

サンセット・サンライズ

ゆーり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

傷心のトウカイティオーがクズトレーナーに捕まってしまい、都合の良いように弄ばれる話。

トウカイティオーの設定はアニメ寄り。

目 次

逢魔時	
喰われるモノ	
この関係ってなんだろう	
強襲I	
たぶん間が悪かつた	
強襲II	
夏と言えば水着だろ	
そうだ、温泉に行こう	
強襲III	
舞台裏	
日没	
天秤	
門出	
年度代表ウマ娘	
【番外編】心が鳴らす音	
にぶトレーナー	
強襲IV	
大阪杯	
勝負服	
春天覇者	
T M論争	
ウサギとカメ2	
ウサギとカメ	
等価交換	

185 174 157 150 143 133 122 114 106 93 84 76 69 61 56 48 42 38 33 27 22 17 9 1

強襲V

お話ししよう

決意と成長と

アイドルウマ娘

領域

頂点V S帝王

一心同体

参戦

始動

ローギア

袖振り合うも多少の縁、腕を絡めたならそれはもう運命では?

286

宝塚記念

宝塚記念2

308 295

278 270 261 251 241 233 223 214 202 193

逢魔時

「うん、いいよ」

……はは、勝つた！

「ありがとう！ 実績も何もない俺だけど、最後まで諦めないことだけは誓うよ」

もうすぐ日が沈もうかというグラウンドの片隅で、俺は乾坤一擲のスカウトを行っていた。

ここ、トレセン学園にトレーナーとして就任して早数年。名バを育てあげて、獲得賞金で預金額九桁到達を目指したはいいものの、G I ウマ娘どころか重賞勝利すら達成できなかつた。

おかげで財布は風が吹けば飛びそうな軽さだし、無能トレーナーランキングがあればランクイン間違いなしの立ち位置を確立してしまつた。

この状況から抜け出そうにも、無能では才能あるウマ娘をスカウトできないという負のループで、前回の選抜レース後のスカウトも奮わない結果だつた。

そう、選抜レースはウマ娘が選ばれる場であると同時にトレーナーが選ばれる場もあるのだ。選択権は常に優れている側が持つている。俺が以前コイツをスカウトした時も一顧だにせず断られたしな。全く、頭の軽そうなガキの割には見る目があると思つたものだ。

……だが、成功した。

コイツの置かれた状況が俺に味方した。ならばその波に乗らない手はない。見える、見えるぞ。金色に輝く栄光の未来が！

ふふ、コイツの望む菊花賞はどうせ出られないだろうが、その後のレースでいくらでも稼げる。

この天才に、無敗の二冠ウマ娘にぶら下つてるだけで金も名誉も手に入るつてんだから笑いが止まらねーゼ！

『諦めない』か。いいねそれ。ボクも諦められそうにない。だから君に全てを賭ける』

気が合うじゃねーか。俺もお前にこの先を全部ベットさせてもら

うつもりだ。

お互にいい目が見られるよう、頑張つていこうじゃあないか。
「よし、じゃあ握手でもするか！ これからよろしくな、トウカイティ
オー！」

「うん、こちらこそよろしく。トレーナー」

栄光に目が眩んで何も見えてない男と、絶望の暗闇に堕ちて周りが
見えなくなっていたウマ娘。そんな、天と地ほどに乖離のある二人
は、燃えるように真っ赤な夕日に照られながら、手を取り合つた。

どこで間違つてしまつたのだろうか。
最初から？

いや、身の丈に合わない夢だつたとは思わない。
才能も努力も環境も揃つていた。ダービーだつて獲つたのだから、
運もあつたはずだ。

けれど、自分の夢は唐突に終わりを告げた。否、今まで積み上げて
きた全てが崩れてしまつた。

菊花賞、もつとも強いウマ娘が勝つと言われるクラシック戦線の終
着点。

あるいは、それに挑むことすらできない自分はどうしようもなく弱
かつたということか。

『トウカイティオー、左脚骨折！ 菊花賞出走は絶望的か！』

『トレーナーとの関係悪化！?

契約解除の可能性が取り沙汰される』

『トウカイティオー、再契約の続報なし。発覚した気性難と脚部不安
が原因か』

ここ最近、紙面とワイドショーを賑わせているのはボクの話題ばかりだ。もつとも、どれ一つとして良い話ではないけれど。

骨折によつて菊花賞への出走ができなくなるだけであれば、まだマ
シだつたのだろう。いまのボクはレースへの出走権も、走りを支えて
くれるパートナーも失つていた。

互いに信頼し合えていたはずなのに、たつた一事でその関係は脆くも崩れたんだ。

菊花賞への出走を許してもらはず我儘を言うボク。そして、骨折の原因は過剰なトレーニングを強いた担当トレーナーにあるという世間からのバッシング。

結果的にあのヒトは、ボクと一緒に夢を見るなどを諦め別の道を行つた。

その事実を受け入れられず、癪癱を起して暴れたボクを引き取るうなんて物好きは、この学園には居なかつた。

それで怪我も悪化させちゃうんだから、本当に救いようのない間抜けだ。

「一人で飯を食べるのにも慣れちゃつたな」

以前なら考えられないことだつた。

級友かトレーナーと食事を共にすることが常であつた自分が、今となつてはおひとり様の常連だ。

一応弁解しておくと、他のウマ娘たちから避けられている訳ではない。マヤノも他の皆も自分を心配してよくしてくれている。それを素直に受け取れず、勝手にボクが孤立していつているだけのことだ。食堂のテレビに目を向けると、週末に行われるレースの特集番組が流れていた。

「いいなあ……」

失くしてしまつた、当たり前だつたもの。

三冠、G I、重賞。そんな格式はレースに出走できるという前提あつてのものだと、気付くのが遅すぎたのだろうか。

無敗の三冠ウマ娘になる以前の最低限の資格すら満たせない現状。憧れの存在とは似ても似つかない。

今ではつきりと脳裏に浮かぶ“皇帝”シンボリルドフのレース。自分の原点であり、今も追い掛けている彼のウマ娘は、どんでもなく速くて強くてカツコよかつた。

なにより、彼女の走る姿には他に真似できない煌めきがあつた。あのキラキラした輝きに自分もなりたいと思つたのだ。

けれど、彼女の輝きはレースが強いだけで魅せられるものではない。これまで己を磨き上げてきた努力と成し遂げてきた功績。常日頃からの在り方全てが集約され、レースに臨んでいるからこそ発揮される輝きだ。

それに比べれば、目指した存在の煌めきからどこまでも遠い自分。レースが速いだけでしかなかつた傍迷惑な子供。

それがボクだ。

「……今日のご飯、なんだかしょっぱいなあ」

無敗の三冠という目標が断たれた事実と同じくらい、己の矮小で情けない在り方が嫌になる。

「こんなのは、見捨てられても仕方ないよね」

必死で我慢していた零れ落ちる涙が抑えきれなくなつた。誰も居なくなつた食堂で一人机に突つ伏す自分が酷く惨めだった。

それでも。いや、だからこそ菊花賞は……三冠だけは諦められない。

信頼したあのヒトとの関係が断ち切られた以上、どれだけ今の己が目指すものから遠からうと、もう残つてているのは夢だけなのだ。

獲れなければ、二冠で終わつてしまえば、今までの全てが過ちだつたと認めることになる。

「新しいトレーナーを探そう」

きつとこのヒトとなら、自分の夢は叶う。そう信じた有能で優しかつた者すら自分から離れた。

同等以上の実力を持つトレーナーとの契約は望めないだろう。

だが、菊花賞へ出ることに文句さえ言わなければ、才覚なんてどうでもいい。

自身の力で勝ち取つてみせる。

他の誰も賛同してくれないのでどうしても、夢を諦めてなんて生きていけない。

「そうだ。離れていつた奴のことなんてどうだつていい。ボクの夢

を、ボク以外の誰にだつて否定なんかさせんもんか」

愛憎は表裏一体とはよく言つたものだ。

あんなにも愛おしかった信頼できるパートナーは、今となつては憎悪の対象だった。

あのヒトは、ボクの夢を断ち切つた女は、今日も別のウマ娘にトレーニングを施すのだろう。

そうしていつの日か、ボク以外のウマ娘で三冠を達成するのだろうか。

「……ははっ、バカにしやがつて」

顔を上げ、席から立ち上がり外へと向かう。
ご飯がほとんど喉を通らないからだろうか。足取りがフラフラするがじつとはしていられない。

はやく、ボクの夢を受け入れてくれるヒトを探そう。

「……どうしてっ！」

そうして始めたトレーナー探しは、全くうまくいかなかつた。

気性難を理由に断られないよう、愛想よく相手の顔色を伺いながら話したのに。

誰も彼も目を逸らして否定の言葉を吐く。

なんでなの？

そんなにいけないことなの？

人生でたつた一度しか挑めない、歴代でも数えるほどしかいない三冠ウマ娘になる夢なんだよ？

君たちもトレーナーなら、その栄光を掴みたいと思うものじやないのか。

「なんでそんな現実的なことばっかり言うんだよお……」

完治が間に合わない。

万全でない脚で出ても勝てない。また脚を悪くするかもしれない。三冠になれずとも、その先がある。

「先つてなんだよ。ボクにとつて、菊花賞に出ない先なんて意味ないんだ」

どいつもこいつも量産品のロボットかと思うほどに同じことばかり。

なにがトレセン学園のトレーナーだ。

なんの意外性も特別性もない、似たり寄つたりの理屈屋ども。

「くそ。トレーナーが居ないと出走できないなんて条件さえなければ、誰が頼つたりなんてするもんか」

悪態をつくも、打つ手がない。

本当にこのまま、諦めるしかないのか。

ボクを見捨てたやつに、ボクのことを見もしない連中に言われるま、走りもせず負けるのか。

「うつ……うう……くそ、ちくしょう……」

もう嫌だ。ヒトなんて、みんな大っ嫌いだ。

「はあ……はあ……、やつと見つけたぞトウカイティオー！」

……つ、誰？

「え、なに泣いてたの？ 脚が痛むのか？ 保健室行くか？ おんぶするぞ」

いきなり話しかけてきたと思ったたら、オロオロして心配し始めた。何の用だろうか。いまは誰にも会いたくないからどうか行つてほしい。

そう思つて睨みながらなんでもないと伝えると、こちらに向き直つて口を開いた。

「あー、そのスマ。お前が新しいトレーナーを募集してると聞いてな。他の連中に先を越されないよう探し回つてやつと見つけたんだ」トレーナーを探しているボクを、先を越されないように探してた？「……それつて、ボクのトレーナーになつてくれるつてこと？」

実績のあるトレーナーを優先したとはいえ、かなりの数に声を掛けたはずだ。探し始めてそれなりに日数も経つてているのに、今まで会うタイミングがなかつたのだろうか。

「ああ、もちろんそのつもりだ！ その反応つてことはまだ未契約か？」

「おいおい、俺にもツキが回つて来たんじゃねーかこれ！」

オロオロしてたくせに今度は子供みたいにはしゃぎだした。忙し

いヒトだな。

「ちょっと待つてよ。ボクが探していたのは、菊花賞に出ることを認めてくれるトレーナーだよ。そうでないならお断り」

この条件を誰も呑まなかつた。

断つてきたトレーナーたちも口では勝てないとかなんとか理由をごねていたが、結局のところはあの女と同じで面倒事なんか引き受けたくないのだ。

骨折によつて受けた世間からのバッシング。学園はトレーナーの過失を否定する見解を発表したし、ボクもそんな事実はないと世間に伝えた。だが、一度ヒートアップして思い込んだ大勢というのは厄介極まりない。その後、実際に契約解除されてしまつたことも含めて、この話は真実だというのが世の中の風潮だ。

それゆえに、ウマ娘に負担の大きいトレーニングや出走ローテーションを批判する空気が出来上がつてしまつてゐる。当事者であるボクを完治の見込みもないまま長距離レースに出すなんて言えば、どれだけ非難されるか。

ギリギリまで出走有無を公表しないという手はあるが、ボクとしては約束を反故にされないためにも、出走の意志表明をしたい。その交渉の余地はあるだろうか。

「菊花賞？　出ればいいじゃねーカ！　たつた一度のクラシックだもんな！　簡単には諦めつかねーよ」

……え？

「ほんとうに、いいの？」

ボクが言うのもなんだけど、出走の意思表明をしただけで世間からめつた刺しにされるよ？

「流石に骨がくつついで歩くのもままならん状態で出すとは言えないけどさ。走れるとここまで持つていく気なんだろ？　だつたら俺が言うことはねーよ。精々お前が無事に帰つてこられるように入念なりハビリとお祈りをするだけだ」

そう言つて笑顔を浮かべるこのヒトからは、欠片も今後への憂いを感じ取れなかつた。

「……あつ」

その笑顔を照らす赤い光に、今になつて気付いた。どうやらここはグラウンドの片隅で、いまは日が沈もうとしている夕方だつたらしい。

「だから頼む！ 僕にお前をスカウトさせてくれ！ 一緒に三冠を、

その先の夢を叶えよう！」

血のように、炎のように真っ赤な夕日に照らされるなかで浮かべていた笑顔は、妙に印象的だつた。

「……うん、いいよ」

急な展開に思考は追いついてなかつたが、自然と口から出たその答えが、正解な気がした。

喰われるモノ

トレーナーに向いてない。その自覚は大いにあつた。

そもそも楽しく生きるのに使う金が欲しくて選んだ職だ。高潔や理念やら綺麗な夢なんてものはない。

だが、それにしても向いてない。

トレセン学園のライセンスを取得できたのだから、それなり以上に優秀ではあるのだ。

記憶力も、分析力も、頭の回転の早さもある。

しかし、それだけでは取り返せないレベルで、熱くなれない。

ウマ娘は機械ではない。

ヒトと同じ知性と感情を持つている。肉体のトレーニングだけではなく、心を持つ生き物としての理解とサポートがいくらでも能力を底上げする。

トレーナーにはウマ娘に対する共感と熱中が最低限必要なんだ。

しかし、俺はどうにもそこら辺りを真剣にこなせなかつた。

相手を理解できず結果が出せないことを恐れているのか、分かり合えず関係性が断裂する可能性に怯えているのか。

あるいは、もつと根本的に眞面目な熱血というのが肌に合わないのか。

なんにしてもトレーナー失格な態度であることだけは間違いない。手を引く、背を押す、並び立つ、支える。在り方に個性はあれど、トレーナーとはウマ娘の夢を一番に応援する存在でなければならない。どの手法を取るにしても、ウマ娘個人を理解して伸ばすことが必須である。

それを苦手とする俺ではあるが、トレーナーを辞める気があるかと言えば、そんなつもりは欠片もない。

なんせ一発当てた時の稼ぎが良い。しかも自分が天才である必要はなく、担当ウマ娘が天才であればいいのだ。

汗水垂らして息を荒げるウマ娘に後ろから偉そうに指示を出すだけで、何千万・何億という金が入つてくる。

これを利用しない手はない。

まあ、そんな都合の良いウマ娘はそうそう転がつてはいないのだが。

だからこそ、このチャンスは絶対に逃せない。

すでに実力を証明した『天才』がフリーになつてフラフラしているのだ。

なんとしても手中に収めて骨の髄までしゃぶり尽くしてあげなければ。

トウカイティオーのスカウトに成功するという偉業を成し遂げた俺は、嬉しさの余り飛び跳ねそうになる衝動を抑えていた。

ぐへへ……。G Iに一回勝つだけでトレーナーにはエリートサラリーマンの年収を上回る金が入つてくる。八大競走ともなれば、さらに倍ドンドころじやない。

目の前のコイツはまさしく金を生むウマ娘なのだ。

……なのだが、なんかコイツ濁つた目してんな。もつと明るくて元気で姦しい感じのウマ娘だつたはずだが、菊花賞に出られないことでよほど精神が追い詰められていたのか？

「そういうやさつき泣いてたよな？ 喉乾いてるだろ。水でも買つてこようか？」

ミネラルウォーター100円。これからを思えば安い出費だ。

「ううん、気にしないで。その、トレーナーになつてくれる人が見つかんなくつてさ。ちょっと焦つてただけだから」

はあ？ いつから学園の連中はそんな間抜けになつたんだ。トウカイティオーなんて取りあえず買いだろ。

「あはは、前のトレーナーから契約を切られたときに暴れちゃつたらね。怪我じや済まない可能性もあるし、みんな及び腰になるのも仕方ないよ。世間からのバッシングとかもあつたし」「しょぼい理由だな。マスコミが好き勝手書いた記事を真に受けて轟

る世間様なんざBGM代わりにでもしとけよ。そもそも、中坊が下らんことで暴れるなんて生きてりや何回かはあるだろ。どんだけお利口なやつらしか担当してねーんだよ」

バッティングを真に受けたところで一円にもなりやしないが、ウマ娘にちょっと優しくしてやれば数千万円になるかもしね。ギャンブルとも言えない選択肢だ。

「そうだね。あのヒトも、そう言ってくれると思つてた……」

あのヒト？ 前のトレーナーのことか。でも、たしかコイツの元トレーナーって。

「あの眞面目ちゃんか。ウマ娘に対してもじやなくて、世間様にも真摯に対応しますつてか」

俺の抱いた印象と違うな。むしろ、ウマ娘のためなら相手を問わず噛み付きに行くタイプだつたはずだ。マスコミ程度になにを言われようが、ウマ娘のためなら小動もしないだろう。

……なのに、トウカイティオールの精神が摩耗するような雑な別れ方をした？

もしやこれは。

「なあティオー。トレーナーが見つからないと言つてたが、癪癩持ちが理由で断られたのか？」

そう問い合わせると、一層濁つた目でコチラを見てきた。ちょっと怖い。

「理由はむしろ菊花賞の方だつたかな。その怪我で出走を約束するわけには行かないつて。やっぱリバッティングを受けるのつて大変なんだね」

「へえ……。なんとなく読めてきたなあ。

「そ、それよりさ、契約書を用意して学園に提出しようよ！ 善は急げだよ！」

普通に考えれば、それはトウカイティオールという才能を逃がしたくない俺が言い出す内容だ。

なのにコイツはよく知りもしない、事実として到底見合わないレベルの俺と組むことに必死になつてゐる。

くくく……。おいおい、こんなことあつていいのかあ？

この年頃のガキってのは、良くも悪くも視野が狭い。良い方向に転がれば、全エネルギーを一点集中させて大きな成長を見せる。悪い方向に行けば、ほんのちょっとしたことで自分を全否定されたと感じて心が捻じれてしまう。

トウカイティオーにとつて、それが菊花賞と三冠の夢で現状は悪い方向に行つて いる訳だ。

そもそも、コイツをスカウトしようつて後任が現れないのはおかしい。

癪癱を起したことで敬遠する空気があつたのも事実だろうが、別のが働いて いると見るべきだ。恐らく、怪我をした状態で出走を強行しようとするコイツを諦めさせるために、眞面目ちゃんはコイツとの契約解除に踏み切った。

その後、学園側にもトウカイティオーが冷静になるまではスカウトをさせないよう働きかけたのだろう。

一応はトレーナーである俺にその知らせがないのは、抜け駆けすると判断されたか？

大正解だ。

本来なら見向きもされない相手だろうが、今のティオーにとつては天から垂らされた蜘蛛の糸。

どれだけ細く頼りなからうと全力で掴みにくるわけだ。

くはは、自分に味方が居ないと勘違いしたガキなんぞどうとでも転がせるぜ。

「そんじや、ティオー。トレーナー室に行つて契約書類を書く……」

「うん、すぐに行こう！　はやく書こう！」

食い気味に返事するなよ。藁をも掴む思いなのは分かるけど、そこまで急ぐ必要はなくない？

「ま・え・に！　どつか飯でも食いにいこーゼ。今日は奢るからよ」

もう日も暮れだし、晩飯食うとこ決めないとな。

「なんでごはん？　そんなことより契約書を書こうよ。最優先だよー」

おバカ！　お腹が空いた状態でいい書類が書けるか！

「だつて俺、お前のことすげえ強いウマ娘で一人称がボクつてことしか知らないし。まずは親睦を深めねーとな」

あと、お腹が空いてると頭が回らない。

「それ全然知らないってことじやん!?　後でやつぱなしとか言つたら許さないからね?」

へつへつへ、心配しなくてもぶつ壊れて走れなくなるまで使い潰してやるさ。

「ついでだし、外出時間の延長手続きもして腹ごなしにゲーセンでもいくか」

脚が使えなくともできるゲームはあるだろ。

「ゲームセンターかあ。UFOキヤツチャーとかあるんだよね。行つたことないなあ」

……は?

「いやいやいや、そんな訳ないだろ?　ROUND1でバッティングとボウリングと卓球、更にはゲーセンをはしごして締めはカラオケ。ガキどもの定番的な巡礼地の一つじやん」

いまだきの都会つ子は別の遊びが主流なのか?

「その中だとカラオケくらいしか行つたことないかなあ」

なん……だと……?

「学園に入るまでもレースの練習ばっかりだつたし、歌とダンスのレッスンもあつたからね」

ああ、そうだつた……。こいつらはそういう奴等だつた。

「ちつ。おいティオー。お前、にんじんハンバーグは好きか?」

「え? 好きだけど」

たくよお、ここ最近は担当ウマ娘を持つてなかつたから財布が寂しいつてのに。

「オススメの店に連れていつてやる。少々値は張るが、味と量は保証するぞ」

かつて担当していたウマ娘御用達の店だ。レースはともかく舌は確かな奴だつた。

「そんな悪いよ。ファミレスので十分満足できるし」

「喧しい！俺たちのコンビ結成祝いだ。半端なもん食わせられるか

！車取つてくるから正門で待つとけ」

俺の車じやなくて学園のだけど、怪我してるティオーを運ぶつて言
えば文句は言えまい。

……それにしても、ボウリングとかゲーセンが未経験つてどんなもの
代だよ。

思えば、俺が過去に担当した三人のウマ娘たちも似たようなもの
だつた。

レースしか知らない。レースが全て。自分はそのために生まれて
きたと素面でのたまう。

ウマ娘つてのは質の悪いことに、本能に走ることが刻まれている。
それが余計にアイツらの視野を狭めた。

……本当にバカなやつらだつた。

トレセン学園に入学できただけでも才能はある。だが、その中で輝
かしい成績を認められるのはほんの一握りでしかない。結局、トレセ
ン学園でやつていくには力不足で重賞レースにも出られず引退して
いつた。

天才共には遠く及ばないくせにレースに全てを注ぎ込んで、望む結
果は出せず自分に絶望してなにもかも諦めようとする。

自分が楽しむために生きている俺にとつて、これしかないのだと苦
しそうに走るアイツらを見ているとこつちまで気が滅入つて許せな
かつた。

俺は凡才が天才に打ち勝つ方法なんて知らないし、教えてやれな
い。アイツらに何が適しているかも分からない。

だからという訳でもないが、代わりに遊び方を、俺の楽しいと思う
ことを沢山教えてやつた。

色んなどこに連れまわして、地方のレース場に行けば観光地を物見
遊山してご当地めし。季節ごとのイベントに連れ回して、門限破りも
しょっちゅうだつた。

そんなことばかりしていたからか、レースでは鳴かず飛ばずだつた

アイツらは、引退して学園を去るときは妙にいい笑顔をしていた。

やりたい事ができたと、悲壮な感じもなく出て行つた。

一人目は家業の温泉宿を継ぐと言つて女将修行に励んでいる。

幼い頃から女将になることを決められていたのが嫌で、他の道を探すためにレースで結果を出したいと言つていた。結果的に、外に出て経験を積んだことで家業の素晴らしさに気づいたらしく、今では若女将として認められつつあるらしい。

一度だけ招待してもらつたが、自腹で来ようものなら一ヶ月もやし生活になつてしまふ高級宿だつた。

二人目は地方レース場の周りにある観光地を旅行したのがよほど楽しかつたのか、色々な場所を巡るために長距離トラックの運転手になつた。

なんでもトレセン学園を含むウマ娘の施設備品を取り扱う輸送業者らしく、ウマ娘の雇用は大歓迎だつたらしい。

いまでも時々トレーナー室に来て勝手に茶を飲んで、各地の土産物を置いていく。

三人目は完全に意味不明なんだが、格闘家の道を歩んでいる。

レースをするには体格がガツチリしそぎだと思つてはいたが、文字通り強さについては才能があつたらしい。

『トレーナーへ』というメッセージを添えてサンドバッグを蹴破る動画を送つて来たりするが、なにを伝えたいのかさっぱり分からん。「アイツらの時はレースで金が稼げなかつたから、外に行つたときは一人前の飯を分け合つて食べてたつけなあ。ティオーならそんなみみつちいことしなくて構わんな。先行投資だと思つて、せいぜい恩を売つておくか

それにもしても、才能という点においてはアイツらと比べるべくもないが、それだけつてのは勿体ないだろ。

「ま、そつち方面は得意分野だ。怪我が治るまでの暇潰しならドンと来いだな」

その第一弾としてにんじんハンバーグは悪くないだろ。

ティオーの稼ぎなら二、三年で億は固い。

そう考えれば、たかだか数千円のハンバーグなんざ屁でもないし
な。

近い内に利子込みでたつぱりと返してくれよな、金蔓ちゃん。

この関係つてなんだろう

「うーん、これ？ それともこつちかな？」

菊花賞に出るためならなんでもする、その覚悟がある。けれど、ギブスも取れてない状態でやれるトレーニングには限界がある。

だからリハビリやトレーニング、レースのための道具類から見直そ
うつて話になつたんだけど……。

「……普通の服屋さんだよね？」

ウマ娘のための用具類を取り扱う店舗が多く入つた複合商業施設。
なのに、連れてこられたのは普段使い用の服飾店だった。

「おーい、どれにするか決まつたかー」

声のする方を向くと、店舗前のベンチに座つたトレーナーがクレー
プを頬張つていた。

「…………」

「一緒に選んでよ！ というか何でボクはレースに関係ない服を選ば
されてるのさ！」

勝負服とかジャージなら分かるけど。

「だつてお前、全然私服持つてないじゃん。制服で遊びに行くと目立
つんだよ」

そんな私服が足りなくなるほど遊びまくるつもりないんだけど。

「トレーニングする訳にはいかないのは納得するけどさー、他にも
レースを見るとか走りの勉強するとかやれることはあるんじゃない
の？」

体を動かすこと以外はあまり熱心じやなかつたボクだけど、ここま
で走りに関係ないことばかりやつてると流石に大丈夫なのつて思つ
ちゃう。

「メリハリつてのは大切なんだよ。ほつとくと勝手に体を動かしそう
だからな。休息と監視を兼ねて俺の嗜好も満たせる。最高に頭のい
い時間の使い方だろ？」

契約を結んで二週間。ちょっと分かつてきた。このヒト、頭が悪く
て自己管理が雑だ。

そして相当な浪費家。

まだ二週間なのに何回も外食に連れて行かれたし、その度になにか買い与えられる。

「……もしかして餉付けされてる？」

別にそんなことで絆されない……ってそもそも絆す必要もなくボクに選択肢なんてないか。

契約を交わした翌日。学園に書類を提出すると、なぜか大騒ぎになつた。理事長とたづなさんから何回も『本気か？ 騙されてないか？』と確認されたし、トレーナーのことをすごい顔で睨んでいる女もいた。

トレーナーが必ずしも優れた成績を出しているわけないことや、かつて担当したウマ娘が全員中退していることを教えてきた辺り、よほど契約を思い留まらせたかったのだろう。

もつとも、一緒に食事したときに全部教えてもらつてたから今更ではあつた。あのお店、オススメなだけあつてにんじんハンバーグ美味しかつたなあ。

ボクの契約の意志が固いことを知つた理事長たちの取つた行動は、トレーナーへの尋問というか圧迫面接だつた。

あとでトレーナーに聞いた話だが、証人になれるヒトが居る場所で菊花賞へ出走させないことを明言させておきたかったらしい。

普通のトレーナーならばそんなことをする必要はない。怪我を押しての出走なんて自身の経験としても醜聞になりかねないからだ。だが、トレーナーはそれをやる奴だと思われているらしい。

「囮まれて詰め寄られてる状況で、全く逆のことを言うとは思つてなかつたんだろうなあ」

東条トレーナーとかも居たから相当な圧だつたはずだが、トレーナーはなんら躊躇うことなく、ボクを菊花賞に出すと宣言した。

嘗ての走りを取り戻すには時間が足りない、勝算もない。そうはつきり言つて、それでもボクが望むなら菊花賞に出すと言い切つた。

ウマ娘のことを本当に想つているのなら、正しいとは言えない決断。だが、ボクにとつてはその宣言が何よりも嬉しかつた。

まだ、ボクは夢を諦めなくともいいんだ。

未だに学園側とは揉めているらしいが、当人はどこ吹く風でなんとも思つてなさそうだ。

「ずっとそのマネキン見てるけど、その服にするのか？ さすがにティオーデ普段着にするには大胆すぎるような」

「……へつ？」

いつの間にか傍に来ていたトレーナーに言われて意識を向けると、チューブトップにショートパンツの組み合わせのマネキンが置かれていた。

「ぶふつ！ ち、違うよ！ 考え事してただけ！」

「いや、新しい自分になつてみたいて気持ちも分かる。でもこれは親御さんになんて伝えればいいのか分からねーな」

なんでそこで両親の話が出てくるのさ！

「ほとんど毎日状況連絡してるからな。今日も服買いに行くつて伝えてるから、カモフラージュに大人しめのも買つて誤魔化すか？」

「だから買うつもりないってば！」 ていうか連絡取り合つてるとか聞いてないんだけど！」

いつのまにそんなことしてたの？！

「あんまりやる事もないし、お前のこと心配してんじやねーかなつて連絡したら仲良くなつちまつてな。親父さんとか昼間でも即レスしきたりするから仕事に集中できんのか怪しいぞ」

は、恥ずかしすぎるつ……！」

「今後はボクのこと両親に連絡するの禁止！ 破つたら怒るよ！」

「はーい、わかりましたー」

絶対に分かつてない。破る気満々だ。学園に対してもこんな態度

なのだろう。その内、理事長がキレるかもしれない。

「もうつ！ トレーナーが不真面目すぎて出走できないなんて事になつたら承知しないからね！」

そんなこと有り得ないとは思うが、このヒト見えてると不安になつて

きた。よく中央のライセンス取れたな。

「けけけ、心配ご無用。その辺の加減は心得てるよ。品行方正なんて

やれる気がしないが、最低限のルールは守る」

どーだか。

「暑くなってきたから動きやすい軽装も悪くはないんだがな。ギプスが外れたあともテープニングやサポーターが必要だ。ボトムスはその辺りを隠せるようなのを選んだ方がいいかもな」

……あつ。

「そういうの、あんまり気にしたことなかつたな」

服装なんて、勝負服以外はあまり拘りがない。

「マジか。女子の中高生とか一日として同じ私服は着られない生き物だと思つてた」

そんな生態してたら破産しちゃうよ。

「しようがねえなー、じやあ俺が選んでやるかー」

楽しそうに服を物色しだしたけど、服のセンスがいいとも思えないなあ。

「つて、キャラ物のプリントTシャツなんて着ないよ！　どんだけ子供扱いしてるのさ！」

ほんとはボクのこと女子中学生だと思つてないでしょ！

「え、これと半ズボンで虫取り少年スタイルにしようと思つてたのに」
ボトムスに気を遣えつてアドバイスしてきたヒトがなんでそんなチヨイスなの？

「そんなの着るくらいなら自分で選ぶよ！」

トレーナーの持つていた服を奪い取つてまともなモノを物色する。これにしようかな。

「ほー、なかなか良い服のセンスだな。トウカイティオーと言えばやつぱり青と白か」

深い考えもなく手に取つたロング丈のワンピース。その配色を見たトレーナーに、そんなことを言われた。

「……やつぱりこつちにする」

ティオーという名前と会長への憧れを形にした勝負服。自分の象徴であるそれが嫌いになつた訳ではない。

けれど、どうしてもダービー後の骨折とあの女を思い出す。

過去の自分と決別なんて大袈裟なことじゃないけど、別のモノにしちくなつた。

「赤のブラウス？」

「ボクには似合わないかな……」

あの日、トレーナーと組むことを決めた日に見た真っ赤な夕日。今の自分を象徴する色はこれだつて思う。

「いや、いいんじやねーの。元気で騒がしいやつに合つてる色だと思うぞ」

「そうだよねー。ボクに合つてるよねー……」

「やつぱりボクのことお子様だと思つてるでしょ！」

「ほれほれ騒いでないで会計するぞ。もうそろそろギプスも取れるし、本格的にリハビリの準備をしますかねー」

これ、本当に担当トレーナーとそのウマ娘なんだよね？ 遊び友達の間違いじゃないよね？

そんな不安が全くないと言えば嘘になる。けれど、骨折して以降、初めて楽しいと感じる誰かとの時間はあまり嫌いになれそうになかつた。

強襲 I

「あの娘を解放してください！」

じめじめとした梅雨の時期。不快指数爆上がりだが、エアコンのある部屋でゆつたりと雨音を聞いている分には悪くない。

そんな静寂を気分よく楽しんでいたというのに、ぶち壊しにしゃがつて。

「まーたアンタか。いい加減しつこいんだよ」

鬼の形相で部屋に乗り込んで来たのは、トウカイティオールの元トレーナーだ。

「何度だつて来ます！　あなたなんかに任せていたら、あの娘の未来が潰えてしまう！」

清楚そうな面してる癖に煩い女だ。そんなだと男にモテないぞ。「解放もなにも束縛なんてしてねーよ。俺とアイツが結んでいるのは対等な契約。ティオールが嫌だつて言つてるならともかく、なんで他人に言われなきやならねーんだよ」

ティオールと菊花賞への出走を止めないという条件で結んだトレーナー契約。それを知つてからというもの、毎日のように部屋に突撃してくる。

「あの娘にとつて、今が一番大切な時期なんです。菊花賞を諦めることが辛くとも、その先に飛躍がある。目先のレースに囚われて無理をさせてはいけないんです！」

立派なご高説だこと。実際、間違つてもいらないんだろうけど、残念ながら俺には何も響かない。

「アイツのあるかも知れない未来なんて知つたことじやねーよ。止めたかつたら本人に言えばいいだろうが。なあ？　故障した担当ウマ娘を見捨てた元トレーナーさん？」

「……っ！」

おーおー、綺麗な顔を歪ませちゃつてまあ。でも言えるわけないよなあ？

契約を解除して菊花賞を諦めさせて、担当外になつてまで口出します

るなんて恥知らずにもほどがある。

「私がどんな思いでこの選択をしたと思つてゐるの！」

だから知らねーって。

俺が考へてゐるのは何時だつて自分の得になることだ。

その得を生み出してくれるティオーのことはちよこつとだけ考えてやらんでもないけどな。

……とはいへ、毎日来られるとウザつたのは事実だ。方針くらいは話しておくか。

「心配しなくともアイツは菊花賞に出られねーよ。怪我が完治する見込みがないんだ。URAからお断りされてそれで終いだ」

骨折してすぐに療養していればギリギリ分からなかつたのかもしれないが、暴れて悪化させたのがいけなかつた。

勝敗はともかく、医師からの診断書もなく最低限の走る形すら保てないようでは運営側も出走を許可できない。そして、菊花賞までにそこまで持つていくには時間が足りない。

俺としては金蔓が長持ちしてくれるなら万々歳。そういう意味では、目の前のコイツには感謝しないとな。

「そこまで分かつていて菊花賞を餌にあの娘に近づいたんですか!? どこまで人の道を外れれば気が済むんです！」

声がデカすぎて耳がキンキンする。これがヒステリックというやつか。やーねえホント。

「そつちこそ偉そうに上から物を言つてんなよ。ガキに夢も見せてやれない大人が正しさを振りかざしてんじやねーよ。死にそうな目をして俯いてたアソツを放つておくことが、テメエの言う人の道だつてのか？」

どういう意図があつて契約解除にまで踏み切つたのかは分からぬ。断腸の思いがあつたことも想像に難くない。だが、俺にとつては鴨がネギ背負つて歩いてたようなもんだ。食べない選択肢なんざあり得ない。

「人でなしのクズ！ どんな手を使つてでもあの娘から引き離してやる！」

自分がティオーにやつたことを棚に上げて酷い言い様である。

「そんなことして大丈夫かあ？　俺は夢を絶たれて失意に沈んでいた
アイツが唯一繋れた存在だぞ。自分を捨てた奴が後任まで失脚させ
たなんてことになつたら、果たしてアイツの精神は持つのかねえ？」
どれだけ言い募ろうが、ティオーがこちらの手の内にある以上は強
硬手段には出られない。例え真正のクズであろうとも、救いの手を差
し伸べたのは俺なのだ。その事実は変えられない。

「くつ……。なんであの娘がこんな目につ！」

諦めて指を咥えて見ているといいさ。心配せずとも大切な商売道
具だ。せいぜい長持ちするよう手入れはしつかりしてやるさ。

「このつ……！」

怒りのメータ―が振り切れたのだろう。女が手を振り上げた。

これで暴力に訴えてくれれば、コイツの弱みも握れて一石二鳥だ
な。

「なにしてるの……」

ふと、部屋の入り口から声が掛かつた。

ちつ。いつの間にか放課後になつてたか。タイミングの悪いこと
だ。

「あっ、ティオー……」

はつとしたように腕を下した女を見つつ、さてどうするかと考え
る。

ふむ。弱みは握れなかつたが、突撃してくるのを止めさせるには
ちようど良かつたか。

「ティオー、話が終わつたら俺も向かうから、先に着替えてトレーニン
グルームに行つておけ」

俺にとつて逆転の目であるティオーを部屋から離そうとする行為
に、女は目を瞬かせていた。

全く、察しの悪い女だ。

「嫌だよつ！　どうせ菊花賞のこと言わされてたんじよ！　これはボ
クとトレーナーの問題なんだから、関係ない奴は出ていいつてよ！」

悲鳴を上げるように叫ぶティオー。その聲音に込められた悲痛さ

に、女の顔が今までにないほどグシヤリと歪んだ。

「そう言つてやるなよ。コイツだつてお前のことを心配してんのさ」「ふくく……。ダメだ、笑いを堪えるのがキツい。まだだ、もう少し耐えろ俺。

「あなたっ、わざと！」

そりやそうだろ。俺がお前の味方をするわけがない。ティオ一本人から拒絶させるためだ。

「心配ならなんでボクを見捨てたのさ！ 今さら関わり合いを持つようなことしないでよ！ 慘めなボクを見て楽しんでるんでしょ！」

ティオ一の未来を憂いて決断したやつがこの仕打ちで、俺がティオ一のパートナーやつてるんだから世の中間違つてるよなー。

「ティオ一、私はあなたのことを……」

「出ていいつてよ！ もうこの部屋には来ないで！」

勝つた。

「このままじゃ埒が明かないな。ティオ一、トレーニングルームに行こう。アンタは落ち着いたら部屋から出ていくてくれればいいさ」「

拒絕されたショックで放心している女を放つて、ティオ一を連れて部屋を出る。

これでもう部屋に来ることはなくなるだろ。今度こそティオ一がぶち切れるだらうからな。

「……あのヒトの言うこと、聞いたりしないよね？」

部屋を出て廊下を歩いていると、ティオ一が不安気にこちらを見上げてくる。

またもや信頼度アップイベントが来たか。

「ああ、もちろんだ。周りの連中の言うことに耳を傾ける気があるなら、最初からお前と組もうとはしないよ」

そう言つて頭を撫でてやると、安心したように顔をふにやらせた。チヨロくて可愛い。

こうなつてしまえば、もはや学園も余計な口出しはできまい。

どれだけ裏が見え隠れしていようと、俺はただ担当ウマ娘の目標を応援しているだけだ。それを邪推して強引に引き離したとなれば、ト

レセン学園の理念そのものに鱗が入る。

学園の意向でどうとでも引き離せる仮初の関係なのか、とな。

あと警戒すべきはルドルフくらいか。だが、皇帝と呼ばれてようど所詮は学生の小娘。ティオーがこちら側にいる以上、如何様にでもで

きる。

「ティオー、リハビリのメニューを一通りこなしたら外に飯食べに行くか」

「……うん。また人参ハンバーグが食べたいな」

ふつ、パーフェクトコミュニケーション。

たぶん間が悪かつた

連れ立つて部屋から出て行く二人を、ただ眺めていることしかできなかつた。

あの娘のためを思つての決断だつたのも嘘じやない。

『ウマ娘がレースで勝つても負けても最高の笑顔を浮かべられるよう支える』

その信念を持つて、トレセン学園の門をくぐつた。幾人かの育成を経て、トウカイティオーという才能に巡り合えたのは人生の中でも有数の幸運だつたのだろう。

菊花賞と無敗の三冠ウマ娘に掛ける想いの大きさもよく知つてい
る。

だが、それを成したとしても道半ばだ。彼女の目標であるシンボリルドルフはその先にいる。

それに、絶対を体現してみせた”皇帝”ではあるが、挑戦者に自分と同様の実績を求めている訳ではない。

無敗の二冠でも既に十分。シニア級で然るべき結果を出せば自ずと決戦の日はやつてくる。

だからこそ、今は焦る時ではない。

トウカイティオーという才能を支えるだけの肉体を作るには時間が必要。

それが、今回の骨折で得た私の知見だ。

もう私は傍に居てあげられないけれど、信頼できるトレーナーに任せることつもりだつた。

あの娘なら、三冠を戴かずとも最強を証明できるという確信があつた。

「私は、どうすればよかつたの……」

本当は分かつてゐる。

誰かに任せるのではなく、自分が決断すべきだつた。

あの日の選択は自分の弱さが生んだものだ。

骨折と診断されても菊花賞を諦められないティオーを諫め宥めた。

きっと分かつてくれると信じて何度も話し合った。

けれど、自分の中にも確かににあるのだ。ティオーを菊花賞に出したい。育てたウマ娘が栄光を掴む姿を見たいという欲求が。

その想いは日に日に強くなつていつた。私もティオーも世間も、誰も彼もが無敗の三冠を望んでいる。

ならば、なぜ我慢する必要がある。

結果は出ないかもしれないが、やつてみる価値はある。出れば怪我が悪化するとも決まつていないのだ。

そんな根拠のない肯定の言葉が、心の裡から湧き上がつてくる。

……私は、怖くなつたんだ。

自分の心の声とティオーの悲痛な訴えに負けそうになつていてることが。

理性と知識が否定している。

菊花賞の勝利は不可能で、怪我の悪化や再発の可能性を大きく高める。

ウマ娘のためを想うのなら、心を鬼にして断固として出走は見送らせるべきなのだ。

それでも、内から湧く都合の良い言葉とティオーからの嘆願は止まらない。

信念が揺れるのが分かつた。

目先の栄光と未来の飛躍。ウマ娘の意思と現実的なリスク。

あの娘が心からの笑顔を浮かべられるのは、いつたいどちらの選択なのか。

揺れて、揺れて、揺れて、そのまま倒れて碎けそうになつて。

『ティオー、あなたとの契約を解除する。……学園の承認も得ているわ』

菊花賞を諦めさせるという大義名分のもと、私はあの娘から逃げたのだ。

「今すぐにあのクズとティオーを引き離してくださいっ!!」

とまあ、あの娘から逃げてしまつた私だが、それはそれとしてあの男がティオーの傍に居るのは許せない。

ティオーから更に拒絶される事態になるかもしれないが、もう逃げたりはしない。

あれは害にしかならないタイプの男だ。ティオーを育てるのにも実力不足。なんとしても魔の手から救い出さなければ。

「吃驚ッ！ もう少し音量を下げてくれないだろうか。鼓膜が破けそうなのだが」

「なに暢気なことを言つてゐるんですか！ この瞬間にもティオーがあの男の毒牙にかかるつてゐるかも知れないというのに！」

「お、落ち着いてください！ お一人は学園のトレーニングルームにいるのですから、そんな事態になるわけがありません」

あなたまで何を言つてゐるんですか駿川さん！

「男なんてウマ娘を常にいやらしい目で見てゐるに決まっています！ きっと今もリハビリで汗を流してゐるティオーに邪な視線を向けて匂いを堪能してゐるに違いありません！」

ああ、そこは本来は私の居場所だつたのに。このままでは怒りのあまりあの男を殺してしまうかもしれない。

「静聴ッ！ あのトレーナーは良くない評判も多いがウマ娘に無体なことはしないつ！ 契約の件についてはこちらでも動いてみたが、当人たちに解約の意志がない以上はどうにもできん」
そんな……。

それは本当なの？

「トウカイティオーさんに改めて確認を取りました。互いに望んでの契約で不利な条件を付けられたりはしていません。その後の育成も至つて標準的な内容で良くも悪くも口を出し辛いですね」

「しかし、ティオーには一時的なスカウト禁止令が出ていたはずです！ ……あの男には意図的に伝えていませんでしたが」

私がティオーのトレーナーを辞したとしても、早々に他の者が就いてしまえば意味がない。

だから、一時的にスカウト禁止の処置がとられた。

当時はティオーが精神的に不安定で癪癩を起したこともあり、この件について異論を挟んだ者はいなかつた。

もつとも、癪癩が原因で骨折が悪化したことが分かり、菊花賞の出走が実質不可能になつたため、禁止令自体は短期間で解除されたのだが。

「それが、その……なんの偶然か解除されたその日にはスカウトが行われたようで。禁止令のことを彼は最後まで知らなかつたようなので、本当に運命の悪戯としか言えません」

「運命の悪戯!? そんなことでの娘の人生がクズに弄ばれるというんですか！ すぐにバ脚を現すに決まっています！ ライセンスを剥奪して学園から追い出すべきです！」

ティオーは純粹で素直で無垢なのだ。あんな他者を利用して甘い蜜を啜りたいだけの男と一緒にいたら搾取されるだけだ。

「性急ッ！ 些か彼への評価が穿ちすぎている。学生を指導する身として不適切な行動はあるが、最低限のルールは守つている。それに指導の巧みさはともかく、ウマ娘たちからの評判は決して悪くはない」……そうなのだ。本当に、ほんとーに不思議なのだが、あの男はウマ娘たちからはあまり嫌われていない。自分のレース人生を託すには不足と判断されることが多いが、プライベートで一緒に過ごす分には問題なしという判定を下されているのだ。

「くつ。こうなつたら私の体を餌として差し出して、喰いついたところを暴行の冤罪にしてブタ箱にぶち込むしか……！」

「り、理事長室で犯罪を企てるのは止めてください！」

止めないでください！

私はもう逃げない。大和撫子として不退転の覚悟を決めたのです！
「グラスワンドナーさんに怒られますよ？」

「前提ッ！ 彼女の怪我が菊花賞までに回復することはない。彼もそれを分かつていて。ウマ娘に見合う力量がないのであれば自然と契約解除に至るもの。それを待つていればよいのでは？」

それだとティオーが不埒な目に遭うかもしれないでしょ！」

「杞憂ッ！ 私も彼とはときどき行動を共にするが、幼い見た目の者に興味がないことは分かつている！ 身の安全については保証されている」

「そもそも、人格面に問題がある方がライセンスを取得できるほどトレセン学園の試験は緩くはありません。ウマ娘の未来を担う人材として、我々も細心の注意を払っています。……ところで理事長、いつたい彼と一緒に何をしているので？」

まさか既に理事長まで彼に逆らえないようになに？ もう自力でどうにかするしかないというの……。

「たづなつ！ いや決しておかしなことはないぞ。会う度に駄菓子やらの食べ物を恵んでくれるから食べながら話をするくらいでな」「なるほど。お菓子なことをしているわけですね。食生活の見直しが必要です。お菓子はしばらく禁止にしますね」

「たづなつ!?」

……この二人に相談したのが間違いだつたのだろうか。

「分かりました。強制的に彼を排除する方法は諦めます」

そして私自身が直接出向くことも難しくなった。

ティオーが暴れるだろうし、本音を言うとこれ以上は嫌われたくない。

あの態度を見る限り、下がるほどの好感度が残っているかは怪しいけれど。

「私たちもティオーさんの身の周りには注意しておきます。ですので、早まつた真似はしないでくださいね？」

一番危険なのは一人で外出しているタイミング。ご両親と腹を割つて話をすべきだろうか。

……いや、まずは。

“彼女”的直観と洞察力なら、クズの本性を見抜いてティオーの目を覚ますことができるはず」

今に見ていろ。

私を貶すのは好きにすればいいが、ティオーの傍に居ることを許す

つもりはない。
。

強襲Ⅱ

「たーのーもー！」

気合いが入っているようで聞いた側は気が抜ける。そんな声と共に勢いよくトレーナー室の扉がぶち開けられた。

「マヤノトップガン！ ルームメイトのティオーチちゃんを魔の手から救うためにテイクオフしてきたよ！」

入ってきたのは黄褐色寄りな栗毛のちんちくりん。

「ティオーラームメイト？ ふーん、性格の相性は良さそうだな」

一見して内面もガキだと分かる。ティオーとは賑やかにやつてそうだ。

「でしょでしょー。すつぐく仲良しなんだよ！ ……つてそうじやなくて、ティオーチちゃんを解放してもらいます！」

梅雨ごろまで毎日のように聞かされて、最近やつと解放された文句だ。

誰に言われて此処に来たのかは予測するまでもないが、まさか担当外のウマ娘にこんな事を頼んでくるとはな。

というか、あの女はコレが俺を説得できると本気で思っているんだろうか。

「毎回声に出すのも面倒だからスマホにでも録音しどうかなあ。俺とアソツが結んでいる契約は自由意志によるものだ。本人が望まないなら何時でも解約できるんだから、本人に言つてくれよ」

まあ、本当に契約解除するつて言われたら足元に縋りついて泣きながら『捨てないでくれー！』つて情に訴えるんだけどな。

「それはもちろん知つてるよ！ でも菊花賞への出走を盾にされてるのも本当みたいだつたし、お兄さんがティオーチちゃんに邪な視線を向けているのが真実か確かめないといけないんだもん！」

邪な視線？ 俺がティオーに？

「特段俺の趣味じゃないという点は置いておくとして、中坊にそれは間違いなく犯罪だ。女子高と同義のトレセン学園にそんな嗜好の奴が勤められる訳がないだろ」

まあ女帝とかタイキシャトルはやべーけどな。ふふ、もちろん俺はスカウトして断られましたけどもね。

「あれえ？ なんか聞いてたより全然まともというか、普通？」

いやだから変態や異常者が教育者面してたらダメだから。俺はちょっと金にがめつくて稼ぎのためにウマ娘を積極利用しているだけだから。

「そもそもあの女になんて吹き込まれたんだよ。だいたい予想は付くけど」

どうせ守銭奴でウマ娘なんて金稼ぎの道具としか思つてないとかだろ。まさにそのとおりなのだが、ウマ娘の勝利を願つてているという点では他のトレーナーと大差あるまい。

「うーんとね、ロリペドクズ野郎でウマ娘全般によくない視線を向けて常に息が荒い変質者だつて……」

ただの誹謗中傷じやねーか！ そんなん一目見れば分かるし、学園内どころか外周をうろついてるだけで職質されるわ。

「あたしもちよつと思つてたのと違うなつて。でもでも、まだティオーチちゃんの安全が確約された訳じやないからね！ そこで、テストをします！」

……犯罪者心理テストみたいなものだろうか。まあ、そうと分かつていれば一般人らしい答えをすればいいだけだろ。

「それじゃあ、いつくよおー！ うつふーん」

……これもうテスト始まつてるのか？ 始まつてるよな？

「おままでとは自室でやつてくれないか」
科をつくるという言葉はあるが、その体型でやられても感慨が湧かない。

「おままでとじやないよ！ ノーサツ！ 男のヒトの視線を独り占めにする脳殺ポーズだから！」

いや無理だろ。仮にその男共がロリコンでも微笑ましさのあまり淨化されそうだわ。

……そういう意味では脳が殺されてはいるのか？

「むうー。トレーナーちゃんには効いたんだけどなあ……」

おいおい、ソイツ本当に大丈夫か？ 真正じやないか？

このトレセン学園にそんな変態予備軍が入つてきているとは思いたくないが、俺でも合格できたのだから変質者の一人や二人は紛れているかもしれない。

「ほら、もう気は済んだだろ。この飴ちゃんをあげるから部屋へお帰り」

付き合うのもバカらしくなってきたので、さつさとお帰り願いたい。

「子供扱いしないで！ 大人のレディを飴玉なんかで言うこと聞かせられるわけないでしょ！」

これはおしゃれに興味が出て無駄に凝つたものを欲しがる年頃の反応だな。面倒な。

「これは普通の飴ではない。あのタマモクロスが監修したすんごい飴だ」

パッケージに『弾ける味覚！ 満れる舌！ 轟く炭酸！ 白い稻妻キャンディー』と銘打たれている。

俺も一個食べてみたが、口の中が凄まじくシユワシユワになつて唾液もめっちゃ出てくる。

なんでこんな味にしたのか本人に聞いてみると『これ一個でな、腹が膨れるんや。一袋で二週間はおやつが貰えるで』と遠い目をして語られた。

以前から貧相な体型だと失礼なことを思つていたものだが、家庭事情で食うのに苦労していたのかもしれない。今度なにか差し入れを持つていってやろう。

「例えそうでも飴玉なんて全然大人っぽくないよー！」

ふつ、これだからお子様は。

「飴玉が大人なのではない。企業の製品開発に協力し、子供たちの味覚を楽しませることに頭を悩ませる。そうして最後はご家庭に笑顔を届ける。その過程と経験にこそ、大人が詰まっているのだ。この飴をゆっくり落ち着いた環境で舐めることで、君にも大人の大変さが味わえるだろう」

まあ当人は『企業案件つて儲かるんやな』と目を円マークにして汚い笑い声を上げていたが、あれも一つの大人と言えるだろう。

「……ッ!! たしかに」

さすがはティオーのルームメイトだ。コイツもちよろい。

「というわけでどうぞ。そしてお帰りはあちらです」

そう言つて飴玉を渡すと、その場で口に含んでコロコロと転がしました。

おい、自分の部屋で食えよ。

「甘くてしゅわしゅわでおもしろい！ あ、マヤは大人の女だからこんなことで誤魔化されたりしないからね」

訂正。ティオーよりは少しだけ厄介かもしけん。

「お前の脳殺ボーズで無反応だつたんだからセーフ判定じやないのかよ」

「そつちはもういいよ？ 一個だけ答えてほしい質問があるんだ」

わかつたわかつた。答えてやるからさつさとしてくれ。

「トウカイティオーと一緒に戦つて勝つつもりがある、そう信じていひんだよね？」

「…………」

聞いたしてきたマヤノトップガンは、明らかに先ほどまでと雰囲気が違っていた。

こちらを向いているのに焦点が合っていない。自分の何を見られているのかまるで理解できないのに、見られているという感覚だけは強く感じる。

あの女、コイツを寄越してきた理由はこれか。

「……はあ。もちろんだ。アソイツの怪我も調子も関係ない。俺は勝つことだけを信じてティオーを支える」

そもそも菊花賞には間に合わない。……そう、間に合わないはずだつたんだがなあ。

「マヤね、分かつちやうんだ。たぶん間に合うよ？」

そうなんだよなあ。順調を通り越して奇跡に片足を突っ込んでるような速度で回復していく。

「それでね、たぶん……ううん、絶対に勝てないよ?」

「だから何度も言わせるなと言つてはいる。関係ないんだよ。勝つと信じて支えるのがトレーナーの役目だ」

奇跡のバーゲンセールがあれば良いんだが、恐らく一回限りだろうな。

全く、こんなところで使わなくてもよかつたろうに。

「そつか。……うん、マヤ分かつた! お兄さんとティオーチャンのこと応援するね!」

「なんだ、意外とあつさり引くんだな。こんな回答はトレーナーなら当然のことだろ」

「その当然を貰えなかつたときのティオーチャンを見てるから。マヤね、ティオーチャンの一番近くに居たのに何もしてあげられなかつたの。だからお兄さんには感謝してるんだよ?」

もしかしてコイツ、あの女の思惑とは関係なく俺のことを試しにきてたのか?

「心配いらないって分かって安心できちやつた。マヤはトレーニングに戻るね!」

おう、さつさと帰つて出来ればあの女にも止めるよう言つてくれ。

「あ、そうだ」

部屋から出て行こうとドアを開いたマヤノトッピガンがこちらを振り向いた。

まだなんかあるのかよ。

「女子三日会わざれば刮目して見よ。ティオーチャンのこと、いつまでもお子様だと思つてると、あつという間に撃墜されちゃうんだからね!」

そう笑顔で言い放つたマヤノトッピガンからは、先ほどの茫洋として理解できなかつた視線以上の淒みを感じた。

夏と言えば水着だろ

「トレーナーはさ、なんでボクが菊花賞に出ることを否定せずに受け入れてくれたの？」

季節は夏。暦は八月。うだるような暑さに体が溶けそうだ。

レースがないわけではないが、大半のウマ娘は合宿など強化トレーニングを行っている。そんな時期。

まだ本格的に走れる状況にないティオーは、いつもより静かな学園で俺とお留守番をしている訳だが。

トレーニングルームでリハビリをしていると、なにやら急に変なことを聞いてきた。

そりやあ、レースに出て勝ってくれるほど俺のお賃金が上がるからな。これが勝てないウマ娘ならともかくトウカイティオーダぞ。完全に出し得じやねーか。

……とは言えないでの。

「お前まだ中等部だろ。どんだけ優れてようが最近まで小学生だったガキだ。大人に我儘を言える特権はまだ残つてるだろ」

ウマ娘どものチョロいことよ。レースに出させてあげれば大喜びで俺に金を持つてきて感謝までしてくれるんだぜ？

「ましてやお前つてストイックじやん。遊び呆けてる不真面目ならともかく、楽しいこと自制して頑張つてる連中の我儘が許されないんじゃ、世の中窮屈すぎるだろ」

ウマ娘を顎で使うように指示出してれば称賛されるとか、こんなに楽な仕事は他にねーよ。

この楽チンさが世間一般にバレないように、試験の難易度を上げて狭き門にしてるんだろうな。

うはは、俺様勝ち組。

「レース以外でもやりたいことがあれば言えよ。学園のプールで水中トレーニングも飽きただろ。最近デカいウォータースライダーがあるプールが近場にオープンしたらしいから、息抜きも兼ねて行つてみるか？」

俺も偶には大人の女を眺めて目の保養をしたかつたから丁度いい。ウマ娘は身体能力だけでなく顔面のレベルも高い。ティオーも例に漏れず美形なんだが、ちよいと子供っぽすぎると見えてられるんだが。

「いいの!? 行つてみたい!」

アイツらに水着をプレゼントしたらレースで着て走つてくれないかなー。

「……? どうかしたの?」

「いや、なんでも」

匿名で送つてみてもいいんだが、あの女の刺客が目を光らせてる可能性もあるからな。今回は自重しておくか。

「他にどんな施設があるかな。流れるプールがあつたら浮き輪に乗つて揺られたいなー」

うんうん、最近はトレーニング以外でも自分の欲に忠実で大変よろしい。飯も量を食えるようになつてしまふ。他のウマ娘どもの関係も戻りつつある。

この前のマヤノにネイチャーメイド、マーベルサタデーだつけ?

友人には恵まれていたようで、その変わつた名前のウマ娘たちが良い影響を与えているようだ。

菊花賞まで残り三か月。どうやつても急仕上げにしかならないが、脚部不安からは脱せられる可能性が出てきた。

本気で出走することを前提にトレーニングも組み立てる必要があるが、コイツの居るところで考えることじやないか。

「日射で熱くなつたプールサイドに座つて飲むキンキンに冷えたコーラは最高だからな。ごみごみしてるとダルいし、行くなら平日かねえ」

今は夏合宿期間なので事情が特殊だが、平時でもレース見学に行きますと言つておけば学園を休ませて外出させられる。

これで問題が起きてないんだからいいんだろうけど、ぶつちやけ寮の門限とかも含めて規則がガバガバなんだよな。

ウマ娘とトレーナーの良識ありきで成り立っているが、俺みたいなダメ人間ばかりだとすぐに破綻するのがトレセン学園だ。

「うわあ、楽しみ！　はちみー売つてるかなあ！」

いやそれは知らんけど。朝買つたやつをクーラーボックスで運べばなんとかなるんじやね。

さーてと、何日がいいかなー。

「お、マジかよ。来週末はナイトプールで打ち上げ花火も見られるんだってよ。人は多いだろうけど、どうせならこの日にするか」

この時間帯だと帰宅は夜十時ギリギリか。ティオーの親御さんにも連絡して事前に同意を得ておこうかね。

学園外に行くだけならともかく、どうにも最近は夜間外出の許可申請時に学園関係者から口煩く言われる。非行がどうのと言つてた辺り、俺がティオーを悪い道に引き摺り込もうとしていると考えているようだ。

頭の悪い連中である。俺の稼ぎが減るようなことをするはずもない。

遊びを覚えさせても怠惰にならない、それ以上に頑張れるやつだから偶に遊ばせているだけだ。

「花火もあるの!?　でも遅い時間になっちゃうし学園が許可出してくれるかなあ」

そこは親御さんパワーが物を言うのである。

ご両親も骨折した後のティオーが精神的にヤバかつたことは承知している。

それを回復させた俺を信用して、その辺りの差配は任せてくれるのだ。

俺がティオーのストレス発散のために必要と言えばすぐに学園へ申し入れをしてくれる始末。

ふふつ、この世には頭の悪いやつと人の良い甘ちゃんしかいないのか？

「なんとでもするから心配すんな。それより、この日まではしつかりとリハビリに励んでもらうからな。厳しくするが音を上げるなよ？」

ちなみに、今まで一度たりともティオーが音を上げたことはない。根性がありすぎる。

「うん！ ボク、頑張るからね。えへへ、楽しみだなあ」

たかがプールでこの笑顔。愛い奴である。

「……あ、でもボク、学園指定の水着しか持つてないや。まあ別にいつか」

なにい？

「良いわけねえだろ！ リハビリ中止！ いまから買いに行くぞ！」
レジヤー施設のプールで学校指定水着とかどんな羞恥プレイだよ。
お兄さんそんなの許しませんからね。

「え、でも一回しか行かないだろうし、わざわざ買うほどのこともないよ」

黙らつしやい。目的は大人の女の水着姿だが、ティオーの水着もそれはそれで俺が見たいのだ。

あんな飾り気もない水着なんて天が許しても俺が許さねー。

「来年も俺が連れていくつてやるから一回じや済まねーよ。そもそも年頃の女は毎年流行に合わせて買い替えるらしいぞ？」

流行はともかく普通に成長期だしな。サイズ合わなくなるだろ。
……合つてたらご愁傷様。

「……本当に来年も連れて行ってくれるの？」

お前が学園を辞めでもしない限りはな。水着にプールに飯二人分でもせいぜい数万円か。こいつがG-I獲れば余裕で百回は行ける。
「学園の車借りてくるから、着替えてスマホで候補を見繕つとけよ。
あと、晩飯も食いたいもんがあればリサーチしつけ」

どうせにんじんハンバーグだろうけど、店によつて肉質やソースに個性があつてなかなか飽きさせないので。

「うん……。その、ありがとうね」

子供を遊びに連れて行く位のことでいちいち礼を言うんじゃねーよ。

そうだ、温泉に行こう

「おっしゃす」

……テレビでくらいしか聞いた事ないけど、本当に京言葉で喋るんだ。

「ああ、また世話になる。金は出世払いで頼むわ」

そして元担当ウマ娘の実家にツケ払いを頼むトレーナー。嘘でしょ？

「万年底辺のトレーナーはんが、なんに出世するんやろか。ロリコンの犯罪者になつて逮捕されるのだけは勘弁してほしいわあ」

「そんな不名誉な出世があるか！ エリートトレーナーとして名伯楽とか名将とか呼ばれたりするかもしれないだろ！」

それはトレセン学園のトレーナー陣が壊滅してると同義じやないかなあ……。

「ティオー、なんだその訝しむような目は。お前が俺をそこまで連れて行くんだぞ？」

「ごめんよトレーナー。ボクは無敗の三冠とか七冠を目指してるけど、それは無理そーカな」

世の中できないことつてあるよね。

「お前最近言うことが明け透けになつてきたな！ 七冠より難しいつて実質不可能つて言いたいのか！」

だつてねえ。仮にボクが最強のウマ娘でも、このトレーナーを名伯楽とは呼ばないんじやないかなあ。他に失礼だよ。

「なんや思つてたよりも仲良しさんやねえ。上手くいつてそうで安心したわあ」

この頬に手を当ててコロコロと笑つているのが、トレーナーが最初に担当したウマ娘らしい。

細目で小柄でニコニコしてる、優しそうなウマ娘だ。

「えーっと、お世話になります。……先輩？」

なんて呼んでいいか分からず先輩と呼称してしまつたが、変だつただろうか。

「あら、こない可愛らしい子が後輩やなんて嬉しいわあ」

トレセン学園にもお嬢様タイプの子は居たけど、ここまでんびりした雰囲気のウマ娘とは初めて会つたかもしれない。

全然闘争本能とかなさそうだけど、レースにすゞく熱意があつたつて本当だろうか。

「ほなら、改めまして、温泉旅館『廄ど』。ゆつくり癒されていつてな？」

菊花賞まで残り二か月を切つた九月上旬。
ボクたちは湯治に来ていた。

「じゃあ部屋に荷物置いて、早速温泉に入りにいくか」

旅館の廊下を歩きながら、トレーナーは楽しそうに言つた。

ウキウキしているのが全然隠せてない。お子様だなあ。

……まあそのために来たのだからいいのか。

「一部屋取つてあげられたらよかつたんやけど、一部屋になつてもうて堪忍してな？ 楽で仕切れはするけど、トレーナーはんに変なことされそうになつたら、大きな声出さなアカンよ？」

「あ、はい。ちゃんと叫ぶようにします」

あり得なさそりだけど、それを認めるのも癪だからあり得る前提で話しておこう。

「待て待て待て。自分の担当トレーナーを変態扱いするんじやないよ。親御さんからも全幅の信頼を以つて連れてくるのOKされてるからね？」

ボクもおかーさんと電話してみたけど、頼れる大人つて言うよりは大人の身分だけは持つてる同年代の友人くらいに思われてたよ？
「そない言うて、毎晩ティオーチyanの柔肌を揉みしだいとるんやろ？」

あまりに変な表現をされたものだから、少し顔が熱くなつた。
そ、そんなんじやないし。

「変な表現をするな！ 脚のむくみを取るためにマッサージしてるだけ、そんな激しい揉み方はしてねーよ！」

「激しくはせず、優しく撫でまわすように揉んでるやつ？ 腕を上げたんやねえトレーナーはん」

なにもいかがわしい事なんてないはずなのに、顔から熱が引かない。

ううー、なんかトレーナーの顔も見づらいよ。

「この耳年増め。……いや、もう耳年増というには少し若さが足りないか？」

いや、先輩つてまだ二十歳を少し超えた位なんだよね？ 若さが足りないは失礼でしょ。

「ほんまに女心を欠片も理解せんヒトやねえ。頭を蹴り飛ばしたら多少はマシになるやろうか」

ニコニコした表情は全然変わらないのに気配が一気に物騒になつた。この先輩、グラスワンダーと同じ系統か。

「ウマ娘に頭蹴られたら愉快なオブジエになつちまうだろ。そもそも、女心より先に俺の立場を考えて発言してくれない？ ロリコン疑惑とか免許剥奪されかねないからね？」

先輩も小柄なタイプだしちよつと怪しい。体の凹凸はボクよりもずっとあるけど……。

「他に担当した二人もロリ系だつたんですか？」

この際だから先輩に色々聞いてみよう。トレーナーに聞いたら、そのうち会う機会があるからその時の楽しみにとつておけつて言われたけど、やっぱり気になる。

「んー、ロリやないなあ。長身姉御系とゴリマツチョやから」「

口リから一番遠そうな二系統じやん。

「そうそう、だから俺は全くロリコンではないからね？」

「せやな。女やつたらなんでもかまへん悪食やもんなあ」

うわあ。

「お前それ学園の男性トレーナー全員が被害受ける発言だからな！」

トレーナーつて学園だと周りに舐め腐った態度を取ることが多い

から、手玉に取られてるのって珍しい光景だなあ。

……それに、やつぱりボクとよりもずつと仲が良いんだ。

「あらあら。さて、こちらがお部屋になります。お風呂は普通の温泉と別に時間予約して入れる混浴の家族風呂もありますから、是非そつちも味わつていってな?」

「あー、そういうやそんなのあつたな。どうせならそつちも入つていく

か

へつ
!?!?

「……ふう」

あ”あ”ー、極楽極楽。

湯船に浸かつて一息つくと、おじさんみたいな声が出てしまつた。

「温泉を独り占めなんて贅沢なことしてるなー」

金曜日からの二泊三日で来た温泉旅行だけど、部屋が埋まるのは明日からで今日はかなり空いているらしかつた。

折角だし、存分に寛がせてもらおう。

それにして、混浴かー。

「……っ」

ふと意識してしまつたその言葉を頭から消したくて、湯に頭から潜る。

それつてそういうことなの。いやでもあのトレーナーだよ? 交代で入るだけで変な意味なんてある訳ないじやん。

「ふはつ……」

ダメだ。消すどころかずっと頭の中をグルグル回つてる。これじゃまともにトレーナーの顔見られないよ。

「お湯加減いかがどす?」

「わひやあ!」

突然後ろから掛けられた声に体が飛び跳ねた。

「うふふ、今は他のお客さんがおらんから構いまへんけど、もう少し静

かにな？」

後ろを振り向くと、先輩がニコニコしながら立っていた。

「い、いきなり声掛けないでよお」

「一応ボクもお客様なんだけど、掃除でもしに来たのだろうか。
世間話のついでに背中流したろ思てな。トレーナーはんが居ると話
しづらいこともあるやろ？」

そう言つて洗い場に手招きされる。

……さ、さすがに初対面の先輩に体を洗われるのは恥ずかしいんだ
けど。

「先輩後輩で裸の付き合い。家業を継ごうと決めて最大の役得や
わあ」

もしかしてトレーナーよりこの先輩のほうが危険なんじやないか
な……。

「ほら、髪洗うからそこ座つて。……菊花賞、ほんまに勝てる思うと
のか聞きたくてなあ」

今日までに耳にタコができるくらい言われたその言葉。けれど、そ
こには今までと別種の重さが宿つていた。

「別に止めたいわけやないんよ？ 勝てへんレースに何べんも出させ
てもろたのは、うちかて同じやからね」

そういうえば先輩たちの戦績つて。

「勝てなかつたんですね……？」

「そやなあ。勝てたのは未勝利戦くらいで、プレオープンですら散々
やつたなあ。重賞レースなんて夢のまた夢や」

それは、ボクにとつては想像するのも難しい領域の話だった。

「せやからほんまに驚いたんよ。あのクズが二冠ウマ娘をスカウトし
たやなんて。担当トレーナーとティオーチちゃんの弱み握つて脅した
に決まつてる言うて、他の二人が殴り込みに行きそうになつてたわ」
仮にも自分が担当したウマ娘にクズ呼びわりされて脅迫を疑われ
るつて、どれだけ信用がないのさトレーナー。

「その後に『雑魚しか担当したことないから折れた天才の慰め方がわ
かんねー。誰か教えて?』とかメッセージ送つてくるもんやから、ほ

んまに殺したろかと思うたわ」

敵対者に態度が悪いだけかと思つてたけど、全方位に対して喧嘩壳

るスタイルなんだ。

「でも、才能ないから走るの辞めろって言われた事はいつぺんもなかつたなあ」

……。

「変に気負うとらんか心配やつたんよ。うちも負けたことない子の気持ちちは分からんから。正確には、勝てると思ってるかより負けた後どうするつもりなんか聞いてみたかつたんやけど」

三冠でも、無敗でもなくなつたとして、ボクはどうするのか。どうしたいのか……。

「トレーナーはなんて言うかな」

少なくとも今は、自分の中に答えが見つからなかつた。

情けない話だ。走る資格だけでなく理由まで他者に求めようとしてる。

「あのヒトは間違いなく『壊れるまで走れ』つて言うやろなあ」

……それもいいかも知れない。

周りが走るなと止めるなが、ボクに走ることを望んでくれた唯一のヒトだ。

そんなトレーナーのために走り続けるのも悪くないかもしれない。「誰かのために走ることで強くなれんとは言わんけど、あのクズのため言うのはアホらしいからやめとき」

あはは、他人事ながら酷い言われようだなあ。

「負けてもかまへんから、なんもやる気せんかった時は相談してきてな？ うち以外の二人も含めて、そつち方面ならベテランや。温泉でもトラックの長距離旅行でも格闘技でも、走る以外の楽しいこと教えるから」

走つてもいいと言つてくれるヒトと、負けた後は任せろと言つてくれる先輩。

何もかも失つて失意のどん底だつたボクだけど、トレーナーたちに出会えて本当によかつた。

強襲Ⅲ

『トウカイティオー、菊花賞出走登録が完了。回避はせず』

トレーナー室でそんな記事が一面を飾る新聞を読みながら思案に耽る。

ティオーは辛いリハビリを耐え抜き、レースに出られる状態まで脚を回復させた。

夢を叶えたいという強い意志があつてこそ、成し遂げられたのだとと思う。

警戒していた世間からのバッシングもあまり大きなものではなかつた。

脚の状態を心配する声もあるが、それ以上に三冠達成を見たいという声と夢への挑戦を応援しなければいけないという同調圧力が世間に出来上がっている。

この世間の後押しはレースの結果次第で反転しかねない危うさがあるが、アツのやる気に水を差されるよりはマシだとポジティブに考えるとしよう。

「周囲のお膳立ては整つたわけだ。トレーナーが俺じゃなければ案外勝ちは堅かつたのかもな」

確かに脚は治つた。その兆候も夏を迎える前には見て取れた。

他のトレーナーならば、あの時点でトレーニングプランを見直して菊花賞を勝つための案を練ることができたのかもしれない。

だが、俺が考えて実行したのは普通の範疇を出ないありきたりなトレーニング内容だ。

少なくとも、トウカイティオーにマッチした独自の方法なんてものではない。

アツの才能に自分では見合わない。その事実を改めて認識したからだろうか。

ここ最近、自分で燻つているモノをはつきりと感じ取ることができた。

ティオーは夢に挑める。

俺は大金を得られるかも知れない機会が増える。

世間の連中は主役を欠いたレースを見ずに済む。

良いことづくめのはずだ。

なのに、勝つために必死で自分の走りを取り戻そうとしているアイツを見ていると、居心地の悪い感じがする。

自分でも原因がどこにあるのかは分かつていてる。

俺はウマ娘のために心の底から真剣になることができない。

勝つことを信じて心から望んでいる。力になることも吝かではない。

だが周りのトレーナーと比べると全くもつて足りていない。

リギル、スピカといった学園最高峰のチームだけではない。トレーナーなら当たり前に持つていてるべき”熱”を俺は持てていない。一般的な理論や使い古されたトレーニング方法が悪い訳ではない。だが専属トレーナーを名乗るのなら、それだけでは不足だ。担当しているウマ娘をしつかりと見て、それぞれに合った内容を真剣に模索し実践と修正を繰り返していくかなくてはならない。そうした無二の関係性こそが、ウマ娘の強さに繋がる。

今までには担当したウマ娘に期待できる才能がなかつたからと言いつてもできていたのだが、的外れだつたようだ。

トウカイティオーに才能がないだなんて、笑い話にもならない。

どれだけ取り繕おうとも、これは俺自身の欠陥だ。

それならば、自分が悪いと思つていてのならば、直していけばいい。本気だつて出せばいい。熱中もすればいい。したいという気持ちがない訳ではないのだから。

そう考えたことも、それこそ数えきれないほどある。

「それで”熱”が持てるなら苦労はないってね」

ダラダラと二十年以上も克服できなかつた悪癖だ。自分ではどうにもできない。

情けないことだが、誰かに切つ掛けをもらうしかないのだろう。

「失礼。シンボリルドフだが、入つても構わないだろうか」

そんな益体もない悩みに没頭していると、ドアがノックされ声が掛

かつた。

……このタイミングでラスボスのお出ましかよ。

いつたい何の用だつてのは、考えるまでもないか。

「悪いが、この部屋には時代遅れの女人禁制の法が敷かれていてな。

回れ右で頼む」

「ふむ、確かに私は左回りより右回りのレースを好んではいるが、左回りが苦手ということではないよ？」

そんなこと聞いてねーから。

「そもそもティオーダって女の子だろう。ふしだらな目で見ているなら蹴り飛ばすが、女性として見られないなどと言われたら、やはり蹴り飛ばすことになるが？」

どないせーと言うんじや。

ストレートに拒絶の意志を示したというのに意に介した風もなく部屋に入つて来てやがるし。

「あの女と理事長、どつちの差し金か知らんが交渉するつもりはないぞ」

コイツなら俺ではなくティオーデを説き伏せられそうな気もするが、此処に来たのはアソツの夢を直接否定するのは憚られたからだろうか。

「む？ ああ、勘違いさせてしまつたか。菊花賞の件で來た訳ではないんだ。君と少し話がしたかったのと、そうだな、見定めたいことがあつた」

……色々と疑問の湧く目的であるが。

「今更なのか？ お前は俺がティオーデと一緒に書類を提出した場にも居ただろう」

話をしたい理由とティオーデが無関係つてことはないはずだ。だが、それにしては時期を逸している気がする。俺とティオーデが契約書類を提出した後の尋問にコイツも居合わせていたが、その時の表情からはなにも読み取れなかつた。俺を疎んでいたのか、怒っていたのか。少なくとも負の感情を抱いていたとは思うのだが。

「おや、あまり信用してもらえていないようだね。ティオーデのパート

ナーとして相応しいかだけではなく、私の目的の協力者として見定めたいという話に嘘はないのだが

ますます分からん。

シンボリルドフの目的というのは、全てのウマ娘の幸福とかいうやつだろう。

俺からは最も遠い世界のお話だ。

「追々でも構わなかつたのだけど、ティオーのことも心配で丁度良い機会だつたからね」

そう言つて微笑む皇帝は、どこまでも泰然自若としている。

ヒステリック女やお子様理事長、自称大人の女ガールとは大違ひだ。

「座れよ。コーヒーワンなら淹れてやる。……ぶぶ漬けも出せるが、どつちがいい？」

「なら、コーヒーをお願いしようかな」

「それで？」

さつさとお帰り願いたい俺の問いかけに対し、ルドルフは至極ゆつたりとコーヒーを味わつている。

その優雅な所作でコーヒーを飲む姿は、俺なんぞよりも余程に成熟して見えた。

「天下の生徒会長様だとそこらのマグカップとインスタントコーヒーの組み合わせでも絵になるな。生徒会室にお高いコーヒーメーカーとか置いてそudsし、口に合わないんじやないか」

余裕たっぷりな態度を見て、早々に帰つてもらうことを諦めた俺は仕方なく会話を振ることにした。

「やはり、そういうイメージを持たれているのだろうか？ なにぶん忙しい身だからね。私も普段はインスタントコーヒーの世話になつてゐるよ。飲みすぎて寝つきが悪くならないか憂慮しているくらいだ」

本題以外の話題にはあつさり乗つてくるのな。

カフェインの取りすぎは中毒になるし、睡眠にあまり良い影響を与えないからほどほどにしておけよ。

「このマグカップは君の趣味かな？ 魚の漢字が羅列されている“デザイン”は寿司屋や湯飲みでよく目にするが、マグカップというのは珍しい」

「俺の元担当にトラックの運転手してる奴がいるんだよ。そいつが北海道に行つたときの土産だ」

湯飲みでいいのになんでか取っ手が付いてるんだよな。アイツの趣味はよく分からん。

「ああ、彼女の。最近は会つていないが、他の二人も含めて息災かな？」

「三人とも相変わらず元気にやつてる。というか、なんでお前がアイツと会うことがあるんだよ」

才能なくてドロップアウトしたウマ娘と七冠の皇帝様に接点なんてないだろ。

「彼女はトレセン学園の備品の運送もしているからね。生徒会が員数や状態の確認に立ち会うことがあるのさ」

「へえー、まあそういう事なら機会はあるか。

「それに、彼女と私の在学期間は被つてているからね。見知った先輩ではあるのさ」

そう言えば、シンボリルドルフが学園に来た時に結構な話題になつてたのをアイツと聞いてた覚えがあるな。

「レースで優れた成績を残せはしなかつたが、芯があつて自分の在り方がブレない強いウマ娘だつた。だからかな、そんな彼女が学園を去ることに大きな悔恨の念を感じたものだよ」

……内心、俺が担当したのが三人と知つてゐる事にも驚いていたが、コイツからしたら木つ端ウマ娘だろうアイツの在学中のことも覚えてるのかよ。底知れないというべきか、物好きというべきか。

「退学の日、会つて話をしていくね。学園を去るウマ娘は皆失意に暮れて顔を俯かせていたから、笑顔で気分良さそうに出て行く彼女には面食らつたなあ」

コーヒーを飲み終え、饒舌に語るルドルフの表情は、穏やかに過去を懐かしんでいた。

「『やりたい事に全力を尽くして、その先に別の新しいやりたい事ができた。この学園に来て自分の道を決める事ができた。後悔はない』と、そう言われたことが今も忘れないんだ。この学園でレース以外の幸福を見つけられるウマ娘がいる事実に、私はとても大きな可能性を感じた」

とても楽しそうに語つてるとこ悪いんだが、この話は長くなるのかな……。

「コーヒー、もう一杯淹れてきた方がいい感じか？」

「おや、すまない。衆目の前で語る機会が多いからか、どうにも長話になってしまふな。これでは周りから煙たがられてしまう。あ、コーヒーは淹れてほしいかな」

暗にはよ帰れと伝えたつもりなのだが、分かつて遠慮がないのか天然なのかどつちだろう。

「はあ……。そろそろ本題に入れよ。ティオーの話がしたいんじやないのか」

「いや、彼女の話も大切なんだ。口惜しい話ではあるが、トレセン学園で栄光を掴めるのは一握りのウマ娘のみ。そこから零れた者達に道を示すことが、私にはできなかつた」

そりや道を示すと言つても、歴代屈指の成績を叩きだして会長の座に君臨している奴に言われても嫌味にしかならんからな。

「だからこそ、私は君と彼女たちの関係性を尊いものだと考えている。それこそ、レースで活躍するウマ娘とトレーナーの関係に匹敵する程にね」

とんでもなく見当違いな高評価をされたものだ。

少なくとも退学後の身の振り方なんて、アイツらが勝手に見つけてきただけだ。

俺がなにかしたなんてこともない。

いや、運送会社だけは喫煙所で屯していた業者のオツサンたち経由で俺が紹介したんだつけ？

「なら、学園内に職業斡旋所でも作るんだな。レース一邊倒のガキどもに世の職場体験でもさせれば視野も広がるだろうさ」

「……ふむ、斡旋とまではいかずとも職場体験というのは悪くないな。ウマ娘の身体能力が社会の発展に寄与している場所はレースの興行以外にも多い。無駄にはならないだろう」

なに真剣に考えだしてゐるんだよ。レースをするための学園で他の事に現を抜かしてたら本末転倒だろうが。

「学園の未来なんて壮大な話は生徒会室に戻つてやつてくれ。もういい加減にティオーの事を話そuz。本人が此処に来ちまうよ」

「それはいけないな。君と一人きりで談笑している場面なんて見られたら、ティオーに焼き餅を焼かせてしまう」

談笑のつもりはないが、ティオーはシンボリルドルフの熱狂的ファンだもんな。

「ティオーの事で私が伝えたかつたことは一つ。どうかあの娘の事を宜しく頼む。立場上、囂慢することは出来ないが、それでもお願ひしたい」

そう言うや否や、立ち上がり頭を下げてきたルドルフを見て、俺は言いようのないばつの悪さを感じた。宜しくとはどういう意味なのだろうか。

面倒は見る。それが俺の利益になる公算が大きいからだ。だが俺には、自分を慕う後輩の競技者生活を任せられるような信頼はないはずだ。

「頭を上げろ。話しづらい。意図は分からぬが、俺にはお前が望むようなことは出来ないよ」

トウカイティオーを強くしてくれなんて意味なら、土台無理な話だ。

「トレーナーに求められるものは育成の手腕だけではない。ウマ娘の夢への共感、勝利を疑わない信頼、そして人生を捧げられるほどの覚悟が必要だと私は考えてゐる」

さすがは生徒会長様、志もお高いことだ。

「それで? 結論として俺にトウカイティオーは相応しくないって話

だろ。勿体付けるなよ」

「もう、どうにも君には上手く伝わらないな。君はその全てを満たしている。言うこと無しと断じることはできないが、ティオーに見合わないとは思わないさ」

……は？

「俺のどこがだよ」

「菊花賞と無敗の三冠という夢は、君がティオーの手を取つたからこそ挑めるんだ。そして君はティオーなら勝てる信じている。人生を捧げるほどの覚悟だけは、簡単に推し量れるものではないけれどね」

そう自信たっぷりに答える皇帝様は、まるで俺以上に俺のことを分かつて いるとも言いたげだつた。

「ふふ、まああの娘が勝つた暁には、二人でティオーが勝つと信じていたつて言おうじゃないか」

お、おう。……ん？

「そういうえば、ティオーと一緒に温泉に行つたそうだね。とても楽し そうに話をされたよ」

おいおい、他所でその話をするんじゃないよ。警察がすつ飛んで來たらどうするんだ。

「温泉つて硫黄の臭いがするだろう。ティオーはあまり気にならなかつたと言つていたが」

……え？ あ、うん。

「話したかつたことはこれで全てだ。時間を取らせてもまなかつた。

菊花賞、頑張つてくれ」

そう言つて、皇帝は颯爽と部屋から出ていった。

「……もしかして、生徒会長つて割かし暇なのか？」

舞台裏

「あ”あ”あ”あ”あ”——!! もうやだあ——!!」

そう叫びながらカクテルグラスを荒くカウンターに叩きつける姿を見せられると、なんとも言えない気分になる。

「飲みすぎよ。明日も担当の娘たちのトレーニングがあるんだから、その位にしておきなさい」

これ程までにやけ酒している理由の一割くらいは自分が原因なのだが、酔いつぶれて吐かれでもしたら付き合いきれない。

「だつてだつておハナさん！ 私なりにちゃんとティオーの事を考えてたんですよ！ 落ち着いたタイミングで道理を説けば、折り合いを付けて前に進んでくれるつて。その時のために後任としておハナさんも指名してたのにい！」

そう言つて、今度はカウンターに突つ伏して大泣きし始めた。

……結果的に、この子の行動は全て裏目に出で、失敗したということになる。

トウカイティオーの脚を壊しかねない選択をしないための契約解除は、彼女の心を碎いた。

癪癱を起した彼女が落ち着くために設けた時間は、クズに付ける隙を与えた。

そして彼女は、そのクズの元で万全には程遠くとも怪我を回復させ菊花賞に出走する。

まあ、なんというか、この子にとつては完全な転落ストーリーだなと思う。

「私が後任としてスカウトする予定だということ、さつさと伝えておくべきだつたのかしらね」

トウカイティオー本人の同意もない以上、あくまで裏の約束事で暫定的な処置でしかなかつたが、悪手だつただろうか。

しかし、先にその事を知られていては、菊花賞への未練を断ち切ることは無理だつただろう。

断固として菊花賞への出走を止めたとして、それでは関係構築など

出来ようはずもない。

この子が逃避ではなく最後まで説得を続けていれば丸く収まつたのか。

結果論でしかないが、それもまた危ない橋だつたとは思う。

ウマ娘の暴力というのは、冗談では済まないのだ。

一步間違えれば、ほんの少し超えてはいけないラインを超えてしまえば、比喩ではなく人生が終わる。

まあトレセン学園にはそれがどうしたと臆さず向かい合うウマ娘バカも多いのだが、問題は暴力を振るつたウマ娘の未来も閉ざされてしまう点だ。

トレーナーとしてこれを許容できる者は、少なくともトレセン学園にはいない。

本気で本音を晒し合つてぶつかる。その時の超えてはいけない一線を見極めるのはどうしようもなく難しい。どれだけ優れた才覚を有していようと、彼女たちは思春期真っ盛りの未熟で可能性に溢れた子供なのだ。

大人である私たちとて、その舵取りを誤つてしまふことはある。

「私が逃げたのが、全部いけないんですよね」

「……それは正直、否定のしようがないのだけれど」

これもまた結果論でしかないが、癪癱を起してしまふ素養があつたトウカイティオーレぶつからない選択をしたことは、学園としてはプラスだったのかもしだれない。

事件になつてしまえば、学園の運営もどうなるか分かつたものではない。

「ま、こんな言い訳をつらつらと並べて切り替えられるのなら苦労はしないわね」

あとはこの子にどうやつて立ち直つてもらうかだ。

トウカイティオーレの精神面はもう大丈夫だろう。

あのクズは子供を利用することに躊躇はしないが、自分の側に居る相手を後悔させる真似もしない。

今後のレースの成績はともかく、彼女が一人の人間として間違つた

方向に進むことはあるまい。

クズが育てた三人のウマ娘がそれを証明している。

優れた選手が優れた指導者になれる訳ではないよう、優れたトレーナーが優れた教育者と同義ではないということなのだろう。

「それにしても、あのクズとトウカイティオーのコンビとはねえ。過去の私に伝えたら絶対に信じないでしようね」

仮に信じたとして、間違いない弱みを握つて脅迫したと考えるだろう。

「……どうしたのよ。こっちをじつと見たりして」

ふと呴いた言葉を聞いた瞬間、ギュルンという効果音がしそうな勢いでこちらを向かれた。

突つ伏した体勢なものだから、髪の毛がカウンターにバサリと広がつていて悪霊みたいで怖い。

「おハナさん、クズの事をクズつて呼ぶんですね。どれだけ認めてなかろうと、立場上そういう汚い表現はしないと思つてました」

やけ酒してぎやん泣きしてた癖にそんなことが気になつたのか。というかこの子、あの男の本名を知らないのだろうか。

まあ、トウカイティオーのことを抜きにしても相性最悪だものね。「私のはあだ名としての親しみ半分よ。もう半分は『あなた、いい加減にもう少し大人になつたら?』っていう呆れだけれど」

決してバカではないのだが、あれもあれで生き方が不器用だ。

おべんちやら使つて愛想よくしていれば釣れるウマ娘がもつと居たし、学園関係者からの評判も落とさず生きやすかつただろうに、人間性を偽ることはできないらしい。

「全く、どうしてこう男つていう生き物はいくつになつてもガキのままのかしらね」

ウマ娘を露骨に金蔓扱いするクズもいれば、あつちをフラフラこつちをフラフラした後に他所様のチームのウマ娘を奪つていく男もいる。

「思い出したらライライラしてきたわ。マスター、もう一杯」

スズカ、スピカに行つてからは本当に楽しそうに走つてゐるし、

ちよつとドン引きする位に速いのよねえ。

「はあ……。程度の差はあれ、ウマ娘の想いを汲み取れないという意味では私も同じ穴の貉か」

取り返しが付かなくなる前に、彼がスピカへ引き抜いてくれたことに感謝するべきなのだろう。

「それはそれとしてお礼参りはさせてもらうわっ！ 見てなさいよ、黄金世代最強はグラスだし、次世代最強はオペラオーだと日本中に教えてあげる」

学園最強の座に君臨するのは、いつだつてリギルなのだ。

「おハナさんはいいですね。トレーナー生活に張り合いも出て、気になる男性も学園に戻ってきたし」

「ぶふおつ！」

気になるって誤解を招くような言い方しないでよ！ 私のライバルになれるだけの実力があるのに、うだつの上がらない事ばかりしてるのが許せないだけ！

「それに比べて、私は一人の女の子の心を壊しかけて、壊れかけた心を繫いでくれた男への恨みを未だに捨てきれないなんて……」

そう言いながらも、その声音は先ほどよりも澄んだものになつていった。

「なぜ今日になつて飲みに誘われたのか不思議だつたけれど、納得ができたのね？」

負い目と情けなさから、未だに自分からティオーに会いに行くことも、目を合わせることもできない有り様らしいが、やつと見るくらいのことは出来るようになつたらしい。

「はい。ティオーは、とても楽しそうに前を向いて走つていました」「全然本調子じゃない走りだつたけど、浮かべていた表情はダービーの前と、夢に向かつて進んでいたときの彼女と同じでした」

「だから、悔しいけどアイツが正しくて、私が間違つていたんです」

「私の弱さがあの娘を壊しかけて、その行動は結局は自分を守るためでしかなかつた」

「もう私にはあの娘を導く資格がなくて、アイツにはあるんだつて認

めます」

「ごめんなさい。あなたを支えることから逃げてごめんなさい、ティオー」

そうして静かに泣き出したのを見て、重たい溜息が出そうになるのを堪える。レースに挑むウマ娘にとつて、怪我は付き物だ。トランナー人生で一度も遭遇しないなんて事はあり得ない。その時に間違えずにいられるのかという問題は、この生業を続ける限り避け得ないことだ。酷い物別れをすることになつた二人だが、いつの日か多少でも関係を改善できる時がくればいいのだが。

まったく以て他人事ではないだけに、そう思わずにはいられない。

日没

「ハア……ハア……」

日が沈み、ライトに照らされるグラウンドには、ボクとトレーナーしか居なくなっていた。

そろそろ休息を取るべきではある。だが、もつと走らなければとう焦燥は收まりそうにない。

トレーナーはしつかりと約束を守ってくれた。疑っていた訳じやないけれど、裏切られた経験と病み上がりだという事実が、最後まで自分の中に澱みとして残っていた。

けれど、正式な出走登録手続きが終わり、公に周知もなされた。ボクがしつかりと体調を維持すれば、走れるんだ。

そういう意味でも休んだ方がいいのだけど、構わず脚を前に出した。

あとは勝つだけなんだ。それで夢が叶う。全て上手くいくんだ。
……なのに、自分の脚は全く思うように動いてくれない。

筋力の衰えと関節の柔軟性を取り戻せていない左脚。

トレーニング中の試走ですら息が上がるスタミナ。

ぶつつけ本番でレース勘もなにもない。

そして、夏の合宿を乗り越えて一回りも二回りも強くなつたであろうライバルたち。

敗北を予期させる要素はいくらでもあって、勝利を確信できる要素なんて見当たらない。

「笑っちゃうくらいに逆風だなあ」

かつて描いた夢へ至る道は、どうしようもなく険しい。

事前投票ではボクが一番人気だったが、勝利することへの信頼ではなく、三冠達成へのお祈りが大半と言つたところだろう。

競う相手となるウマ娘たちの仕上がり具合も見たが、悪くない感じだった。ダービーの時と同じ走りができるなら負ける気はしないが、たならばを言つても仕方がない。

どれだけ望もうと失つたものは戻らない。

だからこそ今あるもので、喪失の後に得たもので頑張る。

他ならぬボク自身が、そうしたいと思つていてる。

だが、焦りすぎて怪我をしては元も子もない。

脚を動かすスピードを緩め、気持ちを整理しようと夜空を見上げた。

実際のところ、夢の達成が困難である現状を憂いでいる訳ではないのだ。

ぶつちやけた話、無敗の三冠の夢が持つ意味は自分の中で随分と薄れている。

獲れば、歴史に名を残す偉業になるのだろう。

周囲の評価や待遇、自分の得られるモノは増えていくんだと思う。チヤホヤされて、誰もがトウカイティオーに注目して凄い天才だと褒め称え、賞賛と喝采を浴びせるのだ。

そして、負ければ何もない。

勝者は一人。オールオアナッシングとまでは言わないが、勝者とそれ以外には雲泥の差がある。

敗者に向けられる同情はあれど、やはり求められているのは一着なのだ。

別に世間のそんな対応を非難するつもりも貶す気もない。

所詮、ファンもマスコミも目立つ存在に群がってきただけのことなのだ。

強い輝きを放つ光があれば目を向けてしまう。それだけの話。

光が弱まれば見向きもされなくなる。

捻くれた物の見方だとは思う。けれど、かつての経験が世間に對しての疑念を抱かせる。少なくとも、世間からの期待に応えるために走るのは止めたほうがいい。シンボリルドルフが常に他者から求められる在り方を体現しようとしているのとは真逆の考えだが、今のボクは特に忌避感もなく受け入れられた。

そして、そんな考えを持つたボクにとって、レースとは名誉や世間からの承認を得るための場ではなくなった。

そんなことよりも、大切なヒトたちから受けた施しと恩に報いた

い。

少しでもなにかを返してあげたい。

崩れ落ちたボクを立ち上がらせてくれたヒトがいる。不貞腐れて周りを拒絶していたボクから離れず、支えようとしてくれた友人がいる。例え手酷い負け方をしたとしても、変わらずに自分を迎えてくれる両親がいる。

それは幾多の勝利の末に得られる栄光や財産と比べたって、決して劣つたりはしない得難いモノなんだ。

誰に与えられたのかも分からぬ、持つて生まれた才能の証明ではない。

傍で支え、共に歩んでくれた人達に自分の成長を伝えるために走ろう。

『あなた達のおかげで、自分は今此処にいる』と。

そう考へ、だからこそ負けたくないと思つた。

負けられないのではない。敗北では変わらないモノの大切さを、知ることができたから。

そして、敗北では変わらない人達がボクにはもう居る。

それでも、変わらず傍に居てくれる人達がボクの勝利で少しでも笑顔になってくれるのなら。

「それだけで、ボクの全てで挑む価値がある」

……そう、夢の喪失は問題ではない。ならば、一体なにを焦つているのか。

見上げていた空から顔を下げる、コチラに向けてトレーナーが手を振つていた。

両親と友人はボクが負けたとしても変わることはない。

けれど、トレーナーはどうだろうか。あのヒトがボクに利益を求めていることは分かっている。

ボクには気を遣つて建前を言う事もあるけど、普段の言動を見てれ

ば気付く。

ボクとトレーナーは、あの日『一緒に三冠とその先の夢を果たそう』と契約を結んだ。

では、三冠を獲れなかつた先は？

あの時は後のことなんて考えられなかつた。

今日まで負けた時の話もしなかつた。

先輩は『壊れるまで走れ』と言うだろうと教えてくれた。
どんな結果であれ、ボクとトレーナーの契約は続くんだと、疑うでもなく思つていた。

本当にそうだろうか？

あのヒトは、負けたボクを見捨てずにしてくれるだろうか。

怖くて聞くこともできない。

ああ、そうだ。
ボクは夢が叶わないかもしれないことに焦つて脚を動かしている
訳じやない。

傍に居てくれるはずのヒトを失う恐怖から、信頼していたヒトに裏
切られる絶望から逃げようと、足搔いているんだ。



「そのくらいにしておけよ、ティオー。これ以上はオーバーワークだ」
全く真面目すぎるだろ。やればやるほど嘗ての走りを取り戻せ
るつてなんならともかく、悪化する可能性だつてあるんだぞ。
「うん、分かってる。でもゴメンね、トレーナー。もう少しだけ走らせ
てほしいんだ」

おいおい、まさか自棄になつてるわけじやないよな？

菊花賞まで残り一週間。疲労を抜いて体調を整えるべき時期だ。
ここから追い込み掛けて詰め込むなんてのは論外だぞ。
「応えたいんだ」

ポツリと呟やかれた言葉の意味が理解できなかつた。
「ファンの期待とかの話か？」無視しろとは言わぬが、バカ正直に

受け止めても疲れるだけだと思うぞ」

負ければ手のひらを返す奴や筋の通らない批判の声を挙げる奴もいる。褒め言葉だけ聞くくらいがちょうどいいんだ。

「それはどんな評価をされても受け入れるよ。全部ボクの我儘による結果だからね。ボクが応えたいのは、トレーナーにだよ」

……俺？

「俺の期待についてとか？　たしかに一緒に三冠を獲ろうとは言つたが……」

むしろ怪我される位なら、無事にビリで負けて帰つて来てくれた方が嬉しいんですが。

「学園のヒト達から色々言われたじゃん。見返してやりたいんだよね。『ほら、トレーナーはなにも間違つてなかつた。ボクを菊花賞に出走させたことは正解なんだ。見たか！』ってね」

「……入れ込みすぎだ。俺はお前にトレーナーとして何もしてやれてない。俺にできて他のトレーナーにできないことなんて何一つないんだよ」

トレーニングのレベル。あるいはウマ娘との絆。仮にそんな数値があるとしたら、俺は間違いなく学園でも最低だろう。菊花賞が目前だというのに、有効な策の提案や助言もできず、近くでこうやってトレーニングを見ているだけなのだ。

役に立つ度合いなんて、精々一緒に遊んでストレス解消できるお友達Aと言つたところか。

「だからこそ、ありがとう。他の誰でもできるはずの菊花賞への出走を認めてくれたのは、トレーナーだけだつた。それはあの時のボクにとって何にも代え難いことで、本当に感謝してる」

欲に塗れているだけのことをそこまで言われると、胸がモヤモヤして仕方ない。ウマ娘はピュアな性格の奴しか生まれないのでだろうか。「勝ちたい理由は多い方がいいよ。ボクの夢のため、ボクの夢を拾い上げてくれたヒトのために勝ちたい。そう思うとね、脚を動かしたくて我慢できないんだ」

部屋に帰つて休んでもらうのがベストなんだけどなー。コイツの

目を見てると言うこと聞かせられる気がしない。

「全力疾走はなし。トレーニング後のケアをしても門限に間に合う時間までつて条件付きだ」

いかんな。金蔓が無駄に摩耗する展開なんて避けるべきだ。
いやしかし、強制的に止めさせてモチベーションを落とすのも悪手か？

こういう時はどうやつて宥めすかすのが正解なんだろうな。

「ありがとうっ！ それじゃ、いつてくるね！」

そう言つてグラウンドへ駆け出したティオーを見送つて、未だ晴れない胸にある靄に思考を巡らせる。

原因是今以て熱を持つことができない己への不満。

悪いのは俺で、自分ではどうにも出来ないと思っている。
それはいい。

だが、何故このタイミングでここまで眞面目に考え出したんだ。
ずっと後回しにし続けて、向き合ふこともしてこなかつたのに。

「まさか、勝つてほしいと思つてるのか？ 金なんて関係なくアイツの夢のために？ バカらしい……」

まだ契約から半年と経つていない浅い関係だ。近づいた目的だけ我欲を満たしたかつただけ。怪我にめげず奮起する女の子を近くで見ていただけで感化されるなんて、流石に簡単すぎるだろ。

俺の目的はトウカイティオーを使って金を得ること。そのためにはイツに優しくして、心と体をケアしたんだ。菊花賞一着で得られる金錢は大きいから勝つてほしい。しかし、怪我をされる位なら無理せず負けてほしいし、大怪我して引退なんてことになつたら目も当てられない。

やはり今すぐに休ませて、本番も無理はしないように強く言い聞かせるべきか？

そう考え、練習コースを一周してきたティオーに向けて声を掛けようとして、言葉に詰まつた。

汗をかき、息を荒げながら走るティオーの顔はどこまでも真摯で真剣だった。

俺の記憶にある最高潮のトウカイティオーと比べると、無様で余裕のない走り。

世代の代表格たるウマ娘達に勝つには、恐らく足りない。

それでも譲りたくないモノがあるからと諦めない姿は、キラキラと輝いていた。

……今まで散々利用するため動いてきたんだ。いまさら俺に止める資格なんてないか。

走るティオーを見ていると、かつて担当した三人のことが思い浮かんだ。

アイツらに対してだつて、自分からやめと言い出さない限り口を挟むことはしなかった。

してはいけないと思つた。

たとえ結果が伴わないのだとしても、俺は知つていて。

この学園で最も不真面目で不健全な俺だからこそ、知つていて。自らが選択し心に決めたモノのために本気になれるることは、この世のなによりも尊い。

不純な動機でしか動けない俺が止めていいものではない。

「まあ、俺はトウカイティオーのトレーナーだしな。応援したって何もおかしくはないか」

羨望か嫉妬か、あるいは不甲斐なさか。

降りかかる不幸も困難も跳ね除けて進むティオーの眩さに目を細めながら、変われない自分を納得させる。

応援しかできないトレーナーというのも中々に笑えない話だ。

だが、菊花賞までになにかを劇的に改善することも出来ない。

二冠達成時の走りを万全として、果たして今はどれくらいなのか。距離三千という初めての長距離レースなのに、病み上がりで結果を出せるのか。

俺では精度の高い予想なんてできないが、アイツの想いと努力に嘘はなかつた。

少なくとも、夕暮れのグラウンドで契約を交わしたあの日からは、一番近くでそれを見てきた。

「だからまあ、夢が叶つてハッピーエンドなんて結末も有り得るよな
?」

そうして迎えた菊花賞。

『トウカイティオー 十一着』

それがアйツの夢の終わりで、どうしようもない現実だった。

天秤

『おおつと！ トウカイティオー、これは出遅れたか！』

『ペースが乱れていますね。出遅れを取り戻そうと掛かり気味になつてあります』

『レースは終盤、第四コーナーを超えて最終直線へ！ しかし、トウカイティオー伸びない！ この差を詰めるのはもう無理か！』

『トウカイティオー、十一着！ 無敗の三冠の夢、ここに敗れました！』

菊花賞の推移を簡潔にまとめると、こんな感じだろうか。

可能性としては十分にあり得た話だ。

想いと努力に嘘がなかろうと、それは周囲も同じこと。

力及ばぬ者が運だけで他の十七人を超えてられるほど、世の中には都合良く出来てはいない。

「それにしても、もう少し見栄えの良い負け方をさせてくれよなあ」

どうやら、三女神とやらは悲劇の類を楽しめるタイプらしい。

ある程度でも自分の走りをして負けたのなら、きちんと納得することができただろうに。

「走る事と勝つ事を本能に刻ませて競わせてるような神様なんざ、碌なもんじやなくて当然か」

喜ぶのは一着の一人だけ。多少は判定を甘くしても三着くらいまでだろう。

観客の一喜一憂はともかく、ターフに目を移せば大半のやつは負け湿氣た面してる。

勝てた経験が少ないからかもしれないが、正直あんまり楽しくない。

楽に儲けられなかつたら絶対に職として選ばなかつたわ。

「そんなことよりティオーだな。流石にこの結果は落ち込んでるよな」

本当に、どうしようかね。

結果は出た。どれだけ辛かろうが変えることはできない。

たった二人のウマ娘しか成し遂げていない、クラシック三冠制覇。トウカイティオーという天才もまた、成し得なかつた側になつた。レースを終え、息が上がつたまま膝に手をつくティオーの表情には、悔しさがにじみ出でていた。ティオーの最終目標であるシンボリルドルフとの対決に影響があるわけではない。しかし、途中目標の達成すら出来ない有り様で”絶対”を超えられるのかという疑念は自分の中に生まれるだろう。今後の走りにも無関係とはいかない。

それでも、絶望や諦観は感じられない辺りダメージとしては許容範囲か。

「体の状態を鑑みれば負けて元々だ。悔しさをバネに奮起できるのなら、それでいいか」

俺個人の想いとしてはその程度である。

勝つてほしいと思つてはいたが、負けたからどうということもない。

息を整え、踏ん切りを付けるかのように一度目を閉じたティオーは、地下道へと脚を向けた。

負けたのも初めて。

ライブのセンターでないのも初めて。

けれど、夢が破れたのは初めてではない。

だからだろうか、ダービーの後よりは余裕がありそうだ。
はてさて、案外と大丈夫そうではあるが、これなら慰めの言葉は要らないか。

そんなことを考えながら、自身も地下道へと足を向けたとき。
ふと視線を感じて振り向くと、ティオーがこちらを見ていた。

「……おいおい、なんでそんな酷い面してるんだよ」

悔しさは大いにあるだろうが、それでも一応の納得をしたように見えた。

どれだけ尾を引こうとも、アイツならまた前を向いて走り出すだろうと 생각ていた。

なのに、なぜそんなにも俺に對して申し訳なさそうな顔をしているんだ。

ティオーの表情はクシャリと歪み、握った手と肩が震えているのが見て取れた。

歯を食いしばつて耐えているが、それでも涙がこぼれそうになつている。

まさかアソツ、俺に悪いことしたなんて思つてるんじやねえだろくな。

「……全く、病み上がりがなにをいつちよ前に他人のこと気遣つてるんだか」

アソツの歪んだ表情を見て、心がざわついた。

言つただろう。このレースにかかつてているのはお前の夢だけで、俺にとつては数あるG-Iレースの一つでしかないんだよ。

お前が菊花賞に出られるのはリハビリを頑張つて偶然怪我の治りが早かつたからで、俺が居たかどうかなんて関係ないんだよ。だから、俺のためにそんな顔をする必要はないんだ。

そもそも……。

「大人の期待に応えられなくて子供が泣くなんてこと、あつて良い訳ないだろ」

そんなもん背負おうと考へるなんて、五年は早いんだよマセガキ。

地下道でティオーを待つていると、相変わらず泣きそうな顔のまま歩いてきた。

やれやれ、しようがない奴である。

ここは、俺が金蔓になるウマ娘をスカウトするために磨いてきた口説きテクでさくつと慰めてやるしかないだろう。

「よお、ティオー。悪いレース展開の見本市みたいな走りだつたな！」

……あつ

いかん、昔の担当連中と同じノリでやつちまつた。

「……ファンツ!!」

「痛つてええええええつ!!」

おま、蹄鉄で脛を蹴るのは反則だろうつ……!

「どうせ無様で情けない走りだつたですよーだ!」

お、おう。意外と威勢よく反抗できるじやねーか。そこまで心配するほどの事じやなかつたか?

左脚の脛からじわりと広がる鈍い痛みを抑えるように蹲り、額に脂汗を流しながらも安堵の息を吐く。

「……ねえ、トレーナー。ボクに愛想尽かしちやつてない?」

あ、やっぱり大丈夫じやないやつだこれ。

「愛想尽かす理由がなにがあつたか? 僕には負けて失うものがあつた訳じやないんだぜ」

スカウトした時点では菊花賞に出走できないと予想していたんだ。奇跡的に出られたからと言つて、勝ちに勘定しておけるもんではない。負けて失つたのはティオーが掲げる無敗の三冠だけで、僕にはなんの痛みもありはしない。

「だつてさ、あんなにボクのために尽くしてくれたんじやん。夢に挑む権利をくれて、絶望視されてた怪我を回復させてくれた。あれだけ先行投資したウマ娘がこんな走りしかできないだなんて、ボクだつたら嫌になつちやうよ」

そう絞り出すように話すティオーの唇は震えていて、声は今にも消えてしまいそうなほど、か細いものだつた。

先行投資。ティオーと食事をしたり買い物することを、そう表現したこともあつたな。

「ボク、やつと少しだけ恩返しができると思つたのに、ぜんぜん良いとこなしで負けちゃつた。トレーナーがボクにくれたものを全部無駄にしちやつた……」

そこまで重いものだと捉えていたのか。

確かに、俺がティオーに向ける期待は大きい。

かつての三人とは比べものにならない才能が齎す利益は見過ごせないモノだ。

だから、俺も金の出し惜しみやケチな真似はしなかった。

だが、そこになにか特別なことなど、一つもなかつたんだ。

中央のトレーナーとしては並以下でしかない俺がコイツに与えたものなんて、恩に感じるほどのことじやないんだ。

「無駄なんかじやねーよ。菊花賞で負けても、お前はまだ走れるだろ。G-Iなんてこれから何回でも出られる。今日の負けが震むくらいに勝てばいいだけだ」

無敗よりも、一回くらいは大コケしてた方が可愛げもあるつてものだ。

……それに、俺にとつてはこれが良い機会だつたのかもしれない。少しだけ、自分の心と向き合うことができたから。

「本当にそう思つてくれてる？ 期待に応えられなかつたボクは、まだトレーナーのウマ娘で居ていいの？」

傷心のコイツを半ば騙す形で始まつた、この関係。

きっと、変わつていかなければいけないのは俺の方だ。

「俺のウマ娘でいいのかつて？ むしろ、やつと釣り合いが取れただころだ」

「……釣り合い？」

「碌に重賞ウマ娘も育てられないトレーナーと無敗の二冠ウマ娘じや、誰が見たつて不釣り合ひだつたら。美女と野獸。いや、豚に真珠か？」

そうだ、今日の敗北で俺はなにも失つていない。

だから、平気なはずなのだ。

なのに、こんなにもティオールを勝たせられなかつたことに苛立ちを感じている。

自分でも驚くほどに、負けて泣きそうになつてているティオールを見て、勝たせてやることが出来なかつた己の不甲斐なさに苛ついていた。

「今日の大負けで多少はバランスが取れた。負けたウマ娘に氣の利いた言葉の一つもかけられない無能トレーナーと、情けない走りをしたレース下手なウマ娘。お似合いだろ？」

ちようど、お互^い左脚に大ダメージを負つた仲もあるしな。

そう言つて、まだ脛の痛みで涙目な状態で笑いかけると、ティオーもまた泣き笑いのような表情を浮かべた。

「あはは、なにそれ。でも、そうだね。底辺同士でお似合いかもしけない」

いや、菊花賞十一着は負けではあるが、世代全体で見ると相当に上辺だぞ。

「それにドン底まで沈んじやつたら、後は昇つていくだけだよね」 目元の涙を拭い、大きく息を吐いたティオーは少しだけ普段の快活さを取り戻せたようだつた。

「ああ、ここから這い上がればいいさ」

そうだ。

きつとコイツは今日の敗北と夢破れたという辛い現実すら、強さへと変えていくだろう。

だが、俺は違う。

釣り合いが取れたとしても、それはほんの一時の間だけのことだ。あつという間に俺達の差は広がり、また釣り合いは取れなくなる。それでもコイツが勝ってくれれば、なんの問題もないのだろう。

しかし、もしも負けるようなことがあれば、俺はまた今日と同じ不甲斐なさと苛立ちを感じることになる。

俺がもつとしつかりしていれば、コイツは勝てたのではないかと。「それはちよつと、楽しくなさうだよな」

「……？」

俺の呟きに首を傾げるティオーを見ながら、告げる。

「なあ、ティオー。ライブが終わつたらさ、次を勝つための作戦会議ついでに、にんじんハンバーグでも食べに行くか」

「……うんっ！」

金を稼ぐだけなら、必ずしも一着である必要はない。二着でも三着でも遊んで行くには十分な額が手に入る。

だが、コイツはそれで満足するだろうか。自分の前を走るウマ娘を見て、今日のような見当違いな不安を抱え、笑顔を曇らせはしないだ

ろうか。

それを近くで見せられるのは、全然楽しくない。

なら、手放すか？そんな訳もない。

ティオーより才能があるウマ娘を探すだけでも困難極まるだろうに、契約に漕ぎ着けるだなんて奇跡が起きてもまだ足りない。

ならば、やるしかない。金も稼いで俺も楽しい思いをする。そうするには、コイツを一着にして勝たせるしかない。

そのためなら、俺が楽しい思いをするためならば、俺は今までよりも少しだけ熱くなれる。

「他のトレーナー連中、なにが悲しくてガキの子守を仕事にしてんのかと思つてたんだがな」

なんてことはない。あの連中も楽しみたいだけのことなんだろう。自分のウマ娘が勝つのが楽しくて、勝たせられるように鍛えるのが楽しいのだ。

ならばきつと、俺とティオーが勝つために過ごす時間も楽しいものになる。

そう考え、自然と笑みがこぼれた俺をティオーが訝しげに見てくる。

「なんでもねーよ。控室行つてライブの準備するぞ」

この先は、努力も時間も意志もプライドも、俺の持てる全てコイツのために使おう。

それがあの日、コイツを騙したクズな大人としての責任つてやつで、トウカイティオーのトレーナーだと名乗つっていくのに必要な資格なんだと思う。

門出

「という訳で、これからの方針を決めようと思う」

菊花賞を終えて数日。あの日から、俺たちの関係性にもほんの少しが变化が起きた。

金や目標と言つた付随する理由に変わりはなくとも、負けたくないという想いはより強く。

一緒に勝ちたいという意思を共有できたことで、日々の生活にも張り合いかが出て いる。

「方針？ 体の負担が限界を超えない範囲で中長距離のG I レースに出るでいいんじゃないの？」

何を言つているのだろうと首を傾げるティオーにこつちが困惑する。

……あれ？ 俺の予想してた回答と全然違うんだけど。

以前よりも理解し合えたと思つていたのだが、もしかして俺の勘違いか？

「それでいいのか？ その、春秋の三冠とかルドルフと同じレースを走りたいとかあるだろ」

出るレースによつて、トレーニングの方針にも違いがでる。

心機一転した真面目なトレーナー君としては、しっかりと意思疎通を図り認識の齟齬はないようにしておきたいんだが。

「別に拘るつもりはないよ。あー、でも賞金のことを考えるとグランプリは外せないかな」

……んー？

「しょ、賞金でレースを選ぶのはどうかと思うぞ？ ほら、やつぱり自分の信念に基づいて選択するべきじゃないか？」

二十数年生きてきて、ここまで口を開くのが重たいと感じたことはない。

賞金より信念とか、どの口がほざいてるんだ。

「そこで取り繕わないでよ。お金が欲しくてボクのことスカウトしたんでしょ」

改めて担当ウマ娘から言われてはつきり分かつたが、これ最低な理由だな。

「そ、そんなことないし。俺はトレーナーとしてトウカイティオーリーという才能が潰えるのは許せないって思つたからスカウトしたんだし」「へえー、そうなんだ。ちなみにボクは菊花賞に出てくれるならどここの誰であろうとどうでもいいって思つてスカウトを受けたよ」

それは言われんでも知つてるけども。

……よく考えたら俺、ティオーリーの怪我が治つたら捨てられる可能性を甘く見積もつてたよな。

金にしか興味ないと思われてる無能トレーナーの泣き落としなんか通用する訳ないじやん。

あれ、もしかして俺どうとう来期から無職か？

「捨てないでください。なんでもしますから……」

担当ウマ娘に下座を敢行するトレーナーって歴代にどれくらい居たんだろうか。

でも、やつと本気になれそうなんだよ。

いまさらトウカイティオーリー以外のウマ娘なんて考えられないんだ。「なんでいきなり土下座しだしたの……。心配しなくともトレーナー以外と組むつもりなんてないから。レースだつて本当にそれでいいつて思つてるんだから気にしないでよ」

ううむ。そこまで言うのなら信じるしかあるまいか。

「なら話を戻すぞ。年内だとジャパンカップや有馬記念があるけど、俺は出走を見送つてもいいと考えている」
菊花賞の敗北でもトウカイティオーリーの人気に翳りはなく、有馬の出走権も獲得できてはいる。

だが、ここで急いで菊花賞の二の舞になりかねない。
腰を据えて育成に注力すべきだと思う。

「それでいいの？ 有馬記念一着で賞金一億二千万円だよ？」
イチオクニセンマンエン。

億なんて桁、そうそう言葉にすることもない。

それが、一部とは言え自分の懷に入るかもしれないのだ。

金の魔力抗いがたし。だがそれでも。

「……い、いいんだ。次のレースは俺たちにとつて本当の意味で復帰レースになる。半端な状態ではなく、納得できる仕上がりにしてから挑みたい」

でも一億二千万か……。平均的な生涯年収の何割になるか。

いやいや惑わされるな。それは勝つたらの話だ。

ティオーの力を信じてはいるが、それはトレーナーとして妄信することではない。

それに、幸いにも菊花賞の後に怪我の再発や体の不調は見られなかつた。

年内の出走を避ければ、数ヶ月はスタミナや筋力の強化に充てられる。

「じゃあレースに出るのは来年になつてからだね。賞金なら春の天皇賞だけど、いきなりGⅠ最長距離はさすがに無茶かなあ」

菊花賞を超える距離三千二百だもんな。

レース勘を取り戻すことも考えると、やはり初手は実績があつて得意とする中距離だろう。

「そうなると候補はあつてないようなものだな。四月の大阪杯。それが俺たちの新しい目標だ」

八大レースにこそ含まれないが、新年初つ端のGⅠということもあり、出てくるウマ娘も強敵揃いになるだろう。

「……やつぱり、最初はGⅢとかGⅡから挑戦して徐々にステップアップしていくか？ いきなりGⅠてのは高望みしそうかもしれん」なんだか怖くなってきた。

今まで本気でやつてこなかつたからこそ言い訳できていたが、本気ということはそれ以上はないということだ。

どこまでも冷酷に現実を突きつけられる。

お前はその程度なのだと、結局はトウカイティオーには見合わないのだと思いつくることになるかもしれない。

「もうつ、なにを弱気になつてるのさ！ このトウカイティオーのトレーナーなんだよ！ 来年は出走するGⅠレースを俺たちで総なめ

してやる位のことは言つてよ!」

「いやしかしだな、人生というのは謙虚に身の程を弁えて歩んでいくべきだと思うんだ」

コツコツやつていくのが人生のコツだぞ。

「謙虚つてトレーナーに一番似合わない言葉じやない?」

口を慎みたまえよ、トウカイティオ。俺だつて似合わないと思つて いるのを我慢してゐるんだから。

「ど・に・か・く! 次のレースは大阪杯。その次は春の天皇賞。マイルに挑戦してみてもいいけど、順当に行けば宝塚記念つて流れかなあ」

アイツらの時はプレオープンや重賞以下のレースに勝つところからだつたから、こうやつてGⅠレースの名前がポンポン出てくると眩量がしてくるな。

トウカイティオが如何に凄いウマ娘か、今頃になつて実感が湧いてくることになるとは思いもしなかつた。

「分かつた。その予定で動こう。そんじや、次はトレーニングについてだな」

菊花賞までのほんどの期間はリハビリだつたし、直前も負荷が高すぎるトレーニング内容は避けていた。

ここからは、完全に怪我が回復した状態のトレーニングに切り替えられる。

「トレーニングはバランスよく坂路やプールを混ぜていくのがベストだよな」

少なくとも、現時点のティオには全てが足りていない。

だが、天性のバネや関節の柔らかさが完全に失われた訳でもない。時間さえあれば以前と遜色ない状態になるだろう。

ならば、併せてスタミナや心肺機能、筋力の強化も図つていく。平均的に能力を鍛えていくなかで、強みも取り戻していけば最強ウマ娘の再誕である。

俺の一番の課題は、そこからさらにコイツを伸ばしてやれるかつてどこなのだが。

「心配してるのはレース勘なんだよね。ボクたちって専属だから併走相手を都合良く用意できないし、こればっかりは仕方ないかなあ」

併走相手か。チームを組んでいれば相手には困らないんだがな。学園のほかのウマ娘たちと交渉することはできるのだが、ここでも俺の存在が足を引っ張る。

そう、俺は基本的にトレーナーを含めた学園関係者からの評判がすることぶる悪いのである。

トウカイティオーとの併走に価値を見出すやつはそれなりにいるだろうが、良からぬことを考えているのではないかと敬遠される可能性もある。

その辺りを理解して融通を利かしてくれそなのはリギルとスピカのトレーナーだが、スピカには間違いない春の天皇賞でぶつかることになるメジロマツクイーンがいる。

お互に手の内を晒したくないという理由で断られる可能性は高い。

リギルは……。

『どうかあの娘のことを宜しく頼む』

シンボリルドフに頭を下げさせておいて菊花賞はあの有り様である。

蹴り飛ばされても文句言えねーわ。

どの面下げて併走お願いしまーすつて言いに行けばいいんだ。

「すまん、ティオー。俺はダメダメなトレーナーだよ」

まともに併走相手すら用意してやれないなんて。

性格も態度も能力もダメなんて逆にすごいよね。無能三冠トレーナーってか? やかましいわ。

「さつきから落ち込んだり空中にツツコミ入れたりどうしたの? 頭大丈夫?」

心配してくれてるんだろうが言い方は選ぼうね。

「併走相手のこととはまた今度考えればいいんじゃないかな。まずはボク自身の能力を戻し切るところからだよ」

……そもそもうか。

俺のガバガバな見立てでも、年内一杯はそちらに注力する必要がある。

他のウマ娘の出走予定なんかが分かってくれば、頼みやすい相手も出てくるかもしれん。

「もし見つかんなかったらマヤノとかマーベラスにも頼めなくはないしさ」「

マヤノとマーベラスかー。

才能はあるんだろうけどまだ未デビュードからなあ。
さすがにシニア級の相手にはならないだろう。

それでも相手をしてくれるなら意味はあるし、担当のトレーナー達と関係性を構築していくための第一歩として、こちらから恩を売れるかもしれない。

「はあ……。引っ越してきた地域でご近所さん付き合いが上手くできるか悩む主婦の心境だぜ」

意地悪なおばちゃんみたいな連中に虐められたらどうしよう。

「本当にここに悩んでるのさ。だいたいトレーナーは虐められたら倍返しするタイプでしょ」

そもそもそうだったわ。

眞面目にティオーと向き合つていくつて決めた影響で及び腰になつてるな。

トレーナー業は嘗められたら終わりだ。

二冠ウマ娘と一緒にトレーニングさせてやつてもいいんだぜ、くらいのテンションで行こう。

「おーっし、弱気はやめだやめだ。二冠のティオーよりすごいウマ娘なんて同世代にやいないんだからな！ ふんどり返つて行くか！」

「二冠獲つたのはトレーナーと組む前なんだけどね」「わはは、細かいこと気にすんな！」

■
氣にするな、なんて笑つてることにしない訳ないよ。

過去の栄光だけじゃ、ボクとトレーナーの評価に繋がらないじゃん。

ボクはまだなんの恩返しも出来ていないんだよ？

トレーナー、ボクに欲望は隠さずに出していくって言うよね。

だから誤魔化したりしないよ。恩を返すだけじゃない。

本心から、トレーナーに貰つた以上のモノを与えてあげたいと思つてるんだ。

それが今ボクのやりたいこと。

だから、いくらでも賞金の高いレースに出してくれていいよ。

ボク、頑張つて稼いでくるからさ。

まあ、トレーナーがじっくり育成に臨みたいって言うなら従うけど。

そうやつて、自分の気持ちを整理しながら拳を握つて力を込める。

……明らかに肉体の出力が上がつていて。

欠片も本調子ではなかつた菊花賞から数日、なにかトレーニングをした訳でもないのに。

理由は分かつている。

ボクとトレーナーの両方が本当の意味で一緒に歩んでいく覚悟を決められたからだ。

今までの関係が嘘だつたわけじゃない。けれど、足りていなかつたピースがカチリと嵌つたかのように、心身にあつた違和感が消えたのを感じる。

今にして思えば、ボクは精神的に騙し騙しやつてきていたんだろう。

以前のトレーナーを、あのヒトを失つた絶望と悲しみを無理矢理に憎悪と怒りで上書きしていた。

そんな心の歪みと菊花賞への焦りは無意識のうちに肉体にも負担を与えていた。

それが負けたことで、いや負けたからこそ、存念なく前に進めるようになつた。

焦る必要はない。

トレーナーの言うとおり、次のレースは万全の状態にして挑もう。

そうしてトレーナーに見せてあげるんだ。

あなたのウマ娘は誰よりも速く、地の果てまでだつて走れるんだつてことを。

そうしてトレーナーに教えてあげるんだ。

あなたの欲望を叶えるために、好きなだけボクを使ってくれていいんだつてことを。

年度代表ウマ娘

「あ”一肩が凝るわネクタイは上手く締まらないわ散々だ。慣れないことはするもんじやねーな」

『ティオーの写真を送つてほしい』

以前から、ご両親にそういう要望を受けてはいた。

だから定期的にトレーニング風景や遊びに出たときの写真を撮つていて、多少は数をこなせていると思つてたんだがな。

今までは手持ちのデジカメやスマホで満足してくれていたのだが、今日という晴れ舞台はより高画質な写真で残したいと嘆願された。なんならコチラからカメラを送りますよとメッセージに型番が書かれていたのだが、レンズも含めると目ん玉飛び出るような金額のやつだつた。

アイツの実家、思つてたよりも全然太いわ。

あまりに高額すぎて手が震えてキレイに撮れる気がしねー、と頑垂れていたところ、何を勘違いしたのか今度はルドルフが『この一眼レフとスタビライザーを使えば手ブレ対策もバツチリだ』とクソデカいカメラを置いていきやがつた。

そういう意味で悩んでたんじやねーんだよ。

というか気づいたら部屋の入口に手を組んで背を預けた状態で立つてたが、何時からいたんだろうか。

使用料は撮影したデータの横流しで良いとか言つていたが何も良くなない。

最近俺のなかでキヤラが壊れ気味なんだが、それでいいのか皇帝。それで結局ルドルフのカメラを使って撮つたんだが、重いわデカいわで腕と肩が痛い。

そもそもアイツはなんの用途でこんなもんを持つてたんだ。

「……これで最低限は見せられるか?」

やつとこさネクタイも納得のいく状態になつた。
もうスーツなんて絶対に着ねー。

さてと、次は手の掛かるお嬢様のご機嫌取りか。なんで祝いの場な

のに俺は疲れてばっかりなんだ

ジャケットを羽織り、関係者控室から出てティオーを迎えて行く。廊下を歩いている最中、向けられる視線の温度は冷たく、聞こえてくる声に込められている感情は愉快なものではなかった。

「はあ……。苦労して連れてきたんだぞ。頼むからティオーの前では取り繕つてくれよー」

すでに手遅れな気もするが、宥めるにも限界がある。

そうして辿り着いた部屋には『受賞者控室』の立て札。

菊花賞の敗北から早や二ヶ月が経過し迎えた新年。

無敗の三冠こそ逃したものの、トウカイティオーはURA年度代表ウマ娘に選ばれた。



『菊花賞は残念だつたけど、それでも夢に挑戦する姿を見られて良かった』

『前のトレーナーだつたら勝てただろ。無策みたいだつたし、負けたのはトレーナーが原因』

『病み上がりで長距離レースは無謀だつた。三冠と一緒に無敗もなくなつたし、トレーナーは責任取れるのかよ』

『ダービーと同じ走りとは言えなかつたけど、また走つてるトウカイティオーが見られて嬉しい。次にどのレースに出走するのか楽しみ』以上、ここ最近ネット上で飛び交つている俺とティオーに対する代表的な評価の抜粋である。

菊花賞直後から少なからず声は上がつていたものの、基本的にはティオーに対する応援と同情の声だけだった。

そこに俺の能力を疑問視する内容が含まれだしたのは、年末頃からの話だ。

切欠は、あの女の担当ウマ娘が有馬記念を獲つたからだろう。

シニア級で数年走つてゐるウマ娘なんだが、今までのレース結果はあまり奮うものではなかつた。

だが、ここに来て国内最高峰のレースで勝利を飾り大きな注目を集めていた。

その勝利者インタビューで担当トレーナーの悪い噂を払拭したかつたと答えたことで、一連の事情に詳しくなかつた者達にも興味を持たれた次第である。

そのあとはまあ、トントン拍子にマスコミとゴシップ好きなネット上の不特定多数によるお祭り騒ぎという訳だ。

トウカイティオーの骨折と、それに伴い発生した担当トレーナーへのバッシング。

菊花賞への出走を目的とした、大した実績のないトレーナーとの再契約。

奇跡的に出走を果たしたもの、惨敗を喫し夢破れた菊花賞。

適度に不幸で刺激的で、妄想の余地がある。そんな話が出てきたもんだから、ここ最近は随分と俺を非難する内容が盛り上がりを見せている。

昨年のダービー直後は、あの女が無理なトレーニングをティオーに強いたんだとボロクソ言われてたんだが、結局のところ面白ければ真実や正しさなんてのはどうだつて良かつたのだろう。

今では前のトレーナーと共に歩むのがティオーのためだつたと言う奴が多数派のようだ。

そんな風に好き勝手言われている訳だが、俺にとつては顔も見えない匿名からの罵詈雑言なんてものは道端に転がっている犬のフンと変わらない。

目に入れば不快だが、わざわざ手間を掛けて片づけるほどの価値はないし、放つてもいいずれ消える。そんな程度だ。

疑問に回答してやるなんてあり得ないし、そんな無駄な事に時間を費やすくらいならティオーと遊びにでも行つた方が余程に有意義だ。ティオー自身を悪く言う輩はほぼ居ないようだし、ノープロブレムである。

そしてそれは、現在俺たちを取り囲んでいるマスコミ関係者相手でも同じことだ。

「……だからまあ、そんなに唸つて周りを威嚇するんじゃないよ。今日の主役の一人はお前なんだ。人気商売でもあるんだから、笑顔で愛想を振りまいとおけ」

あまり気にしてない俺に対しても、隣に居るティオーはそうはいかないらしい。

眉間に皺を寄せ、歯を剥き出しにして『うー』と唸つている。

威嚇なんだろうけど、可愛さが先行してくるからあんまり問題ないかもな。この場に呼ばれたことに緊張していると受け取られるだけかも知れない。

「だつて、負けたのはボクの責任なのにトレーナーにばつかり好き勝手に文句言うんだよ！」

語調は強いが声を抑えているあたり、冷静ではあるようで良かつた。

「どうでもいいだろ。ありもしない事を然も真実かのように書くのがお仕事なんだ。それに比べれば、俺に関する批評はあながち間違つちやいないからな。痛快な非難の記事を書かせて、せいぜい気分良くなつてもらえばいいさ」

そんなことよりも、ティオーの人気が落ちたりした方が問題だ。レースに勝つために人気は必要ないが、稼ぎという視点では大きな違いが出る。

企業からのCM出演依頼や製品とのコラボ企画、スポンサー契約なんて話が出れば、得られる金銭はレースの賞金と比較しても劣らない。

無貌の悪意なんてのは俺が引き受けて、お前は小綺麗に着飾つて華麗にレースを走り金を持ってきてくれればいいのである。

「……むうー。ぜんぜん納得いかない」

そう言つて頬を膨らませるティオーは、やはりまだまだお子様である。

ネット上のファンもマスコミも、実際は興味ないのに乗つかつてきてるだけの連中が大多数であり、そいつらは対応次第で敵にも味方にもなる。

もちろん、そんな風見鶏みたいな連中なんざ欠片も信用できないが、味方として都合よく使えない訳でもない。元からないものと思つて適当に使い捨てればいいのさ。

そういう意味じや、連中も俺達もお互い様だ。

「……つと、そろそろ順番みたいだな。ほら笑顔笑顔。内実はどうあれ投票で選ばれたんだ。俺たちに得があるのも事実だし、投票してくれた連中に礼くらい言つてやつても罰は当たらんさ」

最後にそう伝え、檀上に上がる準備を促す。

この場において、もともとトレーナーはオマケみたいなもんなんだ。

人生で何度あるかも分からぬ機会でもあるんだから、素直に祝われてこい。



『惜しくも三冠を逃しましたが、134票を集め見事年度代表ウマ娘に選ばれました、トウカイティオーさん！』

「（気持ち悪い……）」

檀上に立ち、拍手の音とシャツターの光を浴びる中、抱いた感情は嫌悪だった。

情けない走りをして三冠を逃したボクを称え、その夢に挑戦するチャンスをくれたトレーナーのことを貶す。

それは、己が貶されることよりも遥かに許し難い行為で、向けられる称賛はどうしようもなく薄っぺらい空虚なものに思えた。

ボクの過去と見栄えに対する評価。トレーナーと歩んできた道のりなんて誰も見ちゃいない。知ろうとすらしていない。

そして、そんな連中に愛想笑いを浮かべて手を振つて応えるボク。ああ、胃がムカムカしてきた。

ボクは考えが甘かつたのがもしそれない。

信頼するパートナーと想いを共有して一緒に歩んでいく。

途中思い通りの結果が出ないことあつても、二人で乗り越えて進ん

でいく。

そんな寄り道があつてもいい。そう考えていた。

どうやらそれでは遅いようだ。

早急にコイツらを、ボクたちの邪魔をする連中を黙らせる必要がある。

胸を蝕む黒い衝動はとうに我慢の限界に達していたが、爆発させるべき場所はここではない。

ウマ娘たるもの、ターフで結果を示して己の意思を押し通すべきだ。

だが、言われっぱなしは癪なのも事実。

場の空気は冷え冷えになるかもしれないが、文句の一つでも言つてやろうか。

そんな考えが顔に出始めていたのだろう。隣に立つていてるトレーナーが軽くため息をついて、小声で話しかけてきた。

「学園のウマ娘や両親、先輩連中もテレビ越しに見てるんだ。目の前のコイツらじやなくて、自分と関わりのある連中を安心させてやるために笑えばいいさ」

……そういうことならまあ、仕方ない。

ただでさえ皆には心配を掛けてるんだ。

菊花賞の敗北から立ち直れているのか、気を揉ませているだろう。

ボクは大丈夫だつて、ちゃんと伝えてあげないといけない。

そうして少しだけ本心からの笑顔を浮かべると、トレーナーとは反対の側から声が掛った。

「おめでとうございます。でもきっと同情票も含まれていますわね」

「まー、それはそうだろうねー」

自分と同じく登壇し、最優秀シニア級ウマ娘として表彰されていたメジロマックイーン。

ボクにとつてはクラスメイトでもあり、シニア級に上がつたことで今後は鎧を削るライバルになるウマ娘だ。

「マックイーンも有馬記念惜しかつたよねー。最後の加速が伸びなかつたけど、クリスマスもまだなのにケーキでも食べすぎちゃつたの

？」

そう意趣返しすると、顔を赤くして斜め上に逸らした。
え、そこは怒るところでしょ。もしかして本当に体重管理に失敗してたの？

「は、春の天皇賞では目に物見せてやりますわ。覚悟しておいてくださいませ、ティオー」

スピカつてなんとなくその辺が緩そうだもんない。

それともスペシャルウイークを見て、自分もあのくらい食べて大丈夫と勘違いしたのか。

『では、お二人に今後の目標を聞いてみましよう』

「私は春の天皇賞、二連覇を目指しますわ」

堂々と宣言して▽サインするマッケイーンを後目に、なんと答えるか思案する。

三冠も無敗もなくなった現状、明確に目指すレースがある訳ではない。
ただひたすらに勝つと答えてもいいのだが、何故かしつくりこない。

もう誰にも負けてやるつもりはないし、トレーナーのことをバカにしてる連中は許せないが、気炎を吐くのもボク達しくない気がした。

だから今の自分がしたいことを、心に浮かんだ言葉をそのまま口にした。

「ボクを支えてくれるヒト達に恥じない走りを」

真面目にやる気なんて全く起きない表彰式ではあったが、ここだけは雑にできない。

背すじを伸ばし、前を向いてはつきりとそう答えた。

■

支えてくれるヒト達に恥じない走りを。

そう答えたティオーの顔つきは、先ほどまでの不機嫌が嘘のように

大人びたものだつた。

女子三日会わざれば刮目して見よ……か。

スカウトした日から三日も会わないことなんて一度もなかつたんだが、子供というのは知らない内に成長しているものらしい。

今日着ている赤いドレスも、肩回りに細かいレースがあつて可愛いよりも華やかな美しさを感じる。

私服もそうだが、最近は赤色がマイトレンドなのだろうか。

ご両親じやないが、これじやまるで巣立ちを見守る親鳥の心境だな。

なんにしても、ティオーが成長してくれるなら悪い事じやないが。

『お一人には功績を称え、新しい勝負服が授与されます』

司会の言葉に合わせて、二人に目録が手渡された。

……そいえばあの勝負服、結局どんなデザインにしたんだろうか。

この表彰式、現在進行形でティオーの機嫌は悪いのだが、出席するか否かでも一悶着あつた。

受賞が決まつたは良いものの、ティオーは表彰式に出席することに對して全く乗り気ではなく、それどころか世間の俺に対する反応を見て辞退したいとすら言つていたのだ。

あまりにも勿体なさすぎるの、俺も受けるよう説得したのだが梨の礫。

ボクだけしか評価されていないのなら断ると頑なだつたのだが、新しい勝負服を貰えることが分かると渋々受けてくれることになつた。G I レースに出られるだけの実力を持つウマ娘にしか与えられない勝負服。その二着目を得られるというのは、世代の中でも傑出していることの証左だ。ウマ娘にとつては非常に特別なものであり、ティオーも無視はできなかつたのだろう。そういう物欲はどんどん出していくべきだと思う。

そんなウマ娘にとつて大きな意味を持つ勝負服。

当然ながら、そのデザインにもウマ娘の意志が反映される。しかし、俺はその製作に全く関わらせて貰えなかつた。

以前、ティオーの私服を選んだ際にキャラ物のプリントTシャツを
チョイスしたことセンスを疑われているのだろうか。

しかし、最初から口を出すつもりもなかつたのだが、デザインの決
定稿や試作品すら見せてくれないのはどういう理由なんだろか。

「なあ、ティオー。結局どんな勝負服にしたんだよ」

問い合わせる俺に、ティオーは今日初めての満面の笑顔で答えた。

「えへへ、内緒！」

……全く、なにがそんなに嬉しいのやら。

【番外編】心が鳴らす音

夢が破れるとき、一体どんな音が鳴るのだろうか。紙が破れるときのような音だろうか。

心が折れるとき、一体どんな音が鳴るのだろうか。割り箸をへし折るときのような音だろうか。

胸が高鳴るとき、一体どんな音が鳴るのだろうか。……アタシの胸が高鳴ったときは、鈍くて濁った音がした。

当然だろう。

友の掲げた無敗の三冠が叶わぬ願いとなつたとき、彼女の心から鳴る音を聴いてみたいだなんて。

そんな薄汚くドス黒い感情を抱く自分から、綺麗な音が鳴るわけないのだ。



始まりは何だつただろうか。

たぶん、彼女がダービーに勝利して二冠を得た時だつたと思う。

同世代において、最高の天才と目されるそのウマ娘が放つ輝きは、目を焼き尽くすほどだつた。

この世のすべてが自分の味方で、自分のためにあるとでも言わんばかりの自信と自任。

どれだけの才能を持つて生まれれば、周りからの承認を得て生を歩めば、そんな在り方ができるのか。

仮に同じ才能があつたとしても、自分にはできそうにない生き方だなど、苦笑しながら友達付き合いをしていた。

そうして彼女の骨折が判明し、菊花賞への出走が絶望視されたとき。

とても信頼していた大切なトレーナーから契約解除を言い渡されたとき。

あれほどの天才でも地を這うことはあるのだと、世の無常さに戦慄

したものだ。

そして、少しだけ自分の心が弾んでいることに気付いた。

己が高みに至ることではなく、他者が理不尽な不幸で落ちていくことに、優越と快感を覚えたのだ。

なんて、なんて嫌なやつなんだろう。

そんな自己嫌悪を消すために、がむしゃらにトレーニングした。

彼女の友人として、生活のサポートを買って出て、コミュニケー
ションも図ろうとした。

次のトレーナーが決まるまでの間は、彼女が周りを拒絶していたから上手くいかなかつたけれど。

それでも、梅雨を迎える頃には以前の関係を取り戻せたように思う。

そうして気付くと、菊花賞に出走できる資格を得ていた。
彼女の居ないレースなら、自分にも勝ち目があるかもね、なんて軽い考えで出ることを決めて。

出走できない彼女への申し訳なさと、自分だってG-Iを獲れば輝けるかもしれないという淡い期待を持つて。

やつと、かつて自分が抱いた仄暗い胸の弾みを忘れられたと思つたとき。

地を這つていたはずの彼女は、かつてと変わらない輝きを放ちながら、菊花賞に挑んできた。

アタシは御大層な夢なんて抱かない。

だから、夢破れて心が折れるなんてことは、これからも一生ないだろう。

その代わり、他人を羨んでばかりで、うじうじとしている自分に溜息がでちゃうけど。

彼女は、物理的に脚が折れて、一緒に夢もポツキリと逝つてしまつたはずの彼女は、また立ち上がりつて歩み始めた。

なんて強さなのだろうか。

彼女が才能だけで走っている訳ではないことを、アタシはよく知つ

ている。

不斷の努力とひたむきさは、関節の柔らかさやバネといったアシリティに負けないくらい、稀有な才能だ。

だからこそ、とんでもなく高いところを飛び続ける天才だからこそ、落ちてしまえば元には戻らないと思つていた。

實際、その走りは菊花賞までに元に戻ることはなかつた。けれど、そこに向けてトレーニングに励む彼女には以前と変わらない、あるいは以前よりも遙かに燃え盛る炎と熱が、煌々と瞳に宿つていた。

世間は彼女のことを悲劇の天才だなんて呼んで。

どこまでも無責任に奇跡の復活劇を望んでいる。

まるで本当にこの世の全てが彼女に味方しているかのようだつた。天才にとつては、挫折や絶望すら、人生を彩るためのスペースでしかないのでだろうか。

だつたら、アタシたちは一体なんなのだろうか。

彼女たち、選ばれた天才の引き立て役？

付け合わせの野菜。演劇の黒子。背景の賑やかし。

誰がやつても同じことに、たまたま選ばれたエキストラ。

そんな訳がない。あつていいはずがない。

ああ、だからどうしても、一緒に走つて聴いてみたくなつた。

彼女の夢が破れる音を。

彼女の心が折れる音を。

アタシとアナタは何も違ひはしないのだと、実感させてほしい。

主役も脇役もない。誰もが平等に戦い絶望するのだと、教えてほしい。

い。

そうして、決戦の火蓋が切つて落とされた菊花賞。

成せば、トウインクル・シリーズに消えない歴史として刻まれるだろう無敗の三冠は、夢のまま終わつた。

その時のアタシの心情はあまりにもぐちゃぐちゃで、筆舌に尽くしづらいものだつた。

自分の四着という結果に落胆するでもなく、私はそれを確認することを優先した。

胸の内をゾクゾクと這い上がつてくる興奮と好奇心。

こんなことを考えてはいけないという罪悪感と自己嫌悪。

ねえ、ティオー。

今、あなたはどんな表情を浮かべているの？

ねえ、ティオー。

今、あなたの心はどんな音を鳴らしているの？

アタシはいま、こんなにも醜悪な笑みを浮かべて、心はこんなにも汚らしい音を鳴らしている。

ねえ、ティオー。

アタシとアナタはなにも違わないって、教えて？



「ん”あ”あ”あ”―――――!!」

チーム『カノープス』が集まりトレーニングの打ち合わせをするなか、唐突にナイスネイチャの絶叫が部屋に響いた。

「ネイチャ、どうしたの？」

ツインターが他の二人に問いかけているが、その様子を疑問に思つても驚いてはいないあたり、カノープスでは割とありふれた光景なのだろう。

「きっと、そういうお年頃なんだよー」

「大声を出すことで体内に酸素を多く取り込み、筋肉への血流を増加させることができます。血流を良くすると肩こりや腰痛の改善に繋がりますから。これはネイチャさんなりのストレッチのようなものでしよう」

のほほんとネイチャ思春期説を推すマチカネタンホイザと、メガネをクリッと持ち上げながら、ネイチャ流健康法説を推すイクノディクトス。

今日もトレセン学園は平和である。

「ああー、確かに座つて話を聞いてるだけだと退屈だし、体が固くなっちゃうもんね」

「……それは暗に、さつさとミーティングを終わらせて解放しろと言われているんでしょうか」

ツインターボが納得するなか、カノープスのトレーナー南坂は、自分の話が長くて面白くないと言われているように思えて肩を落としていた。

「アタシは嫌な女だつ！　自分が勝つことじやなくて、ライバルが負けることを望むだなんて！　ナイズネイチャじやなくてバツドネイチャなんだーつ！」

机に突つ伏し頭を抱えながら叫ぶナイズネイチャを見て、一同は再度顔を見合わせた。

「ネイチャはなに言つてんの？」

「きつと、昨日みた昼ドラの影響だよー」

「ライバルの負け、というのは先日の菊花賞のことでしょう。この場合、恐らくはトウカイティオーサンのことですね」

イクノディクタスからその名前がでた瞬間、ナイズネイチャの体がビクッと跳ねたことで、トレーナーも得心がいったようだつた。「全員が万全の状態で臨み、自分が勝つことができれば最善です。しかし、定められた時期までに調子を上げてくることもウマ娘に求められる能力です。そこまで気に病む必要はないのでは？」

トレーナーの視点から見れば、ナイズネイチャの悩みは珍しいものではない。

相手の不調や失策を願つてしまふのは、それだけ勝利への執念が強いことの証明もある。

スポーツマンシップに悖るという考えは理解するが、嫌悪するほどのものではない。

「違うの！　アタシ、自分の着順よりもティオーザが負けたことが氣になつてた！　どんな気持ちなんだろうって、そんなことばつか考えた！　友達なのに、こんなの最低じやん！」

そこまで言られて、ようやく全員が程度の差はあれ理解した。

ナイスネイチャは見たかったのだ。敗北したトウカイティオーナイフ姿が。

「ネイチャつて変わってるね。ターボは自分の勝つてるとこのほうを見たいかなー」

「ぐはあつ！」

「そういうことですか。確かに圧倒的な強者が敗れる姿に思いを馳せる気持ちは理解できなくもないですね。嫌な女という点は否定できませんが」

「おうふ！」

「私はみんなが頑張つて、えいえいむんつ！つて勝つても負けても良かったねーって言えるようなレースが好きかなー」

「うぐう……」

三者三様にレース観を語られるなか、ナイスネイチャは自分の心が折れる音を聴いた。

もうバキバキのベコベコのボツキボキである。

「……もうアタシ、ティオーの友達でいらっしゃない」

突つ伏したままボソボソと話すナイスネイチャは、微かに涙声になっていた。

「これはミーティングどころではありませんね」

溜息をついたトレーナーは、何かを考えるようにしばらく目を伏せてからこう言つた。

「その悩みを抱えたままではまともにレースを走れません。解決する方法がありますので、皆さん手を貸してください」

そうきつぱりと言い放ったトレーナーを、ナイスネイチャを含む全員が見た。

「ほ、方法つて？」

自分のクソみたいな性根を叩き直せる方法なんてあるのだろうか、という心情がありありと読み取れる声だつた。

「はい、直接トウカイティオーにぶちまして、謝罪しましょう。一時間もあれば解決ですよ」

いい感じのスマイルで火の玉ストレートを投げると宣言したト

レーナーと、ニヤリと笑みを浮かべてにじり寄つてくる三人のウマ娘を見て、ナイスネイチャは先ほどまでは別種の叫び声を上げた。

「無理無理無理！　こんな酷いこと言つたらアタシ、ティオーと絶交することになつちやう！」

「友達じやいられないと言つていたじゃないですか。どちらにしろ同じ結果なら、当たつて碎けろですよ」

拘束され、三人掛かりで担がれ、ドナドナと運ばれていくナイスネイチャを道行くウマ娘たちが何事かと目をむいて見るが、顔ぶれを認識すると納得したように日常へ戻つていった。

チーム『カノープス』

勝ちきれないチームであり、雰囲気もどちらかと言えば理知的で穏やかなこのチームだが、やると決めたときの手段の選ばなさは、学園最強なのである。



「という訳で、ネイチャさんはティオーさんに思うところがあるらしく、直接会つて話がしたいとのことです。申し訳ありませんが、お時間をおいただけないでしようか」

いやいや、ティオーってば目を丸くして何事かと驚いてるじやん。トレーニングを終えて栄養補給中だったのだろう。もうじき日が暮れる食堂で軽く食事を取つているところだった。

「食べながらで良ければ別に構わないけど、当のネイチャがすつごい嫌そくな顔してるんだけど……」

当然だ。なにが悲しくて友人に絶交を突き付けられに来なきやいけないんだ。

アタシが悪いのだとしても、やりきれない。

「ネイチャ、さつさと話せば？」

よく分かつてなさそうに催促してくるツインターの能天気さが心底羨ましい。

「我々が居ると話しづらいのでしょう。引き上げますので、後はご自

分で頑張つてください」

「二人とも、喧嘩しちゃだめだよー」

こいつら、アタシを処刑台に運んでおいて結果を見ずに帰るとか鬼か。

いや、近くに居られると話しつらいのは事実だけど、そもそも運んでくるなよ。

ぞろぞろと帰つていく三人を恨めしく思いながら見ていると、ティオーから声が掛かった。

「座りなよ。表情を見る限り、あんまり良い話じゃなさそうだけど、どうしたの？」

コチラを見てくるティオーは至つて普通だった。

そう。菊花賞に敗れたあの時、あんなにも辛そうな表情を浮かべて、あんなにも悲しそうな音を鳴らしていたというのに、この天才はまた立ち直つていた。

「えっと、その、菊花賞があんなだつたから心配でさ。いやアタシも四着だから偉うこと言えないんだけど。あ、でもURA賞に選出されたんだつけ。お、おめでとう」

アタシはナイスネイチャ。脚質は逃げで覚醒スキルは逃亡者である。

「ありがと。ちよつと色々あつて素直には喜べないんだけどね。で、本題は？」

この娘はトウカイティオー。脚質は差しと追い込みで固有スキルはブルーローズチエイサーだ。

なんて現実逃避をしている場合ではない。

覚悟を決めろアタシ。女は度胸。本音を隠したまま仮面を被つて友人関係を続けるつもりか。

たとえ蛇蝎の如く嫌われようとも、本当に友人だと思つてゐるのなら逃げてはいけない。

「ごめんティオー！ アタシ、菊花賞で負けて心が折れたアンタを見たいつて思つてた！ その時にどんな音がするんだろうって、トウカイティオーでもあんな顔するんだなつて愉悦を感じちゃつてた！」

本当にごめん！」

言つた。言つてしまつた。

胸のつつかえが取れて、軽くなると同時に嫌悪がじわりと広がる。

「へえー、そうなんだ。やつぱり皆も暗い気持ちを持つてたりするもんなんだね。ボクだけかと思つてたよ」

あつけらかんと言つてから食事を口に運ぶティオーを見て、アタシはしばらくなにも反応できなかつた。

「怒つたりしないの……？」

「なんで？」

だつて、自分が負けたところを見て喜ばれているなんて憤慨ものだろう。アタシだつたら許せないし、悲しくて泣いちやう。

「そういう事を思われてもお互い様かな。ボクだつて菊花賞の出走が確定するまで、出られる連中は全員脚折れろつて思つてたからね」ええ……。

「フクキタルに呪術も教わりにいつたよ。『専門外です！』つて教えてくれなかつたけど」

全方位に対しても天才なティオーなら、呪術にも適正があつたかもしれない。

フクキタルが悪ノリしていたら洒落にならなかつたかも。

「ティオー、アンタつて結構イイ性格してたんだね」

マヤノやマーベラスと同じ、純粹でナチュラルに善性な娘だと思つてたのに。

「そりやあ、自分の状態が最悪なときに調子の良い周りなんて見たら悪態の一つでも付きたくなるでしょ。ネイチャはボクのことを正義のヒーローだとでも思つてたの？」

正義かどうかはともかく、ヒーロータイプで王様気質だとは思つていた。

そういえば帝王つて傲慢で悪政を敷くイメージがあるから、むしろこれが正しいのだろうか。

「それはそれとして、心の折れたボクが見たいだなんて屈折した感情を抱かれてるとは思いもしなかつたけどねー」

意地の悪い笑顔でコチラをのぞき込んでくるティオーは、もしかしなくとも楽しんでいるようだつた。

「うつ、それについては誠に申し開きのしようもなく……」

ティオーだつて同じようなことを考へることがあるんだと安心感は得られたものの、それで自分の行いが許される訳ではない。こんなやつと友達なんてやつてられないだろう。

「しようがないから、今から一緒にちみーを飲んでくれたら許してあげるね」

数瞬、言われた内容が理解できなかつたが、これは財布役になれという意味だらうか。

「ええつとその、何百回くらい奢ればよろしいので……？」

菊花賞の賞金で足りるだらうか。

「ボクはトレーナーほど金に意地汚くはないんだけど。奢りじやなくて自腹で一緒に飲んでくれるだけでいいよ」

もしかして、このウマ娘は帝王ではなく天使とか聖女の類だつたのだろうか。

「それだけで、いいの？」

席から立ちあがり、はちみーを買いに歩き出したティオーを慌てて追いかける。

「ボク、忘れてないよ。怪我してるときには荷物持つてくれたり、契約解除されたボクを元気づけようと話しかけてくれたこと。あれ、全部演技だつたの？」

そんなことはない。

一切の打算がなかつたかと言えば嘘になるが、アタシはティオーと友達でいたいのだ。

いつも元気で周りを明るくしてくれる、天才肌のウマ娘。嫉妬するし、劣等感もあるけど、それ以上にアタシはティオーのこと大好きだ。

そんな娘の痛ましくて苦しそうな姿を見たくなんてない。

友達としてちょっとでもいいから力になりたい。

そういう思いだつて、本当にあつたんだ。

「ボクはネイチャとずっと友達でいたい。だから別に気にしないよ。それに、これから的事を考えるとあんまり怒るに怒れないから」

それは、一体どういう意味だろうか。

「友達つてだけじゃなくてさ、ライバルだとも思つてるから。ネイチャはどう?」

もちろん、アタシもティオーのことを最強のライバルだと思つている。

「ライバルとして対等だから、怒つたりしないってこと? なんだか、それは変な気もする。

「そうじやなくてさ、ボクの心の折れる音が聴きたかつたんでしょう? ボクは他の娘の心が折れる音なんて興味ないけど、それは折らないって訳じやないからね」

先を歩くティオーがコチラを振り向いたとき、その表情には今まで沈んでいく夕日の如く、熱く輝く決意が漲つていた。

「もう、負けたくないんだ。例えどれだけのウマ娘の心を折つて、夢を破いて、絶望させることになつても」

向けられる気迫と圧力に、体を冷や汗が伝う。心臓が大きく脈打つ。

「ボクの心の折れた音が聴きたかつたんだとしても、ボクはネイチャと友達でいるよ。だからボクがネイチャの心を折つても、ネイチャはボクの友達でいてくれるよね?」

ティオーの才能を恐ろしいと思つたことはあつた。

ティオーの在り方を恐ろしいと思つたこともあつた。

だが、ティオーの笑顔を恐ろしいと思つたのは、今日が初めてだった。

「ネイチャは次のレース、何に出るつもりなの?」

「えつと、有馬記念に出て、その次はまだ決めてないけど……」

「そつか。ボク、次は大阪杯にする予定なんだ。だから、出てくるなら覚悟しておいて」

ゴクリと自分が唾を呑む音が、やたらと大きく聞こえた。

「二度と立ち上がりたくないくらいグチャグチャに叩き潰すけど、友達だ

から許してね？」

「それで、どうなりましたか？」

ティオーから潰す宣言を受け、カノープスに与えられているミーティングルームに戻ると、トレーナーが一人で待っていてくれた。「友達で居てくれるつて。それと、次の一緒になつたレースでグチャグチャに潰すつて」

「それは……成功なんでしょうか」

疑問に思う気持ちも分かるけど、個人的には大成功だ。

あの後も、はちみーを一緒に飲んで他愛もない近況とか世間話に花を咲かせた。

「提案してくれてありがとうね。無茶でしょつて思つたけど、結果的に丸く納まつたよ」

「丸く……？ 僕はカノープスのトレーナーですからね。ネイチャさんのが要望に応えるのが仕事です」

当たり前のようにそう答えるトレーナー。

柔軟で軟弱に見られがちだが、流石はトレセン学園のライセンス持ちというべきなのだろう。

「それじゃあさ、ついでにもう一個ネイチャさんの要望に応えてほしいんだけど、いいかな？」

潰す宣言を受けたとき、湧き上がってきたのは恐怖だけではなかつた。

「構いませんが、なんでしょうか？」

自分の中にある闘争心が沸々と湧いてくるのが分かつた。

「このままじゃネイチャさんはティオーに潰されてしまう訳で、そうならないよう厳しいトレーニングメニューを用意してほしいなー、なんて」

ティオーはアタシをライバルだと言つてくれた。

潰すと宣言したのは、アタシのことが嫌いだからではない。

対等なライバルとして、何度もたつて向かつてくる相手だと認められたんだ。

その期待に、応えたくなつた。

「分かりました。今日はもう休んでください。メニューは明日までに用意しておきます」

本当に、頼りになる。

「ああ、一つだけ聞いておきます。厳しいと言つても具体的にはどれくらいを『所望で』？」

どれくらいか。その言葉を聞いて、唇の端が持ち上がるのが分かった。

「トウカイティオーを、あの天才の心を、へし折れるくらいに」

ティオーはアタシを叩き潰すと言つた。

ならば、アタシだつて彼女の心を折つていればずだ。

あの娘は、友人としてアタシに許諾をくれたんだ。

何も気にすることはない。折れたほうが弱くて悪いだけのことなんだつて。

だから、もうなにも遠慮しない。

自分を主役の影だなんて思わない。

世の理不尽さや、他のウマ娘にも頼らない。

アタシはアタシの力で、あの天才をへし折る。

そう決めた自分の心から鳴る音は、どこまでも黒く綺麗に澄んでいた。

にぶトレーナー

季節は春。暦は三月。まだ肌寒い日はあるものの、春の陽気を感じることも多くなってきた。

そして、春はその年のG-I戦線が本格化する季節もある。短距離の高松宮記念、中距離の大阪杯、長距離の天皇賞（春）に向けて、シニアの強豪たちが始動するのだ。

そんな中、俺とティオーはと言えば、あまり変わり映えのしないトレーニングの日々を送っている。

大阪杯を約一月後に控え体調は万全なのだが、実力という点ではイマイチ伸びていない。菊花賞はティオーが病み上がりで適正も未知数な状況だったことから、成長の有無を判断する決定的な要素にはならなかつた。

だが大阪杯は違う。距離は皐月賞と同じでティオーが二冠を獲つた中距離レースに分類される。そして、ダービーから約一年後の開催となるこのレースにおいて、俺とティオーは判断を下されることになる。

かつての強さからどれだけ成長し、己を高めたか。

かつてのパートナーと比べてどれだけ優れ、劣っているのか。

相変わらずの人気を誇るトウカイティオーと違つて、俺に対する世間の評価は下降の一途を辿つている。外野に関係性を口出しされる筋合いなどないが、あまりに雑音が多いとティオーの気が散つてしまふのでよろしくない。

レースで結果を出して周囲を黙らせるのが最善ではあるのだが

……。

「強くなつてるとかどうかが全然分からんんだよなあ……」

俺の育成能力と鑑定眼に難有りということが早速判明しました。

というのも、年明け位までは順調に進んでいたのだ。

筋力とスタミナ、柔軟性が戻つたことでトレーニングで出せるタイムはダービーの時と遜色ないレベルまで到達できた。

しかし、そこからの伸びしろが此処二か月ほど見られない。

例えば大阪杯の距離を走らせてみたタイムは、菊花賞後に測った値からほぼ変化なし。

中盤の一ハロンや上がり三ハロンと区間毎に分けて数字を出しても同様だ。

早くなるでも遅くなるでもなく、安定した数値がずっと続いている。

菊花賞より短い距離だからか、スタミナが尽きて息があがるということもない。

変わらない状況に焦りを感じ、メニューの変更や春天を意識してみるか、などと迷走しそうになつていた俺に対して、当のティオーには現状への不満が見受けられなかつた。

なにか現状に対し自覚しているモノがあるのだろうか。

そう思つて尋ねてみたところ、以下の回答が返ってきた。

『なんかね、出力調整が難しすぎて上手くいかない感じ。上手く行かない理由が口で説明しづらいんだけどね。ごめんだけど、怪我が怖いからもう少しだけ慣らしに時間をちょうどいい。大阪杯には間に合うから』

どうやら感覚的に出力調整がバグつているというかド忘れしたと いうか、車で言うところのローギアかトップギアのベタ踏みしか選べない状態らしい。

序盤から中盤にかけて徐々に上げていく、あるいは意図してスピードを出したり抑えたりが効かないらしく、意識せずに走ると大逃げか追い込みのような動きになつてしまふ。

しかもトップギアでベタ踏みしたときの足に掛かる負荷が測りきれないらしく、今は常時ローギアで動かして少しづつギアの上げ下げを行っているんだとか。

「はあ。本当はこれ、俺が見抜いて修正方法のアドバイスをしてやる場面なんだよな」

菊花賞以降、俺なりに熱意を持つて本気でティオーの育成に取り組んではいるものの、思つたように成果は出せない。

当初はティオーに向きもされない程度だった俺と、二冠を獲らせ

たあの女の差はどうしようもなくあつたという訳だ。

その差を埋めるべく努力も始めた訳だが、そんな事はトレセン学園のトレーナーであれば当たり前の前提条件でしかない。

一朝一夕で追いかけるだなんて考えてはいなかつたが、大阪杯は目前なんだ。

力及ばず何もしてあげられませんでしたじゃ、アイツのトレーナーを名乗れない。

ちょっと憂鬱な気分だが、打てる手がないか模索するしかない。良い案がない訳でもないが、覚悟を決める必要がある。

まずは手取り早い手段として、フクキタルの元でシラオキ教に入信して神頼みすべきかとアホなことを考えながら校舎内を歩いていると、階下でティオーと誰かが話しているのを見つけた。

スースを着た男性ということは、学園のトレーナーだろうか。

まだ声も聞こえてこない程度に距離があるが、ティオーの表情は心底嫌そうに歪められていた。まさか、マヤノの担当トレーナーと同じ嗜好をした変態予備軍だろうか。

ウマ娘が本気で抵抗すれば人間が勝てる訳もないのだが、放つておくのも良い気分がない。

虫除けになるのもトレーナーの役目か。そう思い、階段を降りる歩調を早めた。



「(しつこいなあ……)」

年度代表ウマ娘に選ばれ、新しい勝負服も手に入れた。心機一転、トレーナーと一緒にシニア級を戦つていこうとする気が漲っているのだが、最近は水を差されることが多い。

ボクの目の前で今後の育成方針やレース計画を熱弁しているのは、トレセン学園でも優れた経験を持つているベテランのトレーナーだ。別に今日に限つたことじやない。ここ最近、ベテランや中堅、若手といった区別なく、トレーナーが居ない時を見計らつて引き抜きを掛けられるようになつた。

菊花賞も終わり、ボクの怪我が完治して精神的にも安定して見えた

ことで、及び腰だった連中が動き出したということなんだろう。

やれ『自分が君を成長させられる』だの『今後のレースで勝ちたいならあの男とは縁を切るべきだ』だの、見当違いなスカウト文句には辟易させられる。

トレーナーとしての実力なんてどうだつていいんだ。一番辛い時に、大切な時に傍に居てくれたからこそ、ボクはあのヒトに自分を託していいと思つていてる。

それを盲信と誇る奴だつているだろう。だが、都合の良い時にだけすり寄つてくる連中とどれほどの違いがあるというのか。

白けた視線を向けていることにも気づかず、一方的に捲くし立てることも鬱陶しいのだが、コイツらに共通するどうしても許せないことがある。

「あのクズの元に居ては君も一緒に腐つてしまふ。私でなくともいい。別のトレーナーの元に行けば、君は以前の輝きを取り戻せる」

これだ。先輩たちの親しみと敬意を込めた呼称とは違う。

ボクを救い上げてくれたヒトの事をクズと呼ぶコイツらに、ドス黒い感情を向けてしまうことをどうしても我慢できない。

ボクの機嫌が最悪だということに、やつと目の前の鈍い人間も気付いたようだ。

「私は君のことを想つて言つているんだ！ 他の者達のスカウトも断つてしているようだが、それは決して君のためにならぬ」

それでも引かずに自身の意思を唱えたのはトレーナーとしての矜持か、ボクを想うが故か。

そのどこまでも掛け違つてゐる言葉を拒絶しようと口を開きかけたとき——。

「質の悪いナンパはそこまでにしてくれねーかな」

後ろから、聞き慣れた声が掛かつた。



早足に近づいていくと、話している内容も聞こえ始めてきた。どう

やら変態予備軍ではなく、ただのスカウトだったようで一安心。

そう思つていたのだが、なぜかティオーの機嫌が滅茶苦茶悪い。負

のオーラが立ち昇っているし、拳を強く握りしめている。聞こえてきた限りでは変なスカウト内容ではなさそうだったが、癪に障ることでも言われたのだろうか。

なんにしても、アイツが不快な思いをしているのならギルティである。お引き取り願おう。

「質の悪いナンパはそこまでにしてくれねーかな」

ティオーの後ろに立つて告げると、負のオーラを霧散させたティオーがこちらを見上げてきた。一度だけ目を合わせてから、遮るように二人の間に体を割り込ませる。

「お前は……。ナンパなどとふざけた物言いをして！　何時までもウマ娘たちを好きなように食い物にできると思うなよ！」

そう唾を吐きながら勢いよく話す男に向けて手をパタパタと振る。汚いからもう少し勢いを抑えて欲しい。

「お盛んなどこ悪いが、コイツはこれから俺と^{トレーニング}デートをする約束があつてね。お邪魔虫にはお引き取り願いたいんだ。ほら、人の恋路を邪魔するとウマ娘に蹴られるつて言うだろ？」

おちやらけた態度を崩さずに言うと、男は顔を真っ赤にして言い放つた。

「そのような軽い気持ちだから、この娘に菊花賞でのような負け方をさせてしまうんだ！　自分がどれだけ浅はかな行為をしたか分かつてているのか！」

うーん、まことに正論である。俺もこれじゃ良くないなって思い、態度を改めているところだ。しかし、如何せん才能が不足していてキヤパシティが乏しい。眞面目になれるのはティオーに対する態度だけで限界なのである。

だから申し訳ないのだが、何時もどおりの対応でお帰り願おう。

「外野がぐちやぐちやと喧しいんだよ。俺とコイツの関係に他人が口出しをするな。心配しなくても、あの時にトウカイティオーをスカウトしていれば、一生後悔するくらいの結果を叩きだしてやるよ」

ドヤ顔で宣言すると、男は更に憤慨する様子を見せ、捨て台詞を吐いて去つて行つた。

「結果を出せない無能に、何時までも居場所があると思うなよ」

居場所か……。

温泉宿の丁稚と運ちゃんのアシスタント、格闘家のセコンドだ一番樂に稼げるのってどれになるのだろうか。

転がり込む先は考えておいたほうが良いのかも知れないな。

そう思いながら後ろのティオーに向き直ると、こつちも顔を真っ赤にしていた。

なんか負のオーラの代わりに湯気が立ち昇っている。
どうしたんだろうか。もしかして風邪か？

■
「お盛んなとこ悪いが、コイツはこれから俺とデートをする約束があつてな。お邪魔虫にはお引き取り願いたいんだ。ほら、人の恋路を邪魔するとウマ娘に蹴られるつて言うだろ？」

声が聞こえた時点でドス黒い感情は消えていたのだが、次いでトレーナーが放つた言葉を聞いた瞬間、頭の中が真っ白になつた。

そして溢れてくる、処理できない情報と感情の洪水。

デート。……デートと言つたか？

それはあれか。恋人同士が一緒に遊んだり寛いだり、共に時間を過ごすアレか。

人の恋路とは誰と誰のことか。

ボクとトレーナーか？

いつたい何時の間にそんな関係性に？

いや別にダメつてことはないんだけどね？

踏むべきステップつてあるじやん、ティオーステップじやん？（意味不明）

いやしかし、ボクとトレーナーは担当ウマ娘と担当トレーナーで、ウマ娘とトレーナーは一心同体だから、そういうことなのか（メジロ並感）

頭の中をグルグルと回る情報の処理はまるで完結せず、次の行動に移れない。

そこに、畳みかけるように追撃が行われた。

「外野がぐちやぐちやと喧しいんだよ。俺とコイツの関係に他人が口出しをするな。心配しなくとも、あの時にトウカイティオーをスカウトしていれば、一生後悔するくらいの結果を叩きだしてやるよ」

俺とコイツの関係つてなにさ？」

前後の文脈からすると、やっぱり恋人か？

恋人同士だつたのかボクたちは？

なんの行動もできずノーガード状態のボクは、軽く小突くだけで倒れてしまふ程に無防備を晒していた。

「おい、ティオー。どうしたんだ？ 顔が真っ赤だが風邪か？」

顔を真っ赤になんてしてないし、いきなり恋人宣言されて舞い上がつたりもしてないからね。

「べ、ベベベ別になんでもないによ。いやー、もう春だね。アツツいなー」

手で顔を扇ぎながら完璧な誤魔化しを敢行する。

これで体面は取り繕えただろう。

「……？ まあ、体の具合が悪いんじやなければ構わんが」

ちよつと脳みそが沸騰して心臓がぴょんぴょんしてるけど、全然平気かなつ！

「そ、それよりトレーナー、今日デートの予定なんてあつたつけ？」

今日どころか、今までこれからも入つたりしないはずの予定だったが、気付かない内にボクたちの関係性には大きな変化があつたのかもしれない。

「あ？ あー、そうだな。最近はトレーニング漬けだつたし、偶には息抜きするもの大事だよな。ぱーっと遊びに行くか」

あ、あれえー。やつぱりボクの勘違いじやなくて今日はデートの予定だつたの？

「そ、その、なにぶんデートというのは初めてなものでして。お手柔らかにお願いしましゅ……」

一体、自分は何を言つているのだろうか。

初めてだからお手柔らかについて、慣れてきたら手荒でもいいってことになつちやうじやん。

たぶん、なにか盛大な勘違いをしているんだという気もする。
けれど、嫌な気は全然しないから詳しくなんて聞かない。
デートでボクをどこに連れて行つてくれるのか、楽しませてもらう
ことにしよう。

強襲IV

トウカイティオーはダービーの時と比べて強くなつたのか？

菊花賞以降、幾度となく取り沙汰される議題の答えは今のところ出でていない。

日本ダービーはトウインクル・シリーズにおいて最も重要なレースと言つても過言ではないし、事実そう捉えて挑むウマ娘も多い。

ここで終わつてもいい、だからありつたけを……。

そんな破滅的な考えを持つ者すら、居ない訳ではないのだ。

もちろん、トウカイティオーはそこが己の終着点だとは露ほども考えていなかつたし、一般的にはシニア級も見据えたトウインクル・シリーズのキャリアとして、前半と言つたところだろう。

ウマ娘として本格化していくも、心身の成長曲線が描く頂点として日本ダービーは早すぎる。

ならば、ダービーで見せた圧巻の走りすら途上。彼女の至るスピードの極限はさらに先にある。

世間がそのように無責任な期待をするのは道理であり、期待に応えられなかつたとき原因を糾弾することもまた、彼らの主観からすれば当然の権利なのである。

「問題は俺だけに留まらずティオーにまで飛び火しないかだよな。成長という意味でも、レースに蟠りなしで挑むという意味でも、GⅠで一勝が欲しい」

しかし、大阪杯だけに囚われてしまうのも良くない。その次は春の天皇賞だ。何の対策もなしに挑めば、それこそ菊花賞よりも酷い結果になるだろう。

手を打ちたいところであるが、能力不足気味の俺の中で最も経験値が薄いのが長距離レースだ。

長距離レースつて只でさえ少ないので、重賞以外で絞るとほぼないんだよな。

長距離のノウハウ、ティオーの脚質である先行のノウハウ。どちらも俺には足りていない。

スタミナが重要なのだから、今の時点から春天を走り切ることを考えたメニューにはする。

だが、脚の負担はどう見積もればいい。

仕掛けどころのタイミングを測る練習は流石に大阪杯が終わるまでは待つか。

そもそも作戦はどうする。あの無尽蔵のスタミナで昨年の春天を事もなげに走り切ったメジロマックイーンを相手に、正攻法で挑むのは正解なのか？

ティオーの幅広い才能がトレーニングや採れる作戦の自由度にも繋がっているんだが、俺が全く扱いきれてない。

「なんて泣き言はいつてられないな。全部アイツのために使うつて決めたが、それはアイツを理由に時間を無駄にしていい事にはならねえ」

ならば、どうするか。分かる奴に聞くしかあるまい。

俺よりもトウカイティオーのことに詳しい奴がこの学園にはいる。俺よりも遙かに真剣に、長い時間をティオーに注いでいた奴だ。頼み辛さという意味でも最上位なのだが、躊躇している場合ではない。

プライドも、アイツのためにならいくらでも使い潰すと決めたんだから。



そうしてやつてきました。あの女のトレーナー室。

全く親しくないし、むしろ不眞戴天の仇と思われているだろう。

だからこそ、誠意を見せる必要がある。

伸ばした指先をしつかりと揃え、合わせながら上体を前に倒していく。

背筋はぴしっとまっすぐに、丸めるのではなく背筋も使いながらだ。

上体を倒し切ったとき、額を床に擦り付けるような真似はない。

水平を維持。

畳んだ膝が崩れないよう注意しながら姿勢を固定し、一連の動作を完了させ用件を伝えた。

「ティオーの育成について、相談させてください」

座礼『下座・最敬礼』。

音だけ口にだすと超カッコイイ必殺技のように聞こえなくもないが、つまるところ土のある場所以外で行う土下座のことである。

「どういう、つもり……」

なんとか絞りだしたような声には、複雑な感情が込められているのがありありと感じられた。

床しか見えないから表情がどうなつてているかは分からぬが、すさまじく歪められていることは想像に難くない。

果たして逆の立場だつたなら、俺はどう対応しだろうな。頭を踏み付けられるくらいのことはされるかも。

そんなことを考えていると、もう一度同じことを問い合わせられた。「答えなさい。どういうつもり。ああ、しつかりと考えてから口に出しなさいよ。私はいま、冷静さを欠こうとしているわ」
……踏み付けられる程度じゃ済まないかもしれん。

「ティオーと話し合つて、春は大阪杯と天皇賞に出ると決めた。大阪杯はともかく、俺じや天皇賞に対して碌なアドバイスも適正なトレーニングもしてやれない。だから、それが出来るお前に教えてもらいたくて來た」

ギリツツと歯を軋ませる音がこちらまで届いてきた。相當に立腹らしい。

「なら、あの子を手放しなさい。あなたに教えられないことを知つているトレーナーがここには大勢いるわ。その嘘くさい態度が本物だというのなら、本気での子のことを想つていてるというのなら、あなた以外に任せる。それが最善よ」
なるほど、仰る通りだ。

今ならティオーのトレーナーを引き継ぎたいと申し出る奴はいくらでも出てくるだろう。

選り取り見取りだ。

きっと、ティオーにとつて俺とは比べ物にならない良縁も転がっているのだろう。

それでも、俺の答えは決まっている。

「やだ。トウカイティオーのトレーナーは俺だ」

どれだけ力及ばずとも、それだけは譲れないのだ。

「……っ！ 我儘なものね。そんなにあの子の才能が惜しいのかしら」

「ああ、そうだ。俺に熱を持たせてくれたアイツの事がどうしても惜しい。

「アイツが負けるところはもう見たくない。だが、同じくらいに俺以外の奴と一緒に勝ってるアイツも見たくない。俺がアイツを勝たせてやりたいんだ。この役目を他の連中に渡したくない」

隠したつてしようがない。俺はもう、自分の至らなさを理由に目を背けることはやめたんだ。

「金銭目的で近づいた寄生虫があの子に何かを与えるだなんて、驕りがすぎるわ。重荷か邪魔にしかならない」

「そうならないための今だ」

苦しい理由だつてのは分かつていて。調子が良すぎるのも事実だ。それでも、アイツに与えられる最善をいま持っているのは、たぶん目の前のコイツだけなんだ。

問答に納得したのか、腹を据えかねたのか。

こちらにコツコツと靴を鳴らして近づいてくる音がした。

次いで感じたのは、後頭部と額への衝撃。

「けじめよ。黙つて踏まれてなさい」

おい、マジで踏むのかよ。ドラマじゃないんだぞ。どんだけサディストなんだこの女。

「勘違いしないでちようだい。これは私へのけじめ。あなたじやないわ」

意味が分かんないんですけど。それでなんで俺が踏まれなきやいけないので?

「私はもうトウカイティオーネのトレーナーはしないと決めた。してはいけないと自分に課したわ。それでも、もしかしたらという願いと欲を断ち切れないの。だからよ」

「すまん。聞いてもさっぱり分からんのだが。お前の趣味以外になんの意味があるんだ」

あと、そろそろ足を退けてくれないだろうか。おい、グリグリするんじやねーよ。まだ本番じやなかつたのかよ。

「私が趣味で男に触れようとする訳ないでしょ。なんで男の穢らわしい頭で靴を汚さなきやいけないのよ」

嘘でしょ。コイツ、素で自分の靴の裏より俺の頭のほうが汚いって言つてんの？

この学園の試験、絶対に人間性の測り方を間違えてるだろ。

「私は間違えた。けれど、あの子のためを思つての行動だつたのも本当。だから、過去の失敗だけじや諦めきれなかつた。けれど、これでもう本当に資格はなくなつたわ。あの子の未来のために頭を下げに来た相手を踏み付けるような女が、担当なんてして良い訳がない」

……それはなんというか、随分と屈折した納得のさせ方だな。

「まあ、私からあの子を奪つた男がどの面下げつて思いもあるから、八割くらいは憂さ晴らしだけど」

ほほ私欲じやねーか！コイツかなりやべー女だぞ！

あんまりすぎる言い分に戦慄していると、頭から足が退かされた。やつと頭を上げられる。そう思つて上体を起こそうとするとストップが掛かつた。

「なに顔を上げようとしてるのよ。私がいいと言うまでは下げて這いつくばつてなさい」

やばい。全然覚悟が不足してたわ。みんな、浅い考へで下座なんてしちゃいけないよ？

微妙に後悔しつつ現実逃避していると、ゴソゴソと何かを探す音を出していた女が俺の前に戻ってきた。

もしかしてこれから鞭とか使つた二回戦が始まつたりするんだろうか……。

「読むのは自宅に帰つてから。途中での子には絶対に見つからないようになさい。それと、丸パクリもやめて。たぶん気付かれるから」

「あら」

バサリと、自分の前に落とされたのは厚みのあるファイルだつた。

「これは？」

薄々予想はできるのだが、この短時間で出てくるのはどうということだ。見越して準備していたなんてあり得ないだろ。

「未練よ」

万感の思いが込められているだろうその声は、少しだけ震えていた。

「もしも、あの子とクラシックを戦い抜いていたなら。そしてシニア級に乗り込んだなら。いつの日か、”絶対”に挑み超えてみせるのなら。そういう、もしもの未練」

「ダービーの時点でそこまでのプランを練つていたと？」

大枠の予定ならともかく、この厚みはそれで収まるようにも思えない。

「いいえ、練つっていたのはつい最近までよ。言つたでしよう。未練だと。それをいま断つたわ」

ああ、そういうことか。

コイツも、ティオーカのことを考えないようにするための切っ掛けが欲しかつたのか。

自分と、なによりもティオーのために。

「女々しい未練の産物がそれよ。具体的には今後三年を見据えているわ。それが、私がシンボリルドルフに勝つのに要すると考えた時間。適当に焚書して断ち切ろうと思つていたけれど、強盗にでも入られたと納得することにするわ」

ファイルを手に取る。

ずしりと感じる重みは、紙束の重量によるものだけではない気がした。

これが担当ウマ娘を育成するという覚悟なのだとしたら、やはり俺はまだまだ足りていない。

反りの合わない女だと思つていたが、こういうところは尊敬するぜ。ちゃんと礼をしないとな。そう思い立ち上がりうとして。

「だから、私がいいと言つまで顔を上げるなど言つてているでしょう。鳥頭なのかしら？」

ええ……。まだ続けないといけないの？ 足が痺れてくれたんだけど。

「ねえ、あの子ちゃんとご飯食べられてる？」

「ああ、バクバク食つてるよ。体は全然デカくならねーけどな」

「そう。勉強も疎かにしてないかしら。あなたを見ると心底心配だわ」

「やる気はないみたいだが、地頭と要領がいいんだろうな。成績上位だよ」

「そう。あなたに感化されて悪い遊びを覚えたりしてないかしら。私たち、思つてはいる以上にウマ娘たちから見られているわよ？」

「色々教えたが、人の道を踏み外すようなことはさせねーよ。一緒にG—I 獲るつて決めたから、最近はカラオケとか外食ついでに軽く遊ぶくらいだ」

「そう。……ダメね。いくらでも聞きたいことがあって、終わりそういうにないわ。もういいから、さつさと出でいきなさい」

顔を上げてみると、近くで俺を見下ろしているんだと思つていた女は執務机の後ろにある窓の縁に手を掛けて外を眺めていた。

部屋に入つて俺が頭を下げてから、一度たりともコイツの表情を見てないな。

「ありがとな。生憎と釣り合うようなお礼の持ち合わせはないが」

「いらないわよ。精々、それを使つたのに見合う結果を出しなさい。あの子を悲しませるような事になつたら殺すわよ」

……冗談だとは思うが、肝に銘じておこう。

「アイツの近況、時々伝えにこようか？」

同じ学園には居るが、明らかにお互いが避け合つている。まともに顔を合わせた機会すらなさそうだ。

「いらない……。いえ時々で、本当に時々でいいから、教えてちようだい。綺麗さっぱりとは忘れられそうにないわ」

よく見ると、縁に掛けた手は強く力が込められていた。
もしかしてコイツ、泣いてるんだろうか。

「わかつた。それとティオーのこと名前で呼べよ。無理してあの子だ
なんて呼ぶ必要ないだろ」

コイツは結局、一度もティオーの名前を口に出さなかつた。これも
けじめの一部なのだろう。

クソ真面目というか、いじらしいというか。

「うるさいわね。私は能天氣あなたと違つて折り合いをつけるのに
時間をかけるタイプなのよ」

さようでございますか。

「近況報告はどうする。学園内では会うのもマズいしメールとかでいい
か？」

「履歴が残るものは危険よ。私もそのファイルの元データは後で削除
しておくわ。そうね、寮の門限以降にバーでも行きましょか。おハ
ナさんの行きつけだから、情報漏洩とかは気にしなくてもいいわ」

俺、あんま酒に強くないんだけどな。

さて、話すことは話した。収穫も大いにあつた。

そろそろ授業が終わる頃だし、退散すべきだろう。

そう思い部屋を出ようと背を向けたとき、ポツリと声が聞こえた。

「応援しているわ。頑張って」

もちろん、俺に言つたのではないことは分かつた。

ま、トウカイティオーを応援している奴なんて腐るほど居る。

その内の一人の言葉として伝えてやりやあいいか。

大阪杯

「今すぐ、部屋から出ていいって」

男性が女性からこの言葉を言われるシチュエーションってどういう時だと思う？

え、ラブコメで女の着替えを覗いてしまったときだつて？ 惜しいな。

正解はもう間もなく大阪杯が始まろうかという最中、担当ウマ娘の控え室を訪れたトレーナーに向けて放たれた言葉である。

……俺、なにか怒らせるようなことをやってしまったのだろうか。「もしかして、昨日のハンバーグ屋でデザートを頼ませなかつたからか？ 我慢させたのは悪かつたが、レース前日にあまり食べすぎるのもな」

俺たちにとつて、重要な意味を持つ大切な復帰戦だ。より万全な状態にしたいと思つての判断だつたが、かえつて余計なストレスを溜めさせてしまつたのかもしれない。

今まで軽い気持ちで雑に対応していたが、こういうウマ娘の心と体のバランスを整えるための最善をどう判断するかも今後の課題だな。

「ちがうよ！ そんな子供みたいなことで機嫌悪くしないし、見て分かるでしょ！ ボクはまだ制服なの。これから着替えるから出て行つてほしいの！」

そう吠えるティオーは確かに学園の制服のままだつた。今から着替えてると本当にギリギリだし、もう顔を合わせる時間取れないんじゃないだろうか。

「前から気になつてたんだが、なんでそんなに新しい勝負服を見せたがらないんだよ。隠すことないだろ」

一月の受賞から大阪杯まで日があつたにも関わらず、俺は一度も新しい勝負服に身を包んだティオーを見ていなかつた。

レース前に何度かは着た状態で走つてみたほうがいいだろうと言つたのだが、断固として拒否された。

俺はへっぽこトレーナーだからウマ娘育成におけるトレセン常識とか詳しくないんだけど、担当トレーナーに勝負服を見せたがらない理由つてなにが考えられるんだろうか。

恥ずかしい……これから何万人という観客に見られるんだからないうだろう。

サプライズ……レースへの準備より優先することじゃないと思う。験担ぎ……聞いた事ないなあ。

「どうせならカッコ良いお披露目にしたいなって。新しい勝負服を着たボクは強いんだって印象をトレーナーにも持つてもらいたいんだ。だから、もう少しだけ我慢してよ」

「お前がそう言うなら無理強いはしないけど、俺はトウカイティオール弱いと思った事なんて一度もないぞ。リハビリ中も菊花賞も、お前はずつと強かつたよ」

勝負服が気にならないと言えば嘘になるが、俺の言葉を聞いてなんだか嬉しそうにしているティオーを見て、緊張や気負いはなきそようと安堵する。

まあ、ここまで來たんだ。お披露目を大人しく待っていることにしよう。

……一応は監督義務もあるんだが、目ん玉飛び出るようなデザインの衣装だつたらどうしよう。

いや、最初の勝負服はルドルフを意識したのもあるだろうが、キチツとした服だつたしセンスは問題ないだろう。

きっと、まともなデザインになつているはずだ。

「なら、俺はそろそろ応援席に行くぞ。他になにか気になつていることはあるか？」

実を言うと、俺のほうは気になつてることが沢山あつたりする。

結局、今日までにティオーが本気で走ったのは、少なくとも俺の前では一度きり。

その時のタイムをどう判断すればいいのか、俺には明確な回答がなかつた。

心身の不調はないはずだ。ならば、今日のトウカイティオーコソガ

本当なのだと考へてもいいんだろうか。

「そうだねー。常識的なレース展開なら特に問題ないかな。奇策で大逃げとかされると、ちょっと困っちゃうかも」

常識的な逃げはともかく、大逃げは確かにマズいな。

ティオーのギア上げ下げ問題はまだ完全に解決していない。

先頭集団がある程度団子になつてくれていればいいんだが、大逃げされると付いて行こうとしてペースが乱れる可能性がある。

距離二千だから、そうなつてもスタミナが足りないってことにはならないと思うが。

「それでもやりようはあるよ。困るつていうのも対応できなんじやなくて、どの対応にしようか決めかねてるだけだからね」

無視して自分のペースを維持するのか、付いて行くのか。

コイツはレースや勝負の勘所にも天性のモノを持っている。

怪我以降の出走が菊花賞しかなく一番鈍ってる部分ではあるが、信じるしかないな。

「ああそれと、強くて勝てることも大事だが久しぶりのレースなんだ。楽しんでこいよ」

今まで考えたことなかつたんだが、仮にレースに勝つたのに楽しくなさそうな面をされた場合、やっぱり俺も楽しくないと思う。

楽しく走つて勝つてもらう。なんともまあ贅沢なことを言つているが、目標は大きいほうがやりがいもあるつてな。

「うんっ！ 本当はね、今すぐに走りたくつてウズウズしてるんだ！ 期待しててよね！」

そう言つて両手でガツツポーズするティオーを見ていると、なにも心配はいらなそうだ。

応援席でアタフタしてると周りの連中に舐められかねないからな。この部屋を出たら、ドンと構えて自信満々そうにしとくか。

そう考へて控室を出て扉を閉めたとき、『やっぱり、胸元の布面積切り詰めすぎたかな……』という声が聞こえた気がしたが、たぶん聞き間違いだろうな。

■

ターフに立ち、鳴り響く歓声を聞くと戻ってきたんだなという実感が湧いてきた。

菊花賞は正直それどころじやなくつて、今になつて思い返すと全然余裕がなかつた。

どちらにしろあの時点の実力じや勝つことは難しかつたと思うけど、冷静に走れていれば入着くらいまでは持つて行けたかもしだい。

菊花賞五着でも賞金は一千万円だ。これがあればトレーナーともつと色々遊べたのになあ。

なんてお金への未練がタラタラな辺り、ボクも随分と変えられてしまつたなつて思う。

全然嫌じやないんだけどね。

「さてと。トレーナーにああ言つた手前、無様は晒せないよね」

最後に勝つたのが昨年のダービー。それから十ヶ月の間、勝ちがない。

そんなウマ娘はいくらでもいるが、ボクにとつて敗北してからのレースも長期間勝ちがないまま迎えるレースも初めての経験だ。

「皆、強いんだな」

本人たちに言つたら嫌味にしかならないが、負けてからのレースがこれほど怖いものだとは思いもしなかつた。

けれど一着になれるのが一人である以上、大多数のウマ娘は今の自分と同じ心境でレースに臨んでいるはずだ。
また負けたらどうしよう。

もうあの頃の強さには戻れないと分かつてしまつたらどうしよう。支えてくれるヒト達の期待を裏切つてしまつたらどうしよう。

栄光と同等の挫折がレースにあることを、ボクはよく知つていて。誰も彼もが、その恐怖に打ち勝つてターフに立つていて。尊敬するし、すごいなつて思う。

以前の自分だったら、勝ちたいつて想いから逃げちゃつたかもしない。

けれど、そうはならなかつた。

ボクを救い上げてくれたヒトは、敗北の後も隣にあり続けてくれた。

きつとあのヒトは、ボクがどれほどの感謝をしているのか分かつてくれていない。

ボクがどれほどに恩を感じていて、返してあげたいと思つてているのか理解していない。

分かつてくれだなんて図々しすぎるから、言うつもりはないけど。言葉で伝えられないのなら、行動で示すしかない。

「だから、ごめんね」

ゲートに入り、スタートのために腰を落として脚に力を込める。自分の内から湧き上がる力がマグマのように煮えたぎり、噴火しそうになつているのが分かる。

なんとか抑えているが、脚に込めた力は爆発寸前で、今にもターフを踏み碎いてしまいそうだ。

ボクは、まだまだあのヒトと一緒に走つていただきたい。
けどね、それを邪魔するモノがこの世にはあるんだ。

負けてしまえば、その邪魔者たちはもつと調子づいてしまう。
どうしても、勝たなきやいけないんだ。

それにそんなつもりはないのだとしても、ボクと同じレースに出るつてことは、君たちこそが最も直接的な邪魔者だと言えなくもないよね。

だからね、容赦はしないよ。

勝つ。

鮮烈に、圧倒的に、破壊的に。

この世の誰一人として、ボクの邪魔をしようだなんて気を起させないようにな。

—— そうして、ゲートは開いた。



トウカイティオーはともかく、クズと揶揄されるトレーナーには欠片も自覚はなかつた。

『皆のために頂点として』規範を示すことを己に課したシンボリルドルフ。

『支えてくれるヒトのために一人のウマ娘として』走ることを決めたトウカイティオー。

それは、目指した“皇帝”と比較すれば随分とこじんまりとした決意。

だが、願いが大きければ強いなどと言う道理はない。

三冠に手を掛けた天才は、挫折の果てに己が力の使い方を見定めた。

ここではない世界で、何者にも為し得ないだろう奇跡を起こした魂は全く別の道を辿り『誰かのために走る』という同じ答えを示した。ウマ娘は機械ではない。

ヒトと同じ知性と感情を持つている。肉体のトレーニングだけではなく、心を持つ生き物としての理解とサポートがいくらでも能力を底上げする。

例え指導する側が成長を実感できずとも、未熟であるが故に可能性に溢れた子供たちの精神はたつた一事で激変し、肉体にも影響を与える。

天賦の才を誰憚ることもなく使い熟せることも成長であり、それを成せる精神性を育むこともまた、指導なのだ。

今以て、自分には覚悟も実力も伴なつていないと考えているクズは、ある意味で最もトレーナーという職の神聖性に囚われていると言えた。

指導者として手本にされても恥ずかしくない人間性。

悩みや疑問に正しく即答できる、プロの育成者としての知識と経験。

世間の悪意や理不尽に晒されかねない子供を守る、大人としての責任感。

本気になると決め、以前の己があまりに至らなかつた故に、そんな

行き過ぎた存在になることがトウカイティオールの隣に立つ条件だと思つてしまつていた。

そんな人間など、世界を見渡してもそうそう居るものではないといふのに。

このトレーナーが、己こそトウカイティオールに相応しいのだと自任できる日はまだ来ない。

それでも、走れば結果は出る。

結果によつて判断される。

トウカイティオールの隣に立つてゐるのは、誰なのかということを。この日、躊躇と呼ぶに相応しい大差をつけて阪神レース場に”帝王”が君臨した。



『現在、先頭はイクノディクタス。イクノディクタスが逃げる！』

イクノディクタスが逃げ、か。

出走しているウマ娘の数が少ないからか、元からそういう想定でいた娘が多いのか、逃げウマ娘が居るにしては集団としてまとまつている。

望むところな展開ではあるのだが、正直に言うとちよつと困つていた。

「（これ、どこでスパート掛けばいいんだろ……）」

有り余る力を使うタイミングを本番になつても図りかねていた。脚を溜めすぎだし、スタミナも余り過ぎて使いきれる気がしない。けれど、まだ残り距離八百もある。

いまラストスパートを掛けても普通に走り切れる、と思つてはいるのだが……。

「（さすがに早すぎる？ けど、これ以上待つても最高速まで上がり切らないし……）」

初つ端から全力全開で走ろうと思つていたが、よく考えるとボクのスタイルは逃げじやない。

仕方ないので何時も通りに2、3番手に付けて最終コーナーから抜くことにしたのだが、物凄くじれつたい。

こんな事なら短距離の高松宮記念にしておけば良かつたかも。

そう思うくらいに、このままでは溜めた力の使いどころがないまま勝つてしまう。

「（ええい、ままよ……！）

トレーナーも楽しんでこいつて言つてたんだ。お行儀よくセオリーに従う必要もあるまい。

むしろ、そつちの方が今のボク達らしいかと考えを改めてスパート態勢に入つたとき。

ふと、会長ならここで我慢して確実に勝つ走りをするんだろうなと思つた。

そうしてそのイメージを、かつて目指した憧れを振り切るために、今自分に出せる全てを脚に込めてターフを踏み抜いた。



『レースは第四コーナーを超え、最終直線へ！ 先頭はトウカイティオー！ すでに二番手とは四バ身差！』

やだ、うちのウマ娘強すぎ。それが素直な感想だった。

『トウカイティオー、脚色は全く衰えない！ それどころかさらに速度を上げ、グングンと後続を突き放す！ 驚異的な末脚です！』

既にレースで結果を出している中距離とは言え、シニア級初戦でここまで他を圧倒するのか。

息一つ荒げず、まだまだ余裕と言つた感じの表情。

スピードを掛けた途端、一気に先頭に躍り出る驚異的な加速。

それでいて、まだ最高速に到達していないのか上り続けていくスピード。

残り距離百。

結局、最後まで後続との距離は開き続けるだけでレースは終わりを迎えた。

『残り距離百メートル！ しかし、その差はもう何バ身だ！ 文句な

し、余裕でゴールインだあ！」

大差でゴールしたティオーラの顔には汗一つ見受けられず、どれほど
の余力を残してしまったのか、見当が付かない。

そう、G.I.ですら余力がある、ではなく余力を残してしまった、だ。
それはつまり、効率ではなく最速を目指していたレースとしては完
全に展開をミスつたということであり、逆にしつかりとスタミナ管理
さえできれば、より長い距離のレースであっても十二分に走れること
の証左だ。

「なにはともあれ、これで一勝か……」

懸念事項だつた出力調整の大難把さに起因するレース展開の失敗
は現実となつた。

それでも圧勝するほどの力をティオーラが持つていてくれた嬉しさ、
気付く奴は気付くだろうから、次からは付け入られる隙になるなどい
う心配。悲喜こもごもと言つたところか。

——すまん、嘘ついたわ。

正直に言うと圧倒的に歓喜のほうが上回つている。奇声をあげな
がらこの場で転げ回りたいくらいに嬉しい。

だが俺はトウカイティオーラのトレーナー。

たぶん、クールで厳かなダンディズムとかを求められる気がするか
ら、澄まし顔で勝つことが当然のようにウンウンと頷くだけに留め
る。

割と近くでレースを見ていたメジロマックイーンとスピカのトレーナーが『絶対、この異常さを理解してねーだろ』と呆れているよ
うな気がしたが無視だ。

しかし、この嬉しさを一旦脇に置いておかねばならないほどの違和
感が一つ。

「微妙に唇の端が上がつてゐるから嬉しいのを隠してゐるだけだとは思
うんだが、なんであんな態度なんだ？ カツコつけてるだけか？」

完全に自分のことを棚上げしているが、ティオーラの様子がどうにも
変だ。

ガツツポーズもなれば、客席に向けて手を振つてゐる訳でもな

い。他のウマ娘と健闘を称え合うでもなければ、特に怪我や不調もあるように見えない。

薄い、ともすれば真顔に見えかねないほどに薄い微笑を浮かべて、ティオーは客席を見ていた。

■

このとき阪神レース場に詰めかけた者たちの中で、トウカイティオーのトレーナーだけが気付いていなかつた。

鈍感クズ野郎だからか、それとも彼だけがトウカイティオーにとって対象外だつたからか。

レースは終わつた。

誰が強者で、誰が上位者か。

野生の肉食動物の雄が群れのリーダーを争うが如き闘争に決着が付き、序列は確定した。

トウカイティオーは己に挑み敗れた者たちを見下している訳ではない。

むしろ、勇敢にも戦い抜いた心の強さに敬意を持っている。だが、それ以上に優先すべきことがある。

戦いに挑む勇者たちの心意気や良し。

しかし、それを周りから見てピーチクパーチク轟つてているだけの連中と、今日の結果を見てまだ己を阻もうとする愚者に対しては宣言しておかねばならない。

一切の例外はない。

憧れも、友情も、ネイチャーマック天霸者も、己の前に立ちはだかる全てを等しく叩き潰すと。

もう、夢は掲げない。

力という冷酷な現実を突き付ける。

その、会場に居る者全てを威圧する姿はあるウマ娘を幻視させた。どこまでも燃え盛る意志と、暴力的なまでの強さを以て君臨するその姿は――。

怖気を感じるほどに冷たい視線でレース場を睥睨し、勝つて当たり

前だと佇むその姿は——。
”皇帝”の名を持つ絶対者に、よく似ていた。

勝負服

『”帝王君臨”　トウカイティオー、阪神の地で完全復活ツ!!』
むふ、むふふふ…………。

新聞の一面を飾るその文字を、何度も目で追つて口に出してしま
う。

担当ウマ娘がG Iを獲るのってこんなに嬉しいもんなんだな。
つい嬉しくて、コンビニで新聞を十部も買ってきました。
レース直後も嬉しさが爆発していたんだが、じわじわと湧いてくる
この嬉しさも大変よろしい。

俺のトレーナー人生において初のG I制覇であり、先輩である三人
からもお祝いのメッセージが送られてきていた。

『自分の実力やなんて勘違いせんよーに』

『アイツ、マジですげーな。また皆で祝勝会にメシ食いにいこうぜ
！　金はクズに渡される賞金の取り分でいいだろ』

『……b』

俺に対する称賛の言葉が一つもないどころか、俺の金でメシをたか
ろうとしている始末。

アイツら、社会に出る前にちゃんと学校で礼儀を学ばなかつたのか
？　担当していた奴の顔が見てみたいぜ。

「……アイツらも勝たせてやれていたら、この喜びと一緒に味わえた
のかな」

それはきっと高望みなのだろう。それでも後悔がない訳ではない。
G Iでなくてもいい。G IIもG IIIも立派に喧伝できる実績だ。

ウマ娘としてトレセン学園の門を潜つた意味を、俺はアイツらに与
えてやれなかつた。

たとえ才能がなかつたのだとしても、道をこじ開けるための標にな
なつてやるのがトレーナーの役目だつたのに。

せめて、この気持ちを忘れずに未来へ持つていこう。
アイツらにとつて、ティオーが少しでも誇れる後輩になれるよう
に。

その決意を表明するために、三人にメッセージを返した。

『ああ、やっぱ手元に置くななら天才に限るわ。』俺の金で奢つてやるから、咽び泣いて感謝しろよ中退者共』

このあと、トーカルーム内にティオーには見せられない汚物のごとき罵詈雑言が飛び交ったのは言うまでもない。



「はあ……。疲れた」

駄のなつてない先輩どもに成人男性としての誇りを持つて口撃を行ひ虚しい勝利を得たあと、俺は直面しているもう一つの重大な問題に目を向けた。

「どうすっかなー、これ」

祝辞と同様にメッセージアブリに送られてきた、ある文章。

俺が今、頭を抱えている悩ましい問題である。

そのメッセージの内容はこうだ。

『大阪杯の勝利おめでとうございます。私たちもテレビに繋り付いて見ておりました。ところでその、あの新しい勝負服なのですが、なんか胸元が不安というか露出が多いように見受けられたのですが、排熱目的の構造なのでしょうか?』

もちろん、メッセージを送ってきたのはティオーの親父さんである。

俺も気にはなつていたのだ。

パドックに現れたときは、遠目だつたのもあって大きな違和感はなかつた。

全体的に赤を基調とした躍動感を感じさせるデザイン。

羽織つた上着とスカートは厚手の生地でしつかりとした作りのようを見たし、ロングブーツも重厚感がある。

招き猫を背負うだなんて物理法則に喧嘩を売る真似もしていない。……いや、腰によくわからない『なにその、なに?』つて感じの円盤が付いてたりはするが。

全体的にはトウカイティオーに非常に似合う勝負服にはなつてゐるんだ。以前の白い勝負服からの落差というか印象の違いは大きいが、どちらも人気が出るデザインだと思う。

では、なにが問題なのか。

——そう、露出である。

ヘソ出しどころではない。首回りは鎖骨までがつづり見えているし、腹回りはもちろん肋骨のあたりまで出てしまつてゐる。

上着に目が行つてあまり気にならないだけで、脱げばゴールドシチーと同じか下手すると以下の布面積しかないかもしない。

あのグラビア撮影か海水浴と勘違ひしてんじやないかと思える勝負服と同等以下なんて正氣か。

ちなみにこの感想をゴールドシチーに聞かれたときは、ぶん殴られそうになつた。タマモクロスたちが止めてくれなかつたら俺はボコボコにされていただろう。

そこがまた厄介なのだ。勝負服にはウマ娘たちの強い想いが込められてゐる。

夢、理想、信念、決意。

どれもバカにしてよいものではなく、招き猫ですら迂闊に踏み込めばヘビーな事情が飛び出してきかねない。

まさに藪をつついで蛇を出すというやつだ。ヘビーだけに。

披露される前は気になつて仕方なかつたデザインだが、今となつてはめつちや聞きづらい。

『その過多な露出に込められたものは何なんですか？』つて女子中学生に聞いてみろよ。

即ブタ箱行きになるぜ。

だが、聞かない訳にもいかない。

担当トレーナーに対して、両親から問い合わせが来ているのだ。

『あなたが担当しているうちの愛娘の服の趣味がなんだか凄いことになっていますが、どういうことですか？』と。

ましてや俺はティオーと複数回、服飾品を購入しに行つてることを両親に報告している。

ダービー以降の諸々で趣味に変化があつてもおかしくはないが、離れた場所から見守っている両親から見て最も大きな変化は、隣に立てるヒトが女性から野郎に変わったことだろう。

やはりなんらかの悪い影響を……？と心配になるのも無理はない。ここで『きっと、元からそういう趣味嗜好があつたのだと思いますよ』なんて回答はさすがに抗議ものだ。

預かっている身としても適当には誤魔化せない。

そもそもデザイナーにお任せしたデザインということもないだろうし、意図はあるはずなのだ。

例えば羽飾りのような装飾や炎のような飾り布は、怪我からの復活という思いを込めて不死鳥を意識したのだと読み取れる。

それだけに露出にも意図があるはずなのだ。露出したいという欲求以外の露出理由なんてあるのかは知らんが。

回答の候補として、もつとも一般的な見解はメッセージにもあつたようには排熱だろう。

ヒトを遙かに超えるスピードとパワーで数分のあいだ爆走するウマ娘の体からは、凄まじい熱量が生み出される。

熱が籠りすぎて汗が噴き出ると走るのにも邪魔だし、レース後に体温を崩すかもしれない。

そういった理由である程度は排熱を意識したデザインにされるというのは珍しくない。

だが、排熱効率が高いほどウマ娘は速くなるという定説ができるほどでもない。

そうであれば、余程の事情でもない限りは全員が水着みたいな勝負服を用意することになるだろう。

トウインクル・シリーズが公共の電波には乗せられないニッチナイベントになつてしまふ。

だからこそ、あるはずなのだ。

あの露出に込められた思い。今のアーツを形作る基になつたなにかが！

……自分で言つてアホらしくなつてきた。

とりあえず、時間が欲しいと返事をしておこう。

『排熱以外には思い当たる事情がなく、調査にお時間ください』……

と。

だが本人に直接聞くのは憚られる。そもそもレース本番まで見せてくれなかつたのだ。聞いても教えてくれない可能性が高い。ならば――。

「アソツが親しい連中に聞き取り調査するしかあるまい」

ふつ、自慢ではないが俺は諜報活動が得意なのだ。



「ええー？ テイオーちゃんの勝負服のデザイン？」

「ああ、実は最近まで俺はデザインを知らなくてな。今もどういう意図があるのかよく分かつてないんだ」

一番手、マヤノトップガン。

ティオーと同室でマセたおガキ様であるコイツなら、他人の持ち物に興味津々かつティオーと話す機会も多いはずだ。先んじてデビューケードを果たして活躍しているティオーの一着目の勝負服なんて話題に出ないはずもない。

「…………」

なんか無言かつジト目で見られている。お腹が空いたのだろうか。「なんだよ。渡せる菓子なんて無糖ガムくらいしかないと。それでいいか？」

「…………いやらしい。毎晩毎晩、嬉しそうに話を深夜まで聞かされて、寝不足にされた理由がちよつと分かつて不機嫌なだけ」

なんだ相変わらず仲良いんだな。だが夜更かしは程々にしておけよな。

「ていうか言いたいことがあります！ もつとティオーちゃんとお話ししてあげて！ 足りない分は全部こつちに回つて来てるんだからね！」

あん？ 話なんて腐るほどしてるとと思うが。

「くつちやべりながらトレーニングする訳にはいかないが、会話量は相當あると思うぞ？ というか俺の一日の会話の八割以上はティオーが相手だ」

ちなみに会話量二位は学内の関係者で、三位はコンビニの店員だ。
「全然足りてない！ 今の三倍にしてあげて！」

多すぎるだろ。一緒にいる時間以外にあつた出来事全部話すつもりかよ。

「まあ検討はしてやるよ。そこで勝負服の話はどうなんだ。色々聞かされてるんじゃないのか」

なにをそんなに話すことがと思わなくもないが、この年頃の子は元気が有り余つててすげーわ。

「ティオーちゃんの勝負服の意図なんて簡単だよ。全部なんだもん……ゼンブってなんだ？ 全部？ それとも前部？」

「女子のあいだで流行っているモンの略称かなんかのことか？ チヨベリグみたいな。それなら俺も流行りに乗つたみたいですが、説明しやすくて助かる」

盲点だつたな。たしかに俺もご両親も女子学生のトレンドなんて詳しくはない。よく分からなかつたのも道理だ。

「ちーがーいーまーすー！ ティオーちゃんのあの日から今までを全部乗つけた勝負服つてこと！」

あ、普通の意味なのね。でも全部つて言われてもピンと来ないんだが。

「これ以上はアタシからは言つてあげないもん。担当しているウマ娘のことをちゃんと理解してあげるのもトレーナーの役割なんだよ！」

おい、正論で殴つてくるのはやめろ。

しようがないだろ、勝負服の話題は避けられ氣味なんだから。

「言われなくても分かるくらいにいっぱいお話して情報を掴まなきや。女の子はね、日進月歩なんだよ！」

こいつ、案外熟語とか諺が好きなんだろうか。

「全然参考になんなかつたけど、建前で礼は言つとくわ。サンキュー

な

そう言つてマヤノと別れる。本命からの情報が無価値だつたんだがどうしよう。

「女の子を子供扱いしないことー！　あ、でも年齢の話はNGだからねー！」

去り際に後ろからそんな声が届いてきた。その理論つて結構理不尽だよな。



「え、ティオーネの勝負服？　アタシにそれ聞いちゃいます？」

二番手、ナイスネイチヤ。

同期にデビューした友人関係にあるウマ娘であり、菊花賞では共に走った相手もある。

ティオーネとマヤノがお子様なのに対してこつちは枯れてるというか、じじむさいというか、あんまり子供らしくない言動が目立つ。

それだけではなく、最近はなんかこうティオーネを見る視線にネバついたものを感じる気がする。同期で適正距離も被つていそしだから、よりライバル意識が強くなつたのかもしれない。

それでも良き友人であることは変わりないので、参考にはなるはずだ。

「うーん、ティオーネはアタシと違つて自分を表に出すことに全く躊躇とか恥ずかしさを感じないタイプですからねー。やつぱりこう、自分を構成してくる大きな部分が前面に出ちやつてると思いますよ？」

やばい、また抽象的な表現だ。自分を構成している大きな部分でなんだ。水分か？

「いやー、それをアタシの口から言うのは羞恥心が耐えられそうにくつてですね。お二人さん、アオハルしますねえ」

アオハル……青春のことか。俺の青春はバカな連中とバカなことばかりしていた気がする。

「少なくともお前たちほど何かに全力投球する青春じゃなかつたが、

あの勝負服って青春を表現してたのか

青春のイメージカラーってなんとなく空色とかだと思つてた。

「いや、そうではなくてですね。ティオーが青春で体験したことと言いますか……まあ、集大成つてやつですね」

全部、集大成……。ダメだ、分からぬ。

いや、別に良い悪いとかを判断するつもりはないんだが露出に繋がる意味が分からぬ。

「あはは、悩んでますねえ。変な理由はないんで、気にしなくてもいいと思いますけどね」

俺もご両親への報告が必要なればここまで悩まないんだけどな。「ところでトレーナーさん、仮にも同期のライバルであるネイチャさんに手間を掛けさせてタダつてのは筋が通らないと思つたりするんですよ」

なんだコイツ。明け透けに謝礼を要求してきやがつた。別に構いやしないんだが、こんなタイプだつたか？

「なにが望みだ。あんまりやりすぎると後でマヤノに不公平だつて言われそ�だから程々で頼むぞ」

お子様を相手するときの大事な法則。格差は付けないである。

「マヤノのどこにも行つてたんだ。あ、お礼は全然大したモノじやなくてよくつてですね。今度、ティオーと併走トレーニングさせてほしいのと、このあと勝負服に限らず色々と話を……」

ん？どうしたんだ急に黙つて？

「いやー、やっぱ今の話はなしで。お礼を強請るなんてはしたない真似をしちゃいかんですね。それじゃ！ アタシはこれで失礼します！」

「あつ、おい！」

早口で捲し立ててどつか行きやがつた。なんだつたんだ？

「ネイチャと何してたのかな、トレーナー？」

―――――一年程のあいだ、もつとも多く聴いてきた声。

だが、そこに込められた激情は過去に類を見ないものがあつた。

「いや、別に大したことじやない。ただの雑談だ……」

お前の勝負服の露出について探つてましたとは口が裂けても言えん。

「へえ、そう。詳しく述べは聞かないよ。信頼してるからね。けど、一つだけ教えてほしいかな」

「な、なんでございましょう……。

「話しかけたのは、どつちから?」

選択を間違えると血を見ることになる。そんな予感があった。

「お、俺からだけど」

「そう。じゃあ、ギリギリ(ネイチャは)許してあげようかな。それと、もうネイチャとは二人では会わないこと。いや、カノープス関係者とは一人で会わないこと。いいね?」

あ、はい。

「いやいや待てよ。そんな会う機会 자체ないけど、理由はなんだ? ライバルだからか?」

極論デビューしてる全員がライバルではあるのだが、同じ学園内にいるだけあってそこまでバチバチな関係って案外ないのだ。

「前はともかく、今は手段を選ばないだろうからね。遅れを取るつもりはないけど、隠せることは隠しておいたほうがいい」

そ、そうなんだ。

「それとトレーナー。ボクね、今すぐ機嫌が悪いんだ。ストレス発散のためにトレーナーのお金でハンバーグを食べに行きたいんだけど、もちろん良いよね?」

「……はい、もちろんございます」

やばい、なんか今日のティオ一怖い。

勝負服のことも全然分かんねーし、どうすればいいんだ。

このあと、マーベラスヒルドルフのどこにも行くつもりだつたのに。

「ほら早く行くよトレーナー! 今日はね、一キロは軽く食べられそうな気がしてんんだ!」

おう……、それ食つて体がもうちょいデカくなればいいな。

結局、ご両親には『なんか今までの全部とか、自分の中の大きな部分を占めているものを意識した「デザインらしいです」と返事をしたら何故か納得してもらえた。
もしかしてこの曖昧な表現を理解できないのって俺だけなのかな?

春天覇者

『トウカイティオーの走り、圧巻でしたね！』

『そうですね。次は春の天皇賞へ出走することを宣言しています。前年覇者であるメジロマツクイーンとどのような勝負を繰り広げるのか、目が離せません』

テレビ、新聞、雑誌。各メディアはこそつて大復活を遂げた天才を持ち上げる報道をしている。そして、メディアとその先に居るファンが気にしているのは何時だつて次の楽しみだ。

もつと強い相手と、もつと面白い勝負を。

際限なく肥大化していく欲求に限界はなく、例え私たちが終わつたとしても、それを過去の思い出にして次を見つける。

「見せ物であることは否定しませんが、付き合いきれないという思いもありますわね……」

誇りを持つて高貴なる者としての責務を果たすのも楽ではないと、溜息が出てしまう。

「今は世の無常さを嘆いている場合でもありませんね。早急に対策を立てなくては」

衝撃的な復活劇を見せた大阪杯でのトウカイティオーの走り。

鎧を削り、切磋琢磨し合えるライバルが再び舞台に上がってきたことは間違いない吉事だ。

だが、そのライバルが底も見えないような強さを持って己に挑んできることは、喜びだけで表現できない。

春の天皇賞二連覇。

数多居る天才たちが未だ成し遂げていない偉業であり、メジロ家にとつては悲願もある。

弱者を甚振つて春の盾を手に入れようなどとは考えたこともないが、別に全ての強者が参加したうえで勝たねばと思っていた訳でもない。

得意の中距離に引き籠つてもらい、自分が史上最強のステイヤーという称号を得てから挑戦しに行つても良かつたのに。

しかも、トウカイティオーにとつては菊花賞のリベンジという側面もある長距離レース。

モチベーションの高さは自分に劣らない。才能という点では頗る目に見て五分五分。

ならば、上回っている要素はなにがあるか……。

先日の大阪杯の映像を見ながら、レース展開のイメージを固めていく。

「随分と熱心だな。事前投票の大本命。前回の勝者であつても、トウカイティオーの存在は無視できないか」

映像の分析に集中していると、なにやら大量の紙束を抱えたトレーナーが部屋に帰ってきた。

「あの娘の輝きを無視できるウマ娘なんていませんわよ。例え目を瞑つて顔を背けようと、その光からは逃れられません」

トレーナーによつて机に並べられ始めたのは新聞や雑誌、それに映像媒体のようだつた。

どうやら、資料を手当たり次第に漁つてきてくれたらしい。

「俺も同感だ。どうせ逃げられない光なら、しつかりと見据えて備えるのが正解だろ」

内容は全てトウカイティオーについて綴られたもの。客観的な評価も取り入れて分析しようとすることだらう。

トウインクル・シリーズを専門とする記者や評論家の視点はバカにできるものではない。端から見ることに特化し、それを文章として書き起こすことを生業とする彼らの成果物は、短時間で濃厚な情報が得られる重要なソースだ。

しかし……。

「ほとんどはダービー前までのモノですね。それ以降はなんというか、ゴシップ誌の迷惑記事という印象が拭えないのですが」

菊花賞までのほとんどはリハビリに充てられており、公の場に立つこともなかつた。

大阪杯までは担当しているトレーナー共々に好き勝手言わっていたこともあつて、精度という意味では信用が置けない。

「なにより、今のトウカイティオールはダービーまでの彼女とは別物です。走りも、心も、在り方も。十把一絡げに扱っていると、足を掬われますわよ」

「たしかにな。今のトウカイティオールは昔とは違う。だが、その本質まではそうそう変わるもんじやない。antzについて知っていることの復習にはなるし、昔との違いをより明確にするためにも調べておいて損はないさ」

そう言われてしまえば、同意せざるを得ない。

何気なく手に取った雑誌には『月刊トウインクル』の文字。そこにはトウカイティオールの強さを支える彼女特有の性質や、レースで好む展開について詳しく書かれていた。

その内容を読みながら、自身の見解を述べる。

「天皇賞においても、先行することは間違いありませんわね。そして、そこに警戒すべき強敵が居た場合、あの娘はそれをマークする位置につきます」

つまり、自分の後方に付かれるということであり、抜きに掛かるのは最終コーナーから。

それは恐らく、自分に限らず大多数の予測ではあるのだろう。

「ですが、その予測を覆されたのが大阪杯でもあります」

大阪杯では第三コーナーを超えないうちからラストスパートを掛けってきた。

あまりにも早すぎる勝負の仕掛けどころではあつたが、それで圧勝しているのだから文句を付けられようはずもない。

「俺はそうは思わない。正確には、春の天皇賞は大阪杯と同じことにはならないと踏んでいる」

そう断言する顔には、確信があるように見えた。

「距離三千二百。惨敗した菊花賞より長く、出走してくるウマ娘のレベルも高い。それにトウカイティオールは菊花賞で全く自分の走りをできずに負けている。奇策や新戦法なんか使う前に、まずはしつかりとレースを作ることを優先したいはずだ」

スタートの失敗、ペース配分の失敗、スパートの失敗。彼女の菊花

賞は実力で敗北したというよりも、お粗末なレース展開に終始してしまった故の結果だった。

「どれほどの天才であっても、いえむしろ天才であるからこそ、過去の失敗を頭から消すことは出来ず、払拭したいという思いに囚われるということですか」

だからこそ、採る戦法は王道にして最も得意とする好位追走。

「ああ、俺はそう考えている。あとはそれを認識したお前が天皇賞でどう走るかだ」

どう走るか。それは、何時も通り自分の走りを貫くだけでは足りないということか。

「具体的には、スローペースな展開かそれ以外かつてとこだな」

スローペース。トウカイティオーが大阪杯で見せた驚異的な加速と末脚を出来るだけ後半まで封じることが目的だろうか。

「良い案だとは思えませんわね。本當かどうかは分かりませんが、パーマーは大逃げするそうですわよ」

「なにい？ 逃げじゃなくて、大逃げなのか？」

正確にはダイタクヘリオスが大声で『大逃げ、爆逃げ、超逃げだあー！』と叫び、一緒に歩いていたパーマーが腕を振り上げて同意していたのだが。

盤外戦術ができるようなタイプでもないし、たぶん実行してくるのだろう。

「ええ。それにティオールが過去の失敗を払拭したいと考えていることは同意しますが、払拭する方法は我々が考えているものと別になる可能性もあります」

彼女の性質は以前と比べて大きく変質している。

強い輝きを放っていることは変わらない。だが、かつての彼女がスターとして文字通り星のような煌めきを放っていたのに対し、今は星は星でも太陽だ。燃え盛る炎を伴う光熱は、近付く者を焼き尽くす。そういう攻撃的で排他的な強さが今の彼女にはある。

自分に合わない展開だと思つたら、即座にぶち壊してくるだろう。

そうなれば、自分の走りをさせてもらえないくなるのはコチラ側だ。

「作戦の読みに不確定要素が多い以上、お互に得意のぶつけ合いになるか。こつちも細かいところで積み上げていくしかないな……」

そう言いながら、トレーナーはレース映像を巻き戻した。

「色々と変化があるなかで、外から抜きに掛かることを好む性質は変わっていない。マツクイーンは出来るだけ内ラチ側に付いて、トウカイティオーには外を走らせる。スパートを仕掛けるのもこつちからだ。相手に主導権を渡すのを極力避ける」

距離三千二百ともなれば、内外で走る距離にかなりの差が出る。王者の採る策としてはなんとも姑息な気がするが、嫌なら相手も内ラチを走ればいいだけのことか。

「策と言つても無いよりはマシって程度だ。結局は実力がモノを言う。長距離を疲れなく走りきるための筋力強化も大詰めだ。本番直前まで負荷を上げていくぞ」

望むところだ。元より、自身の実力以外の要素に頼つて勝つつもりなど毛頭ない。

「ま、今は休憩中なんだ。体はしつかりと休めて、頭を使つて分析に集中しよう。資料をかき集めるついでに糖分補給用の大容量シュークリームを買ってきただんだが、食うか？」

「ええ、全部いただきますわ」

トレーナーの掲げたシュークリームの袋をひつたくつてモニターに目を向けると、トウカイティオーが大阪杯の勝利者インタビューを受けている場面だった。



『トウカイティオーサン、大阪杯の勝利おめでとうござります。大差を付けての圧勝でしたね！』

『ありがと。ちょっと上手くいかないところもあつたけど、結果には概ね満足してるよ』

『新しいトレーナーの実力や関係性について、様々な憶測がありますがいかがでしょうか？』

『それ本人がいる前で聞く？ 関係性に問題があるなら一緒にここに

出てこないし、実力がないなら今日も負けてたよ。次の質問どーぞ』『次は春の天皇賞ですよね！ 前回の勝者であるメジロマツクイーンに勝つ公算はありますか？』

『ボクの負けた菊花賞よりも長い距離で強い相手だからね。公算なんてないよ。けど、はいそうですかつて負けは認められない。勝ちに行くよ』

『”皇帝”シンボリルドフが達成した七冠。トウカイティオーさんもやはり目指しているのですか！』

『七冠そのものは特に意識してないかな。ただ、やりたい事をやつていくなら追い付かなきやいけない数だとは思ってるよ』

本当に、随分と変わってしまったと思う。

以前から、持つて生まれた才能を思うが儘に振りかざしてはいた。もちろん、そこにはしっかりと裏打ちされた努力や彼女なりの考えがあつたのだろうが、それでも感覚派だったことは間違いないだろう。

それに、才能を振りかざすと言つてもそこに他者への隔意などはなく、あくまで自身の夢へ向けた無邪気な行動だった。

だが、今は違う。

振りかざされる才能はより激しく勢いを増した。

なにより、その行動には冷酷な意志と明確な意図がはつきりと見て取れた。

競い合うライバル、切磋琢磨し合う仲間。だが、それ以上に己の前に立ちはだかる敵であると考えているのだろう。

彼女の底抜けの明るさと自己肯定を好み、羨ましく思つていた身としては少し物悲しくもある。

それでも、レースに挑む競技者としての心の疼きは抑えられない。『最強の王者として、最強の挑戦者を待ち受ける。燃えますわね』

天皇賞の盾が持つ絶対的な価値は変わらない。

誰を相手に勝つて手に入れたのだとしても、胸を張つてメジロ家に持ち帰れるだろう。

だが個人的には、あのトウカイティオーに勝利して手に入れた盾の

価値は格別だ。

デビュー以前からクラスメイトとして近くで見てきた。

日本ダービーを勝利して、二冠を得たときの輝くような強さに見惚れた。

夢への挑戦を絶たれ、それでも這い上がって、結局は届かなかつた三冠。

どれ程に苦しみ悲しんだのか想像も付かないが、彼女は立ち上がり歩み始めた。

以前よりも苛烈に、燐然と輝きながら。

その強さに、心からの敬意と称賛を送りたい。

だがそれでも、譲れない。

王者とは貪欲でなくてはならない。

王者とは傲慢でなくてはならない。

勝ちたい。

あの娘に勝ちたい。

盾でも名誉でもない。

家でも誇りでもない。

メジロマツクイーンというウマ娘の魂が、どこまでも勝利を欲している。

だから、戦いましょう。

全力で、全靈で、全開で。

それはターフに立つ者にだけ与えられる最高の権利。

「どこまでも競い、高め合いましょう。ティオー」

私と貴方で。

最強の名を懸けて。

TM論争

TM対決、あるいはMT対決。

ここ最近、各メディアを賑わせている言葉だ。どちらが、ではなくどちらも。

より詳細に説明するなら、どちらで表現するのが正しいのか活発な議論が行われている。

「TM、そしてMTか」

トレーナー室でネットニュースを見ながら咳くと、メジロマックイーンのレース映像を分析していたティオーの耳がピクリと動いた。やはりアッシュも気になつていてるのだろう。

「てりマヨか、マヨチキか……。熾烈な争いになるだろうな」

きのこたけのこ、つぶあんこしあん、唐揚げにレモン。人間はいつだって平和を望みながら、争うことを止められない。業であり性というやつなのだろう。

それはそれとして、やはり一日の長があるてりマヨが優勢だろうか。

「違うよ!? なんでハンバーガーの売れ行きの話だと思つてるの!」

ティオーが嘘でしょ!? って顔をして勢いよく椅子から立ち上がり叫んだ。

「なんだ違うのか。まあ、俺はマヨネーズが入つてればどっちでもいいんだけどな」

どつちも違つてどつちも良い。ラブ＆ピースだ。

「だからマヨでもないんだつてばっ! トウカイティオーのTとメジロマックイーンのMだよ!」

「でも、それだとなんでアルファベットの順番争いなんてしてるんだ? 特段言ひづらくもないし、どつちでもよくないか?」

アルファベットが先だと内枠にしてくれたりするんだろうか。

「どつちが強いかつてことを表したいんじゃないの。ボクも正直どうでもいいと思うよ。走れば嫌でも結論は出るんだし」

タマモクロスを彷彿とさせる鋭いツッコミをしてきたにも関わらず

ず、ティオー自身も順番に興味はないようだった。

そりやそうだよな。

「まあ、俺はマヨネーズが入つてればどつちでもいいんだけどな」

入つてなかつたら悲しいけど。

「マヨは関係ないって言つてるんだから離れてよ！　だいたいマヨつてMの方じやん！　そこは無理矢理でもTを推してよ！」

デスクをバンバンと叩きながらティオーがまたもツツコミを入れてきた。

なんだか今日はやたらと冴えてるな。

それにしてもTか。

チキン、チーズ、チリソース、タマゴ、トマト……。

「うーん、Mかなあ」

全てを合わせたとしても、マヨの前には鎧袖一触だろう。

「どんだけマヨが好きなの!?」

どんだけかと聞かれると、いっぱい好きとしか答えられない。

「昔はマヨを容器から直接ちゅーちゅーする文化もあつただろう。俺は彼らほどの情熱を持たないニワカだが、マヨは等しく皆に幸福を与えてくれるんだ」

デザート系以外のだいたいの食い物に合う魔法の白いクリームなのである。

「そんな汚い食べ方する文化聞いたことないよ！　まさかトレーナー室の冷蔵庫のやつでやつてないよね!?」

もちろんである。俺はマヨと合う食べ物が好きなのであって、マヨだけ食べる趣味はない。

しかし、ティオーは知らないのか。ジエネレーションギャップを感じる。

「とにかくっ！　メディアやファンはともかく、トレーナーがMT対決つて言うのを許すつもりはないからね！」

ふむ、正直言いやすければそれでいいのだが、MTでもよい理由を勘違いされても困るから訂正はしておこう。

「TとMの順番なんてどつちでもいいが、お前がそうして欲しいと言

うならTM対決にするよ。どっちにしろ俺が応援するのはトウカイティオーデ、勝つと信じてるのもトウカイティオーデ。それ以外はない

い」

だからこそ、本当にこの話はどうでもいいのだ。

「そ、それなら良いんだけどさ」

「まあ、巷ではMT対決の方が優勢らしいな。長距離ならメジロマツクイーンというのが世間の評価な訳だ」

ティオーデの素質は長距離でも十分にやれると思わせるだけのモノがあるが、実績としては菊花賞の大敗のみだから妥当ではある。菊花賞と昨年の春天を制したメジロマツクイーンにステイヤーとして抜きん出た実力があることは疑いようがないし、URA賞で二連覇を目指すことを公言しており、モチベーションも高いだろう。「お前の最高速度と加速が文句なしであることは分かつてるんだ。あとはスタミナと根性でどこまで食らいついでいるかだな」

長距離レースで最も重要な能力は?と聞かれたら大半のやつがスタミナだと答えるし、実際その通りだろう。

そして、メジロマツクイーンは距離三千を超えるレースであっても、息を荒げることもなく澄ました顔で走り切るようなスタミナお化けである。

なにかのインタビューで優雅に走つて勝つことを意識しているなんて言つていた気もある。

しかし、これは外面を取り繕つても勝てる展開だったなら、そういうというだけの話だ。

死にもの狂いで走らなければ勝てないのなら、死にもの狂いで走れば勝てるのなら、あのウマ娘は優雅な令嬢の仮面なんて惜しみもせず全力で投げ捨てるだろう。

長距離なんて泣きたくなるほど辛いだろうレースを主戦場にしている連中は、皆揃つて醜く足搔ける強さを持ち合わせている。

対して、トウカイティオーデはどうか?

スタミナがない訳ではないが、根性とかスポコンは似合わないという意見が大多数だろう。

優れた才能を思うが儘に振るう天性のスター。それがトウカイティオーラと考へてゐるやつは非常に多い。

かくいう俺もそう考へていた内の一人だしな。
だが、それも過去の話だ。

根性とは、なんの理由もなく持ち得る能力とは違う。ひたすらに走つてきた距離。耐え抜いてきたトレーニング。重ねてきた勝利への想い。そういつたレース本番までの日々全てが礎となつて根付く性質だ。

ダービー以前のティオーラのことは知らないが、俺と組んで以降のコイツの努力は三千二百程度の距離で潰れるような軟なモノではない。どれだけ無様でカツコ悪かろうと、最後まで勝つための走りを貫ける。

「ティオーラとしてはどうなんだ？ 春天で負けに繋がりそうな懸念はなににあるのか？」

怪我明けの菊花賞では発揮できなかつたが、ティオーラは勝負勘も半端ではない。マックイーンとの付き合いも俺よりはあるだろうし、違うものが見えているかもしれない。

「スタミナはどれだけ鍛えてもマックイーンを超えられないだろうから、一抹の不安があるかな。けど、それよりも危なそうなのは仕掛けのタイミングかなあ。ボク、まともに長距離を走れた経験ないからね」

レースは距離の分だけ紛れも起きやすい。失敗を取り戻せる場面も多くなるが、最後に勝つのは細かいところで失敗せずに、貯金を積んでいけるウマ娘だろう。

「ティオーラにとつても、京都レース場で長距離を走つたのは菊花賞だけだもんな」

レース場を走つた経験。距離を走つた経験。どちらもレース運びを考えるのに大切な要素だ。

しかし、この点でメジロマックイーンを上回ることは不可能。
昨年の覇者にスタミナでも経験でも劣る現状。才能と努力で勝ちますと言うのは頭がお花畠すぎるし、やはりここは奇策でも用意する

べきか。

「爆逃げティオーカ。語呂としては有りだな」

何も考えず最初から全力で前に走ればいいから、俺も頭すつからかんに出来て大変楽である。

「なんで逃げを採用しようとしてるのかは予想付くけど、やんないからね。変な作戦採つてもあんまり意味ないから何時も通りでいいよ」「だつてお前、それだと俺が居る意味ないじやない」

なんかこう良い感じの作戦をズバッと提示して、このレースは全て俺の読み通りだ、みたいな事したいんだけど。

「作戦やトレーニングを考えてくれるのは嬉しいから止める必要はないんだけどね。トレーナーは居てくれるだけでもいいの。それだけでボクは最強だから」

それじゃ俺はフクキタルに背負われてる招き猫みたいなモンじゃねーか。

「出走するメンバーの走りは大体分かつたから。全員が普段通りの走りをすれば、ボクは五番手くらいでマックイーンを追う形になるんじゃないかな。実際にターフに立つてみて分かることもあるだろうから、直前には作戦を変える可能性もなくはないけど」

うーむ、俺も長距離レースに詳しい訳じやないから無理に思い付きを実行させても悪影響しかないか。

ちなみに例のファイルでも、ティオーの無敗記録を維持するための難関は春の天皇賞だと予想されていた。シニア級に上がつて早期に挑むレースとして、三千二百という距離とメジロマックイーンという覇者が一番厄介という認識は共通のようだ。

記録に拘るのなら挑まないのが最善とも書かれていた。

逆に当時掲げていた最終目標、シンボリルドルフを超えることを意識するならば挑戦すべきと考えていたようだ。例え結果が負けであつたとしても、得られるものが他のレースとは比較にならない、と。「そんなことはいいから。ボクのトレーニングをちゃんと見てること。それが終わったらマッサージをして、一緒にはちみーを飲んでご飯を食べる。こっちが疎かになつたら怒るからね?」

ここ最近の定番ルーチンだな。

勝つためにトレーニングやミーティングに割く時間が増えたから遊ぶ頻度は落ちたんだが、それでティオーと一緒に居る時間が減ったかというと、むしろ増えた気がする。

「そう言えば、天皇賞はどっちの勝負服で走るんだ？」

大阪杯はお披露目の意味もあつたから新しい勝負服だつた。復帰戦で大勝利を飾つた勝負服だから縁起も良さそうだが、以前の勝負服の人気も未だ根強い。交互に着るのも有りだろう。

「どつちもなにも新しい方しか着る予定ないんだけど」

「そうなの？ 古いほうも着ないのはもつたいなくない？」

「あの勝負服 자체を悪く言いたくはないんだけどね。精神面の影響つて大きいからさ。今のボクはアレを着ても勝てないよ」

それはやはり、菊花賞の走りと敗北の印象を拭えないということだろうか。

お世辞にも良い走りだつたとは言えないが、俺にとつては大きな転換日でもあつた。

勝つた負けた以上の意義がレースにはあるのだと教えられた日でもある。

「なにその微妙な顔。どうしても見たいつていうなら部屋で着てあげるからさ。あとは学園のイベントとかでファンサービス目的なら別に着てもいいよ」

いや、別に服を着たところが見たい訳ではないんだが。

「さてと、ばつちりイメージも湧いてきたし、トレーニングに行こうかな！」

そう言いながら伸びをするティオーの顔には、静かな闘争心が見て取れた。

「まあ、お前の勝負服なんだ。自分がこつちだつて思つた方を着るのが正解に決まつてるか。で、イメージが湧いてきたトウカイティオー様から見た勝率は如何ほどだ？」

レースに絶対はないが、コイツほどの天才なら七、八割で勝利が固かつたりするのかな。

「うーん、そうだねえ」

きつぱりと断言されるかと思っていたのに、返ってきたのは思案するかのような声。

「樂観的かつ巣廻目に見て、五割ってところじゃないかな」

苦笑するような声色と弧を描く唇に對して、欠片も笑つていない目。

それはつまり、万全のトウカイティオーであつても消せない敗北の可能性があるということだ。

俺たちが契約を結んでから、戦績はここまで一勝一敗。

恐らくはティオーにとつても、過去最強の相手と競う最も過酷なレース。

その中で俺は、トレーナーとしてコイツになにをしてやれるのだろうか。

ウサギとカメ

コツリ、コツリと蹄鉄の鳴らす音が京都レース場の地下道に響く。やれるだけのことをやつてきた。

新しい勝負服もよく馴染んでいる。

調子は万全で、だからこそ勝敗に言い訳は効かない。

「今日のレースに勝利し、もう一度春の盾をメジロ家に」

幼い時分、邸宅の敷地内を駆け回り遊んでいた頃が懐かしい。

ステイヤーとしての素質があることが分かつてからは、常に期待が付いて回った。

自分だけではない。

メジロに連なる家系にウマ娘として生まれ、才能が見初められたのなら誰であっても同様だ。

ライアンならばクラシック三冠。

ドーベルならばティアラ路線。

それぞれに期待された役割があつた。

それがただ重荷であったのかと言えば、そうでもない。

元より私たちはウマ娘。

走りたい。速く、より速く、誰よりも速く。

そういう本能を最初から備えた生き物だ。

期待は压し掛かる重荷であると同時に、勝利を彩る装飾品でもあつた。

全身全霊で挑み勝利を飾った昨年の天皇賞。盾を持ち帰った私を一族総出で祝ってくれたあの時間は、人生で最も幸せなひと時だった。

あの時間をもう一度。私とメジロ家に祝福と誇りを。

絶対に勝ち取つてみせるという、揺らがぬ決意をさらに固く胸に宿して歩みを進める。

そうして歩いていくうち、響く足音に自分以外のモノが混じつてることに気付いた。

「……ティオー」

ターフへと続く交差路。

炎を想起させる赤いウマ娘がそこに居た。

揺らめく陽炎のように立ち昇る闘志。

烈火の如く燃える瞳。

腹に力を込めて踏ん張らなければ、たたそれだけで道を譲つてしまいそうなほどの霸氣を纏わせて、”帝王”は堂々とターフへと向かっていた。

「調子は良さそうだねマックイーン」

「そう言うあなたも、万全に仕上げて来たようですわね」

間違いなく、私が戦ってきた中で最強のウマ娘。

前人未踏の偉業を前にして立ちはだかる存在は、どこまでも強大だ。

だからこそ、価値がある。

「もし、負けても泣かないでくださいます」

「それは約束するよ。悔し涙は去年のうちに全部出し尽くしちゃったからね」

そう笑うティオーの表情からは、過去への未練は感じられなかつた。

大阪杯を見て分かつていたことだが、無敗の三冠という夢は振り切れたようだ。

「……ところで、どっちが先にターフに出ていこつか」

別にどっちでもいいことなのだが、そう言われると後から出たくなってしまう。

「MT対決らしいから、マックイーンお先にどうぞ」

「いえ、真打というのは遅れて登場するものでしょう?」

いやいや、いえいえと下らないやり取りをしていると、ここが勝負の場ではないような気さえした。

「試しに、二人同時に出て行つてみようか」

「……係員の方に迷惑を掛けるわけには参りません。じゃんけんで決めますわよ、ティオー」

どちらが勝つたかは、聞かないでほしい。



『唯一無二、一帖いちじょうの盾をかけた熱き戦い！ 最長距離G I 天皇賞（春）！ 出走するウマ娘たちが続々とターフへ姿を現しています』
『一番人気は変わらずメジロマツクイーンでした。トウカイティオーは二番人気。やはり、菊花賞の敗北が要因でしそうか』

共に世代屈指の強者。

片やクラシック二冠を勝ち取り、“皇帝”の後継と目される天才。片や菊花賞、春の天皇賞と長距離においては歴代有数の成績を叩き出している怪物ステイヤー。

確信を持つて勝敗を予測できる者など何処にもおらず、それ故に数万人の観衆がもたらす熱気は、春の陽気を吹き飛ばしてしまった。

もつとも、ターフに立つ十四人から放たれる戦意はそれすら遙かに凌駕するが。

『さあ、前回の有馬記念を制したダイサンゲンがターフに現れました』
『同じく、ターフには逃げ宣言をしたメジロパーマーもいますね』

誰も彼もがG I 勝者、あるいはそれを成せるだけの実力者たち。相手がどれだけ隔絶した天才であろうとも、一瞬でも隙を見せれば喰らいつく。

そういう氣概を持つた戦士たちだ。

「……しつかりと目に焼き付けましょう」

そして、戦意を滾たぎらせてているのはターフに立つウマ娘たちだけではなかった。

「うん、そうだね。キラキラウマ娘同士の真剣勝負。たっぷりと拝見させていただきますか」

次、ぶつかり合う時に勝利するために。

今は観客の一人でしかなくとも、負けっぱなしではいられない。

一つでも多くの情報を得て、いざれ来る戦いに備えるために多くのウマ娘が牙を研いでいた。

「できれば、ネイチャさんとしてはティオーに勝つてほしいんだよねー」

「それは同期のライバルだからですか？ それとも菊花賞の件で負い目があるから？」

イクノディクタスの問いかけは至極真っ当な疑問だつただろう。

本人としても、大阪杯で完敗を喫したトウカイティオーの負けは想像できない。

「んー？ 違うよ。勝つて勝つて勝ちまくつてさ。もう誰にも負けないって自分も世間も思つたとき、パツとしない三番手が似合いそなウマ娘に負かされたらさ、良い音が鳴ると思わない？」

そう言いながら浮かべたニコリとした笑み。

その裏に見え隠れする黒く粘度の高い感情を感じ取つてしまい、イクノディクタスは顔を顰めた。

「憑き物が取れたのは大変結構なのですが、こちらに向けてくるのは止めてください。正直、付き合ひきれません」

チームメイトの劇的な変化をどう受け止めればいいのか答えは出ないが、自分まで巻き込むことだけは勘弁して欲しい。

「警戒しなくても、チームメイトを対象外にする分別位はネイチャさんにはつてありますよ？」

「よく言いますね。トウカイティオーとの勝負で一番邪魔になるのが逃げウマ娘だからと、ターボ相手に逃げ潰しのトレーニングをしまくつてあるくせに」

そのイクノディクタスの反論を聞いた瞬間、一緒に居たツインターボの体が震えた。

「ネイチャ、すんごい意地悪になつた

トレーニングを思い出してしまつたのだろう。涙声になつてしまつて いる。

「ほらほらターボ、泣かないで。もうコツは掴んだから、しばらくはやらないからさ」

「(なんて言つてますが、しばらくということは何時かは再開するのでしようね)」

あつさり騙されて機嫌を直しているツインター・ボと躊躇なく騙しにいったナイスネイチャ。

イクノディクタスは半ば現実逃避氣味に、これが二人の美点なのだろうと思考を打ち切った。

「皆さん、主役の登場ですよ。雑談はそこまでにして集中してください。ネイチャさん、分かっていますね？」

南坂の核心を省いた問いかけに、ナイスネイチャはニヤリと笑いながら答えた。

「もちろん分かっていますとも。このレースで見るべきはティオーダけじやない。来るエツクスデーには、マックイーンも間違いなく役者として登場するでしょうからね」

「その通りです。あなたが見るべきは二人より速く走る方法ではあります。あの二人も含めて、レースを走る全てのウマ娘をどうコメントロールするかイメージすることです」

ナイスネイチャが黒く澄んだ決意を固めたあの日から、南坂もまた“帝王”の戴く冠を篡奪する術を考えていた。

この天皇賞は、その重要な前哨戦なのである。

『やつてきました！ 史上初の天皇賞連覇に挑む一番人気メジロマツクイーン！ 会場に詰め掛けたファンが歓声で出迎えます！』

『白い勝負服、素敵ですね。トウカイティオーの赤と並ぶとよく映えそうです』

大本命。その登場に数万の視線と期待が突き刺さって尚、王者に毛ほどの動搖もありはしなかつた。

……なぜか耳はペたりと垂れていたが。

『さあ、もう一人の主役が登場です！ ここまで八戦七勝！ トウカイティオー！』

二番抗バ。勝利も敗北も呑み込んで立つウマ娘からは、挑む者としての氣概と強者としての威容が違和感なく溶け合っていた。

『両者ともに気合い十分といった表情ですね。良い勝負が期待できそうです』

『さあ、全てのウマ娘がゲートに入りました。勝つのは一体誰なのか

? 十四人がそれぞれのプライドを賭けて、いまスタートしました
!』



十四人の優駿たちは、誰一人遅れることなくスタートを切った。会場の熱狂と比較すると静かな立ち上がり。

綺麗に縦に並ぶかのような位置取りだ。

大逃げ宣言をしたウマ娘が居たにも関わらず。

『これは……逃げ宣言をしていたメジロパーマーをメジロマックイーンが追う展開！ トウカイティオーはその二つ後ろ！』

『ラップタイムもかなり速いですね。後続も着いていくのか抑えるのか判断に迷っているように見えます。三千二百あるレースのまだ序盤。掛かっているのか作戦の一環なのか。どちらにしろ、メジロパー

マーにとつては非常にやりづらい展開になりました』

逃げという脚質を持つウマ娘の特徴は何か。

諸説も例外もあるだろうが、メジマーな見解としては『頭からっぽで走ることが大好きな奴』だろう。

頭が悪いとか考えなしという意味ではない。

己の全てを早く走るという一点にのみ注げるウマ娘ということだ。

事前の読み、レース展開の調整、駆け引き。

そんな些末ごとに意識は割かない。

誰よりも速く、誰よりも短いタイムでターフを駆けて勝つ。

最強のウマ娘とは即ち最速のウマ娘のことだ。

そんな、ある意味真理とも言える無謀を真顔で言い放つ連中が逃げウマ娘だ。

では、そんな彼女達が最も嫌がることは何か。

速く走る以外のことを考えさせられることである。

少なくともメジロパーマーは、このレースの先頭は終盤まで自分だという前提で臨んでいた。

他の逃げウマ娘とも先頭争いなど起こさせない。

そういうつもりだつた。

だが、現実はそうはならなかつた。

少しでも脚を溜めるとかスタミナを温存するなんて事を考えてし
まえば、追い抜かれてしまう。

それほどの勢いでメジロマツクイーンが猛追してきている。

大逃げしている自分に追い付こうとしている。

それは同じく大逃げしているか、最低でも逃げを作戦として採用し
たということだ。

メジロマツクイーンというウマ娘はそういうた奇策を好まない。
自制心が強く、常に誇れる己を示さんとする在り方はレースにも如
実に顕あらわれている。

なのに、なぜ彼女にとつて一番重要と断言してよい春の天皇賞でそ
れを曲げてきたのか。

そんな余計を考えさせられている時点で、メジロパーマーは本領を
発揮できているとは言い難い状態だつた。

もつとも、当のメジロマツクイーンにメジロパーマーを牽制しよう
などという意図は全くななく、本当に逃げているだけなのだが。

■

甘かつた。浅慮だつた。勘違いしていた。

ここまで苛烈だとは、想像もしていなかつた。

見せつけるような存在感を放ちながら自分を追うティイオーが何を
考へて いるのか、すぐに分かつた。

「私に着いていけば勝てるど、そういうことですか……」

出走経験自体が少なく、その数少ない経験も敗北に終わつて いる天
才が採つた策は何か。

実際にシンプルだ。

最も長距離レースへの出走経験があつて強いウマ娘に着いていく。
ただそれだけ。

「マークされるのは事前の想定通り。想定外なのは……」

己に降り掛かる、プレッシャーの大きさである。

体が圧し潰され、ターフに沈むと錯覚するほどの圧力。

肌をチリチリと焼け焦がすような気配。

一挙手一投足はおろか、呼吸や視線の動きすら捉えられていると思わせる針のような視線。

いつも通りの走りをする。それがこんなにも難しいと感じたのは初めてだった。

このペースはマズい。

残り距離に対しても明らかにスタミナの配分を間違えている。

最終盤でパーマーと一緒に逆噴射する未来がありありと予想できた。

だが、それは後ろを走るティオーも同じことではないのか？

すでに三番手まで上がってきたティオーと後続の間にすら数バ身の差が生まれている。

そして恐らく、ティオーは自分がプレッシャーに当てられて掛けつていることを見抜いている。

ならば、自分はペースを抑えて終盤に抜き去るのが最良ではないのか。

そうしない理由があるとすれば。

「(あの娘は、このペースでも最後まで走り切れる自信があるということ)」

そして、徹底的に自分を叩き潰す氣でいるということ。

ならば、自分もペースを落とすことをしてはならない。

速度を抑えて走りを取り戻したとしても、待っている結果は変わらず敗北だ。

勝ちたいのならば、自分が上だと示したいのならば。

——超えていくしかない。

後ろから迫る炎を振り切り、持つはずのないスタミナを持たせる。

その無理を押し通す必要がある。

たとえ、なにを犠牲にすることになつたとしても。

メジロマツクイーンは覚悟を決めた。

幾度となく決めてきたが、まだ足りていなかつた。

もしかすると、今日が己の終着点になるかも知れない。

心に浮かんだ嫌な想像を受け入れ、僅かに笑みを浮かべたメジロマックイーンは。

歯が剥き出しになるほど強く食いしばり、微笑を獰猛な笑みに変えて脚に力を込めた。



大方の予想を覆す展開となつた春の天皇賞。

大逃げが成立しなかつたメジロパーマー。

明らかに過去のレースと異なる走りで逃げるメジロマックイーン。掛かってしまつていると勘違いするようなスピードで前の二人を追うトウカイティオー。

レースが後半に入ろうかという段階でも後続との差が詰まることなく、四バ身近い。

対して先頭集団の三人が走る距離はそれぞれに一バ身程度の差。ここまで必死に先頭を維持していたメジロパーマーだが、そのスマナはもう何時尽きてもおかしくない状態。

逃げさせて貰えなかつたこともそうだが、彼女もまた後ろから迫つてくるプレッシャーに晒され続けていた。

しかも、途中からは一人ではなく、二人のウマ娘から放たれるプレッシャーに。

最序盤はマックイーンが自分を追つてきていたのだと思っていた。序盤から中盤に入る辺りで、自分と同じく後ろから逃げているのだと気付いた。

そして中盤に入つてから。

追われて逃げていたはずのマックイーンからも、とんでもない圧が放たれ始めた。

自分を抜き去り、追つてくる存在を置き去りにする。

メジロ家最強のステイヤーがその覚悟を決めたのだと分かつた。

そうして迎えた二周目の第三コーナー。

大逃げに当たり前のように付いてきた二人は、さらにスピードを上

げて二人だけの世界へと突入していった。

……せめてもの救いは、先を行つた二人の顔になんの余裕もあるいはせず、自分と同じ死に物狂いであることが見て取れたことだろうか。



「（マズい……っ！）」

春の天皇賞。その終盤に至つてトウカイティオーが抱いたのは焦燥だった。

メジロパーマーを追い抜いて迎えた、メジロマツクイーンの一騎打ち。

徹底的にマークした。嫌がらせと言つてもいい位に圧を掛けた。それが最善だと考えたからだし、効果はあつたはずだ。

重圧から逃れるための走りをして、普段通りの消耗で済むはずもない。

メジロマツクイーンのスタミナは最後までは持たない。

スタミナが持たないのは自分も似たようなモノだが、自覚してのそれと相手に強いられたモノでは心構えの面で大きな違いができる。こつちは最初から気合と根性も全部使い切ること前提だ。

それでもメジロマツクイーンに届くかは微妙だったが、自分の走りを貫けなかつた彼女ならばなんの問題もない。

そう考えていて、実際そうなつていて。

ここに来て、その思惑を超えられた。

レースは最終局面。

ゴールまで残り距離二百を切ろうとしている。

それでもまだ、トウカイティオーとマツクイーンの間に差が一バ

身。

しかし、トウカイティオーの焦燥の理由は差が詰め切れないのでない。

「（これ以上は、脚が壊れるつ！）

まだスタミナはある。脚も前に出る。振り絞れば勝ち得るだけの

モノが残っている。

だが速すぎた。この領域に脚を踏み入れるには、まだ早すぎた。
下地と基礎。

時間を掛けて組み上げるしかないそれらが、足りない。

デビュー以降、初めてとも言える好敵手との激戦。

己の全てを出し切つて尚、届かないかもしれない相手。

それはきっと、前を走るメジロマツクイーンにとつても同様だったのだろう。

互いに勝利を掴まんとした必死の走りは、限界という壁にぶち当たつた。

才能の限界にではない。今までに積み上げてきたモノで到達できる限界だ。

本来ならば、そこで終わる話。

どちらが勝つにしろ、限界を尽くし切つた結果が出るだけのはずだった。

この二人の闘いでなければ。

——最強の名を懸けて。

——絶対を示すために。

譲れぬ理由を胸に抱いた極めて近しいレベルの天才同士による激突は、限界という壁に容易く鱗を入れた。

尽きぬスタミナ、際限なく上昇するスピード。

天に昇るまで翔け、地の果てにすら届きそうな疾走。

無論、全て気のせいでしかない。

精神の高まりと周りの状況が噛み合つたことで、ほんの一時的に起きた偶然による超越。

歴史に名を遺すであろう二人のウマ娘をして、必然で至るにはまだ遠い境地。

自身の高すぎるスペック行使したが故の怪我を経験しているトウカイティオーには見えていた。

消耗品である脚の越えてはいけない一線。

「(なのに、マツクイーンのスピードが落ちないっ!)」

まだ超えられる限界でないのは相手も同じはず。

脚に掛かる負担は無視してよいものではない。

それでも、先に行く好敵手の上昇は止まらない。

それどころか、違う背中から逆の力はさらに膨れ上がり爆ぜる寸前
なのが分かった。

「（勝つにはボクも超えるしかない！　けどそれは――）」

脚が壊れることを許容するのと同義だ。

もう誰にも負けたくないって、そう思つた。

だが敗北と故障を天秤にかけたとき、今の自分はどうちらを取るべき
なのか。

まだ出せる力が残つていて、勝ちを捨てるのか。

この先、出走できるはずだつたレースを諦めてでも勝利に手を伸ば
すのか。

怖い。

あの日々に戻るのが。

ただ漫然と大切なヒトから与えてもらい続けるだけの、あの日々。
大好きな時間だつた。幸せな時間だつた。

それでも、支えて助けてもらうだけでしかない時間は辛かつた。
やつと対等に、並び立てるようになつたのに。

まだ一度しか、たつた一度のレースでしか勝利を捧げられていない
のに。

「（トレーナー、ボクは……っ！）」

きっとあのヒトは、またボクの脚が折れたとしても傍に居てくれる
だろう。

それでも、もしかしたらという恐怖は拭えないのだ。

与えられるだけの存在では、もしもの時にあのヒトを引き止められ
ない。

二着でも賞金は出るんだ。

次に繋げて沢山のレースに出るほうが、折れるのに比べればずっと
マシだ。

そうやって自分の心に言い訳を重ね、ゴールまでの距離が百を切る

うかという時、応援席に居る大切なヒトが視界に入った。

大阪杯のときはよく分からぬ偉そうな態度で頷いていただけだつたのに、今は腕を振り上げてコチラに向けて叫んでいた。

『負けるな、がんばれ』と。

恥も外聞もなく応援するその姿は、己の勝利を願つてくれている事の何よりの証だつた。

「（一体なにを考えていたんだボクはっ！ レースで手を抜いて帰つて、あのヒトにどんな顔をして胸を張れるつて言うんだ！）」

自分がするべきは負けてもいい理由探しなどではない。

どれだけの迷惑を掛けることになつたとしても、面倒を見る価値があるウマ娘だと示すことだ。

トウカイティオーは俺のウマ娘なんだと声高に自慢できる存在になることだ。

なればこそ、恥ずべき真似はしてはいけない。

「（たとえこの先がどうなるのだとしても、今に全力を出し切る！）」

そうしてトウカイティオーが心を決めた瞬間^{とき}――。

純白の翼がターフを舞つた。



『レースは最終直線！ 後続を大きく引き離しての一騎打ち！ だがトウカイティオー、ジリジリと詰まつていた差がここに来て縮まらない！ メジロマツクイーンが粘る！』

観衆の大歓声を浴びながら走る両者。その好走に決着が付こうとしていた。

最終コーナーを超えて、直線に入つた時点であつた一バ身の差。

徐々に、しかし確実に詰められていた差は振り出しに戻された。

強大なプレッシャーに晒されて三千の距離を走つていたメジロマツクイーンは限界だつたはず。

だが残り距離二百を切つたとき、観衆は確かに見た。

ターフを舞う白い羽。

そして、これまでの疲労が消えたかのように翔けるメジロマックイーンの姿を。

『メジロマックイーン突き放す！　トウカイティオー伸びない！　ここが限界か！』

その実況は半分間違つていて、半分合つていた。

トウカイティオーが伸びていないのでない。

伸びを相殺するどころから離されるほどに、メジロマックイーンが速いのだ。

そしてそれは、限界を超えた者と越えられなかつた者の差。

『残り百を切つた！　差は変わらず！　このまま終わるのか！』

舞う羽は、限界の壁を越え先へと至つた証。

赤のスーパークロー。

タブー破りの三冠馬。

ち。

彼女たちには、よりはつきりとそれが見えていた。

「（天翔ける白翼、か……）」

己の轟雷とも、隣に立つウマ娘の吼えるエンジンとも違う。

彼女の、メジロマックイーンだけの到達点。

「（いや、彼女は昨年の時点で既に片鱗を見せていたはず。だが、私がいま見ているのは別モノだ）」

根差す本質。魂の発露。

メジロマックイーンのそれは、貴顕としてのプライドと使命を象徴したモノだったはず。

ならば、目の前に広がる大翼はどこから生じたのか。

誇張なく、日本レース界の頂点と称してよいはずの者たちですら見たことのないそれ。

一人のウマ娘から生み出される、異なる二つの到達点。

その源泉は――。

「好敵手、^{ライバル}か」

ウマ娘が望む全てを手中に収めたと言つても過言ではない”皇帝”をして、得ることの出来なかつた存在。

強すぎたが故に、自分たちは知らぬまま此処まで来てしまつた。

メジロマックイーンは、ただレースに勝ちたいのではない。

他の誰よりも何よりも、トウカイティオーを超えて勝利したいのだ。

その執着こそが、あの翼なのだろう。

自分たちには持ち得ないはずだ。

「羨ましいわね。本当に……」

隣から聞こえた声に混じる悲哀と憧憬は、普段の彼女からは想像も付かないものだつた。

誰もが認める強さを持つていても、その来歴からクラシックの冠を戴くことはなかつた怪物。

「我々を倒してくれる勇者は、結局は現れてくれなかつたからな」

”皇帝”と”怪物”。どちらも並び立つ者が居ないからこそ異名だ。

勝利に喜びながらも、何時の日か玉座を追われる時が、打ち倒される時が来ると信じていた。

まさかそれが、レースに勝つよりも難しい願いだとは思いもよらなかつたが。

「ともあれ、称えようじやないか。新たな時代を駆けるウマ娘たちの好走を」

『いま一着でゴール！ 前人未踏！ 春の天皇賞連覇を成し遂げました、メジロマックイーン！』

「それもそうね。幸いにも、アタシたちにはまだ戦える機会があるんだものね」

偉業の達成を目の当たりにして沸くレース場。その喝采は会場を揺らさんばかりだった。

「けど彼女、大丈夫なのかしら。アレはタダじや済まないとと思うんだけど」

彼女の至つた限界の先。

言葉にすれば陳腐だが、齎される強さと対価はどこまでもシビアだ。

メジロマツクイーンは明らかに無理を通していった。

現にゴールした今も脚元が覚束ない状態だ。

「……そうだな。相応の代償を支払うことになるだろう」

見る限り折れてはいないようだが、下手をすれば脚の寿命を大きく縮めかねない。

そしてティオーの抱えた歪さもまた、垣間見えた。

「怪我を恐れる気持ちは理解できる。だが、一着でなくともいいか等という想いはターフに立つ者が抱いてよいものではない」

それに、今のティオーはレースを楽しんでいるのだろうか。目的を果たす手段としか考えていないのではないだろうか。

その原因は、間違いなくあのトレーナーになる。

救つてくれた故の、救えてしまった故の歪み。

「今の一人は、良くも悪くも互いしか見えてない」

共有すべき夢、目指すべき具体的な目標。

それら、二人で共に歩んでいくべき先が曖昧だ。

恐らくは、菊花賞に敗れたとき。

そして大阪杯に勝利したとき。
ティオーは夢と一緒に多くのモノを捨て去り、前を向いて立ち上がる。がつた。

その負の側面が鎌首を擡げかけたのが今日だ。

勝ちたい理由を他者だけに委ねてしまえば、最後の最後で競り負ける。

「アタシはそういうラブロマンスみたいな関係も好きだけれどね。まあ、折角ターフで一緒にするんだものね。邪魔者としか思われないのは悲しいし、楽しみたいとも思うけれど」

そう顎に指先を添えてなにやら思案している”怪物”。

……また変なことを考えていなければいいのだが。

「メジロマツクイーンとの激闘が、かつてターフに求めていたモノを思い出させてくれればいいのだがな」

などとお節介なことを考えてしまつたが、そこまで心配している訳ではない。

ダービー後の絶望に比べれば小石に躓いた程度の話だ。

なによりも、あの娘は私たちとは違う。

レースの世界がどれほど残酷であつたとしても乗り越えて行くだろう。

なぜなら。

「ティオー、君は独りではないのだから」

会場を包む喝采にかき消された咳き。

眩しい光景を見るかのように目を細めるシンボリルドフの視線の先には。

なにやらティオーに向けて叫んでいるトレーナーの姿と、ウイナーズ・サークルに立つ勝^{マックイーン}者の肩を支えながら笑い合う敗^{ティオー}者の姿があつた。

ウサギとカメ2

「マックイーン、脚は大丈夫？」

届かなかつた。

あと一步。コンマ数秒。ほんの数メートル。

その猶予があれば勝てたかもしれないのに。

「大丈夫……とは言えませんね。折れてはいないうですが、脚に力が入りません」

レース終盤に感じた限界の壁は、変わらず壁として聳え立つたままだつた。

対して目の前の好敵手は、恐らくその壁を超えたのだろう。
レース中に感じた力の膨張。それが爆ぜたあとに幻視した白い翼。
そこからはもう一方的だつた。

詰め切れるはずだつた一バ身の差は縮まることなく、二バ身まで広がつた。

思わず見惚れてしまうような綺麗で力強い翼だつた。

「天皇賞連覇、すごいよ」

自分が壁を越えていたなら、一体なにが現れていたのだろうか。
どんな景色が見えていただろうか。

あのヒトになにを与えてあげられただろうか。

この胸の内から湧き上がる後悔を感じずに済んだのだろうか。

「ありがとうございます、ティオー。あなたが居たから今の私になれました」

負けたくなかった。

怪我はしたくなかった。

あのヒトに勝利を捧げたかつた。

あのヒトの重荷にはなりたくなかった。

マックイーンにだけは負けたくなかった。

マックイーンにだから勝てなくとも納得できそだつた。

「……悔しいなあ」

足りない。

なにもかも足りない。

勝つにはもつともつと要る。

怪我を天秤に掛けることなく勝つしていくならば、力が必要だ。自分の前に立ちはだかる邪魔者の中には、まだまだ強者がいる。**立ち止まつてはいられない**。

好敵手の見せた限界の先に自らも身を置かねばならない。

ボクのしたいことは、あのヒトと一緒に勝つことなんだから。

今はひとまず認めることにしよう。

ボクはまだ弱い。

けれど、ここが行き止まりでもない。

進んでいける先がある。

必ず超えられる。あのヒトと一緒になら。

「ふう……。うん、悪くないね。やる気ってきた」

無理のない範疇はんちゅうで入着を狙つて賞金を持つて帰る、それも悪くはない。

けれど、やつぱり負けるのは嫌だ。

「どうかしましたか、ティオー」

「なんでもないよ。次は負けないぞつて思つただけ」

「あら、次も勝つのは私です。あなたには負けません」

負けちやつたから大口叩くつもりはないけど、その様でよく言つてくれるなあ。

「そんな」と言うなら肩を貸すのはもう止めよつかない。そのガクガク状態の脚じやライブも満足にできないんじゃない？ ライブのセンター変わつてあげてもいいよ？」

菊花賞に負けて、春の天皇賞で負けた。

ボクの長距離適性は少なくとも中距離には劣る。

ここからはその事実を受け止めて戦いの場を選ぶ必要がある。

ましてや相手がこの突き刺さる視線の先に居るウマ娘たちなら。

ここはシニア級。

先達に挑まねばならない戦場であると同時に、向こうから襲い掛

かつてくる戦場もある。

観察、挑発、興奮。

読み取れるものはそれに異なっている。

確実なのは、そう遠くない未来にぶつかり合うだろうということ。
なんの目的があつてコチラを意識しているのか分からぬが、ボク
の前に立つならやることは変わらない。

それがなんであろうとも、叩き潰していくだけだ。



「まさか、あのトウカイティオーでも勝てないだなんて」

抱いた感情は驚愕。^{きょうがく}

大阪杯で私を歯牙にもかけない強さで圧倒したウマ娘よりも、さら
に上が居る。

その事実はGⅠ勝利という壁の高さを感じさせ、ともすれば絶望感
すら漂う。

この先、努力を重ねたとして勝てるのか。

どれほどの努力をすれば勝利に手が届くのか。

道は暗く、明かりは見えない。

この結果には、彼女の打倒を目的とするチームメイトも心穏やかで
はいられないだろう。

そう考えて横に視線を向けると、ネイチャさんは難しい顔をして
ターフを見つめていた。

「へえー。ふーん、そうきますかー。天才は本当ににをさせても天
才ってやつですかねー」

喜色と渋面。その両方を同時に浮かべようとして出来上がったよ
うな歪んだ表情。

発する言葉は嫉妬のようにも聞こえるが、感情の色が感じられな
い。

「大いに実りはあつた。しかし懸念すべき点もあつた。トータルで見
ればイーブンと言つたところでしようか」

それに反して南坂は淡々と手元のファイルになにかを書き込みながら、所感を述べていた。

「そうだね。レース中のウマ娘に精神的な負荷を掛けにはどうすればいいか、実践して見せてくれちゃいましたもんね。見てくれたのがプレッシャー掛けたい相手だつてのは癪ですけど」

なるほど。普通に走つて勝てないのなら、如何に相手に本調子を出させないかが肝要。

「確かにマックイーンさんは終始走りづらそうでしたね。トウカイティオ一から放たれる圧は此処からでも感じ取れるほどでした」

しかし、あの化物じみた強さを持つウマ娘たちが簡単に圧に屈してくれるだろうか。

化物同士だからこそ意味があるだけで、私たち程度が圧を掛けたところでそよ風ほどの影響しか与えられないのではないか。

そう考え、再度ネイチャさんに目を向けた瞬間、無意識に体が後退つた。

「今、後ろに下がつたでしょ？ 普通に威嚇するだけだとあんまり意味はないよ。けどね、使い方次第でいくらでも意味を持たせられる」
レース開始前に見せられた、へばりつくような黒い感情。

それを遙かに上回るなにかが向けられている。

蛇に睨まれた蛙のように、体が動かない。

「タイミング、緩急、ポジション。効果の大小も重要ですが、上手く使えば小さい力でも大きな影響を与えられますからね。となると、やはりどのレースで仕掛けるかが肝になりますか」
金縛りにあつたように動けない自分に対して、南坂はなにも感じていなかつたようだつた。

いや、ターボもタンホイザも首を傾げて私を見ている。
体が動かなくなっているのは自分だけなのか。

「一人にだけ集中させたり、周り全体に圧掛けたり、色々とバリエーションがある訳ですよ。あとは意表を突くとかね。どうだつた、イクノ。怖かつた？」

厭味いやみつたらしい笑顔で聞いてくるネイチャさんの顔を張り倒した

くなつた私は悪くないと思う。

「……ほん。それで、その嫌がらせでトウカイティオールに勝てるのですか？」

意趣返しも兼ねたとは言え、この聞き方は少し意地が悪かつただろうか。

「いやー、アタシはそこまで優秀なウマ娘じゃないんですわ。タイマント勝負ならどれだけ策を弄したところで完敗でしょ」

自分だけでは勝てないと、ネイチャさんは当然のこととして断言した。

「なら、どうするのですか？ 待つっていてもトウカイティオールが弱くなつてくれるなんて事はありませんよ」

恐ろしい事だが、今日がトウカイティオールの上限だとは思えなかつた。

今ですら届くか分からぬといふのに、まだ先があるだなんて。「簡単簡単。用意すればいいんですよ。トウカイティオールを倒してくれるウマ娘を」

言われたことの意味が、いまいち理解できなかつた。

「正確には、いい感じにギリギリまでトウカイティオールを追い詰めてくれるウマ娘かな」

つまり、漁夫の利を狙うということだろうか。しかし、それは……。「ネイチャさんは、それでトウカイティオールに勝つたと思えるんですか？」

反則という訳ではない。

陸上競技のセパレートコースではないのだから、全体の駆け引きはあつて当然の要素だ。

だが、ネイチャさんは自分でトウカイティオールの心を折りたいと物騒なことを言つていたはず。

「もちろん勝手に共倒れされちゃうだけじゃダメだよ。アタシが狙つて全員共倒れさせて、一着でゴールする。そして負けたティオールに手を差し伸べてあげるの。『いい勝負だつたね』つて……考えていることが性悪すぎやしないだろうか。

「役者がどうこう言つていたのはそういう事ですか。マックイーンさんなら、トウカイティオーを消耗させられると」

実際に勝っているのだから相手としては適任なのだろう。

「うん。だけど先行型の強いウマ娘ばかりだと展開が早くなりすぎてアタシが付いていけなくなりそうなんだよね。だから理想は差しと追い込みのウマ娘。それにマックイーンは休養するつて可能性もありそうだし」

ターフから引き上げるマックイーンさんを見ていると、十分に考えられる話だ。

怪我はなくとも、その兆候や出走するのが危険な位に疲労が溜まつていることはあり得る。

秋まで、あるいは年内のレースを避けることになるかもしない。「まあ人選は頼れるトレーナーに任せないので。さてと、名勝負も見えてやる気も漲ってきたことですし、アタシは学園に帰つてトレーニングすることにしましようかね」

「ですね。私も負けてはいられません。お付き合いしますよネイチャさん」

変な性癖に目覚めてしまつた友人だが、勝利への貪欲さが増したことも間違いない。

見習えるところは真似させてもらうとしよう。

「おっ、やる気満々ですねえ。ちょうどアタシもお願ひしようと思つてたんだよね。ほら、ターボはしばらく使わないとつて言つちやつたし」

……は？

「やつぱり今日のパーマーを見るとさ、逃げウマ娘は邪魔なんだよね。しかも干渉できるタイミングがスタート直後しかないのでしょ？だから入念に練習しておかないとね。潰し方。いやー、チームメイトに逃げができるウマ娘が二人もいてくれてネイチャさんは幸せものだよ」

なにを無害そうな顔して畜生発言してるんだこの女は。

「泣くまでやるから覚悟しておいてね。というか泣かせてからが本番

だから

……口は災いの元。

それが今日、私ことイクノディクタスが学んだ最大の知見だつた。



「やつ、中々いいレースだつたね」

メジロマツクイーンの応援に来ていたらしい後輩と話をするためにマルゼンスキーが去つた後、レース場までは同道していたもう一人のウマ娘が戻ってきた。

「おかえり。……毎回思うのだが、なぜレース場までは一緒に来るのに中に入ると一人でどこかに行つてしまふんだい？ 同じモノを見ながら君の意見も聞きたかつたんだが」

相変わらず自由というか、破天荒というか。

「レースを見る時はね、誰にも邪魔されず自由でなんというか、救われてなきやあダメなんだ。独りで静かで豊かで……」

なにやら含蓄があるのかないのか分からぬ事を言い出したが、私が聞きたいのは観戦の作法ではなくレースの所感だ。

「ドリームトロフィー・リーグに登録されていないウマ娘としては最高峰のレースだつたはずだが、君にはどう見えたか教えてもらえないだろうか」

彼女の持つ視点は私と大きく異なる。

マルゼンスキーとは近いところがあるが、果たしてなにを感じ取つたのか。

「ある意味ではルドルフに似ているんぢやないかな。レース 자체の楽しさよりも、その先にある何かのために走る。楽しさよりも実利と言えばいいのかな」

やはり、そう見えるか。

「興味の湧き具合としてはそれなりかな。いずれ上がつてきた時を楽しみにしておくよ。アタシよりも君はどうなのさ。トウカイティオーの事は気に掛けていただろう。今の彼女をどう思つてゐるんだ

い？」

今のティオーをどう思うか。

強さについては申し分ない。

メジロマツクイーンにこそ負けたが、同じ条件で勝てるウマ娘は歴代でもそうは居ない。

これから成長も考えると、中距離ならシニア級最強と言えるかもれない。

内面については以前の明るく^{はつらつ}潑刺とした性質は少しだけ鳴りを潜め、排他的な面が見受けられるようになつた。

この一年ほどの間、彼女が置かれていた環境を^{かんが}鑑みれば仕方のない変化なのかもしない。

彼女の人生で、あれほどに他者の悪意や人の汚い部分を直視させられた事はなかつただろう。

それ故にトレーナーに対して依存に近い信頼をしてしまつていてることも道理なのだろう。

だが、それでは困るのだ。

「トレーナー君と仲睦^{なかむつ}まじくしている様子は微笑ましいのだけれど、シンボリルドルフとしては手放しで喜べないな。私のようになりたいと言つてくれたティオーが二冠を獲つたとき、柄にもなく思つてしまつたんだ。本当になつてくれるのではないかとね」

私のように、私と同じ夢を抱いてくれる存在に。

「おや、なんだか悪い顔をしてないかい？ とても自分の事を目標としてくれていたウマ娘に向ける表情だとは思えないのだけれど」

二冠を獲つたとき、頂点に立つに相応しい才能だと思つた。

菊花賞に向けて立ち上がつたとき、他者の痛みと弱さを理解できる強さを得たと思つた。

数奇な運命のように悪い噂の付き纏うトレーナーと組んだとき、トレセン学園に新しい風を吹かせられると思つた。

「無敗の七冠を無邪気に目指していただけなら笑顔で見守つていたさ。けれどね、もうそんな他人事ではなくなつてしまつたんだ」

全てのウマ娘の幸福という荒唐無稽な夢。

それを成すには多くの力が要る。

多様な人材が要る。

あの二人は、彼と彼女は私の夢を叶えるために必要だ。だから、困るのさ。

お互いだけを見て満足なんてされてはね。

「皇帝」の後継者と目されている”帝王”。そうなつてくれるんじゃないかと思うとね、我慢が利かなくなつた。どうしても二人まとめて手元に収めたくなつた

そうすればより多くのウマ娘に与えられる。

活躍の場を、未来を、新しい夢という名の幸福を。

「手元に収めるつて、具体的にはどうするんだい？ シンボリの家に招き入れるという意味かな」

そういうふた手段もいすれば考えなければいけない。

ウマ娘の幸福を目指すのなら、学園内だけではなくURAに対する働きかけも必要だ。

だが、まずは。

「生徒会で囲うとしよう」

悩める全てのウマ娘に手を差し伸べることは不可能。

だが、あの二人が居れば差し伸べることができる手の数は増える。「立派な」と言つてる風だけど、ちよつと悪の”皇帝”っぽいよ？」

そう言つて笑うミスター・シービーはなんとも愉快そうだった。

「タブー破りが代名詞になつてている君に”悪”呼ばわりされるとは心外だな」

「タブーと言つても周りが勝手に言つていただけのことさ。破つたところで誰も迷惑は被^{こうむ}らない。ところで、囲うのは結構だけれど言うことを聞いてくれるのかい？ レーナーの方も随分と変わり者だと聞いているけれど」

「むしろトレーナー君の方が扱いは簡単だよ。会つて話してみてはつきりと分かつた。彼は頽^{くずお}れる者を見過^ごせない。強制せずとも引き合わせるだけで支えになつてくれる」

その支え方がトレセン学園の気風に合わないことが問題視されて

いたが、生徒会でバツクアツプすればいい。そうやつて物事を綺麗な
ように見せるのは、不本意ながら得意な方だ。

「問題はティオーダな。トレーナー君を貸してくれと言つても首を縊
に振らないだろうし、生徒会活動にも今は興味を示さないだろう。は
てさて、どうすればコチラ側に来てくれるかな」

恋は盲目……で合つているのか分からぬが、今のティオーにとつ
て最優先事項なのは彼と二人で過ごす時間。

他のコミュニティと積極的に関わつてその時間を削ろうとはしな
いだろう。

もう少し時間を経て落ち着けばすんなり協力してくれるかもしけ
ないが、引き込むのが早いほど手を差し伸べられる数も増える。あま
り待ちたくはないな。

「ルドルフの夢を否定はしないけれど、それってトウカイティオーの
幸福を無視してないかい？」

……耳の痛いセリフだ。

普段は何を考えている分からぬのに、こういう時は核心を突いて
くるから性質たつちが悪い。

「なにも問題はないよシービー。私は“皇帝”シンボリルドルフ。ト
レセン学園の生徒会長で七冠を達成した唯一のウマ娘なんだ」

「とてもよく知っているけれど、それがなにか関係あるのかい？」

関係あるのかつて？

もちろんあるさ。

なぜなら……。

「私のやる事こそが”絶対”だ」

そう言つた私を呆れたようなジト目で見やるシービーをしり目に、
言葉を重ねる。

「それにね、私も少しだけ拗ねているのさ。あんなに私を目指すと
言つていたのに、今のティオーはトレーナー君に夢中だろう？ 可愛
い後輩にまたこつちを振り向いてほしいなー、なんて幼稚な考えも
あつたりする」

だから、ちょっとだけ強引な手段で。

まずはトレーナー君から手に入れるにしよ
うか。

等価交換

春の天皇賞を終えて一週間。

私は再び盾を手に入れ、公言どおりの二連覇を成し遂げた。

最強のステイヤーという称号を得て、メジロ家の悲願は最良と/or>てよい形で果たされた。

その代償、歩を進めるごとにじわりと滲むような痛みが走る脚を見ながら思う。

失ったモノは大きいが、同じ選択を迫られたとして、やはり私は同じ決断をしただろう。

約一年に及ぶ休息期間。

それが、消耗した脚をレースに耐えられるよう戻すのに掛かる時間だ。

もどかしさはある。

出走できないこの時間が、好敵手との決定的な差となってしまわないかという怖さもある。

それほどまでに天皇賞の盾を争つたウマ娘の実力は凄まじかつた。

一年前の自分は彼女ほどに強かつただろうか。

答えは否である。

一年という積み重ねた時間と経験の差があつてギリギリの勝利。己の強さが新たな段階に進んだという感覚もあつたが、後ろを追つてきていた彼女とのあいだに大した違いは感じられなかつた。

下手をすれば次のレースでは自分と同じ場所まで上がつてきているかもしれない。

そうなつたとき、春の天皇賞三連覇の夢はどうしようもなく達成困難になるだろう。

さらなる成長が必要だ。

少なくとも今の自分に圧勝できる強さを得られなければ、来年は勝てない。

病は気から。

療養のためにも気持ちを上向かせたいが、得難い好敵手の存在が今

だけは憂鬱^{ゆううつ}の種だった。

負けてなお精神に負荷を掛けてくるだなんて。

「恐ろしきは”帝王”と呼ぶに相応しいその気質か。

「マツクイーン、いま時間あるか？」

益体^{やくたい}もないことをトレーナー室で考えていると、部屋の主が帰ってきた。

態々声を掛けってきたということは、今後のプランについて良い案でも浮かんだのだろうか。

「構いませんが、どうしました？」

「戻つてくる途中、トウカイティオーに会つてな。マツクイーンに用事があるつてんで部屋の前で待つてもらつてるんだが」

今まさに思案し、対策を練ろうと考えていた相手の突然の来訪。

このタイミングで一体なんの用だろうか。

「用件は聞いてみたんだが、マツクイーンの居ない場所で話すことでもないつて言われてな。真剣な顔してたから、遊びの誘いとかじやなさそうだが」

考えられるとすれば、やはりレースのことだ。

長距離レースでは一応の勝敗がついた。

だが、中距離ならどうか。

まだ休養することは公には周知されていない。

宝塚記念辺りでのリベンジ宣言に来たのかもしれない。

「話すことは問題ありません。ただ、トレーナーも同伴でという条件付きにしたいですわね」

「ああ。俺もそれがいいと思つてゐる。それじゃ、入つてきてもらうぞ」

トレーナーによつて招き入れられたティオーの顔付きは、聞いたとおり真剣なものだつた。

■
マツクイーンの二連覇とそれに伴う休養。

担当トレーナーとしては嬉しい反面、無理をさせ過ぎたことは反省すべき点だ。

トウカイティオーの強さを知った以上、次に向けた焦りもあるだろう。

高い自制心と使命感故に頑張り過ぎるくらいがあるマツクイーンに対して、此処からは精神面のケアがなによりも重要だ。

焦燥を消しつつも、モチベーションは高く維持させる。

その難題に頭を悩ませていた最中に突然やつてきたトウカイティオー。

「さつき伝えたように、俺も同席させてもらう。構わないな?」

トレーナー室の打ち合わせスペースに三人で腰かけ、話を促す。

マツクイーンの用意してくれた紅茶を飲んで息を吐くと、肩に力が入っていたのが分かった。

……さて、どんな話が出てくるのやら。

今後、何度もマツクイーンとぶつかり合う事になるだろう強敵。

話の内容は予想が付かないが、こちらもトウカイティオーに探りを入れて次に活かす。

それが、スピカを率いるトレーナーとしての役割だ。

そう気を引き締めると、トウカイティオーは特に気にした様子もなく頷いた。

「うん。ボクはマツクイーンがいいなら問題ないよ。まずは時間くれてありがとう。まだ天皇賞の疲れも抜けきってないでしょ?」

礼を述べるトウカイティオーも天皇賞を走っているはずなのだが、あまり疲労が残っているようには見えない。

タフネスは彼女にとつて優れている面ではなかつたはずだが、どうやら克服済みのようだ。

「それは……お互い様のはずです」

少しだけ納得がいってなさそうに答えるマツクイーン。

勝てたとはいえ、レースへの出走が難しいレベルの疲労が蓄積したのだ。

それに対しても相手は特に消耗した様子もないとなると、そう思いたくなるか。

「ボクは療養について一家言あるからね。じゃあ早速だけど、相談に入らせてもらおうかな」

本題に入ろうとするトウカイティオーを見て、自然と身構えてしまう。

隣のマツクイーンからも唾の呑み込む音が聞こえてきた。

俺にとつてはレースの勝負相手という以外に接点のないウマ娘だ。どんな話が飛び出してくるのか、恐らくマツクイーンも緊張しているだろう。

「メジロ家で繫がりのある税理士とか、信用できるファイナンシャルプランナーが居れば紹介してほしいんだけど」

思考が固まるのが分かつた。

ぜいりし？ふあいなんしやるぶらんなー？

内容がしばらく咀嚼できなかつたし、マツクイーンの頭の上にもクエスチョンマークが飛び交つていた。

「えーっと、話の流れが見えないというか、ちょっと内容が予想の斜め上すぎで思考が追いつかないのですが、なぜそのような相談を？」

マツクイーンの疑問も尤もだ。

そんな事を聞いてくるトウカイティオーがおかしいという訳ではない。トレセン学園で上位に位置するウマ娘は重賞レースで勝利・入着しているのだから、相応の賞金を受け取っている。世間からの人気が大きければ、ぬいぐるみやライブのグッズなども販売され、学生どころか大半の大人が足元にも及ばないような収入を得ていたりする。いくらレースの才能があつてもまだ子供。収入に対する税制だの、グッズ販売のインセンティブや契約内容を自分で管理するなんて不可能だ。というか、専門としている者でもない限り大人でも普通に難しい。

短期間で大金を得てしまい、人生観が歪んだり道を誤つたりしないよう体制を整備することも学園の重要な責務だ。だからこそ、そういった問題に対処するための部署や人員を学園でも用意している。

クラシックで二冠を達成したトウカイティオールも、既に関わり合いを持っているはずだが。

「確かに、メジロ家では代々重用してきた者たちや懇意にしている企業などもあります。紹介できないと、いう事はありませんが、学園が用意している人員の質は決して低くはありません。その、わざわざ私に借りを作るような真似をする必要もないと思うのですけど」

暗に紹介するのはタダではないぞと伝えたのは、マツクイーンの義理堅さの表れだろう。対価は貰う。代わりに、紹介するのであればメジロ家として責任を持つて不利益になるような結果にはさせないという宣言もある。

「そういうことを担当しているヒトはいるんだけどさ、学園の関係者つて小煩いんだよねー」

やれやれといった感じで首を横に振るトウカイティオールの言葉で、全容が見えてきた。

トウカイティオールの金遣いが荒い訳ではないだろう。清貧を尊ぶという柄でもないだろうが、物欲が大きいようにも見えない。趣味としても、レースと歌とダンスさえあれば満足というタイプのはずだ。ならば、口出しをされている理由はトウカイティオール自身ではなく、その周りに起因しているのだろう。

「なるほど、私も少しは理解できます。ウマ娘の一番近くに居るトレーナーの金銭管理が下手くそだと、心配されてしましますものね」
冷ややかな視線を向けられ、ギクリと肩が跳ねた。
……まあ、そういう事なのだろう。

「全く、ボクの賞金を不当に搾取されてないかだなんて、心配してることも失礼だよね」

少々特殊な関係性ではあるが、トウカイティオールとトレーナーの間に強い信頼関係があることは疑いようがない。そのトレーナーを疑うような相手こそ、付き合うに値しないと言いたい訳だ。

憤慨した様子のトウカイティオールを見て、自然と笑みがこぼれた。

自分も胸を張つて立派な大人ですと言える存在ではないが、あの後輩はそれに輪を掛け世渡りが下手だ。全てが誤解とも言えないし、

トレーナーとして結果を出せていなかつたことも事実。

そんな自分にとつても心配の種だつた人物は、担当ウマ娘がライバルに借りを作つてでも優先すべき存在になつたのだ。最近はトレーナーとしての在り方にも一本の芯が通つたようと思える。

トウカイティオーだけではない。クズと周りから誹謗ひぼうされている男の成長もまた、油断できない要素だと認識を改めよう。

「トレーナーとウマ娘の理想の関係性は一心同体。共に歩む相棒をバカにされて黙つてはいられませんものね。ダービー以降のあなたを心配していた時期もありましたが、杞憂で済んで良かつた。理由も納得できましたし、そういうことであれば紹介するに吝かではありません。手配するようにいたしましょう」

マックイーンから是と返事を受け、笑顔で喜ぶトウカイティオー。

荒れた内容にならなくてよかつた。

そう一息ついた瞬間、次いで聞こえてきた言葉に体がピシリと固まるのが分かつた。

「ありがとうつ！　いやー、一人で暮らしていくのに必要なお金が三億円つて言うでしょ？　余裕を見て五億は稼いでおきたいし、トレーナーの金銭感覚が緩いのは事実だから、ボクがしつかりと代わりに管理しなきやなーって思つてたんだ！」

ほっこり温かい空気が漂つていたはずなのに、今は体を冷たい汗が伝つていくのを感じる。

隣に座り紅茶のカップを持つマックイーンの手も、微かに震えていた。

「と、ととトレーナーとウマ娘の理想の関係性は一心同体。互いの足りない箇所を補つていくものです。トレーナーの金銭感覚が危ういなら、ウマ娘が管理するのもど、道理ですわね」

どんな道理だよ。確かにマックイーンに任せれば俺の財布の中身もちつたあマシな状況になるかもしれないが、学生に財布を管理されるなんて恥ずかしすぎるだろ。

「うんうん、そうだよね！　ボクも出来るだけ長く現役で走つて稼ぐつもりだけどさ、稼ぐだけ使われても困るし、遊ぶお金とは別にちや

んと貯蓄とか資産運用して準備しないとなつて」

いつたい俺はなにを聞かされているのだろうか。準備とは、いつた
いなんの準備なのだろうか。というか、あの後輩は自分のウマ娘にな
にをさせているんだ。別の意味で心配になつてきただぞ。

「先ほども申し上げたとおり、手配はメジロ家が責任を持つて行いま
す。日程は後ほど詰めるようにいたしましょう」

これ以上、踏み込むのは危険と判断したのだろう。

マックイーンはさつさと話を締めに入つた。

俺も完全に同意である。

「分かつた。それで貸し借りの話だけど、なにかボクにしてほしい
事つてあるの？」

マックイーンの対応を特に疑問にも思っていないようで、トウカイ
ティオーは対価をどうするか問うてきた。マックイーンも大したも
のを要求する気はないだろうが、今後を見据えるとなにが最善か。
「マックイーン、お前に案がないなら俺が提示させてもらつてもいい
か？」

マックイーンが頷くのを見て、トウカイティオーに向直つた。
「今年の夏、スピカで合宿をする予定なんだ。その合宿にお前たちも
参加してくれないか？」

スズカが海外へ行き、スペはドリームトロフィー・リーグへ。

トウインクル・シリーズへのデビューレースを予定しているゴルシ、ウ
オツカ、スカーレットにとって、世代を代表するウマ娘と切磋琢磨す
る時間を設けて新しい刺激を与えることは今後の成長に役立つ。

「トレーナーに聞いてみないと断言できないけど、たぶん大丈夫じゃないかな。でもそれって対価になるの？」

自分にもメリットはあるし、借りを返すことにはならないのではな
いかと、トウカイティオーは首を傾げていた。

「うちのウマ娘たちにお前やアイツからの意見を色々と貰いたいの
さ。疑問に思うかもしれないが、俺は対価として充分だと判断してい
る」

念のためマックイーンに視線を向けてみたが、こっちも異論はなさ

そうだ。まあ、返されすぎても後味が悪いからな。

「二人がそれでいいならボクがどうこう言うことじゃないか。じゃあ、トレーナーに許可を貰つておくよ。マツクイーン、相談に乗つてくれてありがとうね」

そう言つてトウカイティオールは立ち上がり、部屋から出ていった。たっぷりと時間を置き、足音が聞こえなくなつたことを確認してから、大きく息を吐く。

「はあ。トレーナーとウマ娘としては上手くいっているんだろうけど、なんだかなあ」

後輩はちゃんとウマ娘と対等な関係を築けているのだろうか。もしかしなくとも尻に敷かれているのではないだろうか。

「あれも一種の成長、なのでしょうね……」

部屋の天井を見上げ、マツクイーンが重たく呟いた。

「しつかし、ティオールやりすぎなきやいいけどな。男つてのは束縛されるのを嫌うもんだ」

特に俺やアイツみたいなタイプはな。

「あら、これだけレースで結果を出しているウマ娘がいるというのに、ボロい合宿所しか用意できないあなたも大概でしょう。なんでしたら、私生活から財布からなにまで、私が管理して差し上げてもよろしいですわよ?」

そう冷たい笑顔で告げるマツクイーンを見て、俺は部屋から逃げ出すことにした。

強襲V

他者を従えるために、何が有用だろうか。
たとえば実利。

金銭や役職、栄誉。

価値が明確であり、私にはそれらを与える権限がある。
だが、与え方を間違えれば堕落を生む危険性もある。

たとえば共感。

夢や目標、”理想”。

些か曖昧だが、想いの強さがもたらすモノの大きさはバカにできない。

反面、曖昧さ故のすれ違いや誤解が生じやすい。
たとえば力。

逆らうことのデメリットを示せば相手は自然とこうべを垂れる。
大した支出もなく従えられるが、反発もまた激しくなる。
なにより、それでは長続きしないだろう。

「ふふつ、私の取った方法は功を奏するだろうか」

まあ、仮に上手く行つたとしても二人からは嫌われることになるだ
ろう。

それが悲しくないと言えれば嘘になるが、背に腹は代えられない。
生徒会室の窓から、件のトレーナーの元へ赴く”女帝”を見ながら、
そんなことを思った。



「というわけで、貴様には生徒会が主導しているプロジェクトの一つ
に携わつてもらう」

春の天皇賞を終えて一週間。

次に出走予定の宝塚記念に向けてトレーニングメニューを見直し
ていると、”女帝”が部屋に乗り込んで来てそんなことを言いだした。
「何がどういう訳だよ」

”女帝”エアグルーヴ。

生徒会副会長を務め、規律や規則の遵守に重きを置くウマ娘だ。自他共に厳しい女であり、俺も事あるごとに『たわけ』と言われている。

正直、その見てくれでブルマ履いて重賞レースに出る女にたわけとか言われたくない。

大人びた顔立ちに色気のある化粧。本当に高校生?と言いたくなれるような身体つき。

お前の恰好の方がよっぽどたわけてるだろ。

口に出すとタダでは済まないだろか。

それにしてなんで俺なんだろうか。
以前、ルドルフが押しかけて来たときは案外取つつきやすい奴だと認識を改めた。

気さくで話の分かる奴で、柔軟性もなくはなさそうだつた。

俺みたいな奴でも使い道があれば躊躇いなく使うだろう。

だが、エアグルーヴは違う。

印象が悪い相手に対しては期待も重用^{ちようよ}することもしないだろ。頑迷というよりは、そういつた外面を取り繕うこととも大切な努力と考えて いるからだ。

そして俺は、エアグルーヴには毛嫌いされているはずだ。

俺も生徒会みたいな堅物が集まつていそうな組織が嫌いで、プロジエクトとか仕事みたいな単語が嫌いだからお互い様だが。

「トレセン学園全体が近く開催されるURAファイナルズに向けて大忙しなのは知っているな?」

それはまあ、もちろん知っている。

芝・ダート・距離関係なく全てのウマ娘に活躍のチャンスを与える。

そういう名目で子供理事長が発案した新しいレースの準備に上も下も追われている。

G I レースが連日行われるお祭りのようなものだから、世間の注目も大きい。

さらに予選からの勝ち抜き方式で通常の重賞レースと比べても参

加資格が緩くなっている。

各世代の最強格以外にもチャンスがあるかもしないと、うだつのががらないウマ娘たちも奮起している。

そういう意味では距離制限を取り払った第三のドリームトロフィー・リーグと言い換えてもいいかもしない。

「でも、俺たちはURAファイナルズ出ないぞ？」

そんなトレセン学園の新たな試みではあるが、俺とティオーはあるで関わる気がなかつた。

なんでかつて？

このレース、賞金が一円も出ないの。

走ることを目的とした、夢に向かつて駆けるウマ娘たちのレース。

それがURAファイナルズだ。

ティオーが興味あるなら出ても構わなかつたんだが、心底どうでもよさそつた。

『そんなことより有馬でしょ』

それが俺とティオーの共通認識だ。

ただでさえ秋から年末にかけては中距離のG1レースが連続する。ローテーションを考えるときにURAファイナルズはノイズになる。

俺たちにとつては大した意義も見いだせないレースだし、出なくてもいいよねつて。

もちろん優勝すれば大きな注目を集められるし、賞金以外の面で稼ぎに都合の良い副産物が色々とあるだろう。

ウマ娘の本懐がなにかと考えれば、出ない選択をする俺たちの方が異常なんだと思う。

「はあ……。レースへの出走は各自の自由意志が尊重されるべきだ。だが、シニア級で最も注目されているウマ娘の一人が出ないなどと、運営も頭を抱えているんだぞ」

そんなこと言われても当人が無関心だからなあ。

どうせなら年が明けて落ち着いてからにしてくれれば良かったのに。

それでも多分出ないけど。

「出走しないことについて私からどうこうは言わん。だからこそ、この話を持ってきた訳もあるからな」

おお、そう言えばそれが本題だつたな。

「もう一度言うぞ。生徒会主導で悩みを抱えているウマ娘の相談に乗る場を設けるプロジェクトが立案された。そして、その相談役の一人としてお前が抜擢されている。ついては毎週決められた時間に所定の部屋で待機してもらうことになる」

色々と疑問はあるのだが、なによりも人選を間違ってるよねこれ。

「そういうのは眞面目で世話焼きな連中に任せるとんだけ。学園のトレーナー陣の中でも不良扱いされてる俺が選ばれるのはおかしくないか？ 誰だよこれ言い出したの」

「……推薦人の個人情報はプライバシーの観点から秘匿させてもらう」

スッと逸らされた視線からは、ばつの悪さが感じ取れた。

何事にもスッパリと決断をして、はつきりした物言いを好むエアグルーヴらしくない態度だ。

まさかコイツが推薦したなんて事はないだろうし、近しい誰かだろうか。

「受ける受けないって話は置いておくとして、お前は俺に任せていいと思ってるのかよ。俺は果たすべき”理想”とやらには程遠いんじゃなかつたか？」

俺がエアグルーヴをスカウトして断られたときのセリフだ。

……本当はこの十倍はキツい言葉でけちよんけちよんに貶されたのだが、心が痛くなるので思い出すのは止めよう。

「私とてこの決定に思うところはある。だが、無意味と切り捨てることはしない。やるせない事だが、高い志があればそれだけで皆を引き上げてやれる訳ではなかつた。その現実から目を逸らし続けることはできん」

なるほどなあ……。

ただでさえクソ忙しい生徒会業務をこなしているというのに、コイ

ツが熱心に後輩の指導にも精を出しているのはよく知られた話だ。

それでも、その全てに結果が付いてくる訳ではない。

多くのウマ娘が掲げるG-I勝利という目標ですら、敷居は恐ろしく高いのだ。

自分に合った距離のG-Iなんて年に数回しかなく、出走権利を得るためにも実績が必要。

しかもG-Iを獲つたことのあるウマ娘が次回から居なくなつてくれるなんて事もない。

たとえばシンボリルドフのような絶対的強者が同世代に居たとしたら。

勝手に感情移入するのは野暮だが、一度しか挑戦できないクラシック級なんて絶望する。

明るい夢と対になる暗い現実。

いつだつて勝者は一人しか生まれない。

実力が及ばなければ、ひたすらに敗北を積み重ねていくことになる。

心が折れるその時まで。

「私と同じ”理想”を抱く者だけを集めて悩めるウマ娘に手を差し伸べたところで、力になれるのは私たちに共感できる者だけだ。それを認めず異なる考えの者を排斥してしまえば、結局のところ手を取り合えない相手は増えていくだろう。……そう諭された」

諭された?

やはり最初は俺を抜擢するのは反対だつたということか。

そこからコイツを諭せる相手なんて相当限られそうだが。

「こほん、その事はいいんだ。なんにしても実行してみないことには始まらない。もちろんウマ娘たちは真剣に悩んで相談に来るんだ。遊び半分で対応などされては困る。……という訳でやつてくれるな？」

キリッとした顔つきに戻つて告げてきたエアグルーヴからは、心配と期待が半々に感じられた。

なんでこんな事になつたのか理解できないが、俺の答えは決まって

いる。

「ああ。もちろん断らせてもらう」

やるわけねーだろ、そんな七面倒臭いこと。

「なんだと貴様ア！ 方々からの懷疑的な意見を跳ね除けてゴリ押すのにどれだけ苦労したと思つていいんだ！」

そんなこと言われてもなあ。俺になんのメリットがあるんだよ。「適任かもねつて理由だけで受けるかよ。ティオーが天皇賞で負けたんだ。俺はアイツを勝たせるためにやらなきやいけない事が山積みなんだよ」

アイツでも才能だけで勝ち続けられる訳じやなかつた。

あの女から貰つたカンペファイルだつて今のティオーに合わせたもんじやない。

現状や目標に沿つた修正と足し引きを考えなきやいけないから忙しいんだ。

「忙しいことを理由にはさせんぞ。さつき言つただろう。URAファイナルズに向けて学園全体が忙しいと」

だから、それは俺たちには関係ないって……。

「いま、学園のトレーナーで比較的時間の余裕があるのが貴様なんだ。シニア級で安定した実力を持つウマ娘の専属トレーナー。しかもURAファイナルズには出ない予定で、準備作業にも一切関わっていない」

ええー。そんなの出る奴らが勝手に背負つてる苦労じやん。

「……実を言うとな。URAファイナルズの開催は正の側面だけではないんだ。盛り上がるウマ娘がいる一方で『どうせ出ても意味はない』。そうやって己を卑下して諦める者たちも居る。放置してしまえば、学園内に大きな溝ができるかもしけん」

「その溝の向こう側を退学させて切り離してきたのがトレセン学園だろ。今更じやないか？」

胸糞悪い話だが、実力主義である以上は仕方のない面もあるし、

世の中に似たような構図はいくらでもある。

俺が今までに担当した三人だつて、それは変わらない。

「だとしても、これからも見過ごしていい理由にはならない。もちろん貴様だけに責任を負わせたりはしない。我々、生徒会も協力する

し、そのためなら権限や予算の面でも便宜を図ろう。この件に携わった時間は残業扱いとして給与も支払われる」

うーん、そう言われても特に興味湧かないんだよなあ。

金もティオーが勝つてくれるお陰で最近はお財布がホクホクなんだ。

「……分かった。そこまで言うのなら仕方がない。私も自分の身を犠牲にしないなどと都合の良い真似はできないと考えていた」

「この仕事に従事し成果を出してくれた暁には……私がひと肌脱ごうではないか」

ふあつ!?

「はつきり言つておくが、他の者にこんなことはしない。貴様にだけ、特別だ」

おいおいおい、大丈夫なのかこれ。

ここは未成年の若人たちが過ごす健全な学び舎だぞ。

「休日に貴様の家に邪魔させてもらう事になるだろう。他言無用で頼むぞ」

あかんでこれ。完全にアウトな褒美や。

「ふつ、どうせ貴様のことだ。汚部屋の住人なのだろう? 私がひと肌脱いで部屋を隅々まで綺麗に掃除してやるから有難く思え」

…………は?

期待させておいて何言つてんだこのアマは。

「ガキの飯事ままごとじやねーんだよ。舐めてんのか」

ときめいてた俺の純情を返してほしいんだけど。

「そもそも俺の部屋は住むのに支障が出るほど汚れてない。普通の範疇はんちゆうだ」

「嘘を吐く必要はない。どうせ酒の空き缶や弁当の空きガラが転がっているんだろう。まあ、仮になくとも私はフローリングの溝や窓のサツシがあれば満足できるから問題ないがな」

ヒトのことをイメージだけで語り過ぎだろ。

それになんでこの女は興奮気味になつてるんだ？
細い溝に興奮できるタイプのフェチなのか？

「ふふ、w i n — w i n というやつだな」

全然WINしてないんだが。俺の一人負けなんだが。

「待てよ。俺の意志はともかくティオーの意見を聞かなきやだろ。ア
イツにとつて今は大事な時期なんだ」

秘技、他人任せ。

運悪くティオーは用事があるとかで此処にはいない。

だが、アイツなら後からでも俺の意を汲んで断固拒否してくれるは
ずだ。

「はっ、貴様がティオーを出汁ダシにして拒んでくることは承知の上だ。
まったく女々しい奴だな」

なに失礼なこと言つてくれちゃつてんのこの女。

終いにや張り倒すぞ。

「義理として貴様の意思も聞いてやつたがな、この件はそもそも拒否
することは認められていない。生徒会が学園の運営陣に上申し、稟議
を通しているからな。ほれ、これが正式な辞令だ。拝領するといい」
ペラリと手渡された紙には、確かにエアグルーヴの言つていた通り
の内容が書かれていた。

マジかよ……。

「トレセン学園も立派な学校法人。公僕とは似て非なるものだ。断る
ようなら、分かるな？」

もはや脅迫だろこれ。

「まあ、本当にどうしても嫌だと言うのなら無理強いはできないと
思つてはいる。嫌々やられたところで、相手のためにもならんからな」
だよな。だから断つても仕方ないよな。

「なので、このあと一人目の相談者と会つてもらうことにする。最終
的な返事はそれが終わつてから聞かせてもらうとしよう」

そう言つて立ち上がつたエアグルーヴは有無を言わさず俺を引き
摺つていつた。

ちょっと力技すぎやしませんかね。

そうして連れて行かれたのは、何時の間にか生徒会室の隣に出来上がっていた、教会の懲悔室のような作りをした謎の部屋。

用意周到すぎるだろ。

「色々と言ひはしたが、もし少しでも彼女たちの心を軽くしてやれるのなら、それは金銭では測れない価値があると思つてゐる。頼んだぞ」

神妙に言つたエアグルーヴが部屋を出て数分。

部屋の扉が開いた音がして、枠越しに誰かが席に着いたのが分かった。

そうして渋々部屋に入ってきたウマ娘の相談に乗つて。

その鬱々とした声で話される、あまりにも自分の価値と可能性を見失つた視野狭窄な悩みを聞かされて。

……結論だけ言うと、俺はこの仕事を引き受けことになつた。

お話ししよう

絶対に断るという鋼の意志を持つて受けた最初の相談。

その意志は全く役に立つことなく、俺は相談役を引き受けることになつた。

「はあ……まさか一発目からあの手の相談が来るとはな。毎回これだと気が滅入るぞ」

週二回。水曜日と金曜日の放課後約二時間。

それが俺の受け持つ時間帯らしい。

後で知つたことだが、他の時間帯は別のトレーナーが受け持ち、生徒会側で相談内容ごとに振り分ける方式のようだ。

女性的な悩みとか、速く走る方法を俺に聞きたくに来ても意味ないもんな。

相談内容を募っているのは学園のホームページ。

匿名の目安箱のような機能を元々持っていたらしいのだが、そこに送られてきていた個人的な相談事を本腰入れて対応するというのが今回の目的らしく、希望者に対して相談室の案内をしていくらしい。

今後はSNSやメッセージアプリの学園公式アカウントでも相談を受け付けていくようだ。

「それにしても、あれで意味なんてあるのかね」

トレセン学園でなんの結果も残せず、地元にも恥ずかしくて帰れない。

それが最初の相談内容だつた。

正直、地元が過疎化して滅びるよりはマシだから帰つてやれと言いたかつたが、そういうことではないのだろう。

桦越しで顔は見えないが、聞こえてくる鬱々として霸氣のない声から、本調子でないことは分かつた。

結果が出せず精神は落ち込み、食事なんかの日常生活も徐々に不安定になつていき体調を崩すという悪循環に陥つてゐる訳だ。

こういう場合に問題なのは、自分で自分を信じられなくなつてゐる

ことだ。

モチベーションがあり、努力をした。

なのに、まるで目指した夢には届かない。

ならば他に自力でなにが出来るというのか。

才能という見えないモノを持ち合わせていなかつた自分では、なにをやつても同じように失敗するのではないか。

一番強く願つたモノで躊躇いたが故に、それ以外だなんて考えも及ばない。

そういう不安に呑まれ視野が狭くなっている。

どこにでもある、大体のやつが大人になるまでに経験する悩みである。

子供の頃に描いた夢を叶られる人間というのはどれ程いるだろうか。

仮にプロ野球選手になるのが夢だつたとして、入団すれば終わりではない。

キャリアを終えたときに満足のいく成績が残している人間はさらにならないだろう。

なんにせよ、折り合いを付けるときがくる。

本人は認められないだろうが、トレセン学園に入学できただけでも才能と努力は証明されている。

他のモノに向ければ、少なくとも生きていくのに苦労はしないだろう。

俺は夢の後押しをして支える者としては力不足だ。

こうすればいい、ああすれば上手いくなんて事は言えない。

だから具体的なアドバイスなんて無理だし、こう言うしかない訳だ。

『なあ、お前にんじんハンバーグは好きか？』

知ってるか？

ウマ娘つてのはマグロと違つて走り続けなくとも生きていいけるけどさ、メシは食わねーと死んじまうんだぜ？

そう言つて、顔を合わすのはNGというルールを破つて一緒にメシ

を食いに行くことにした。

ついでに地元に持つて帰れる物がないのが恥ずかしいとか言つてから、隣の生徒会室に突撃して中にいたルドルフとマルゼンスキーニサインを書かせて土産にさせて。

あまりにも強引すぎる手段だったが、メシを食つたあとにサインが書かれた色紙をぽけつと眺めているウマ娘を見て、多少は元気が出ただろうかなんて考えて。

ふと見たスマホに、凄まじい件数の通話とメッセージの着信履歴があることに気付いた。



トウカイティオーは激怒した。必ず、かの無知蒙昧なクズを蹴り飛ばすと決意した。ティオーにはクズの今日の予定がわからぬ。ティオーはJ Cである。マックイーンのもとで、合同合宿をする話を付けて来た。けれども、クズと一緒に居る時間は人一倍に大切だつた。つい先ほど、ティオーはスピカのトレーナー室を出て、数十メートル離れたクズの部屋にやつてきた。ティオーには、チームメイトもサブトレーナーもない。この後の予定もない。クズと専任の関係だ。このクズは、毎日自分とトレーニングをして食事を取りことになつていた。夕食の時間も間近なのである。ティオーはそれゆえ、ルンルン気分で部屋に帰つてきたのだ。

「なのに、なんでトレーナーが居ないの？」

会議のような長時間部屋を空ける予定はなかつたはず。

もうすぐ夕飯なのだから、なにか買いに出たという可能性も低い。
ちょっと散歩、ということは考えられるが。

「……出ない」

通話に出ず、メッセージを送つても既読にならない。

つまり暇な状況ではなく、手が離せない何かがあるということか。
探しに行つてもいいが、滅多にない行動パターンだ。心当たりのある場所にはいないかもしれない。

「こういう時は人海戦術だよね」

メッセージアプリで友人たちに所在を知らないか聞いてみると、早く速答えが返ってきた。

『どこにいるかは知らないけど、エアグルーヴ先輩と歩いているのを見たよ』

「……へえ」

たつたの一文で、ルンルン気分は決意の直滑降した。

放課後のスペシャリストたるクズがいない以上、回復は望めない。しかし、なぜエアグルーヴなのか。

今までに接点はなかつたはずだ。雑談をするほど相性が良いとは思えない。

態度の悪いトレーナーをエアグルーヴが注意したとかなら有り得るが、どこへ一緒に歩いていく必要があるというのか。

さらに齋もたらされた目撃者情報からして、向かつた先は生徒会室。なにか学園内の用事を頼むためという可能性もなくはない。

だが、ボクの勘が告げていた。

ここで動かなければ取り返しが付かなくなる。

これは、敵対行為であると。

「……まさか、会長たちまでボクの邪魔をしようとするだなんてなー」理解してくれていると思つていたけれど、都合の良い妄想でしかなかつたかな?

まあ、どうでもいいか。

振り切つた憧れに拘泥する暇もなければ、敵対者に掛ける情けもありはしないのだから。

”帝王”は首を擡もたげた黒い激情のままに、脚を生徒会室へと向けた。

■
「それで? なんの用があつてトレーナーを連れて行つたのかな?」
礼儀正しくノックをして、失礼しますという言葉と共にトウカイテ

イオーは生徒会室へと入ってきた。

以前のトウカイティオーであればなんの断りもなしに部屋に入り浸り、シンボリルドルフに甘えていただろう。

新しいトレーナーの下で礼儀作法を学び、精神的に大人びた……訳ではもちろんない。

言葉とは裏腹に慇懃無礼^{いんぎんぶれい}な態度。

声に温かみはなく、冷たい視線には微塵^{みじん}も親しみが感じられない。

その態度は明確に生徒会に対する敵意を表していた。

「気を静めてくれないかティオー。我々はなにも君たちの邪魔^{ごま}がしたい訳ではないんだ」

対するシンボリルドルフは、立ち昇る怒氣に欠片も動じた様子を見せず、清らかな川の潺^{せせらぎ}の如き穏やかさを保っていた。

同じく部屋にいたマルゼンスキーとエアグルーヴも、トウカイティオーの攻撃的な態度に多少の驚きを見せていたが、それでも動搖と呼べるほどの反応は示さなかつた。

部屋にトレーナーが居なかつたことに舌打ちしそうになるのを堪^{こら}え、トウカイティオーは室内の三人を見回す。

ボクが来ることを予測していたなど三人の反応から見当を付け、本丸にして主犯だろう”皇帝”に視線を合わせて問いただした。

「そうなんだ。理由なんてどうでもいいけど、ボクとトレーナーの時間^じを勝手に奪つて欲しくないんだよね。例えそれが会長であつても。それで、もう一回聞くけどなんでトレーナーを連れていったのかな？」

「それと、トレーナーどこ？」

問い合わせてはいるが、聞く耳は持つていない。そんな態度だった。

「此処には居ないよ。先ほど少しだけ顔を見せたが、もう出て行つてしまつた。行き先は分からないな」

それでもシンボリルドルフには些^{すこ}かの揺れもなく、泰然自若としたままだつた。

その態度に苛つきながらも、トウカイティオーは息を吐いて心を落ち着かせていた。

恐らくだが、生徒会——というかシンボリルドルフ——はトレーナーに対して何かを求めて行動を起こした。

単なる注意や突発的な用事ではない。

ボクの来ることも想定内となると、冷静さを失えば理詰めで丸め込まれる。

トウカイティオーは——。

誰よりも強くシンボリルドルフを目指したウマ娘は、誰よりもその恐ろしさを理解していた。

レースに於ける強さですらギリギリ手が届くかどうか。それ以外の面では遠く及ばない。

以前はたった一人で生徒会を切り盛りしていたバイタリティと深謀遠慮。

多くの者を惹きつけるカリスマ性と、反発した者すら納得させる弁舌。

目の前の”皇帝”はターフの外でも君臨者足り得る存在だ。

もう戦いは始まっている。

トウカイティオーは油断なく、気を引き締めた。

「なら、トレーナーを連れて行つた用事はなんだつたのかな。宝塚記念に向けて忙しい時期なんだけど」

先ほどまでは前哨戦。生徒会側に裏があることは確信している。

トウカイティオーにとつての問題は、それが自分たちの害になるのかどうかだ。

「ああ、実はトレーナー君に仕事を一つ頼むことになつてね。内容を説明したら、快く引き受けてくれたよ。ティオーと過ごせる時間は少し減つてしまふかもしれないな。事後承諾になつてしまつてすまない」

いけしゃあしゃあと、シンボリルドルフは澄まし顔で言い放つた。

『この野郎、いい度胸だ』

目元をヒクつかせ、こめかみに青筋を浮かばせたトウカイティオーの顔がそう語つていた。

それでもキレる寸前のところで踏み止まり、彼女は振り絞つた理性

で弁解の機会を与えた。

「ボクたちは忙しいって、そう言つたよね。聞こえなかつたかな。それとも喧嘩売つてる？ もしそうなら言い値で買うよ」

「弁解……と言う名の最後通告ではあつたが。

「待て、ティオー！ これは正式に学園が決定した事で、会長の一存だけという話ではない。納得しかねる事もあるかもしれないが、まずは落ち着いてくれ」

一触即発な雰囲気に、たまらずといった風にエアグルーヴが口を挟んだ。

尊敬する相手である会長に対して喧嘩腰なトウカイティオーにも驚くが、その会長自身が明らかにトウカイティオーの神経を逆撫でしにいつている。

仲の良さを知る身としては、信じられない異常事態だつた。

「ボクは会長と話をしているんだけど。黙つてくれないかな」

最初から冷たさを宿していた視線の温度は絶対零度まで下がり、“女帝”と呼ばれるほどの苛烈さを持つエアグルーヴをして体に震えが走るほどだつた。

エアグルーヴは、この件について最初は否定的であつた。

なにがしかの施策は必要だが、それを担う人物として彼のトレーナーは適切なのか。

悩みを打ち明ける相手として最適とも思えないし、彼の教え子たちが選んだのは全て学園外に行き先を定める道だ。

例えば優れたトレーナー陣から技術的なアドバイスを貰えば、成長して納得のいく結果を得られるのではないか。

そういう未練にも似た想いがあつた。

それでも同志たるシンボリルドルフの『多様性がなければ手の届かない者が出てくる』という言葉に従い、彼を連れてきた。

結果として、今はそれで上手く行くのではないかと言う気がしている。

エアグルーヴは取り成しのために相談者のウマ娘とも顔を合わせていた。

垂れた耳、伏せられた目線と俯いた顔。

頑張れば明るい未来があるだなんて、とてもではないが言えなかつた。

それを速攻でルールを破つて、あの男は手を引いて生徒会室に連れ立つてきた。

嵐のような勢いで会長とマルゼンスキーザインを貰うと、外に飯を食いに行くと二人で出て行つた。

その時の、呆気に取られて状況を理解できていないウマ娘に同情しながらも、こう思ったのだ。

さつきよりは余程にマシな顔をしている——と。

私には、私たちには出来ない方法で彼ならウマ娘の心に活力を与えるのかもしれない。

ならば、自分は会長の側に立つ。

”理想”のために、竦んではいられない。

その想いで、エアグルーヴは口を開いた。

「いいや、黙らない。あの男は我々の”理想”に必要になるかもしれない。お前が奴に惚れこんでいるのは知っているが、こちらも引けん。手放すつもりはない」

その全く以つて具体的な内容が含まれていない言葉は、”皇帝”以上に明確にトウカイティオーネの逆鱗に触れた。

「ふつ、流石は”女帝”エアグルーヴだ。それなりに穩便に言葉を選んで行こうと考えていたのに、宣戦布告に来た使者の首を叩き斬つて送り返すが如き所業。末恐ろしいな」

思つたよりズバッと誤解を生む表現で切り込んだなど、シンボリルドルフは冷や汗を搔きながらエアグルーヴを称賛し、対応方針を変更した。

より、過激な方向へ。

そして、対応がより過激になつたのはトウカイティオーネも同じだつた。

”理想”に必要？ 手放すつもりはない？ 関係のない他人がどこからモノを言つてるのさ。あのヒトはボクのモノだ』

絞り出すように呴かれた言葉と共に、トウカイティオーレが放つていた冷たさの全てが反転した。

燃え盛る霸氣、焼き焦がすような視線。

大阪杯で見せた、己の前に立ちはだかる全てを消し炭にしてやるという気迫。

先ほどまでの冷氣すら遠く及ばないほどの圧に押されて一歩後ずさるエアグルーヴとは対照的に、シンボリルドルフと黙つて成り行きを見ていたマルゼンスキーは平然としている。

あたかも、この程度で我を通せると思うなど挑発するかのように。「あのヒトはボクのモノ、か。ふふつ、他者のことは言えないが中々に

傲慢だな」

この一件、一応の理があるように見せているシンボリルドルフではあつたが、それなりに無理筋も通している。

だが、周囲を黙らせるのに必要な結果を出せる公算は十二分にあつて、懸念していない。

そして目の前の王様を黙らせることも、然して難しいことではなかつた。

「隠すことでもないからな、正直に言おう。彼に頼んだのは、怪我や成績不振で学園からの退学を考えるほどに深い悩みを抱えた生徒の相談に乗つてもらうことだ。去年のティオーやその先輩たちのようだね」

ただ正直に伝える。

それは、なによりも効果的に燃え盛る炎を萎えさせた。

「……そんなの、卑怯じやん」

救われたからこそ、トウカイティオーレは誰よりも彼に価値を見出した。

一定数、彼であればこそ手を伸ばせるウマ娘が居ることも知つている。

自分と同じ境遇の者を助けたいと言われて、どう否定すればいいのか。

その行為は、救われた己自身の否定にすら繋がるのではないか。

トレーナーを取り返す。その望みを叶える答えは、出てこなかつた。

「ティオー、これを機に君も考えてみてはくれないだろうか。生徒会は『唯一抜きん出て並ぶ者なし』というスクールモットーに基づきウマ娘のレベル向上に努めている。同時に様々な不慮で沈みいく者たちへ手を差し伸べたいとも考えている。トレーナー君だけでなく、君もその一助になつてはくれないだろうか」

或いは、”皇帝”と呼ばれる者が立つ視座の高さに対して、どこまでも自分本位な望みに終始している己程度では抗うことなど不可能だつたのか。

そんな考えが、じわりと胸を蝕んだ。

「今すぐに答えてくれとは言わない。だが、今回の試みが相応の成果を出したなら、トレーナー君に依頼する仕事の内容も量も増えていく事になるだろう」

「……ッ！ そんなのダメ！ これ以上、ボクからトレーナーを盗らないでよ！」

無力故に駄々を捏ねることしかできない。

幼稚な我儘でしか自分の意志を通せない。

それは、トウカイティオーの明確な敗北だつた。

悲痛に訴えながらも、それで退いてくれる訳もない。

それが分かつてしまい涙が溢れそうになつたとき、”皇帝”はあつさりと逃げ道を提示した。

「ふむ、いいだろう。誰かを助けるために誰かを蔑ろにしていたのでは何も変わらない。ティオーの意志を尊重する手段も設けるとしよう」

このまま理屈で押し通してもよかつた。

だが、それも破綻させる方法がない訳ではない。

例えばこの後、ティオーが泣きながらトレーナーに嫌だと訴えれば。

彼はクビ覚悟でもこの話を断るだろう。
だからこそ示さなければならぬ。

逃げ道に見せかけた、納得させるための手段を。

「我々はウマ娘だ。己の意思を通したいのならば、勝利を以て通せ」
トレーナーは勤め人であるが故の弱みと性根の甘さを利用してコ
チラ側に寄せた。

ティオーには屁理屈と彼女の実体験を利用して否定できなくさせ
た。

あとは、力で屈服させればいい。

「年末の有馬記念、君も出走するだろう？ そこに私も出るとしよう。
君が勝てば全てが今まで通りになり、我々も彼のことは諦める。逆に
私が勝つなら、我々の邪魔はしないでもらいたい」

あたかも対等に見せかけた、理不尽。

現役最強のウマ娘に……否、日本史上最強かもしれないウマ娘に勝
てという条件。

シンボリルドフは、実際のところ全く以て譲つてやるつもりなど
なかつた。

「そしてティオー、君にも協力をしてもらう。おや、これならトレ
ナー君と離れる時間も多くならずに済むな。我ながら良い案だ。そ
れに、元々ティオーは私を目指していたのだろう。その目的を果たす
機会が来たと思えば……」

凡そ自分の思い通りに事が進み、シンボリルドフは少しだけ気分
よく言葉を紡いでいた。

紡いでいて……気付いた。

萎えていた炎に、自分がとんでもない量の燃料をぶち込んだこと
に。

「それで、いいんだね？」

以前のトウカイティオーならば、ここで退いただろうか。

シンボリルドフに勝つことを目標としていても、それはいがみ
合つた末の喧嘩としてではなかつたはずだから。

だが、今は違う。

彼女は既に経験して知っている。

愛憎は表裏一体であるということを。

「会長に勝つって夢を叶えて、トレーナーを取り返して、最強の座から引き摺り下ろしてやれば、それでいいんだね？」

向けられる声と視線に、シンボリルドフは自然と笑みを浮かべた。

ああ、何時以来だろうか。

己に対しても、ここまで強い敵意が向けられるのは。
こうでなくては。

尊敬や、ましてや崇拜など違うだろう。

相手が誰であろうと力で勝利し、その全てを^もぎ取る。

それこそが、ウマ娘の本能にして本懐。

やつと、私を本気で見てくれた。

そんな身勝手な想いを抱いて、シンボリルドフは答えた。

「ああ。戦おうじゃないか、トウカイティオー。私と君、それぞれの望みを叶えるために」

決意と成長と

”女帝“の放った辞令というサラリーマン特効の一撃によつて敗北を喫し、悩めるウマ娘の相談に乗らされた翌日。

過ごしやすい気温の爽やかな朝とは異なり、俺の心には重たいモノが圧し掛かっていた。

初つ端から素人に任せるべきではない人生相談を持つてきた生徒会もどうかと思つた。

だが問題は、仕返しにと経費で高額なにんじんハンバーグに舌鼓を打つていてティオーに連絡を入れるのを完全に忘れていたことだ。やつちまつたと思いながら見たスマホには着信とメッセージの連打。

あまりにも多い通知履歴にビビりつつも、アイツつて案外寂しがり屋なんだなど思いメッセージを一通り読んでいた。

異変に気付いたのは、メッセージを数十ほど読み進めたときだ。それまでは無断でいなくなつた俺への怒りを露わにしながらも、コチラの所在を確かめる内容だつた。

だが途中から経緯不明な泣き言と生徒会への文句が並べられ、最後はこう締め括られていた。

『シンボリルドルフをボコボコにするっ!!』

ティオーとルドルフつて仲良かつたんじゃなかつたか？

疑問ではあつたが、そう言えば最初からティオーの目標はルドルフだつたなと思い出した。

シニア級に上がつたときの目標設定であまり意識していないようだつたから忘れていたが、初心を思い出したのか何か奮起する理由でもできたのか。

やる気が出るのなら悪い事ではないかと謝罪の返信をしようとしたとき。

新たなメッセージが着信した。

『その前にトレーナーもボコボコにするから』
……明日が俺の命日になるかもしない。

とまあ、そんなこんなでウマ娘に力で抗う方法を考えながら眠れな
い夜を過ごした訳だ。

そうして迎えた翌日早朝。

卷之三

イオーと合流した。

凄まじい気迫とスピーディで周回を重ねるティオーは、トレー二ングというよりもストレス発散が目的のように見えた。

声を掛けようかとも考えたのだが、あのスピードのままコチラに飛び蹴りでもされたら間違いなく死ぬ。

できれば止まるまでは話しかけたくない。

三

視線を落とすと、コチラに歩みを進めるティオーの姿。

がら近寄つてくる様は控えめに言つて怪物みたいだつた。

「なにか、ボクに言うことがあるんじやないかな？」

久しぶりに聞いたティオーが本気で不機嫌な時の声色。

罪することにした。

すまなかつた。生徒から悩み相談を受けてな。あまりにも急だつたのと、内容が重たかつたもんで連絡するのを忘れてた。次からは気を付けるよ」

「……他にも、なにか言つておかないと困る事があるんじやない」
責めるような上目遣いは、隠し事はしてくれるなど言つているよう
だった。

大二

生徒会に文句言つてたのは、定期的に悩み相談を受けることになつてトレーニングの弊害になることを知つたからなのだろう。

「悪い。生徒会からウマ娘の悩み相談に乗ってくれつて頼まれてな。

週に何回か放課後はトレーニングに付き添えなくなる」

辞令である以上は断り切れない話だつたのかもしれないが、それで

もティオーに無断で決めることじゃなかつた。

トレーナーであるなら、こういう信頼を損ねる行動はしちゃいけないよな。

「……その娘、悩みは解消できそうだつた？」

ティオーは悩んだように、聞くかどうか迷うような素振りで聞いてきた。

「正直、分からん。ちつたあ元気が出でくれりやいいんだけどな」件のウマ娘と色々話をしてみたところ、適性は短距離で趣味は手芸らしい。

俺の拙い知識だと短距離はそこまで突出した奴が居なくて狙い目じやないかとも思うんだが、少し調べたところ下の世代が粒揃いらしい。

飛び級の天才児ニシノフラワー。

時々バカでかい声で校舎を走り回つてサクラバクシンオー。

いくつかレース映像を見てみたが、モノが違うウマ娘たちだと感じた。

今年か、遅くとも来年には短距離重賞レースは地獄の様相を呈すことになるだろう。

そんな状況でレースで納得のいく結果を出させる案は俺の中にはなかつた。

だもんで、自分は走る以外の方法では価値を示せないと勘違いしたウマ娘におススメの総務課に行くよう伝えた。

走る以外でも、レースやウマ娘に関わる方法つてのは意外と多かつたりする。

手芸というか手先の器用さだと、勝負服のデザイナーだのぬいぐるみの原案作成だの。

走ることを目的として学園に来たウマ娘には見向きもされてないが、実は採用募集やイベントもあつたりするのだ。

作る方でなくとも、モデルや練習台としての需要が普通にある。ウマ娘として生まれてきたというメリットは、それだけで滅茶苦茶大きいのだ。

結構面白いから気分転換に行つてみろと言つたら、よく分かつてなさそうに頷いていた。

「お前がトレーニングの邪魔だからやめろつて言うなら生徒会に直談判しに行つてくるぞ。いや、この場合は理事長になるのか？」
たまに賄賂として駄菓子を渡していた仲だつたりするのだが、最近は受け取つてくれない。

秘書の厳しい管理下に置かれて いるらしく、勝手に菓子の類を食べると後が怖いらしい。

子供が好きに菓子も食えないとは、世知辛い世の中である。

「ううん。断らなくてもいいよ。ボクもトレーナーにたくさん助けて貰つたからね。ボクのことを忘れて没頭されちゃうのは嫌だけど、他の娘たちのことも助けてあげてよ」

ちよつとだけ納得してなごそうに、それでも撤回する気もないといつた顔でティオーは許可をくれた。

相変わらず、子供っぽい容姿と態度に反して内面はしつかりした奴だ。

「ああ。もちろん俺が一番に優先するのはティオーだ。何かあれば遠慮せず言えよ。悩み相談は……相手にや悪いが最悪は後回しにさせてもらうさ」

どつちにしろ後悔するんなら俺はティオーを選びたい。
「うん。よーし、この話は終わり！」

区切りを付けるように、ティオーは大きな声で宣言した。

「それでねそれでね！ 会長をボコボコにする話なんだけど！」

おう、それそれ。ボコボコって表現を可愛いと思うべきか物騒と思うべきか判断に困つてたんだよな。

「一度と偉そうな口が利けないよう に徹底的にやりたいんだけど、やつぱり会長が得意の差しで圧勝してやるのが精神的にダメージ与えられるかな！」

「いや、なんでそこまで敵意剥き出しなの？ 怖いんだけど」

否定のしようもなく物騒な表現だつたわ。

勝利は最初から確定事項で、如何にして精神にダメージを与えるか

考えてるのはいかんでしょ。

スポーツマンシップを思い出してほしい。

「もしかしてトレーナー、会長が偶然で悩み相談の話を持つてきただと思つてるの？」

え、そりやそうでしょと返した俺に、ティオーは察しが悪いなーとぼやきながらも事の経緯を説明してくれた。

ティオー曰く、ルドルフは己の掲げる夢のために俺とティオーを手元に置きたいらしい。

怪我に起因する夢の喪失を味わいながらも、そこから復活を遂げたウマ娘。

育成者たるに相応しくない噂話を囁かれながらも、様々な形でウマ娘に道を示すトレーナー。

それは、多少強引な手段を用いてでも確保しておきたい人材らしい。

「いやいや、ティオーはともかく俺にそんな価値を見出すのはおかしいだろ。カウンセラーやキャリアプランナーもアソツが求めれば鶴の一聲で集まるんじゃないか？」

俺はその手の分野について何一つとして勉強したことはない。

ルドルフ個人の名声でもシンボリの家の力でも、人材を集めのに苦労はしないと思うんだが。

それでも人手が足りないからとにかく搔き集めたいという事だろうか？

「トレーナーって他人の悩みは扱き下ろしながら相談に乗るのに自己評価低いよね。中央のトレーナーなんだから、それだけで上澄みなんだよ？」

ふつ、大人になるつてのは身の程を知ることが第一歩なんだぜ、お嬢ちゃん？

「なに腹立つ顔してんの。トレーナーのこともボコるつて話、ボク忘れてないからね」

……美味しいご飯に連れて行くから勘弁していただけないだろうか。

「昨日は主導権握られちゃつたけど、改めて考えると会長には全てのウマ娘の幸福つて夢以外にもトレーナーに執着する理由があるんだと思う。正確には、ボクを担当しているトレーナーに対しても」

昨日のことを思い出しているのだろう。少しだけ憂いた顔をしたティオーは、ルドルフの考えに思い当たることがあるらしい。

「きっとボクとトレーナーの関係が羨ましいんだよ」

羨ましい？

俺とティオーの関係性に羨むような特別性はあつただろうか。

トレーナーの立場からしたら、こんな天才を担当できるのは嫉妬に値するだろうけど。

「例えの話だけどさ、トレーナーはボクが週末に遊園地に連れて行つてほしいって言つたら連れて行つてくれる？」

「トレーニングの調整が付けば連れて行くけど」

なんだ、ルドルフのやつは遊園地に行きたいのか？別に一緒に連れて行つても構わんが。

「東条トレーナーは優秀なヒトだよ。ウマ娘を強くしてレースに勝たせるつて意味じや今のトレセン学園で一番じゃないかな。けど、あのヒトは生糰のトレーナーだからウマ娘個々人に深入りはしてこない。プロフェッショナルつて言えばいいのかな」

ふむ。確かにおハナさんがリギルのメンバー個々の趣味に付き合つたり、プライベートで一緒に外出しているなんて話は聞かないな。

まあ、あの人の場合には単純に忙しすぎて時間の捻出も出来ないんだろうけど。

「会長は夢の実現のために頂点に君臨しなきやいけないと思つてる。その意味で東条トレーナーは文句なし。だけど、ウマ娘の幸福つて夢にまで付き合つてくれる訳じやないのも知つてる」

シンボリルドフにとつて、レースの勝利は目的であると同時に手段。

だが、おハナさんは勝利の先にまで口出しする気はないつてことか。

「だから羨ましいの。ボクがお願ひすればレースに勝つ以外のことと一緒に叶えてくれるトレーナーのことがある」

それはまあなんというか。

「あいつ結構バカなんだな。レースの勝ちじやなくてアソツの夢と一緒に叶えたいって思つてるやつも大勢いるだろうに」

校内放送でも使つてぶちまければ、すぐに立候補者が見つかる気がするけど。

「そこはほら、立場つてものがあるから素直に行動に移せないんじゃない？ 昨日のやり口もかなり陰湿というか回りくどかつたからねー」

詳しく述べると、俺を探す一環で生徒会室を訪ねたティオーに対しても去年の骨折や先輩連中の例を出して協力を要請してきたらしい。

しかも俺とティオーが一緒に居ない時を見計らい、互いに相手の状況が認識できない状態で、学園への根回しと下ネゴで拒否できないようにしてだ。

悪いことをしている訳ではないし、やりたい事にも理解は示すが正直気分が良くない。

「なあ、やっぱり悩み相談は断つてこようか？ 理屈はともかくやり方に納得がいかんのだが」

ムカつかないと言えば嘘になるし、これじゃどう転んでもお互にしこりが残ってしまう。

「断つても会長が諦めない限りはあるの手この手で誘いを掛けてくるよ。断り続けるのに労力使うのもバカらしいし、本当に強引な手段に出られても困るからね。だからこそ、向こうが提示してきた賭けに乗る」

年末の有馬記念でシンボリルドルフに勝つという条件。

ティオーどころか、それ以外のウマ娘にも自分が負ける可能性を一%たりとも考えていいのは流石”皇帝”というべきか。

それはともかく、あの女ですら勝つのに三年という時間を見ていたシンボリルドルフに今年挑むというのは、些かならず早計だろう。

勝算は、少なくとも俺には導き出せなかつた。

「その条件、お前はやれると思っているのか？」

ティオーには、俺とは全く別のモノが見えているのだろうか。

それを聞いてみたくなつた。

「あつたり前じやん！ ボクとトレーナーが力を合わせれば会長なんてラクシヨーだよ！ コテンパンにしてやるから！」

それはたぶん、根拠のない自信だつた。

それでも俺にとつて、トレーナーという職に就く者にとつて、一番嬉しい言葉だつた。

「おう！ そんじや、ぱぱつと勝つて最強のウマ娘になつちまうか！」担当のウマ娘がやりたいと、やれると言つているのなら全力で付き合うのが役目。

トレーナーとして覚悟を決めて挑むだけだ。

「それにしても舞台は有馬記念か。まだ少し先の話だな」

勝つためのトレーニングやレースをこなしていればあつという間だらうけど。

「一応は猶予をくれたんだと思うよ。今すぐに戦つて勝てるかと聞かれると厳しいからね」

約半年という残り期間で、どうシンボリルドルフに勝つか。

当たり前の話だが、俺に具体的な案とかは全くなない。

「それでねトレーナー。早速、お願ひしたいことがあるんだけど」

「なんだろう。心の栄養補給のために遊園地でもいくか？」

「併走相手を用意してほしいんだ。できるだけ強いウマ娘で」

なるほど。トレーニングの質を上げるために欠かせない要素だ。

なんだかんだと相手探しが滞つていたが、いい加減に見つけないとな。

「夏合宿するつて話はあるけど、マツクイーンとスペシャルウイークに頼めないか聞いてくるか」

マツクイーンはシニア級の対戦相手だが、背に腹は代えられない。頭でもなんでも下げるとしよう。

「うん。出来れば一人にもお願ひしたいかな。けど、一番お願ひした

いのは別のウマ娘なんだ」

どうやらティオーには明確に思い浮かべる相手がいるらしい。

「交渉事の巧みさを期待されても困るが、やりだけやつてみるさ。で、

誰なんだ？」

「オグリキャップ」

ティオーから出たその名前は、シンボリルドフに勝ち得る実力を持つた数少ないウマ娘の一人であり、今の日本に知らない者はいないであろうアイドルウマ娘だった。

アイドルウマ娘

オグリキヤップに併走トレーニングを依頼する。

言葉にすれば簡単そうに聞こえるが、実際にはかなり難度の高い要求だつたりする。

別段、当人が気難しいとか法外な対価を求められる訳ではない。学園の規則が邪魔をするなんてこともない。

まあ、仮に問題があつたとしても無視するが。

じやあ、どこが難度高いのって話だが、オグリキヤップは人気がありすぎるのだ。

日本で名前を知らないのなんて赤子か文明を捨て仙人の様な生活をしている奴くらいだろう。

比喩でもなんでもなく、今はそういう時代だ。

クラシック三冠をどれ一つとして獲得していないにも関わらず、その全てを獲つたウマ娘達すら超える程の人気を誇る稀代のスター。強い。優れた成績を残した。

そういうつたレースの結果だけでは計れない魅力が彼女とそのレス人生にはあつた。

例えば、規則の改定。

長年適用されてきたそれを、彼女は実績を以て変えさせた。

決めた側にも思うところがあつただろうとは言え、前例のない偉業。

『学園のウマ娘は学食食べ放題』というルールを破壊した、まさしく怪物と言える存在だ。

約二千人のウマ娘が在籍し、種族として健啖な傾向がある成長期のスポーツマン達。

それはもう食べる。オグリキヤップじゃなくても相當に食べる。

それでも学園のプライドを懸けて維持していた食べ放題ルールは、脆くも崩れた。

偶然に機嫌が悪かつたオグリキヤップが『食材の貯蔵は充分か』と問うた際に『応』と食堂側が慢心して答えたのが運の尽きであった。

腕が上がらなくなるまでフライパンを振り続けた料理人もあつぱれだつたが、結果は結果。

食糧庫はもぬけの殻と成り果て、現代日本の学び舎で多数の女学生が飢える事態が発生した。

ウソでしょ、と頭を抱えた学園上層部と生徒会は仕方なく対応を検討した。

食べ放題をなくせばいいという安易な意見も出たが、いきなりのルール改定は公平性に反する。

昼飯も食えず腹を鳴らしながらも生徒会長——シンボリルドルフ——は、オグリキヤップの良心を信じて一つのルールを追加した。

『学園のウマ娘は学食食べ放題。但し、他のウマ娘に迷惑が掛からな範疇にすること』

オグリキヤップは無限の胃袋と食欲を搭載してはいたが、幸いにも性質は善良だつた。

機嫌の悪さも解消されたことで、ショーンボリしながらもルールを受け入れ学園に平和が訪れた。

これが、俗に言う『オグリキヤップの乱』である。
……え？ クラシック追加登録制度？

そういや、そんな話もあつたな。

まあ、これはただの冗談でしかないが、オグリキヤップの人気は他を圧倒する。

ティオーダつて滅多にないスター性を持つていると思うが、オグリキヤップに並ぶかと聞かれると現時点では厳しいと言わざるを得ない。

そんな彼女がチームメイトでも親しい間柄でもないウマ娘との併走トレーニングを受け入れればどうなるか。

街中で迂闊にファンサービスをしてしまい收拾が付かなくなつた有名人状態になる。

実際にそうなつてしまつた過去があり、彼女が併走する相手は同期やその前後にデビューをした友人のウマ娘であることがほとんどだつた。

「さてと、部屋の前まで来たはいいがどうやって口説き落とそうかね」特に良案とかはない。

食べ物で釣れそうな気もするが、流石にトレーナーが止めるだろう。オグリキヤップのトレーナーをしているオッサンとはそれなり以上に付き合いがあるが、例に漏れず担当ウマ娘至上主義などこがある。

余程に明確なメリットを示さないと首を縊には振らないだろう。「おじゃましまーす」

考へても仕方がないので部屋に入ると、バケツみたいなサイズのプリンを食つてるオグリキヤップと新聞を読んでいるトレーナーがいた。「おいおい、知らない相手じゃないとは言えノックくらいはしろよ」生徒会長も勝手に部屋に入ってきたし、ここではこれが常識のはずだ。

新聞から顔を上げたトレーナーは呆然としながらも反応してきたが、これは俺なりの主導権の握り方なので許してほしい。

「隠すようなもんもないだろ。ティオーの併走相手にオグリキヤップ借りて行きたいんだけど、いいよな?」

筆記用具を忘れたから貸してくれないか。

そんなノリで担当ウマ娘を使わせて欲しいと言われたら普通は怒るところなんだが、この二人は色々と普通ではない。

トレーナーの名前はキタハラジヨーンズと言つて、東海ダービーで一着を取つたらしいヒト男。

という黒歴史を持った北原という名のオッサンなのだが、オグリキヤップを担当するために中央のライセンスを取得してカサマツトレセンから追つてきた男でもある。

四十年になつて難関と言われる中央のライセンス取得に挑み成し遂げたのだから、その熱意と覚悟は凄まじいものだったのだろう。

外野から色々と言っていた時期もあつたから、底辺同士だつた俺とは交友があつたりする。

……もつとも、このオツサンは俺ほどに周りへの態度は悪くないが。

対してオグリキヤップは押し入ってきた俺を特に気にした風でもなくプリンを食べ続けていた。

頬袋でもあるのかと錯覚するほどに口内をパンパンに膨らませて、惚けた表情でもちやもちやとプリンを食べているコイツが日本レス史で最高の人気を誇っているというのだから、世の中分からぬものだ。

「はいそうですかつて貸すわけないだろうが。ウチの方針は知つてるだろ」

嫌、ではなく困ると言つたニュアンスを込めた回答。

一度でも例外を作つてしまえば、なぜアイツらだけ特別扱いなのかと周囲から問われてしまう。

それに回答するだけでも労力が掛かる。

そんなクレームに時間を使わされるのもバカらしい。

予想していた回答ではあるし、オグリキヤップを口説いた方が簡単だろうか。

「オグリキヤップ。ここに俺の全財産が入ったキャッシュカードがある。これで好きなモノを食べていいから、半年ほどティオーの併走相手をお願いできないうか」

ティオーのG.I入賞と成績に伴うインセンティブなども含めると、俺の懐に入ってきた金額は既に八桁に届いている。

ぶつちやけオグリキヤップから見れば大した金額でもないのだが、食事に使つてよいのであればそれなりに惹かれるはず。

俺はもやし生活が始まってしまうが背に腹は代えられない。

どうかこれで勘弁してもらえないだろうか。

「おい！ そういうのオグリは素直に受け取るから止めろって！」

悪いなジョーンズ。俺はオグリキヤップを利用しに来たんだ。

受け取つたが最後、裁判沙汰にしてでも併走をしてもらう。

「ティオー……、トウカイティオーのことだな。北原、私は走つてみた

い」

プリンを食べ終わったオグリキヤップが会話に入ってきた。

口に物を入れた状態で話すことを行儀が良いと思うべきか、俺の存在はプリンよりも優先度が低かつたんだろうと戦慄すべきか。「俺だつてお前とトウカイティオーが併走すること 자체は大賛成だよ。まだシニア級に参戦したばかりでも、実力はドリームトロフィー・リーグに出走しているウマ娘たちにだつて劣らない。実りのあるトレーニングになるさ。個人的に俺もファンだしな。だが今は時期が悪い」

「へえー、ジョーンズつてティオールのファンなのか。

応援したくなるようなスター性を持つたウマ娘が好きだと言つていたし、ティオールは合致してはいるか。

「俺がティオールに頼めばサインでもちよつとした私物でもプレゼントしてやれるぞ。対価としては悪くないと思うんだが」

勝負服の装飾品とかなら予備を揃えているから、レースで使用した事のあるやつでもいいぞ。

「……それはファンとしてダメだろ。力関係に物を言わせて私物を強請るなんてのは、ダメだろ」

コイツ、かなり揺れはしたが誘惑に耐えやがつた。

ウマ娘に対して真摯なその態度。立派なものである。

だがしかし、コチラも退けない。

親しい人物にこんな手段を取るのは避けたかつたが仕方がない。「キタハラジョーンズは東海ダービーに出て一着になる妄想を毎日してたつて言いふらすぞ」

いい年こいたオッサンがウマ娘ロールプレイを日課にしてたなんて知られたら、汚物の如き視線を向けられ学園に居場所はなくなってしまうかもしねれない。

年頃の女の子は中年男性に厳しいのだ。

「そんなの誰だつてするだろ！　自分がウマ娘になつてダービー獲る妄想、するだろ！」

そんな熱弁されてもな。

俺は一着云々より付随する金の方が好きだつたから、どちらかとい

うと賞金の書かれたボードを掲げる妄想をしてた。

「それに今は時期が悪いんだよ。夏の予選もあるんだ。レースに向けて集中したいのに、俺とお前が合同トレーニングなんてしてみる。マスコミが目を輝かせて突撃していくぞ」

あー、確かになー。

今の俺とジョーンズには共通点が多い。

トレセン学園内でも下から数えた方が早いトレーナーとしての能力。

それに見合わぬ才能を秘めた相方のウマ娘。

抜群の実力と人気を誇るオグリキヤップですら、シニア時代は心ない言葉が飛び交っていた。

むしろ、オグリキヤップだから飛び交っていたと言うのが正しいのか。

俺なんて素行の悪さも加わるから、すぐにスキヤンダルが起きると思われている節がある。

マスコミからしたら面白おかしく誹謗できる美味しい存在だ。

その評価 자체は自業自得だから文句を言うつもりもないが。

そんな俺とジョーンズが一緒になにから始めるか、根拠のない憶測で記事を書かれて面倒事になる可能性はそれなりにある。

ティオーの育成に関してジョーンズを頼らなかつたのも、そういう理由からだ。

だが、今回はティオーがオグリキヤップとの併走を望んでいる。

卓越した勝負勘とレースセンスを持つていてるティオーには、自分とルドルフの間に広がっている差が分かっているのだろう。

それを埋めるために必要な要素が目の前のウマ娘はある。

俺自身からルドルフに勝つための方法を提示して手を引いてやれない以上、倒れることがないように支えてやるのがトレーナーとしての最低限の役割だ。

なにか、二人を説得できる材料はないだろうか。

「一つ聞きたいんだが、なぜこのタイミングで頼みに来たんだ？ 春の天皇賞は惜しかつたが、得意だった訳でもない長距離での走りが

出来るのは凄いことだ。焦つて併走相手を探すような状況でもないと思うんだが」

黙つて話を聞いていたオグリキヤップが問うてきた。

あまり他人に興味がない奴だと思っていたが、流石にG Iの春天は見ていたのか。

それとも、他に何か見ておこうと考えた理由があつたのか。

なんにしても、目的について全く触れてなかつたな。

「生徒会と揉めててな。なぜか有馬記念でルドルフと賭け試合をすることになつた。有馬までの約半年でルドルフから勝ちを扼ぎ取るために、お前の力を借りたい」

ティオーがオグリキヤップの何を参考にしたいのかは分からんが、関節の柔らかさやストライドの広さなんかに似ている要素はある。そういうつた技術を盗みたいのだろう。たぶん。

「皇帝」が有馬記念に出てくるのか？ それだけでもスクープだぞ。というかお前、生徒会からも目の敵にされたのか。シンボリルドルフを敵に回すなんて学園全体と敵対するのとほぼ同義だぞ

「ルドルフに反抗的なウマ娘なんてシリウス位だもんな。あと、俺は敵というより被害者だ」

何故か知らんが勝負の景品扱いされているから、ピーチ姫のポジションと言えるだろう。

ティオーとルドルフは……なんであんなに燃え上がつてるんだろうね。

質問の回答に反応したのはジョーンズだけで、問うてきたオグリキヤップは顎に手を添えて考え方をしているようだつた。

なにか気になることでもあつたか？

「ルドルフと戦うのか」

確認するように呟いてから、オグリキヤップは立ち上がつた。

「少しだけ部屋の外で待つていてくれないだろうか。キタハラと二人で話したいことがある」

その綺麗な青い瞳には、何かを決意した光が灯つていた。



部屋の外で待つていると、十分と経たない内にジョーンズが出て来た。

なにやら疲れたような、それでいて晴れ晴れとした表情をしている。

「面倒事を持つてきやがって。トウカイティオーのこと、しつかり支えてやれよ」

言われんでも支えるつもりだが、それは併走OKということだろうか。

「この件に俺は関与しない。個人的な恨みで”皇帝”に意趣返しをしてやりたい気持ちもあるが、それはお前らに任せること……はあ。何を言っているのかさっぱり分からんが、ジョーンズもルドルフから被害を受けたことがあるのか？」

「本当にいいのか？　マスコミはすぐに嗅ぎ付けてくるし相手するのは面倒だぞ」

『夢を応援したいんだ』。そう言われたら、俺に断るつて選択肢はないさ。但し、トレーニングの内容と条件は全部オグリが決める。それ以上を求めるのはなし。それと、今度お前の奢りで一杯やるぞ』

……夢ってなんだ？

今回の件に、ティオーの夢が関わっているなんて話をした覚えはないんだが。

まあ受けてくれるならいいか。
それにしても対価が飲み会かよ。

どうせならジジイ連中とかスピカのトレーナーも誘つて久しぶりに野郎どもで飲むか。

俺は酒に強くないからコーラだけど。

「あと”皇帝”と戦うなら一個だけアドバイスしてやる。トウカイティオーにも伝えておいてくれ」

おお、それは有難い。

ルドルフの勝ち方ってあんまり特徴がなくて対応とか思い浮かば

ないんだよな。

「『呑まるるな』。 そうなつたら誰も勝てない」

呑まれる？

「それはプレッシャーとか放つてる雰囲気について話か？」

学生とは思えない圧を出してるよなアイツ。

適当にやり込められるだろとか思つてた昔が懐かしいわ。

「実際はそんなんだと思う。 ただ、オグリが言うにはターフの上だと物理的な話になるらしい」

ルドルフはターフに立つとパックマンとかワンワンにでも変身するんだろうか。

「まあ、その前に今日の併走だな。 半端な覚悟だとルドルフと戦う前に折られるぞ」

最後によく分からん不吉な事を言つてジョーンズは去つていった。ここ、アイツの部屋なのに何処に行つたんだろうか。

というか折るつてなにを？ 今日、これから併走してくれるの？

そんな疑問に首を捻つていると、オグリキヤップも部屋から出て來た。

「待たせてしまつてすまない。 急な話だつたから準備に手間取つた」

その姿は制服ではなかつた。

トレーニング用のジャージでもなかつた。

「それにしても、あのトウカイティオーと走れるのか。 楽しみだな」

どちらが強いか。

それを決めるための勝負服に身を包んで、オグリキヤップは立つていた。

惚けた表情は鳴りを潜め。

目を爛々と輝かせながら。

一点の曇りもない漆黒の戦意を滾らせて。

「さあ、トレーニング場に行こう」

なんの予兆もなく唐突に。

最強の一角を担うウマ娘がトウカイティオーの前に立ちはだかつた。

「私に勝てないようでは、ルドルフに勝つだなんて夢のまた夢だぞ」

領域

「オグリキヤップを指名したのは確かにボクだよ？ けど、なんで勝負服なのさ？」

「なんででしようね。俺にもさっぱり分からないよ。

「こうして話すのは初めてだな。オグリキヤップだ。改めてよろしく、トウカイティオー」

ヘイ彼女、うちのティオーと一緒に走つてみないかい！くらいのノリで特に喧嘩を売ったつもりはなかつたんだが、なぜかオグリキヤップは臨戦態勢だ。

白いセーラー服をベースに胸元には赤いスカーフと星のような菱形の装飾品。

葦毛の髪も合わせり、ターフを駆ける姿はまるで白い流星のようだともつぱらの評判である。

「あつ、うん。こちらこそよろしく。ちょっと驚いたけど、急なお願いだつたのに引き受けてくれて、ありがとう」
対するティオーもまた、勝負服に身を包んでいた。

オグリキヤップが流星ならばティオーはなんだろうか。

大阪杯での他を圧する威容、天皇賞で見せた勝者と健闘を称え合う姿に”皇帝”を幻視したという意見が少なからずある。

それでいて敵対者へ見せる態度には冷たい意志が見られるようになつた。

勝負服の色も合わせると……火山弾とかか？

「ここまで準備したつてことは、お互に本気でやるつてことでいいんだよね？」

併走トレーニングの相手を務める条件として、オグリキヤップが提示したのは二つ。

お互いを知るために、まずは真剣勝負をしてほしい。

そして、年末の有馬記念でシンボリルドルフに勝つてほしい。

二つ目の条件が持つ意味を俺は測りかねていた。

負けて不利益を被るのは俺とティオーだ。

負けられると訓練の相手をした時間が無駄になるという考えはあるかもしれないが、わざわざ条件として挙げるものだろうか。

「ああ、時間は多く残されてはいない。力の限りを尽くしてほしい。私もティオーレルドルフが戦うのがもつと先であれば、無理に手を出そうとはしなかったんだが」

「ボクも今年ぶつかることになつたのは予想外だよ。しかも会長から仕掛けてくるなんて。なにが気に障つたんだろうね？」

「春の天皇賞。それは間違いない。気に障つたという言い方が正しいかは分からないが、手をこまねいている場合ではないと思つたのは事実だろう」

「そんなに今のボクは想定外かな？ 真つ当に成長した自覚があるんだけどね」

……あれ、もしかして俺だけ理解が及んでなくて二人はなんか分かつてる感じなんだろうか。

もつと理解しやすい表現で話してほしいんだけど。
「ふふっ、以前のティオーレは今ほどルドルフに反抗的ではなかつたと思う。なにより、彼女の居る場所を夢と定めて其処に近づこうとしていた」

それは確かにあるな。

明るく快活なのは変わらない。だが、人懐っこさや気安さというものは随分となくなつてしまつていて。

きつとマスコミやらネットのにわかファン達に嫌気が差したのだろう。然もありなん。

「その赤い勝負服がルドルフには決別の証に見えるんだろう。それが耐えられないんだ。また、私から離れていつてしまふのかとね」

「今も会長のことは尊敬してるよ。ううん、むしろ三冠を夢見ていた頃よりもずっと強く想つてる。シンボリルドルフは本当に凄いうま娘だつて」

そう語るティオーレのまなざしには、キラキラとした憧れとは全く別の深い思慮の色が見えた。

シンボリルドルフのなにを凄いと思っているのか。

単純な強さや実績ではない何かを、ティオーは昔よりも鮮明に感じ取っているらしい。

「それは本人に直接言つてあげて欲しい。きっと、飛び跳ねて喜ぶだらう」

……デムーロジャンプして喜ぶシンボリルドルフ。

宇宙から飛来した謎の電波によつて変な映像が頭に浮かんだ気がするが忘れよう。

「それは無理かなつ！　いまボクは会長とバチバチにやりあつてるからね！」

互いを忌み嫌い排除したいと思つてゐる訳ではない。

だが、爽やかに笑顔で良い勝負にしようと言えるほど蟠りがない訳でもない。

相手に好意を持ちながらも、雌雄を決さずにはいられない。
トウカイティオーとシンボリルドルフはそういう状況に至つている。

これがアオハルというやつなのだろう。

「そうか、バチバチか」

——そう言つておかしそうに笑つたあと、オグリキヤップは表情を憂いを帯びたものに変えた。

「私はルドルフから期待された三つの内、二つまでしか叶えてやることが出来なかつた」

世間を熱狂させるスターとなり、トワインクル・シリーズを盛り上げること。

”皇帝”の座を脅かすほどの好敵手となること。

オグリキヤップというウマ娘が成つたのはそこまで。

「ルドルフのために走つていた訳ではなかつたし、叶えて欲しいと頼まれてもいなかつた。だが、そとはならなかつた私を見て寂しそうな顔をしていたことが、少しだけ心残りだつた」

彼女なら、もしかしたらと思われていたのだろう。

己の身を粉にしてウマ娘みんなの幸せのために邁進する”皇帝”。

その夢を抱いたことにも、進んで来た道にもきつと後悔はないはず

だ。

それでも、長く険しい道を一人歩むことに寂しさを感じない訳じやなかつた。

「自分の隣に立つてくれる存在をルドルフはずつと待つてゐる。頼もしい先輩達とは噛み合わず、期待していた私もそうじやない側だつたからな」

シンボリルドルフの隣に立ち、共に歩む存在。

強さだけではなく信念でも”皇帝”と並び、夢を同じくする者。オグリキヤップにはそうなれるだけの過程があつた。

成功者は極少数と言われる地方上がりの田舎者。

初戦で勝つことは困難極まると言われる編入生としては異例の連戦連勝。

自分を追つてカサマツからやつてきたトレーナーと組むという異色。

シンデレラの如く煌びやかに、降りかかる困難も目が眩みそうな栄光も乗り越えた自分は適任ではあつたのだろう。

しかし、私に出来るのは己の道を征き、走りで示すことだけだつた。想いを口にして伝えるのが下手すぎて、せいぜい客寄せパンダにしかならない。

誰かに手を差し伸べて分かりやすく道を示したりはできない。

私以前に期待を寄せられていたウマ娘たちは……自由であるが故の強さを持つ者たちだ。

善良で有能ではあつても、ルドルフの示す行き先へ最後まで付き合つてくれる同行者にはならなかつた。

ヒト、ウマ娘問わず賛同者も協力者も大勢居るが、その全ては後ろを付いてくる者たちだけ。

身を寄せる先もなく、空いたままの両隣がもたらす寂しさは少しづつルドルフの心を削つてゐる。

そうして数にして三度。ルドルフは並び立ちたいと望んだウマ娘から振られている。

だから四度目は、自分の事を夢だと言つてくれたトウカイティオー

にだけは振られたくないのだろう。

その兆候は以前から見え隠れしていて、ふと立ち話をしただけでもルドルフらしからぬ焦りを感じることがあつた。

その結果が、今の暴走気味な干渉に繋がっていることもなんとなく分かった。

あの時、ルドルフの手を取らなかつた私に何がしてやれるのか。対立するトウカイティオーの併走相手を務めることは、そのままルドルフへの敵対行為になるのではないか。

そうした逡^{しゆん}巡^{じゆん}がない訳ではない。

だが頭の良くない私でも知つていることがある。

悩んで悩んで悩みぬいて、それでもどうすればいいかの分からなくなつた時。

そういう時は強いウマ娘と頭空っぽになる位に全力勝負をすると大抵上手くいくのだ。

だから私と全力で戦おう、トウカイティオー。

そうしてルドルフとも戦つてあげて欲しい。

難しいことが頭から抜け落ちて、勝つことだけに全力を尽くさなければいけないほどの。

——最強のウマ娘として。



「そんじゃ始めるぞー。二人とも位置に付けー」

イマイチ気合の入らないトレーナーの掛け声を聞きながら、スタートラインに向かう。

想定距離は芝二千二百の右回り。

会長との戦いを意識するならば二千五百の勝負になるかもと考えていたが、オグリキヤップ先輩が選んだのは宝塚記念をベースにした条件だつた。

コースの外周にはどこから聞きつけたのか百人を超えているどう野次ウマ。

伝説的な人気を誇るウマ娘と二冠ウマ娘がトレーニングとは言え
勝負服まで用意してタイマンをするのだ。

興味が湧くのも仕方ないことではある。

「それにしても、少しくらいは遠慮というか取り繕つてほしいんだけどなー」

ワラワラと群がつてきている観客に言つてゐる訳ではない。

指定された距離からゴール係が必要だという話になつたとき、気前
良く手を挙げて立候補してくれやがつたウマ娘に対して言つてゐる。
ここ最近、本当に露骨になつてきた。

チラリを目を向けたゴール地点で、目を細めてニンマリと素敵な笑
顔を浮かべてゐるウマ娘の名をナイスネイチャという。

その顔が明確に物語つていた。

一番良いポジションで分析して対策練らせていただきますね、と。
「同期の好敵手があんなに性格悪いだなんて、嫌になっちゃうよね」
排他的な性質に目覚めた自分のことを全力で棚上げして、ネイチャ
に白けた視線を送る。

その視線をナチュラルに無視するナイスネイチャを見て、ティオ一
は溜息を吐いた。

「走る前に伝えておくことがある」

同期の逞しすぎる成長に世を憐んでいると、隣に並んだオグリ
キヤップから声が掛かつた。

「春の天皇賞を私も現地で見ていた。あの時、ティオ一がぶつかつた
壁の先に『領域（ゾーン）』がある。超える時の状況はそれぞれ違うが、
極限の集中状態というのは共通する要素らしい」

『領域（ゾーン）』

スポーツをしてゐる者なら聞いたことくらいはあるだろう。

物事に没頭し、高い集中力で臨むことで限界以上の力を發揮する事
象。

それは、確かに春天を走つたときの自分が持ち得なかつたモノだ。
勝つか、次に繋げるか。土壇場で悩んでいては集中できるはずもな
い。

壁の先、マツクイーンが見せた白い翼は其処に踏み込んだという事だつたのか。

「集中力を高めるためにはルーティーンというものが有効らしい。私も意識してやつてている訳ではないが、周りから見ると実行していると言われた」

「ルーティーンって野球のバッターとかテニスのサーブでよく聞くやつだよね？」

細かい原理は知らないが、特定の状況と動作を関連付けることで精神を安定させる、みたいな方法だつたはずだ。

「でもそれって試合が動いてない時間のある競技だから出来るんであって、スタートしたらノンストップのレースじや使えないんじやないの？」

すでに動いている状態から実行できるようなものではなかつた気がするが、慣れればレース中の動作でも使えるのだろうか。

「そうだな。厳密にはルーティーンではないのかもしない。だが、レースでも往々にしてそれは起こつているんだ。例えばレース終盤で先頭を競り合う。例えはレース後半に一定数のウマ娘を追い抜く」目を閉じて例を挙げていくオグリキャップの瞼の裏に浮かんでいるウマ娘は誰なのか。

それが少しだけ気になつたが、いま重要なのは其処ではない。

「つまり、自分の得意とするレース展開を集中するためのトリガードするつてことだよね」

勝ちパターンを構築してそこに持ち込む。そうすれば余計な事を考えず一点集中ができる。

そういうつた理屈だろうか。

「ああ。得意な展開とは即ち、自分のウマ魂が最も燃える展開でもある。ウマ魂を全力で燃やし、目の前の勝利を掴み取る事に心と体を傾注させる。それが領域に至るコツだ」

納得のいく説明ではあつた。

自分ならばダービーか大阪杯がそれに近い。
思い描く通りに動く体とレース展開。

いくらでも速く走れそうなの感覺は、高い集中状態にあつたからだと言える。

だが、自分が限界の壁にぶち当たつたのは天皇賞だ。

集中力が影響しているのなら、壁を超えられるかもしれない感覺を抱くべきは二つのレースではないのか。

ダービーと大阪杯。その二つと天皇賞。

そこにあつた違いは――。

「話し込んでるみたいだが始めて大丈夫か？ ギヤラリーが増え続けてるから收拾が付かなくなる前に終わらせたいんだが」

考えに沈みそうになつていた意識がトレーナーの声で戻つてくる。

答えを出さず半端にしてよい問題ではない。

見世物になるのは避けたいが、少し時間を貰つて考えるべきか。

「心配することはない。足りないピースは此処にある」

胸に手を置き自身を指したオグリキャップは、力強く答えを示した。

「全力を尽くし、全てを擲つても届かないかもしれない好敵手。それが限界の先に至るのには欠かせない」

……ああ、なるほど。

あの時はマックイーンが居てくれたから。

それならば、確かに不足はない。

なにせオグリキャップは不世出のアイドルウマ娘であると同時に

――。

幾多の強敵と死闘を演じ勝利してきた”怪物”なのだから。

頂点V.S帝王

トウカイティオーネの目的は走法の改善にあつた。

オグリキヤップのスタイルはレース序盤は中段から後段に付いて戦況を窺い、終盤に驚異的な末脚でぶち抜くものだ。

先行策が採れない訳ではないが、最も得意とする作戦は分類として差しに当たる。

シンボリルドフもまた得意とする作戦であり、実力においても両者は伯仲していると言えるだろう。

しかし、仮想シンボリルドフの相手としてオグリキヤップが最適かと問われれば、答えは否である。

オグリキヤップが己に降り掛かる不条理や困難を力でねじ伏せるのに対して、シンボリルドフは自身の不利、或いは不利だろうと思つてゐる周りの認識すら利用してレース展開を制御する。生糞の暴と卓越した謀。

互いに優劣はなくとも代替とするには適さない。
故に併走の目的は対策ではなく成長である。

オグリキヤップを象徴する柔軟な膝関節と極端な前傾姿勢が生み出す異様な走法。

それを自身の走りに取り入れることがトウカイティオーネの狙いだつた。

関節の柔らかさが可能にするストライド走法はトウカイティオーネ得意とするところ。

現時点での両者の違いは、脚を踏み込んだ際に生み出す推進力のベクトルにある。

跳ねるように走る。

トウカイティオーネの走りはしばしばそのように表現される。

それはつまり、推進力の幾分かは上方に向に費やされているということだ。

上から下へ、重力と体重によつて発生する落下方向の運動エネルギーを次の一步に繋げることが爆発的な出力を生み出していること

も事実だが、着地の瞬間に掛かる負荷は相応に大きい。

対してオグリキヤップはどうか。

前傾姿勢は踏み込みが生み出す推進力を上へと拡散させず、その全てを前へ進む力に変換する。

あたかも地面スレスレを低空飛行する戦闘機が如き一直線。

姿勢が上下することに伴うロスの削減と荷重によつて膝に掛かる負担の軽減。

効果が見込めるか未知数な部分はあるが、どちらにしろ今のままでは”皇帝”に届かない。

”頂点”に挑み、そのレベルの強さに至る足掛かりとする。

それがこの併走の、一バ身後ろから追つてくるウマ娘の協力を求めた本来の目的だった。

(……領域があ)

トウカイティオーが先行している現状、走法を直に見ることができないため、自然とレース前の会話が頭をよぎつていた。

春の天皇賞で立ちはだかつた限界の壁。

その先へ至る方法について、トウカイティオーは今日まで一旦は考えることをやめにしていた。

なにせ、一番簡単な方法が怪我をすることを気にせず走ることなのだ。

リスクを考慮しなければ恐らく超えられる。

一着以外では自分の魂が納得しないということも実感できだし、怪我をした場合トレーナーに寄り掛かつてしまふこと以外には躊躇する理由もない。

しかし、そのやり方に無理矢理感を抱いていることも否めない。正道で至るには最低でも筋力のさらなる強化が必須だと思つていた。

或いはここでオグリキヤップの走法を学ぶことが、壁を超える一助になるだろうか。

(それも含めて第四コーナーからかな)

思いがけず始まつた、勝負服を着ての併走という名の真剣勝負。

しかし、第三コーナーに差し掛かつた時点では静かな展開に終始していた。

二人だけの勝負にはペースメーカーとなるようなウマ娘も居らず、タイムを意識している訳でもない。

前を行くトウカイティオールは、その優れたセンスでタイムを正確に把握していくが、距離二千二百としては比較的スローペースを維持している。

オグリキャップの抜群の末脚を見るためにある程度は計算ずくだつた展開の中で、トウカイティオールはある言葉を思い返していた。（葦毛の怪物つて女の子に付ける渾名じゃないよね）

”怪物”と、そう渾名されるウマ娘は幾人かいる。

たいていの場合は圧倒的な強さを持つ存在の比喩として、ファンや外部の人間が言い出したものが定着する。

それはあくまで強さの表現であつて当人の外見や内面、性質を表してはいない。

だが、オグリキャップについては少々事情が異なる。

実際に戦ったウマ娘たちはこう語る。

『後ろから迫つてくる怪物の足音を聴いた』

ヒトを遙かに凌駕するスピードを發揮するウマ娘の脚はターフを抉る。

発する音もヒトの陸上競技に比べると相応に異なる。

他に類を見ない走法を取るオグリキャップとなればさらに異質だろう。

不安定な走行姿勢でも全くぶれない体幹。

終盤の凄まじい追い上げの原動力たる脚力。

なるほど、それらから繰り出される音は尋常なものではないのだろう。

何度機会を用意してもらえるか分からぬ貴重な併走相手。

その強さを余すところなく体感し、全力で超えさせてもらおう。

そんな慢心が少なからずトウカイティオールにはあった。

トウカイティオールは挫折を知っている。

トウカイティオーは信頼が裏切られる事を知っている。

トウカイティオーは夢の終わりを知っている。

だが、それらは全て外的要因に寄るものだ。

彼女は今以て、才能と努力の果てに影すら踏めない相手が居ることは知らない。

万全の状態であるならば、誰が相手であろうと勝利に手が届くと疑わない。

そして”怪物”とは往々にして、そうした傲る者に牙を剥く。

ズンツ、と。

音としては、そうなるだろうか。

第四コーナーを超えた最後の直線。

地面が揺れたかと錯覚するような振動を伴つて、それは現出した。後にして思えば、揺れたのは地面ではなく自分の体だったのだろう。

身の毛のよだつのような圧迫感に体が震えたのだ。

それでも尚、トウカイティオーの心に浮かんだのは負の感情ではなかつた。

怪物の存在を背に感じながらも、これをこそ求めていたのだと口角を吊り上げ脚に力を込めた。

マツクイーンとの激闘に匹敵するだろう戦いの予感に心が躍り、限界の壁に挑む疾走が始まつた瞬間――。

自身の小柄な体躯をさらに下から潜るかのように、”怪物”は瞬く間に隣に並んできた。

(……ツ！)

こと此処に至つて、ようやくトウカイティオーは正しく測ることが出来た。

漠然と今まで勝てないと感じていた”皇帝”との間に広がる差。

それが今、己の真横を駆け抜けていった。

互いに十二分に脚を残して迎えた最終直線。

維持していた一巴身は一秒で詰められ、拮抗した時間はそこから一

秒にすら満たなかつた。

加速に於いても最高速に於いても常に抜きんでた強さを示してき
た”帝王”は”怪物”に蹂躪されようとしていた。

あえて言い訳をするのならば。

それはシニア級を戦い抜いた歴戦のウマ娘と上がりたてのウマ娘
の差であり、ドリームトロフィー・リーグという世代を超えた天才た
ちの戦場で今も鎧を削る猛者との差であり、春の天皇賞でようやく初
めて好敵手と呼べる強さのウマ娘と競えた若手が及ばぬのは仕方の
ないことだった。

それでも、決戦の日はすぐにやつてくる。

負けられない戦場がやってくる。

己が天賦の才と不斷の努力を以てしても尚、半年という時間で埋め
るには非現実的な距離。

シンボリルドフもまた、一切の容赦なく敗北を突き付けてくるだ
ろう。

その現実に、二バ身にまで広がつた差が齎す冷たい恐怖に心が飲み
込まれそうになつたとき。

スタート地点に立つトレーナーの姿が目に入つた。

喪失の後に得た、あの日から変わらず自分を見守り続けてくれてい
る大切なヒト。

負ければ、あのヒトが離れて行くかもしれない。

勝利に執着せねば、また失うもしれない。

トウカイティオーは思い出した。

シンボリルドフが誰に手を出したのかを。
何を盗んでいこうとしているのかを。

ドクン、と心臓が鼓動する。

全身を巡る血が熱く沸騰する。

頭に上つた血で視界が朱黒く染まる。

あのヒトを奪うことだけは『絶対』に赦さないという想いが、魂に
黒い火を灯した。

「思つていたよりもずっと強かつたな」

オグリキヤップから放たれたそれは、敗北者へ向けた慰めの言葉だつたのだろうか。

「強かつた？ ボクは自信なくしそうだよ。調子や作戦に左右された訳じやない、完全な力負けだつた」

菊花賞と春天で負けた経験があつて良かつた。

これが初敗北だつたら、ちょっと立ち直れなかつたかもしれない。そう思つてしまふほどに、"頂点"は高いところにあつた。

最終的に二バ身まで広がつた着差。

両者の間にある実力差はそれ以上であろうことが感じ取れてしまつた。

「逆じやないか？ 今日、負けたことに実力はあまり関係ない。完全に作戦ミスだ」

「……えつ？ いやだつて一人だけの勝負なんだよ。作戦なんてお互

いになかつたんじや」

バ場の荒れを考慮しての内外やポジション争いと呼べるようなものは起きなかつた。あつたのは最終直線からの純粹な速さ勝負だけで、後は追う側か追われる側かを選ぶくらいだつたはずだ。

だからこそ、勝敗は実力のみによつて決まり、言い訳は利かないはずだ。

「ティオーが先を行き私が後を追つた。その時点で結果は決まつていたようなものだ」

確証があるかのように断定的に話をするオグリキヤップの考えに理解が及ばない。

あまり頭の良いウマ娘ではないと聞いていたが、会話を成り立たせられないボクはもしかして物凄く頭が悪いのだろうかと不安になる。「私も話すのが上手いタイプではないから伝わりづらいのかもしれないな。順を追つて確認していこう」

そう言つてオグリキヤップは質問を投げかけて來た。

「先ほどの勝負、ティオーは本気だつたな？」

「もちろん」

慢心が心にあつたかもしれないが、それでもトウカイティオーは一切手は抜いていなかつた。

「なら、限界の壁は感じられたか？」

しかし、春天のときほどに心に沸き立つモノがあつたのかと問われれば、答えはノーだつた。

「全然、感じられなかつた」

メジロマックイーンよりも現時点では強いはずのウマ娘と全力で勝負したのに、あの時の感覚は欠片もなかつた。

相手との実力差があり過ぎて勝負にならないようでは、ダメなのか。

「いまティオーが考えているように力の差が大きいと『領域』に入れなることはある。但し、それは自分が強い場合の話だ。普通に走つて勝つてしまふからな。……ティオーは春天と今日の違いが分かるか？」

あの時との違い。

前を走るメジロマックイーンに勝ちたいと思つて走つていたあのとき。

「ボクが先頭を走つている……？」

後ろからオグリキヤップが追つてきていることは常に感じ取つていた。

だが、マックイーンに追い付きたいくつたときほどに、逃げ切つてやるという強い意志が湧いてはいなかつた。

「その通りだ。私とティオーは『領域』に入る条件が似ている。見定めた好敵手に迫り追い抜くことにこそウマ魂が震え、燃え上がる。十数人で走るレースに対しても二人しか居ないこの併走では、前を走つた時点でティオーが不利だつた」

好敵手を見定め、追い縋る。それがトウカイティオーが『領域』に入りやすい条件。

「逆に相手に追い抜かれて離されるとダメだな。勝負根性を鍛えろと

いう話ではあるんだが、忌避感が出てしまう」

そりやあそだろう。突き放される感覚が好きなウマ娘なんて居るはずない。

いや、そういう展開でこそ燃える性質かどうかという話か。

まあ、ボクはそんなドMではないけど。

などと、トウカイティオーは特定のウマ娘に喧嘩を売ることになるかもしれない感想を抱いた。

「最初に言つてたのは、ボクが後ろを走つていれば勝つたかもしだれな
いつてこと?」

元より目的はオグリキャップの走法を見ることにあつた。
真剣勝負であつたが故に先行策を採つたが差しの方がよかつただ
ろうか。

「それもある。気付いてないようだから言つておくが、私は『領域』に
入つていたぞ。そして、最後の百メートル地点からずつと差は二バ身
のままだつた」

『領域』に入つていたことはトウカイティオーも知覚していた。突
然に増した圧迫感と加速の理由がそれだろうという予測も付いた。
しかし、二バ身差のままだつたことに何か意味があるのかが分から
なかつた。

『領域』には全力を尽くさねば勝てないほどの好敵手が必須。つまり、ティオーはすでに私が『領域』に入れなければ負けると予感させ
るほどに強いということだ。そして君は私と同じ場所に至つていな
いにも関わらず、最終的に速度に於いて並んだ

最後の百メートル。

『領域』に至り”怪物”と呼ぶに相応しい力を発揮したオグリ
キャップに匹敵するほどの速度を、トウカイティオーも見せていた。
「むしろ私よりも君の方が”怪物”らしいのかもな。抜き去つて勝利
が確定的になつたというのに、背を炎に焼かれているのかと錯覚する
ほどの熱量を感じた」

そう言つてから『本当に焼けたりしてないよな』と首を捻つて勝負
服の背中を確認するオグリキャップとひとしきり笑い合つた後、トウ

カイティオーは自分が感じたものを伝えた。

「なんかね、このままじゃ負けちゃうって思つたときにトレーナーの事が見えたんだ。そうしたら心臓が強く脈動して全身に力が漲るような感じがした」

実際には血が沸騰して目の前が真っ赤に染まりもしていたが、それでもあの感覚がなければ差はもつと開いていただろう。

「そうか。勝ちたい理由がブレないウマ娘は強い。様々な要因でそれは崩れてしまうものだが、君たちは大丈夫そうだな」

そう話すオグリキヤップの目には憂いと羨むような色があつた。

「アイドルウマ娘でもそんなことがあつたの？」

オグリキヤップが走る理由。

それは応援してくれるファンのためであるということは、テレビや雑誌で幾度となく語られていることであり有名な話である。

「ファンからの声を苦痛に感じたことだつてあつたさ。それでも今私のなれたのは、キタハラとカサマツの皆が居てくれたからだ」

オグリキヤップのトレーナーであるキタハラは、トウカイティオーのトレーナーと同様に他に比べて育成能力が秀でているという訳ではない。

それでも、オグリキヤップがトレーナーを呼ぶ声には深い信頼が宿つていた。

『領域』については話すことができたし、今日はこれくらいでいいだろう。今後も定期的に併走できるようにキタハラには頼んでおく。だからティオー、どうか”皇帝”に勝つてほしい

併走の対価として出された条件。

シンボリルドフの常ならざる態度の理由の一端を知り、オグリキヤップが少なからず過去に悔いを残していることも分かった。

元よりトレーナーを取り返すためにボコボコにするつもりだつたのだ。

断る理由もない。

「まつかせて！ 高いところでふんぞり返つてる偉そうな”皇帝”様を玉座から引き摺り下ろすつもりだから！」

玉座から引き摺り下ろす。

なるほど、それはいい。

普通のウマ娘に戻れば、ルドルフも背負っている荷を降ろせるかも
しれない。

きっとそれは叶う。そう思わせてくれる目の前の小さな“帝王”
を見ながら、オグリキヤップは柔らかい笑顔を浮かべた。

一心同体

トウカイティオーとオグリキャップの勝負が終わり日が沈んだトレーニング場には、微かな熱気が残留していた。

抜きん出た実力と人気を誇り、特異な走法が持ち味である両者の勝負が見物していたウマ娘たちの心を湧き立たせたからだろう。

ウマ娘ならば魅せられずにはいられない速さ。

自分もなりたいと、望まずにはいられない強さ。

シンボリルドフが期待した世間を熱狂させる『スター』と呼ぶに相応しい綺羅星の如き輝きを二人は持っている。

その光はたつた一度の併走だけでも、多くのウマ娘に夢を与えるほどに強い。

そして、光が強いほどに日陰が産み落とす黒は色濃くなしていくものだ。

「はつ……、はつ……」

誰も居なくなつたトレーニング場で一人走り続いているナイスネイチヤは、少なくとも自身の認識としては日陰側の存在だった。

優れた存在に成れたらいいなど夢想することはあつても、それが実現したことはない。

トウカイティオーという遠くで輝く星に手を伸ばそうとしては、その手を引っ込めてきた。

G Iを獲るには力不足でもあつたし、斜に構えたところがあつたことも事実だ。

もつとも、それも今となつては昔の話。

ナイスネイチヤには叶えたい夢ができた。

「こんな速さじゃ話にならない。ティオーはもつともつと速い。……もう一本だけ二千二百で」

ナイスネイチヤと南坂は宝塚記念に出走すると決めていた。

トウカイティオーとの決戦の場として定めた訳ではなく、その前哨戦。

菊花賞を乗り越えて以降のトウカイティオーに起こっている変化

を肌で感じ、勝つために用意した札がどこまで通じ得るかを探るための確認の場。

今日行われた併走は、ナイスネイチャの思惑と無関係ではあつたが近い状況が再現されていた。

そして近いがゆえに、あとどれほど手を伸ばさなければ届かないか理解できてしまった。

宝塚記念への出走は勝利を目的とはしていない。

それでも、切り札以外は全て投入する予定にしていたレース。

多分に初見殺しの要素を持たせている切り札を使わないということとは、絡め手なしの真っ向勝負を挑むということである。

基本的に勝ち目のない勝負ではあるが、それでもボロ負けすることはあるってはならない。

蟻一匹が巨象に策を弄したところで意に介されはしない。
せめて競い合いが成立する程度の強さを持つていなければならぬのだ。

そして今のナイスネイチャにとって、素の実力だけでトウカイティオーと競り合う自信を持つことは、それなりに難題だつた。

「ダメですよネイチャさん。これ以上はオーバーワークにしかなりません」

汗を拭い、疲労で力が入りづらくなってきた脚に鞭打つてスタートの構えを取つたナイスネイチャに声が掛かつた。

「もう門限も近いです。皆さんも心配されていましたよ」

残るカノープスのメンバーである三人とのミーティングを済ませた南坂が戻つてきていた。

ここ最近はチームとしてのトレーニングを終えた後、ナイスネイチャと南坂の二人で居残りトレーニングをすることが日課となつていた。

三人も付き合うことを希望していたが、トウカイティオーに勝利することを誓つたナイスネイチャがこなしているトレーニング量は怪我に至らないギリギリのラインを攻めている。

複数人に同時に無茶をさせると南坂のキヤパシティを越えかねず、

マンツーマンが最善と判断していた。

「そんな時間だつたんだ。いやー、最近はなんだか時間が経つのが早いね。アタシも年を取つたもんだ」

そんな軽口を叩きながらも、ナイスネイチャはコースから出てこようとはしなかつた。

トウカイティオーとオグリキャップの勝負に自分も参加したらどうなつたか。

決して結果は喜ばしいものにはならなかつただろう事が分かる。だから、脚を動かさずにはいられない。止めてしまえばもつと引き離される。

トレーニング場に残る熱気とは裏腹にナイスネイチャの心は冷たかつた。

「もう一本だけ、お願ひ。私は自分の全部でティオーに勝つて決めたの。こんな所で立ち止まつてられない」

二人の天才がぶつかり合う好勝負に、見物していた者達は沸き立つていた。

あの併走は、心に余裕がある者にとつては楽しいイベントだつたのだ。

だが、そうではない者にとつてはどうか。

例えば切実に、悲痛と言つてもいいほどにレースで勝利することを望む者にとつては恐怖でしかなかつた。

ドリームトロフィー・リーグを主戦場としているオグリキャップはともかく、トウカイティオーは現役でシニア級を走つているのだ。

王道たる中距離でG Iを獲るには、アレに勝たなければならぬのだ。

見せ物としてではなく、競う相手を分析するために見ていた者達は気付いていた。

トウカイティオーの走りが、春天地からまた変化したことには。

菊花賞以前にはなかつた、攻撃的な力強さを持つた走りからの更なる進化。

自身を追い抜き前を走る”怪物”に再び迫るために、彼女は無意識

に”怪物”を真似た。

姿勢はより前傾に、跳ねるのではなく踏み込んだ力を全て前進するためだけに使う走り。

体が上下に振れる幅を大きく減らしたその走法は、赤い影が地を駆けているようにも見えた。

簡単に真似できる動きではないはずだつた。

極端に広いストライドを取りながら姿勢を前傾させるには、関節の柔軟性とバランス感覚が必要不可欠だ。

自然と頭を下げた体勢になるため、レース展開を俯瞰するのにも不向きで使い方を誤ればバ群に沈んでしまう。

それでもトウカイティオーは、それらの条件を難なくクリアしてしまえるウマ娘だつた。

アレが自分の好敵手ライバルなのだ。

アレを倒すと、心を折つてやると、勝ちたいという想いに蓋はしないと決めたのだ。

ならば限界まで鍛え、ティオーが挑んでいたであろう何かを自分も超えるしかない。

「いいえ、ダメです。それはネイチャさんが頑張つている自分に酔つて自己満足したいだけです。そこに成長はなく、脚を無駄に浪費するだけ。トウカイティオーに勝ちたいのなら、明日に備えて回復に努めてください」

南坂から出た忠告は、どこまでも無慈悲にナイスネイチャの心情を読み取つていた。

「……もうちょっと優しい言い方してくれてもいいじゃん」

「優しさを望まれるのでしたら幾らでもしますよ。けれど、勝つために厳しくしてほしいと言つたのはネイチャさんだつたはずです。僕はトレーナーですから、担当するウマ娘の要望に全力で応えます」

年頃の女の子に対しても向けるにはあんまりな物言いであつたが、勝利を欲するアスリートに対しては必要な助言。

それが頭では理解できいても、ナイスネイチャは南坂を睨み付けること止められなかつた。

「でも、それじゃティオーに勝てないかもしれない」

トウカイティオーに伸びしろが残っていることは分かつていた。

それでもたつた一戦しただけで、あそこまで進化するだなんてズルい。

アタシがあれだけ成長しようと思つたら、どれだけの努力が必要になるか。

同じ密度で時間を過ごしていっては話にならない。

遊ぶことをやめて、寝る間も惜しんで足搔くしかないんだ。

以前からあつた天才への憧憬は、ずっとナイスネイチヤの中に渦を巻いていた。

グルグルと出口のないまま溜まつていく一方の感情は、本気になると決めたことで更に淀んでいき、前に進むばかりの好敵手を見て爆発寸前だった。

「勝つって決めてさ、心が晴れたんだ。ずっと自分にしてた言い訳が必要なくなつて、全部を勝つために使えるようになつたから」

アタシは天才なあの娘と違つて普通だから。

アタシなりのそことこにしか頑張つてこなかつたから。

勝つとか強くなるとか、そういう熱いのは生理的に受け付けないから。

そんな言い訳をずーっとしてきた。

全部嘘なのに。

天才だつて呼ばれる位に勝ちたかつた。

精も根も尽き果てる位に頑張つてみたかつた。

いつまで経つても消えてくれない熱い火が自分の中にあることを知つていた。

けど、全力を出して本気になつてしまつたら。

それでも力及ばずに負けてしまつたら。

もう、なんの言い訳もできなくなつちやうじやん。

「怖くなつてきたの。アタシはいま、人生の中で最高に頑張つてる。一番強いアタシになつて自信を持つて言える。頭も体も全力で動かして。それでも負けちゃつたらさ、もう次なんてなくなつ

ちやう」

トウカイティオーの心を折る。

口に出すだけならば、なんて簡単な事なのだろうか。

それが成せなかつたとき、折れて二度と戻らなくなるのは自分の方だ。

「天才つて凄いよね。勝つて当たり前だつて自分も周りも思つてるんだよ？ それで負けちゃつたらどれだけショックを受けるのか想像もできない。なのに、ちゃんと立ち上がりつてまた歩き出すんだもん。眩しすぎるよ」

なぜ、ナイスネイチヤは菊花賞に出られずトレーナーとの契約を解消されたトウカイティオーに優越と快感を覚えたのか。

多分にねじ曲がつた感情表現こそしているが、根本的にはトウカイティオーと自分に大した違いなどないと知りたかったからだ。

大好きな友人は異次元の意味不明な超常存在ではなく、異なる個性を持つているだけのウマ娘なのだと確信を持ちたかつたからだ。

だから、墜ちてくれた友人を見て心底から安堵した。

そして、底から這い上がるトウカイティオーを見て戦慄した。

あれほどの高さから落ちても、まだ立ち上がるのか。

どれだけ絶望したのか想像も付かないのに、まだ折れないのか。アタシなら絶対に無理なのに。

ほんの短い間だけ感じられた安堵は、友人と己の決定的な違いを感じさせるための落差を生んだだけだつた。

だから、ナイスネイチヤも覺悟を決めた。

大好きな友人は待つてゐるだけでは同じところに来てくれないから。

あの娘とアタシはなにも変わりはしないと確信するには、自分が登つていくしかないから。

「負けられないの。勝てなかつたら、認めることになつちやうやつぱり、ティオーとアタシは違うんだなつて。

「そんなのは嫌なの！ だから、我武者羅に走るしかないの！」

人生で初めての、本気の本気。

退路を塞ぎ、どちらかが折れるまで進むという不退転の決意。

自分に言い訳することをやめたナイスネイチャは、一切の逃げ道なく現実と向き合わなければならぬことに、圧し潰されそうになつていた。

「……だからもう少しだけ走らせてよ。待つてくれなくてもいいからさ」

疲労なんて望むところだ。

少しの間だけ、この重たいモノを忘れられるから。

「……優れたウマ娘とは、一体どういう存在のことを目指すと思いますか」

ナイスネイチャの言葉を黙つて聞いていた南坂が不意に問いかけてきた。

「えっ？ ……そりゃあG Iレースで勝つウマ娘でしょ」

他所はともかく、ここトレセン学園には於いてはそれが最も重視される事は間違いない。

「確かにそうですね。しかし、オグリキヤップなどは相応に敗北も経験しています。それにG Iを獲る以前から、強い人気がありました」
カサマツから移籍してきた年の有馬記念。そこに至るまでの重賞連勝記録は称賛に値することだが、彼女はG Iで勝利する以前から“怪物”と呼ばれていた。

「僕は人に夢を見せられるウマ娘こそが、優れていると考えています」
シンボリルドフがトウカイティオーに無敗の三冠という夢を抱かせたように。

オグリキヤップが地方からのシンデレラストーリーを夢物語ではないと示したように。

「あはは、ならやっぱアタシには無理だね」

応援したくなることはあつても、アタシに夢なんて見たりはしないだろうと、ナイスネイチャは自己を評価している。

「そんなことはありませんよ。ネイチャさんに夢を見ている人は此処に居ますからね」

普段の捻くれた態度を取る余裕もなくなつているナイスネイチャ

の言葉を否定して、南坂は笑いながら自信を指した。

「トウカイティオーのような天才ではないかもしれません。常勝不敗やグランドスラムといった伝説を作れるウマ娘ではないのかかもしれません。けれど、それでも勝つことを諦めたくないと足搔くあなたにこそ、僕は夢を見ています」

トレーナーが担当ウマ娘を持ったとして、それが一番に望んだ相手のスカウトに成功したのかは別問題だ。

才能あるウマ娘にスカウトが集中する以上、あぶれた組み合わせは必然的に発生する。

しかし、ナイスネイチャと南坂はそうではなかつた。

「ネイチャさんが本当の意味で本気になつたのは昨年末からなのかもしません。けれど、選抜レースの時からあなたの中にある勝ちたいという想いが消えたことは一度もありませんでした」

表向きは隠していたとしても、口に出すのは捻くれた卑下だつたとしても、勝つことを諦めないナイスネイチャは強い。

そして、トレーナーという生き物は強いウマ娘を勝たせてあげたいと心から望む。

だから、南坂はナイスネイチャを望んでスカウトした。

「次はなくなりなんてしません。僕が機会を作りますから。もし、あなたの心が折れたのなら僕が支えます。敗北を活かして勝つための方法を提示します。あなたが勝利を諦めない限り、傍でずっと一緒に歩いていきます」

ウマ娘の望みを叶えるという、ある意味で受け身なスタイルであつた南坂は、これ程まで直截に自身の意思を伝えることはしてこなかつた。

しかし、今のナイスネイチャに必要なのは同道者だ。

独りではないと、同じ願いを持つ者が居て、夢も責任も分かれ合えると知つてほしかつた。

「なによりも、僕はネイチャさんが勝てないだなんて思つていません。勝たせるのがトレーナーの役目で、僕はあなたのトレーナーですから」

柄にもなく熱くなっているなど頭の片隅で考えながら、それでも南坂は口から出る言葉を飲み込みはしなかつた。

「だから、あなたの想いと一緒に背負わせてください。そして勝ちましょう。あなたの最強の好敵手に^{ライバル}」

心に圧し掛かっていた重しが軽くなつたと、ナイスネイチヤは感じた。

ちょっと優しい言葉を掛けられただけですぐに持ち直すだなんて、アタシつて現金な女だなーと思ひながらも嫌な気分はしなかつた。トウカイティオーに本気で勝てると信じてくれるヒトが居てくれることを、嫌だなんて思うはずもなかつた。

「……もう、なにこれ。アタシには全然似合わない雰囲気になつてるじやん。こんな空気吸つてたら体調崩しちゃうから、帰つて休むね」嫌じやない、どころか嬉しすぎる。

心に追い付いていた脳が南坂の言葉を正確に理解した直後、ナイスネイチヤは火が出そうなほどに顔が熱くなつたことを自覚した。

側頭部で房のように結つた髪で顔を隠しながら、そそくさとレース場から出て片付けを始める。

「ええ、そうしてください。明日からも厳しくいきますからね」

えー、なにこれ。アタシはこんなに恥ずかしがつてゐるのに何であつちは平気な顔してんの。もしかして、トレーナーつて割と担当ウマ娘にこういうこと言つちゃうの。ヤバいなトレセン学園。

高速で思考を回しつつも自分だけ照れてるのは納得いかないんですけどー、と喜悦と憤慨が入り乱れて混乱しているナイスネイチヤに、南坂から再度声が掛かつた。

「ネイチヤさん、そのまで構わないで聞いてください。宝塚記念の調整として出るのは新潟大賞典に決めました。そちらでは、全部使ってみてください」

その言葉を聞いて、少しだけ冷静さを取り戻したナイスネイチヤはぼやくように答えた。

「了解ですよつと。ティオーを相手にするんだもんね。G Iより下で

走る娘たちには最低でも通用しなきや」

南坂の言つた、全部使うという言葉の意味。

それは、ナイスネイチャにとつては反則以外なんでもすると言ひ換えてもいい。

悪いとは思はない。アタシの全力とはそういうことだ。

「せめて、心が折れちゃつた娘のアフターフォローはしつかりしないとねー」

心は折りたいが、折れた娘をそのままにしておくのは後味が悪いから。

普通のウマ娘が持つ勝ちたいという欲求とは些^少か以上に異なる歪さを抱えながら、自分と想いを同じくしてくれるトレーナーと共にナイスネイチャは帰路に就いた。

参戦

『新潟大賞典』

新潟レース場で開催されるGⅢレースなのだが、芝の左回りで距離二千と正直言つて宝塚と有馬のどちらを想定するにしてもあまり適してなさそうなレースである。

適していないからこそ選んだようなものなので別にいいのだが。

自分の戦法は弱者が強者に打ち勝つためのものだ。それはつまり、正攻法とは真逆な姑息で悪どいやり方と言つていい。それでいて奇抜さや唯一性には欠けていて、対処困難な訳でもない。

来ると分かつてさえいれば容易に対処可能という悲しくなるような戦い方だ。なればこそ、情報の漏えいが敗北に直結する。

知られてはならない。意図を読まれてはならない。たつた一度だけ、天才を後ろから一刺しするためだけの刃。

しかし、半端な付け焼刃や鈍^{なまく}ら刀ではトウカイティオーという分厚い壁を貫けないのも事実。実践で刃を研ぐ必要がある。そのための今日だ。

「ネイチャさん、今日のオーダーを伝えます。第一に用意した札を一通り試すこと。第二に使用感とトウカイティオーへの有効性について考察すること。第三にそれらをしつかり熟しつつ勝利することです」

試運転を万全に行い勝負には勝つこと。自分の掲げている目標を思えばGⅢで負けていてはお話にならないのは事実だが、周りのウマ娘からしたら舐め^すめ^すと取られても仕方ないことかもしれない。

「はいはいと。しっかりとオーダーにお応えいたしますよ！」

それでもやり方は変えない。これ以外の方法では勝利が掴めないと、自分に一番合っているからとか色々と事情はあつた。だが、今はそれらの事情を除外したとしても、押し通したい理由ができた。
(トレーナーがアタシは勝てるって信じてくれるんだもんね……)

トウカイティオーに勝てると言い、自分を支えると言つてくれたヒトが提示した戦法。そこには実用性とかセオリーんなんでもの捨てて

構わないと思わせてくれる熱量があつた。

心の中で縮こまつて燃えていた小火ほやを大火に変えてくれた信頼と
いう名の燃料投下。

アタシは勝つ。勝ちたいと思う自分のために。勝てる信じてくれる相方のために。勝つてほしいと願ってくれる仲間のために。

「僕も修正点や対トウカイティオーレに向けた小技が他にないか分析しながら見るつもりです。まだ前哨戦のさらに準備段階ではあります
が、気を抜かず行きましょう。ターボさんたちも学園で応援してくれていますよ」

新潟入りしたのは自分とトレーナーだけで他の三人はお留守番。夜も独占している状態が続いているし、はつきり言つて今の自分はトレーナーにもチームメイトにも大迷惑を掛けている。

決して長いとは言えないウマ娘の大変な現役時代。その内の一年間、トレーナーがかける比率を大きく自分に傾けてもらっているのだ。笑つて許してくれた三人には脚を向けて寝られないし、慢性的な睡眠不足に陥っているだろうトレーナーにはどれだけお礼をしても足りない。

体を壊されても困るし、毎日しつかりと冷蔵庫の食材を活用して栄養のある食事を作つてあげることにしよう。

ちなみに深い深い経緯があつて得意の余りもの活用術ではない。

食堂も閉まつた後に空腹を凌ごうとトレーナー室の冷蔵庫を覗いたら、そこには飲料の缶しかなかつた。飲むと翼が生えそうなやつだつたり、怪物に変貌するエネルギーが摂取できそうなやつだ。そんなバカな菓子の類たぐいくらいはあるだろと戸棚を開けてみれば錠剤しかなかつた。カフェインとブドウ糖を最大効率で摂取できそうなやつだ。

ネイチヤさんは危機感を覚えた訳ですよ。このまま行つたら有馬記念でティオーレに勝つたとしても、トレーナーが倒れて月9ドラマみたいな展開になつてしまふのではないかと。そうでなくともこんな生活をして有馬までに体調を崩されてはトレーニングに支障がでる。アタシには現実逃避のオーバーワークはやめろと言つておきながら

自分は刹那的に生き過ぎだろと、怒りさえ湧いてきた。

それからというもの、毎朝早起きして昼食のお弁当と温めれば美味しく食べられる夕食を二人分用意してから朝練を始めるのが常態化した。南坂は時間と体力がもつたいないからこの栄養補給バーにしようとかほざいていたが、そんなことは天が許してもアタシが許さない。

体は資本。これはアタシを信じてくれたヒトへのお礼も兼ねた立派なトレーニングなのだ。

「ターボたちに勝つたよって報告できるよう頑張りましょかね。それじゃ、いつきまーす」

トレーナーと別れ、控室を出てターフへ向かう。

地下道の出口が近づくにつれて、聞こえてくる歓声と視界を照らす光が大きくなっていく。

それを感じながら、カチリとスイッチを切り替える。

傍に居てくれる人達がくれる温かさをひとつそりと胸に仕舞いこみ、冷徹に思考する。頭に思い描くのは年末のレース。あの天才をへし折つたとき、浮かべるだろう表情と奏でられるであろう音。自然と口角が吊り上がり足取りは軽くなる。ともすれば、鼻歌さえ歌つちやいそうなほどだ。

(きーと、勝ちにいきましょかね……)

吊り上がった口角を誤魔化すようにとろりと綺麗な笑顔を浮かべて、観客に手を振りながらナイスネイチヤはターフに立つた。



『さあ、新潟大賞典、芝二千。ウマ娘たちが一斉にスタートを切りました』

『ナイスネイチヤがとても綺麗にスタートしましたね。今回は先行策なのでしょうか?』

晴れ渡つた空にポカポカ陽気。南西から迫る梅雨前線も、五月の新潟にとつてまだ先の話だ。

そんな最高のロケーションである良バ場で、ナイスネイチャは逃げウマ娘がハナを奪取するため入念に準備してきたかのようなストーリーダッショを決めた。

本日、三枠三番だつたナイスネイチャは他の逃げウマ娘を差し置いて、先頭に立つたのだ。

そして、ほんの少しだけ外にヨレた。

自分よりも外枠の——具体的にはメジロのウマ娘がいる——側へ。作戦その一、逃げウマ娘潰し。

内容は至つてシンプルだ。綺麗にスタートダッショを決めて、ハナを取りたい逃げウマ娘を焦らせる。そして、厄介な相手のいる内か外へ進路をとつて位置取りを阻害する。ただそれだけ。

(いやー、我が事ながら、みみつちいというかシヨボいというか)

基本的にナイスネイチャというウマ娘が用意できる策なんてこの程度の事なのだ。相手を蹴飛ばせる訳でもタツクルできる訳でもない。なんともささやかな嫌がらせ。

それでも逃げを得手とする者達にとつて差しウマ娘にハナを取られるだなんて屈辱でしかない。冷静に考えればナイスネイチャが暴走しただけの可能性大なのだが、どちらにしろハナを取られたままのレース展開では勝ち切れない。その考えが体力配分を誤らせ、前へと掛けさせる。

やらないよりはマシな嫌がらせの初手先頭争いと走行妨害。

ツインターボが泣くまで止めず、鉄の女が泣いても止めなかつたトレーニングの成果は実を結んだと言つていいだろう。

逃げウマ娘たちとも競える見事なスタートを会得した。

(本当はもつと露骨に妨害したいんだけどね。国外のレースだとかなりアグレッシブにポジション取り行つていいみたいだけど、日本は国際レース以外だと判定もシビアっぽいから仕方ないよね)

過去のジャパンカップを見てみれば、国内G-Iとは毛色の違うレースが見られる。

日本のウマ娘が中々勝てない理由の一つは体格に物を言わせた文字通りのぶつかり合いにあるのだろう。

(ワイルドそうなウマ娘はともかく、お上品な見た目のウマ娘も平気な顔して接触してくるんだもんね。アタシは日本に生まれてよかつたわ)

今の自分としてはむしろ望むところなのだが、こんな歪んだ思想になる前に潰されてたんじやなかろうか。

(なんて関係ない話は横に置いて、三番手が似合いそうな地味ウマ娘はひつそり沈んでいくとしましようかね)

実況解説も驚くほどに鮮やかなスタートを切ったナイスネイチャは、その後スースと速度を落としてお馴染みのポジションに収まった。

一体なんのためのスタートダッシュだつたのかと逃げと先行策のウマ娘が首を傾げながらも前に出れば、数秒後にはその頭からナイスネイチャのことは消え去っていた。

それは自分の走りに集中するための自発的な行為だつたが、仮にナイスネイチャに意識を割いていたとしても探すことは難しかつただろう。

ナイスネイチャはバ群に沈んだ。息を潜めて、中段でひと塊となつた集団に溶け込むように。

そうして注目を集めなくなつたナイスネイチャはバ群の中で細かく位置取りを変化させていく。前方を走るウマ娘たちの視界に入りづらい位置を、横と後方を走るウマ娘たちがスパートを掛け辛い位置を常に模索して。

話は変わるが、ミスディレクションという言葉がある。

簡単に言えば、他者の認識を誘導したり勘違いさせたりするテクニックのことだ。

フジキセキが得意とするマジック（手品）などは、この技術を多分に利用している。

ナイズネイチャと南坂はこれを極限まで悪用する策を採用した。強いウマ娘は極一部の例外を除いて広い視野と高い観察力を持つている。

明確に思考しているか本能的に判断しているかの違いはあるが、九

割九分九厘に当て嵌まる特徴だと言つていいだろう。

レース展開を俯瞰し、後方にまで意識を伸ばして仕掛けるタイミングを図つて いるのだ。

そして、俯瞰して得た情報から精緻に展開を思い描いているほどに、突発的な予想外が訪れたときの崩れ方は激しくなる。

本番のレースを想定して積み重ねたトレーニングが想定外に対する体の反応を遅れさせる。

読み込んだ資料と繰り返し見たレース映像から得た知識が想定外の状況に思考を白紙にする。

極限まで高まつた集中力が、立て直すことが不可能なほどに霧散させられる。

レースを走るウマ娘は十三人。上空から見て数えれば誰にだつて分かるだろう。

しかし、ターフを駆ける十二人どころか観客席から全体を視る者達すら見逃しそうなほど、ナイスネイチャは巧妙にポジションを変え、その気配を薄くしていた。

全ては最終コーナーから最終直線の間に行わられる一事のために。ウマ娘たちがラストスパートへと移行する瞬間のために。

いける、とウマ娘たちが脚に力を込めるより一瞬だけ早く。

ナイスネイチャは自分の存在をターフに誇示した。
作戦その二、サプライズアタック。

潜めていた息を鋭い呼気へと変える。静かに軽やかにを意識していた踏み込みを、大きく音を鳴らすほど強いものに変える。視界に入り辛いよう下げていた頭を上げて一番速く走れる体勢に変える。一番厄介そうで勝ちに近そうなウマ娘に視線という名の圧力を飛ばす。急激な静から動への、無から有への変化。

知つて いる自分だけが対応できて、知らない他者は阻害する。

(地味なアタシですけどね、流石にその場にいきなり瞬間移動してきたら驚かれるくらいの存在感はある訳ですよ)

むしろ、それすら無かつたら泣いて引き籠る。

そんな自虐を内心に浮かべながらも周りの変化をつぶさに観察す

る。

いきなり増した存在感による落差と、最初から居たはずなのにどうして忘れていたんだろうかという疑問。

状況の変化に付いていけず、考える必要もないことに脳のリソースを使つてしまい『えつ?』と間抜けな声を上げてしまった前方のウマ娘にしてやつたりと笑みを浮かべ、ナイスネイチヤは全力疾走を開始した。

他者をベストパフォーマンスから遠ざけ、己だけはベストに近づく。

邪道という謗りは受け入れよう。スポーツマンシップに悖るという考えにも同意しよう。

だが、これはレースだ。セパレートコースで自分の最高速を実現させる陸上競技とは違う。

勝つために清濁併せ呑み、硬軟織り交ぜて相手を下す事こそ本質。（なにより、勝てば官軍つてなもんですよ）

初手で逃げウマ娘に嫌がらせ、ラストスパート直前にバ群全体に嫌がらせ。自分はさつきと全身全霊。

狙うのは心と体と思考の隙間だ。生き物である以上、必ず変化するタイミングがあつて、そこはなんとも脆いものだ。

ときどき、その脆弱すらも逆に利用してきたり、徹頭徹尾全速力しか出さないなんて例外がない訳でもないのが困りものだが。

シンボリルドフとか、サイレンスズカとか。

そんな、少なくともこのレースには全く関係ないことを考えられる程度には余裕を持つてナイスネイチヤは完勝した。

ほんの短い時間に全てを注ぎ込むレースであるからこそ、崩れた状態を立て直すのは難しい。それはトウカイティオードつて変わらない。

（『領域』だつけ。それってさ、要はめっちゃ集中してる状態つてことでしょ）

一旦入つてしまえば、なるほど崩すことは困難極まるのかも知れない。だが、その前ならばどうか。極限状態に踏み入ることに全力を伴

うからこそ生まれる無防備。

付け入る隙はあると、とナイスネイチャは確信していた。

誰よりも憧れを抱いている自覚があるから。誰よりも同じレースを走ってきた実績があるから。誰よりも勝ちたいと執着している自信があるから。

何が起こったのかも理解できぬままに負けて呆けているウマ娘たちに労いの言葉を掛けてから、ナイスネイチャは南坂の下に向かった。今日のレースは何点か。宝塚記念に向けてなにが必要か。残された時間の中でもやることは山積みだ。

しかし、肝心の南坂は近づいてきたナイスネイチャに気付きながらも、手元のスマホを難しい顔で凝視していた。

えー、勝ったんだからまずはアタシを褒めてくれるところじやないのーと不満に思いながらも、効率を優先するトレーナーの不審な対応を訝しんで声を掛けた。

「三次元のネイチャさんよりスマホの三次元にご執心なんですかー？担当ウマ娘が重賞レースで勝つたんですよー」

ちよつとだけ厭味つたらしく言うと、南坂は渋面はそのままに勝利を称えてきた。

「おめでとうございます、ネイチャさん。レースの出来 자체は良いものでしたよ。ただ、想定外の事が起きてしまいました」

そう言つて向けられたスマホに映る情報を見て、ナイスネイチャは思つた。

（あー、なるほど。意表を突かれて頭が真っ白になるつてこういう状態のことを言うのか）

画面に映つていたのはニュースサイトの速報。それが二つ。

『メジロマックイーン、宝塚記念出走を断念。年内いっぱいは休養か』これはまあいい。予定していた役者が舞台から降りてしまつた訳だが、トウカイティオーに勝つという目的達成のためにはどちらかと言えば居てくれないほうが好都合だつたから。

問題はもう一つのニュース。

『マルゼンスキー、宝塚記念への出走を表明』

.....いや、なんですか？

始動

話はナイスネイチャが新潟大賞典に出走する数日前に遡る。

シンボリルドフが抱えている……抱えきれなくなりつつある問題の自己解決を図った結果、トウカイティオーとの間に大きな溝が生まれることとなつた。

事の推移 자체はシンボリルドフの予定通りであり、物事を掌の上で思い通りに転がす万能感に笑みを浮かべていたりもした。

かと思えば、予定通りとはいえてウカイティオーと半ば喧嘩別れしたような状況に溜息を吐き、執務机に頃^{うなだ}垂れる。当たり前だけど生徒会室に遊びに来てくれなくなつたとか、カラオケに呼んでくれなくなつたとか無意識に呟きながら、生徒会業務が手に付かない事が増えた。

端的に言つてシンボリルドフは躁鬱^{そうえき}みたいな状態になつていて、今はダウナー入つてる。

エアグルーヴはそれを心配そうに見ながらも、案外自身の調子自体は好調なものだから対処に困つっていた。

なんせクソ寒いジャレが飛んでくる頻度は減り、仕事が進まなくなつたことで適度にシンボリルドフを助ける機会も増えたのだ。なんでもかんでも自分でやろうとする会長は多少業務が滯つてこちらに振られる仕事が増える位が丁度良いだろうとも思つていた。

（とはいって、覇氣のない表情をなさることが増えたのは憂慮すべき事態だ。しかしどうしたものか……）

越権行為ではない。だが、ティオーのトレーナーを相談員に抜擢し^{ばつてき}たのは多分に強引ではあつたのだ。

むしろティオーを怒らせて自分に挑ませてくることを目的にしていたのだから、現状は自業自得と言つてもいい。

それでも自分は生徒会副会長なのだ。会長を助けその力となるのが役割である以上、手を挿^{こまね}いている訳にはいかない。

（それに、あの喧しさもいざ無くなつてみると物足りないからな）

生徒会室に似合わぬ騒がしさを不定期に齎^{もたら}してってくれていた小さな

帝王に、ほんの少しの恋しさを覚えているとノックもなく生徒会室の扉が開かれた。

学園内で理事長室に次いで訪問する敷居が高い生徒会室になんの気兼ねもなく入つてくる人物は限られている。

理事長とその秘書、生徒会メンバー、そして極めてマイペースな一部のウマ娘達くらいだ。

そうして入つてきた人物は、後者二つに当て嵌まつた。

「あらあら、静かで落ち着いた雰囲気の部屋のはいつもの事だけど、なんだか今日は元気がない感じね」

部屋に入つてきたウマ娘の名はマルゼンスキーという。

圧倒的な実力を持ち、明るく朗らかで包容力のある優しい性格をしており、困っている誰かの力になることを惜しまない人格者。

そして楽しいことが大好きな皆の頼れるお姉さんだ。

学園に所属する生徒の中で最年長格でもあるのだが、それを指摘すると指で小さくペケマークを作つた後にデコピンされるので注意が必要。

デコピンと侮るなれ、怒れるウマ娘の膂力りよりよくから繰り出されたデコピンは段ボールくらいなら容易く貫く。悶絶必至で泣きを見ることになるので言わないので吉だ。

「マルゼンさん、どうされたんですか。今日は特に招集をかけてはいなかつたはずですが」

そんなマルゼンスキーは厳密には生徒会メンバーではない。

だが他者を良く見て気配りの上手な性格を持ち、シンボリルドルフに物怖じせず諫言することができ数少ないウマ娘であることから、非公式ながら生徒会長の相談役という立場に納まつていた。

はて、なにか会長に用事でもできたか。それともトウカイティオーに関する対応について否定的だつたはずだから、諫めにでも来たのか。

用件を推測しようとエアグルーヴに対し、マルゼンスキーは特

にもつたいぶるでもなく答えた。

「チャオ、エアグルーヴ。宝塚記念に出ることにしたからその報告に

来たの。制度的に問題ないとはいって、騒ぎにはなるでしょうから先に生徒会には話を通しておかないとね」

今日のディナーはイタ飯よ。そんな軽いノリで告げられた内容に思考が数秒止まる。

宝塚記念に出る？ マルゼンスキーガ？

制度としては問題ない。過去に事例も有りはする。

だがそれは、間違つても普通の事態ではない。

シニア級の娘達からすれば、戦車と戦闘機が争う戦場にゴジラが出 現したようなものだ。

ドリームトロフィー・リーグに登録しながらもトウインクル・シリーズに出走することは確かに可能だ。

であれば、例えば自分がシニア時代に取れなかつたG Iに出続けたりするのでは？と思われるかもしれないが、意外と前例は少ない。

なにせ、ウマ娘たちにもプライドがある。ドリームトロフィーに上がってきたウマ娘に手厚い洗礼を与えることはあっても、自分から後輩虐めに行くだなんて恥と言えよう。

ましてやマルゼンスキーが出るとなれば、それはもう荒らし行為に近い。

だからこそ、あえてトウインクル・シリーズに降りしていくのは相応に切実な——今回のシンボリルドルフのようない——理由がある場合のみと断言してもいい。

少なくとも今年の宝塚記念にマルゼンスキーガ執着する理由はないはずだと、エアグルーヴは頑張つて脳を回転させて答えを導き出した。

「その……ゴジラが出るとミリタリーから特撮にジャンルが変わるの で控えた方が良いと思うのですが、なにか事情がおありで？」

自分の知らない因縁の相手が居たりしたのだろうかと思案するが、それはないはずだ。

ならば、やはり理由はシンボリルドルフとトウカイティオーで、此処に来たのは報告ではなく先に自分がティオーと戦うぞという意思 表示のためか。

「どういう風の吹き回しかな、マルゼンスキー。君が楽しいこと好きなのは承知しているが、人の楽しみを奪うことに悦を感じる嗜好はしていなかつたと記憶しているが」

自身が渦中であることに気付きダウナーから立ち直つてきたシンボリルドルフが問うた。

（楽しみを奪う。それはつまり、会長はマルゼンさんが勝つと考えていらっしゃるのか？　いや、それだけでは奪うとまでは言わないか）トウカイティオーの敗北を予想するのは、特におかしなことではない。

なぜつてマルゼンスキーは、誰なら勝てるのかを度々議論される側のウマ娘なのだから。

負けたことがない訳ではない。それこそシンボリルドルフが実際に勝っている。

しかし、じゃあ他には？と聞かれると、少なくとも挙げられる相手で片手の指を使い切ることはないのが事実だ。

いつの日か”帝王”が”怪物”を下す時が来るのかも知れないが、まだ時期尚早だろう。

「あら、奪うだなんて心外ね。まるで私がティオーチayanの心を折るつもりみたいじゃない」

圧倒的な差を感じたとき、人の心は折れる。

真剣であればあるほどに、真摯であればあるほどに、自分ではアレに届かないのだという現実に心を叩き折られる。

果たして、マルゼンスキーが今までに折った心はどれほどの数にのぼるだろうか。

「君にはそれをしてしまえる実力がある。小賢しい策を踏み潰し、越えてみせんと挑みくる者を真っ向から跳ね返す力。ティオーティーとて、いやティオーダからこそ折れてしまいかねない」

彼我の力量を見誤らないこともまた強者の条件だ。

そして見誤らないからこそ、遙か先未来が読めてしまう。

「トウカイティオーではマルゼンスキーに勝利することは不可能だ」シンボリルドルフは断言した。紛れすらない、タイムマンならば確実

にマルゼンスキーガ勝つと。

「そう、それよそれ！だから宝塚記念に出ることにしたの」

はて、全く以て話が繋がらないとエアグルーヴは首を捻つていた。

天上の選ばれしウマ娘でないと付いていけない領域の会話なのだろうかとも考えたが、そういう訳でもなかつたらしい。

「話が見えないな。やはりティオーを盛大に負かしたいということなのかな？」

シンボリルドフもいまいち目的を推し量れていないようだつた。数多のウマ娘の憧れであるマルゼンスキードラが、その正体は割かし天然なお姉さんなので理論派とは微妙に噛み合わないのだ。

「ルドルフ、あなたつて私がティオーちゃんに負ける訳がないと思ってるよう、自分も有馬で負ける訳がないって思つてるでしょ？」

負けると思つて戦う者が居るのかという話は脇に置くとして、実際問題シンボリルドフは自分が負けるとは思つていらない。負けた場合のプランがないのかと問われると、ちゃんと用意してはあるが。「はつきり言うけど、私はあなたが負けた方がいいかもつて思つてる。だから、間接的にティオーちゃんに味方するわ。知つてる？ ティオーちゃんとオグリちゃん、併走したらしいわよ」

それは、ここ最近学園を賑わせている話題だつた。

接点のなかつたはずのトウカイティオーとオグリキヤップによる、勝負服まで用意しての併走。

事情を知らぬ者からすれば何があつたのかと想像のし甲斐があるというものだが、生徒会からすれば目的ははつきりしている。

シンボリルドフに勝つための道を抉じ開けにきたのだ。

「あの娘は貪欲に勝利を求めているわ。よっぽどトレーナー君のことが大事なのね。そういうのつて応援したくなっちゃうでしょ？」

トレンドイドラマが大好きなマルゼンさんらしい反応だなど、エアグルーヴは思つた。

実態としては、トレンドイというよりひと昔前の昼ドラマみたいな様相を呈しているのだが。

「私だつて大事に思つてゐるティオーのために心を鬼にして勝負を仕掛けたさ。だから、こちらの味方をしてくれても良いんじやないかい？」

まあ私利私欲に塗れてないとは言えないがな、と内心考えながらルドルフはマルゼンスキーにボールを投げてみた。

「ごめんなさいルドルフ。私、ヤンデレは趣味じやないの」

豪快なフルスイングで打ち返された球が心にめり込み机に突つ伏すルドルフを横目に見ながら、エアグルーヴはマルゼンさんヤンデレつて言葉知つてゐんだなと、どうでもいいことを考えていた。

「私と戦つて負けることが、あなたに有馬で勝つ切つ掛けになるかもしれない。だから、大人げないかもしけないけれど本気で勝ちにいくわ」

普段浮かべている柔らかい笑顔を引き締めてマルゼンスキーは宣言した。

そして、シンボリルドルフもまた友人との会話に用いる気軽さを引っ込めて告げた。

「そうか、分かつたよ。また君は私と違う道を選ぶんだね」

今日初めて、シンボリルドルフは”皇帝”たる者としての圧を放つた。

もつとも、それは憎い敵に向けた攻撃的なものではなく、自分を優先してくれなかつた友人への拗ねたような可愛らしさが含まれていたが。

「拗ねないの。それに下の娘達だつて侮れないわよ。私がゴジラだとしたら、彼女たちはメーサー兵器とかスーパー・エックスかもしねい。油断していると私だつて足を掬われちゃうかも」

さすがマルゼンさん、古い作品のことをよくご存じ……えつ、なんでデコピンの構えを取るんですか。いやゴジラは分かりやすい比喩表現であつてですね、年代が昭和どうこうと言いたい訳ではぬわーつ！？

「うーん、凄いことになつてゐるねえ」

トウカイティオーとオグリキヤツプの併走。なにか事情があつてのことだと思つたからルドルフに探りを入れにきたんだけど、こうなつたか。

「アタシもルドルフと違う道を選んだ側だし、こつちに飛び火する前に退散しますかね」

見知つてゐるトウカイティオーの事はともかく、そのトレーナーには随分と興味が湧いてきているのだが、身の安全には代えられまい。こうして謎のウマ娘はひつそりと姿を消すのだと考へながら生徒会室の扉から身を翻すと、目の前にヒトがいた。

「……扉に張り付いてなにをしていたのシービー？」

不審というよりは純粋に疑問に思つてゐる口ぶりで東条ハナはミスター・シービーに尋ねた。

「おや、おハナさん奇遇だね。ルドルフになにか用事かい？」

全く潜めていなかつたシービーは、別に後ろ暗いこともないかと堂々と対応することにした。

「ええ、そうだけれど中は取り込んでるのかしら」

「そうみたいだけど話自体はすぐ終わりそうだつたから大丈夫じゃないかな。そうだおハナさん。トウカイティオーのトレーナーがどんなヒトか知つてる？」

「クズのクソガキよ」

うわあ、即答だ。

苛烈な評価を下すおハナさんに戦慄すべきか、そんな評価をされるトレーナーの存在を問題視すべきか、自由人を自称するシービーでも割と真面目に悩んだ。

「興味があるなら会いに行つてみればいいぢやない。尻込みするような性格でもないでしよう」

尻込み、尻込みと言つたか。

やつちやいけないことをやるのが大好きなこのアタシに対して。「そりやあもちろん。でもねおハナさん、人と人との出会いいつてのは

縁なんだよ。無理矢理結びにいくのはアタシ的には違うんだよね」

これだけ学園を騒がせているにも関わらず、アタシことミスター・シービーと件のトレーナーは一度も出会ったことがなかった。

これはもう御縁がなかつたということであろう。

逆にもしも縁ができたなら、ふかーく関わってみるのも面白いかもしない。

なにせルドルフとトウカイティオーの因縁を生んだ主要因だ。

相當にヘンテコなヒトに違いない。

「あらそう。ところで、今日はこのあと天氣が崩れるらしいから早く帰るか傘を用意しておきなさい。それじゃ」

そう言つて、東条ハナは生徒会室へと入つていつた。

「よく考えたらマルゼンさんとルドルフが微妙に仲違いしてるのってリギルの危機だよね」

喧嘩という訳でもないが、あの二人がギスつたりしたら学園全体が荒れるかもしねりない。

「まあ雨降つて地固まるとも言うからね。……お、たしかにこれは雨が降りそうな空模様だ」

黒い雲が空の青を覆つていくのを見ながら、少しだけ気分良く歩き出す。

「今日は濡れて帰ろつかなー」

ローギア

『マルゼンスキーキー、宝塚記念出走』

そのニュースは文字通り激震となつて関係各所に衝撃を与えた。URAやファンはなぜ今更になつて？と首を傾げはしたもの、高い人気を誇るウマ娘が多くのレースに出走してくれるのならと歓迎ムード。

宝塚記念に出走予定だつたウマ娘はオワタ、なんで今年に限つて、マルゼンスキーアップなどと己の不幸を呪い、概ねFXで有り金を溶かしたみたいな顔になつてゐる。

そして、原因が自分たちにあるとは露ほども考へていないクズと、まあ何らかの関係はあるんだろうなと裏事情に見当をつけたトウカイティオーの反応はなんとも微妙なものだつた。

「マルゼンスキーケー。なんだつてまたグランプリに出走してこようだなんて思つたのやら」

執務机のパソコンでレース関係の情報を漁ると、その話題で持ち切りだつた。

個人的なイメージとしてはナウいイカしたチャンネー。

学生だというのは分かつてゐるのだが、纏う雰囲気や抜群にスタイル良しなせいかもつと年上に思える。

何度か会話をしたこともあるが、年代としてはそれなりに上であるはずの自分と懐かしトークができるからか、どうにも年下であるという認識が薄い。

もしもスカウトできたなら、いろんな意味でウハウハだらうないうのが総合的な評価になるだろうか。

「レースで勝つた負けた以上の意味がある相手じやないもんね。どうせなら後方から仕掛けてくるシービーが出てくれたらよかつたのに」

少なくとも、目の保養という意味ではティオーの完敗だな。

「ボクとトレーナーつて物凄く仲良くなつたよね。今だつて視線からなに考へてるのか全部分かつちやうんだもん。で、辞世の句を詠む時

間は何秒あげればいいかな?」

「辞世の句なんて用意してないからあと七十年ほど待つていただけないだろうか。

「……宝塚記念が終わつたらまた水着買いに行くか」

マルゼンスキーハーのスタイルに思いを馳せていたから、という訳でもないが梅雨が終われば夏が来る。

来年もプールに連れて行つてやるつて約束してたからな。まあ、スピカとの合宿があるから海になるかもしけんが。

ちなみに、大変悲しいことなのだがティオーが昨年購入した水着はなんら問題なく今年も着用可能である。スリーサイズ・体重共に貫禄の増減なし。

「なにさその目は！　増量してるよ！　ほんのちょっとだけしてるからね！」

ええ、ほんとにござるかあ～？

猛反論をされはするものの、成長期にも関わらずミリ単位しか増えないのはその、ね？

「今に見ててよね！　デツカイのぶら下げて見返してやるから！　ばいんばいんだよ！」

ふえー、とつてもマーベラスだね。

それにしてデツカイのをぶら下げたティオーか。うーん、全然似合わないな。タッパも伸びればいい感じのバランスになるのかもしれないが、俺は今のサイズ感のティオーが一番しつくり来る。

「なんにせよ新しい水着は買うとして、デザインは要相談な」

昨年の水着選定でもそれはもう熱いバトルが繰り広げられたのだ。

なぜか頑なにビキニ（それもブラジリアン）を購入すると主張を譲らないティオーに仕方なく試着させてみたのだが、ぶつちやけ犯罪臭しかしなかった。

色柄でなんとか元気で滲刺な面を押し出せないか試行錯誤もしたのだが、もしもししポリスメン案件になると請け合ひだつた。

流石に孫の水着写真を所持していた祖父が逮捕されたアメリカほどに日本の締め付けは厳しくないと思っていたが、任意同行を求められ

ただけでも大問題である。

必死の説得の末、ビキニはビキニでもハイネットクタイプを選ばせることに成功し、俺の社会的地位は保たれたのだ。

その際に捨て台詞として『来年成長して目に物見せてやる』と言わっていたのだが、この分だと今年も来年も何一つとして心配はいらなさそうで一安心である。

「もう一、まあトレーナーが気に入るならそれでいいんだけど。そうだ、サイズはこれから成長を見越してスカーレットくらいのにしようよ！」

やめなされやめなされ、（自分に）惨いことをするのはやめなされ。せめてスペシャルウィーク……いやそれでも厳しいだろうな。

「それにしてもマックイーンは残念だつたな。グランプリか秋天でリベンジできるかと思つてたんだが」

マルゼンスキーの宝塚出走と同時に伝えられたマックイーンの休養。

決して重い怪我ではなかつたようだが、それでも年内のレースは見合わせるらしい。

ちよろつとスピカのトレーナーに話も聞いてみたのだが、療養以上にこれからレースに向けて耐え得る下地を作り直す時間にしたいんだと。

なんていうか先を見据えてるつて感じだよな。その場凌ぎに終始しての俺との差を実感してしまう。

「俺もお前になにかしてやれることがあればいいんだがなー」

オグリキヤップとの併走を経て変化した走法も結局はティオーが自己解決したようなものだ。

連れて来たのは俺だが、依頼を受けてくれた向こうさんの態度を見るに、理由を聞いた時点では無条件でOKしてくれたっぽいんだよな。つまり大して役に立つた訳でもないということだ。

「またそんなこと気にして。ボクはトレーナーが喋る案山子だつたとしても文句言うつもりはないんだよ？」 というかあの後、財布は大丈夫だったの？

「あー、あれな。キャッシュカードの利用限度額なんて適当に設定してたから使えなくなつてびっくりしたわ」

結果こそ敗北だつたものの、ティオーニとしては大いに実りがあつたらしい併走。

キタハラジヨーンズは対価に飲み会しようぜ！とか言つてたが、一番の功労者であるオグリキヤップに賃金未払いというのはいただけない。という訳で『一緒に晩飯でもいくか？ 好きなもん奢るぞ』とサラリーマン的な社交辞令を伝えた訳だ。

そうして”悪魔”が顕現した。

オグリキヤップは”怪物”ではなかつた。

やつの真名は恐らくアバロンかベルゼブブであろう。

蝗の王とも呼ばれる食い潰す者、はたまた暴食の大罪を司る大悪魔である。

やつはその滅びを与える対象にトレセン学園近郊の焼肉屋を選んだ。

フグの刺身を見たことはあるだろうか。

円形の皿に綺麗に盛り付けられたそれを箸で一気に掬い上げて食す様をメディアでご覧になつた事がある諸兄も多いと思われる。それがお高い焼肉屋で特上とか頭に付いてる肉で敢行された。

綿飴を食べたことはあるだろうか。

割り箸に巻かれたふわふわモコモコな砂糖菓子に齧り付いた幼少時の記憶が諸兄にもあるのではなかろうか。それがお高い焼肉屋のシャトーブリアンで敢行された。

肉塊に箸をぶつ刺して齧り付くワイルドさはなんとも男らしい。

流石にお行儀が悪いので注意したら普通の食べ方に戻つたが、あそこまで喜ばれるとは思わなかつた。

歴代ウマ娘の中でも最上位に金を稼いでるであろうオグリキヤップなのに、あまり良い飯を食わせてもらえてないのだろうか。

まさかキタハラジヨーンズによる横領着服？

なんてこともなく、外食に誘われる機会が少ないからご一緒したのが嬉しかつたらしい。

なんにせよ飯を美味そうに食べる奴は好感が持てるぜ。

「流石に三桁万円はいかなかつたけど、あれを迂闊に飯に誘えないってのは同意しちまうな」

食い溜めようという腹積もりでもなかつたろうに、一食分での量だというのだから恐ろしい。

「あれだけ食べればスタミナも付くのかもね。スペちゃんも量を食べるし、ボクも一考の余地ありかなあ」

身軽さが売りのティオーにあの食事量はどうかと思うがな。トレーニング量からいってカロリー自体は問題なく消化できるだろうけど。

……ところでなぜ胸部を持ち上げながら思案しているんだい？

「そう言えば相談室の方はどう？ 生徒会から変なことされてない？」

変なことつて何よ。これでも俺は口八丁手八丁とそれなりの学力でもつてここまで生きてきた男だ。小娘どもに遅れば取らんよ。いやまあ物理でこれらたら手も足も出ずに降伏するしかないんですけどね。ウマ娘に人間が勝てるわけがない。

俺たちヒト男は猛獸がうろつくトレセン学園という名のサバンナに住む豚に等しいのだ。

「特に干渉されたりはしていないな。エアグルーヴから予定表みたいなもんは渡されるが、それ以外はなにもない」

なにやらティオーのトレーナーである俺にも多少の執着があるらしいルドルフなんて、仕事を任せたことへの挨拶を一度されたくらいでそれ以降は会話すらない。俺の身柄が仮預かり状態だから距離を保っているのかもしれないな。

ちなみにクツソ重たい相談案件は一日に一人しか来ないようになつたらすぐにボクに言うんだよ？ それか大きな声を出すこと」

なぜに俺は女学生から変質者に付きまとわれた時の対処法をレク

チヤーされているのだ。

それは成人男性であるこちらが女性に注意すべき事項であろう。
もしかしてこの世界はなにかおかしいのではないか？

俺の灰色の脳細胞が世界の真理に手をかけたようとした時、部屋の
ドアがノックされた。

「マルゼンスキーですけど、いまお時間いいかしら」
噂をすれば影が差す。

毎回投票はされても宝塚記念に出てこなかつたウマ娘の謎出走。
そのご本人がこのタイミングで何の用だというのか。

「……カチコミか？」

「さすがにそこまでバイオレンスじやないでしょ。宣戦布告に来たん
じやない？」

だとしたら出走予定のウマ娘全員のとこを回つているんだろうか。
まあ、普通のウマ娘達にとつてはグランプリの一着が絶望的になつた
んだから謝罪案件と言つても過言ではないか。

「あのー、返事がないけど入つても大丈夫かしら？ もしかしてこれ
居留守使われてる？」

ドア越しに聞こえる声が悲しげなトーンに変わる。居留守しても
よかつたんだが、ウマ娘つて耳もいいから部屋に居るのは確信して
よなあ。

いや、いつそ態と居留守して精神攻撃を行うことで宝塚を有利に戦
えるか？

「……はあ、入つてきていいぞ」

念のためティオーに目配せすると、問題なさそうに頷いたので入室
を促す。ウマ娘の悩み相談に乗つてるせいか、この辺の対応が甘くな
りがちだな。俺は私欲優先の悪い大人だつたはずなんだが。

「それじゃ。お邪魔するわね」

ほつとしたような声が聞こえ、ドアが開かれた。

邪魔するんやつたら帰つてーつて定番やつた方がいいんだろうか。
タマモクロスじやないんだからやめとくか。

「いつたい何の用なんだ。お前つて生徒会側だろ」

入ってきたマルゼンスキーの表情はニコニコ笑顔。特に剣?な様子もなく普段通りのように思える。しかし、よく考えるとこいつはルドルフの側近みたいな立ち位置にいる奴だし、ティオーが生徒会室に乗り込んだときも居合わせたらしいから内部事情も知っているはずだ。

ルドルフとの勝負は年末の有馬だが、それを待たずしてコチラを叩くために送り込まれてきた刺客という可能性だつてあるよな。

「あら、私は中立よ。今回の出走も私の意思であつてルドルフに命令されたりした訳でもないわ」

じゃあなんで出るんだよ。大人しくドリームトロフィー・リーグで怪獣大戦争しておけよ。

「互いの譲れない目的のためにぶつかり合う二人。でも、今まで対等な勝負とはいかないわ。そこに現れた新たなウマ娘。彼女はより良い未来を迎えるために敢えて壁として立ちはだかるの。どう、トレンドイでしょ！」

「お前の趣味かよ。被害のデカさがシャレにならねーんだけど」

そんな事のために何度も出走できるかも分からぬグランプリを荒らされるウマ娘が不憫なんだが。

「大事なことなのよ。一緒に走るウマ娘ちゃん達には申し訳ないと思わないでもないけれど、どちらにしろ私に怖気づいているようじやダメよ」

いや”怪物”に怖気づくのは正常な感性だろ。

「……ねえ、さつきから随分と仲良さそうに会話してるけどさ、結局なにしに来たの？ 用が済んだのなら帰つてほしいんだけど」

おお、そう言えばコイツの趣味で出走するつてだけなら此処に来る必要はないよな。

「あら、そうだつたわね。此処に来たのはティオーちゃんに全力で走つてほしいからなの」

そう言つたマルゼンスキーは何故かティオーではなく、執務机のイスに腰かけていた俺に近づいてきた。

「別に言われなくても手を抜く気なんてないし、負けてあげるつもり

もないけど」

その行動を訝しむように見ながらティオーが答えを返す。

他のウマ娘はどうか知らんがこつちは”皇帝”をボコす予定があるのだ。”怪物”に怯えてなんていられないからな。

「うふふ、嬉しいわ。けれど、それだけじゃ足りないの。だからこれは

私なりの宣戦布告」

執務机の前まで来たマルゼンスキーは前かがみになり、俺の目を見ながらこう言つた。

「つてか、顔が近いんだけど！」

「あなたに私が先頭を走るところ、魅せるわね（はーと）」

ブチリツと、俺は確かに破裂音を聞いた。

神経か、血管か、はたまた堪忍袋の緒か。

対戦相手であるティオーに視線どころか意識すら向けず、されどこれ以上はないと言い切れるほど効果的に喧嘩を売つた。

「ぶつ潰す!!」

めっちゃ顔がいいとか、目が綺麗だとか、なんか良い匂いがするなーという夢心地から一気に現実に引き戻される怒氣の籠つた声。

阪神レース場に一足早い嵐が吹き荒れることが確定した瞬間である。

……あとティオー、流石にその言葉遣いは汚いからやめなさい。

袖振り合うも多少の縁、腕を絡めたならそれはもう運命では？

『おかあちゃんから送られてくるニンジンの仕送りが減ったんです。これってネグレクトなんでしょうか』

違うんじゃないか。そうだな、まずは体重計に乗つて目盛が示した数値についてトレーナーと話し合うといい。

きっと、仕送りの量なんて目じやないほどに食事量を制限させられるだろうから。

『トレーナーちゃんがね、マヤのこと子供扱いするの。やつぱり色気が足りないのかな。どうすればいいと思う?』

そうだな、気持ちは分かるがトレーナーの立場も考えてやるといい。誰だつてブタ箱で臭い飯は食べたくないからな。

それに男が誰しも色気に女性的な魅力を感じているとは限らない。家庭的だつたり、気安い関係を好む奴もいるだろう。

なにより、お前のことを担当としてスカウトしたつてことはすでに首つたけだ。焦る必要はないさ。

それと、ここは匿名相談室だから名前は言わないようにな?

『マーベラスな物を探しているんだけど、どこにあるかな?』

さあ? 体育館の裏とか掘つたらなにか出土するんじやね?

『同室の子があまり私のことを頼つてくれないんです。母親のように思つて甘えてくれていいつて言つてるのに』

同室つてことは少なくとも中学生だろ? 難しい年頃だし、干渉されるほど反発しちまうんじやないか。

お節介に思われない小さいどこから徐々に詰めていくといふと思うぞ。それに、相手も内心は感謝してんじやないかな。

まあ、頑張つて子離れ? しような。

『観客に見られると、どうしても体が強張つて思うように動けなくなるんです。こんな自分が情けなくつて。なにかコツとかつてあるんでしょうか』

うーん、俺の担当してるウマ娘は歓声とか全部自分の力に変換できるタイプだからなあ。

よく観客はジャガイモと思えって言うよな。ウマ娘なら奇声をあげるニンジンが陳列されてると思うとか。

……いや、奇声をあげてたらそれは最早野菜ではなくマンドラゴラか。

まあ、周りの声なんて無責任なもんだ。勝てた理由として謙遜に使うならともかく、負けそうになつてまで気にするほどのもんじやない。

鋼の意思でスルーすることを推奨する。

『G-Iを獲るのが夢なんです……。でも、あなたはダート向きだつて言われて。やつぱりターフじゃないと意味ないつて思っちゃつて。なのに結果は付いてこなくて。向いてるからつてダートに逃げたくないんです』

そうか。気持ちはよく分かるよ。

栄誉、観客動員数、賞金どれを見ても日本では芝が上つてのは否定のしようがない。

けどな、それは周りの連中から与えられるもんの話だ。芝にもダートにも、其処で本気になつて走つたやつにしか得られないもんがあつて、その価値はどちらにも変わりない。

それに逃げるつてことが必ずしも悪い事とは限らない。人生つてのは楽しんだもん勝ちだ。逃げた先に楽しみが見つかるかもしれないなら、試さない方がバカだろ。芝に戻つてこれない訳じやないんだ。一度、チャレンジしてみたらどうだ?



「思つたよりも雨脚が強いな」

宝塚記念を目前に控えた六月。

関東も本格的に梅雨入りし、雨の降らない日のほうが少数派になつてしまつた。

まつたく、濡れると不快だから雨は嫌いなんだが。

「……ん？　おいおい、マジかよ。あれって幽霊か？」

どうでもいい悩みとクソ重い悩みの寒暖差で体調が悪くなりそうな相談室を終えた帰り道。

さつさと寮に帰つてシャワーを浴びようと正門へと歩いていくと、並んでいる街灯の下に誰かが立っていた。

それだけなら別に気にすることでもないのだが、そいつは傘もささずに全身をびしょ濡れにしている。背を向けているから顔は見えないが、頭上に出ている耳からしてウマ娘。濡れた腰まで届きそうな長髪と腰から垂れている尻尾が一体となつて、黒い謎の物体が浮いているのかと思つて悲鳴が出そうになつたわ。

怪談話の定番は夏だろ。フライングして出てんじやねーよ。
「そんな訳ないか。……待ち合わせをすっぽかされて、傘も忘れてたとか？」

自分で言つておいてなんだが、流石にないだろ。

携帯端末がない時代つて訳でもないんだから連絡を取ればいいし、屋根のないところに留まる理由がない。

無視して通り過ぎてもいいんだが、レースで負けて思い詰めてるとかだつたらどうしよう。

そうじやないにしても、あの濡れた状態のまま寮に帰つたりしたら絶対に風邪ひくぞ。

「はあ……。貧乏くじ引いたかも」

見てしまつた以上、なかつたことにはできない。

そう考え、傘を貸そと近づいた。

職員とか大人の義務として、なんて考えではない。

寮に帰つて風呂入つて飯食つて布団に入る。その間、あの変な奴は寒さで風邪引いてんじやないかと頭の中をチラつくなんざ御免被りたいからだ。

「おい、寮の門限が近いぞ。この傘を貸してやるからさつさと帰れ」
そう声を掛けると、振り向いたウマ娘の綺麗な碧色の瞳が俺を捉えた。

「やあ、いい雨だね。こんな日に傘をさして歩くだなんて、勿体ないと思わないかい？」

「全く思わない。アホなこと言つてないでこの傘を使って帰れ」
なに言つてんだコイツ。思春期特有の中二的な病か？

「言葉の割には優しいんだね」

そういう妙な勘違いされると背中が痒くなるからやめてほしいんだよな。

「お前のためじやねーよ。ここでお前を見て見ぬふりをして帰ると俺は楽しくない思いをすることになる。それが嫌なだけだ」

「へえ……！ そう、楽しくなくなるんだ」

さつきからよく分からん反応をする奴だな。なんか引っかかる部分あつたか？

「傘、要らないって断るつもりだつたんだ。気持ちは嬉しいけれど、アタシにとつては邪魔でしかなかつたからね。けれど、断ると君が乐しくない思いをするというのなら話は別さ」

邪魔つて……もしかして雨に濡れるのが趣味の変態か？

「アタシは今、自分の楽しさを優先して他者の楽しさを奪うか決断しなければいけない訳だ。まさしく降つて湧いた悩みだけれど、これは悩ましいね」

いや、変態さんと分かつていれば関わらなかつたので、もう帰らせてもらえませんか。

「ううむ、どうするべきか。……うん、これでいいこう！」

そう勝手に納得した目の前の変態は、傘に押し入つて俺と自分の腕を絡ませてきた。

「傘を借りるのではなく、一緒に入つて寮に送つてもらう。私は濡れる気持ちよさを味わえないけれど、その補填として君が楽しい話を聞かせる。うん、パーフェクトだ」

さあ、それじゃあ束の間の散歩を楽しもうじゃないか。ミスター・トレーナー君。

そう言つてコチラを見てくる変態に、俺は心底から辟易していた。引つ付かれた腕からすごい勢いで水が染みてきているし、コイツを

寮に送るために遠回りする必要がある。しかも楽しい話を聞かせりと。

全力で拒否させていただきたいのだが、ここで置いていくとやつぱり樂しくない。

今日はたぶん、厄日だ。

「決めた。今後、雨に濡れてるのに慌てる様子もない奴には、絶対に自分がから関わらねえ」

「ふふ、やつてはいけないこと、タブーを犯すことほど気持ちのいいことはないものさ。君も一度試してみるといい。ところで君、誰を担当してるトレーナーだい？」

一つの傘に二人で入ること自体、効率悪すぎて俺的にはタブーなんだが。

変な奴に絡んじまつたもんだと後悔したが、帰るまでの暇つぶしだと諦めて質問に答えた。

「トウカイティオー」

むしろお前はどこの誰なんだよ。帽子にデカデカとC Bつて飾りが付いてるが、もしかしてバイクが好きらしいウオッカか。

「へえ、君だったのか。運命的なものを感じるね」

どこにだよ。変なウマ娘に服をびしょ濡れにされるのが俺の運命なの？

「もしかしてだけど、アタシのこと知らなかつたりする？」

なんか見たことあるような気もするけど、俺つて普段付き合いに多いのない奴の顔と名前を覚えるのが苦手なんだよな。

「なんだ、有名人だったのか？ お子様なウマ娘が知り合いに多いのは事実だが、雨に濡れてはしゃぐガキに覚えはねーよ」

ティオーにマヤノにマーベラス。お子様ばつかだ。

俺が男としてお近づきになりたいのは女帝とかマルゼンなのにどつちも敵対関係だよ……。

「あはは、そなんだ！ いやあ、今日は濡れて帰ろうと決めて正解だつたよ。やはり非日常にこそ、新たな楽しみというものは潜んでいるものなんだね」

俺はなんも楽しくねーよ。無視してもダメ、関わってもダメとか詰
んでるじゃん。

「とはいえ、知つてもらえてないというのは少し悲しいね。だから、自
己紹介させてもらうよ。アタシはミスター・シービー。楽しいことが
大好きなウマ娘さ」

ミスター・シービー。その名前は……。

「女性なのにミスター？」

どういう意図で命名したんだ三女神。

「あはははははっ！ 気にするのそこなんだ！」

えつ、なに急に爆笑しだしたんだコイツ。怖いんだけど。

「ははは、ふふっ……。いやあ笑わせてもらつたよ。傘の件と合わせ
て、なにかお礼をしないとね」

お礼とか要らないから今すぐ離れてくれないだろうか。傘はあげ
るから。

「アタシは楽しいこと優先の快樂主義者だけど、それなりに義理堅く
もあるんだ。期待してくれていいよ、ミスター・トレーナー君」

そのあともよく分からん話をしながら寮に送り届けたあと、ふと思
い出した。

「あつ、ミスター・シービーつてルドルフと同じ三冠ウマ娘か」
寮に入つていくシービーを見送つ正在と、入り口でルドルフが
待つてているのが見えたがそういう繋がりか。

あのヘンテコがティオーでも届かなかつた三冠達成者とは、世の中
分からんもんだな。



そんなこんながあつた翌日、悩み相談の担当ではない日もまた穏や
かとはいかない状況が続いていた。

「トレーナーっ！ もう一本いくよ！」

マルゼンスキーヤが部屋を訪れて以降、ティオーはやる気が天井破り
している。

……もつとも、好調不調というよりは怒髪冠を衝いた結果ぶち破っているような状態なのだが。

「なーにが先頭を走るどこ魅せてあげるさ！ それをトレーナーに言つていいのはボクだけだろ！ どこのウマの骨……かは知つてること、余所者が出しやばつてさあ！」

誰憚ることなく大音量で文句を垂れ流しながら爆走する様は控え目に言つて超怖い。

全身から炎が立ち昇つている気さえする。

「……はあ。今の状態のティオーと併走してくれる相手、誰かいるかなあ」

頼みのマックイーンが怪我で療養。オグリやスペシャルウイークはドリームトロフィーを想定した調整だからシニア級とはスケジュールが合わないタイミングも多い。

「そんなミスター・トレーナー君に朗報だ。此処に暇を持て余したそれなりの実力を持つウマ娘ちゃんが一人いるんだ」

いきなり背後から囁かれた言葉に、ぶるりと体が震えた。

「うひゃあっ！ 息を耳元に吹き掛けるな！」

飛び跳ねるように身を離して振り向くと、昨日遭遇した腕に纏わりつくタイプの子泣き爺（女）がいた。

「あははっ、いい反応するね。からかい甲斐のあるヒトは好きだよ」

俺は自分をからかってくる奴は女子供だろうが三冠ウマ娘だろうが容赦しないけどな。

「なんの用だよ……つてさつきの言葉はどういう意味だ」

「そのまんまさ。併走相手を探していると耳に挟んでね。昨日のお礼も兼ねて、アタシなんてどうかな？」

その泰然とした立ち姿にはシンボリルドルフと同じ漲るような自信を感じる。だが、アイツのような厳かな威圧感はなく、掴み所のない印象もある。

なんとも言葉に表しづらい不思議な雰囲気のやつだ。

「ねえ、トレーナー。昨日のお礼ってなんのこと？」

うおっ、ティオーさんいつの間にこんな近くまで戻つて来てたんで

すか？

気配を感じさせず瞬間移動したかのように俺の隣に立つティオーの目には、盛大に非難と疑惑の色が含まれていた。

「いや、大したことじやないんだが、傘を忘れてたコイツを一緒に入れてや……」

「アタシが雨に打たれて肌寒い思いをしていると、そつと傘を差しだしてくれたのさ。いやあ、雨が肌を伝う感覚を味わいながらの散歩も楽しいものだけど、身を寄せ合って触れた人肌の温もりを感じる相合傘の散歩も良いものだね」

そつと傘を差しだしてもないし、身を寄せ合つたんじやなくてそつちが勝手に引っ付いてきたんだろ。

歩きづらいわ、半身がびちよびちよに濡れるわで大変だつたんだからな。

「……ふうん。梅雨なんだから普通は折り畳み傘くらい持つはずだけど、抜けてるのかな。それとも年のせいでの物忘れが激しくなつちゃつた？」

マルゼンに言つたらタダじや済まない発言が聞こえた気がするが、聞き間違いだろうか。

「あはは、これは手厳しい。でもさ、このお礼は君たちにとつても良い経験になるんじやないかな。君が届かなかつた三冠を成し遂げたウマ娘と走る経験はさ」

確かに。ルドルフと同じ三冠ウマ娘との併走はまたとない好機だ。タダだと言うのなら、是非ともお願ひしたい。

「へえ……まあ、そうかもね。七冠ウマ娘にしてミスター・シービーを完膚なきまでに叩き潰したシンボリルドルフに挑むんだもん。ここで躊躇しているようじゃ、お話にならないもんね」

あの、トウカイティオーさん？さつきから言葉に棘が多くありますか？

「言うねえ。これでも人気ならルドルフに負けてないのだけど」

あー、なんだつけ。俺もレースの録画映像見たことあるわ。すごい劇的な勝ち方が多いんだよな。

「人気投票で勝ち負け決めたいなら、レースから引退してアイドルにでもなれば？ もうロートルなんだから体力も追いつかないでしょ」「ふふふ、ルドルフの後継と目されているウマ娘が面白いトレーナーと組んでるって聞いてたから気にはなつていたんだけど、予想以上だね。それで、併走はどうしようか。アタシは去る者は追わないタチだからね。逃げるのも君たちの自由さ」

「望むところだよ。ギタギタにしてやる」

上から睨め付けるように見下ろすシービーと、下からメンチを切るようにガンつけるティオ。

君たちつて知り合いなんだつけ？

まだここで会つて一分も経つてないのに、なんでそんなに喧嘩腰なの？

「おい、勝負じゃなくてトレーニングだからな？ 二人とも、そこんとこ忘れないでよ？」

宝塚記念

宝塚記念。

出走資格がファン投票によつて決まるグランプリレースだ。

それ即ち、大前提として『人気』が求められるということであり、他レースよりも明確にファンの期待を背負つての出走になるということ。

強いから、展開が劇的だから、見た目や走りが好みだから。

投じられた票に込められた想いは千差万別なれど、そこに一切の嘘はない。

勝利予想の倍率とは一味違うプレッシャーがウマ娘たちには降り注ぐのだ。

だから、あんなにも気合が入つているのだろうと、阪神レース場に集つたファンたちは考えた。

或いは、期待薄ながらも一縷の望みを懸けて投票されていた、ある”古豪”への対抗意識を燃やしているのか。

氣炎万丈といつた様子でターフに佇み、険しい目つきをしているトウカイティオール事がそんな風に見えたのだ。

その考えは的外れでもないが、正鵠を射ているとも言い難かつた。確かに気合は入っている。確かに対抗意識を燃やしている。

だが、そこにスポーツマンらしい爽やかさがあるかと問われれば首を傾げざるを得ないし、少なくともファンの想いとかは欠片も頭にはなかつた。



ドロドロのタールに火を付けたかのように、トウカイティオールの心と瞳は燃えていた。

この、今までに感じたことのない感情はなんだろうか。

二冠を獲つたときの達成感とも違う。

骨折と契約解消による絶望とも違う。

新しいパートナーと出会えた幸福感とも違う。

これは怒りだ。

沸々と尽きることなく湧いてくる怒りという名の薪が絶えず焚べられて、心を燃やしている。

しかし、怒りという感情を抱くこと 자체はいまの自分にとつて珍しいことではない。

この一年程の間、理由は様々だがしそつちゅう怒っている自覚がある。

例えば、なにも知らず口出しをしてくる外野の連中にとか。

例えば、微妙にレディに対する扱いを心得ていないトレーナーに対してとか。

であれば、なにを『新鮮』だと感じているのか。

どいつもこいつも、トレーナーに手を出そうとしていることであろう。

仕事を任せたい？

先頭で走るところを魅せる??

雨の中で身を寄せ合つて相合傘???????

あばず'r……'ほん。節操なし~~興~~め。

巻き込むなら自分のトレーナーにしろ。こつちにちよつかいを掛けてくるな。

特に相合傘。そんなのボクだつて一度もしたことないんだぞ。ぽつと出の雨に濡れるのが趣味な変人に先を越されるだなんて、一生の不覚だ。

思い出すだけで腸が煮えくり返る。

ボクはただトレーナーとのんびり充実した現役生活を送ることができればそれでよかつたのに。

得難い好敵手も熱いレースも、あれば嬉しい追加要素^{オプション}でしかなかつたのに。

望んでもいない横槍ばかりが入つてくる。

ああ、そうだ。

恋はダービー。

即ち人生でたつた一度しかない晴れ舞台。

別の恋レスに出走する機会はあろうとも、この瞬間は二度と戻つてはこない。

故に負けられない。奪取などさせてはならない。

ここは競争社会。敗者は涙を呑んで立ち去るしかないので。

「なんだか荒れますなあ。良ければ相談に乗ろつか？　お安くしておきますよ」

人好きのする笑顔で『ワタシ、悪人ジャナイヨ。相談ノルヨ』と声を掛けってきたウマ娘は、数少ない真つ当な好敵手であり、ある意味では一番真つ当ではない手合いだった。

「……なんだか調子良さそうだね。グチャグチャに叩き潰すつて言ったの忘れちゃつた？」

自分の心を圧し折りたいと、中々にアブノーマルな宣言をしてきたウマ娘に剣？な眼差しを向ける。そういう意味での敵にはならないと思つているが、この娘はこの娘で油断ならないのだ。目を離した隙になにか仕掛けてきそうというか、手段を選ばないというか。

「それがですね、今のネイチャさんは調子が鰐登りでして。耐久性も低反発素材並みなので簡単には潰せないんですよ」

等身大低反発ナイスネイチャ……なるほど、ニッチな需要はあります。

「まあ、今日はお試しのつもりだからさ。想定外の相手も出てきたことだし、お互いに力を合わせて偉大な先輩に一泡吹かせるとしましょうよ」

パチリとウインクをしながらナイスネイチャが指した先には、今日の事前投票で一番人気を獲得したウマ娘がいた。

柔らかい笑顔に欠片も緊張した様子のない自然体。

赤の勝負服を纏い、長髪を靡かせながらマルゼンスキーキーは観客席に手を振つている。

「松永久秀に背中は任せてくださいって言われて、はい任せますって言うやつがいると思う？」

ニコリと笑顔を浮かべて、トウカイティオーはだいぶ失礼な返答を

した。

「ちよちよい、だーれが爆弾ウマ娘ですか。……ちなみにマルゼンさんが出てきたのつてティオーが絡んでるの？」

ナイスネイチヤと南坂も頭を悩ませて考えてみたが、偶然出走する気分になつたとは考えづらいというのが結論だった。

そして、ここ最近噂されるようになつたルドルフとティオーの不仲説。

点と点が繋がつて線になつたと言うには情報が歯抜けているが、他にそれらしい要因も思い当たらない。

「絡んではいるけど、絡んで来たのは向こうからだよ。忌々しい」何処とは明言しないが、マルゼンスキーのある一点を凝視しながら唸るトウカイティオーを見て、ナイスネイチヤは愉快そうに笑う。「アタシのこと」を松永久秀つて言つたけどさ、それでもこゝは手を組んだ方がいいんじゃない?」

『だつてそうしないと、アタシとマルゼンさんで挟み撃ちにしちゃうよ』と、浮かべていた笑みをさらに深いものに変えてナイスネイチヤは言つた。

「アタシが松永久秀。ティオーは織田信長。マルゼンさんは……朝倉?と考えましょよ」

どの配役も碌な最期じやないなと思ひながら、ティオーは変わらない答えを返す。

「戦国時代ごつこならグラスワンダーとやつてよ。ボクは全員叩き潰すつもりしかないから。というかそれ、最後は裏切れますつて言つてるよね?」

つつけんどんな態度で会話を終わらせてゲートへと向かつていくティオーを見ながら、ナイスネイチヤは軽く息を吐く。

「……んー、どうしたものかな。ま、誰にちよつかい掛けるかはその時に決めますか」

そんなやり取りを経て、宝塚記念は始まつた。



『票に託されたファンの夢。思いを力にかえて走るグランプリ・宝塚記念。十五人のウマ娘がゲートに入つて体勢整いました。……スタートです』

『まずは先行争いですね。誰が先頭に立つでしょうか』

逃げを得手とするウマ娘は三人。マルゼンスキー、メジロパーマー、ダイタクヘリオスだ。

先行策を採るウマ娘も多く、序盤のポジション争いが勝敗に大きく影響すると予想された。

そして、レースは大方の予想通りマルゼンスキーがハナに立つて始まった。

そこにバカ逃げコンビ——パーマーとヘリオス——が続き、トウカイティオーが後を追う展開。

先行策のウマ娘の中でトウカイティオーが一番前に出たことだけが、珍しいと言える状況だつた。

このポジションが形成されるまでの数秒で散つた火花は三つ。その全てがナイスネイチャによる逃げウマ娘へのけん制行動だ。

見事に内枠一番を勝ち取り、惚れ惚れするようなスタートダッシュを決めてしっかりと外側へとヨレた。

信頼と安定の初手妨害である。

初見だつた三枠三番のダイタクヘリオスは『うえつ、ちょ!』と奇声を上げ、半ば予想していたメジロパーマーは『まだよ』と顔を嫌そうに聾める。

向けられる非難するような視線を鋼の意思で完全スルーして、ナイスネイチャは最も妨害したい相手であるマルゼンスキーの反応を確認した。

ここで得られる結果は重要だ。シニア級のさらに先にいるウマ娘にどこまで通じるのか。それによつて次のグランプリの組み立て方も変わる。

——結果は、歯牙にもかけられないであつた。

マルゼンスキーと枠が離れすぎていたのもあるが、特に気にするで

もなく直進し、ナイスネイチヤより前に出てから内に入る。

『ありや、この程度じや気にも留めてもらえませんか』とナイスネイチヤはマルゼンスキーを見やり『気合が入つて可愛いわね』とマルゼンスキーが目線を返す。

そんなやり取りを経て序盤のポジションが決まった宝塚記念。マルゼンスキーはこう考えていた。

ハナを取れた時点で自分の勝ちは揺るがないだろうと。

トウカイティオーはこう考えていた。

最後にブチ抜けばいいだけだろうと。
両者共に自己の強さに絶対の自信を持つてゐるからこその思考であり――。

この時点では、シンボリルドフの予想通りマルゼンスキーの勝利は決定的だった。

そして、ナイスネイチヤはこう考えていた。
これで仕込みは万全だと。

そもそも、マルゼンスキーの強さとはなにか。

あるヒトは言う。載せているエンジンが違うと。

あるヒトは言う。筋肉や心肺の質が他とは比べ物にならないと。

あるヒトは言う。純粹な肉体のスペックが飛び抜けていると。

表現の違いはあるものの、誰もが身体の出来からして他より優れていると述べてゐるのだ。

それ以外に挙げられるほど特徴的な何かが見当たらないと言つてもいいかもしない。

だが、マルゼンスキーと他のウマ娘の身体能力に明確な差異があるのかと言うと、具体的なものは何もない。

筋力も心肺機能も反射神経も柔軟性も、優れてはいるが隔絶しているとは言い難い。

非常に高い総合値であるが、ここまで他を圧する理由足り得るのか。

マルゼンスキーと他のウマ娘の差を目視できるものなんて、レースの結果くらいしかないので。

ならば、なぜマルゼンスキーは強いのか。

その理屈をターフを駆けるウマ娘達は実感していた。

ターフを強く踏みしめ蹴り上げた脚で速度が上がった。

風を切るように振られた腕で速度が上がった。

スピードに乗るかのように前に傾けた姿勢で速度が上がった。

一挙手一投足の全てがスピードの上昇に繋がっていくのが見て取れた。

力チリと噛み合つた歯車のように、一つの動きに連動して全てが回っていく。

踏み込んで、風を切って、また踏み込んで。

単純に、しかし終わることなく繰り返される挙動は一つ前よりも確実に速く。

無駄なく、自身の動きが生み出したエネルギーの100%を次の挙動に繋げる。

運動エネルギーという名のバトンを欠片も損なうことなく自分の中でサイクルしていく。

誰よりもシンプルに。誰よりも効率的に。

人生の多くを走ることに費やし、その最高峰であるトレセン学園に入学してきたウマ娘たち。

学び、鍛え、改善を続けてきた彼女たちをして、その走りは魅入られずにはいられないものだつた。

勝たねばならない相手であるはずなのに。

今は勝負の場であつて、教えを請う場ではないはずなのに。

あまりにも綺麗でお手本のような走りに、自分の走りが乱れそういうほどの衝撃を受けるウマ娘すらいる中でマルゼンスキーはさらにスピードを上げていく。

端的に言つて、マルゼンスキーは日本レース史上で最も走るのが上手なウマ娘だつた。

マルゼンスキーに勝つ方法は基本的に二択しかないと言わされている。

長距離レースでスタミナ切れを狙うか本調子を出させずに序盤で沈めるかだ。

前者はそもそも長距離レースに出走すること自体が稀であり、対戦相手の側から操作できる要素がない。

後者はドリームトロフィー・リーグでシンボリルドルフやグラスワンダーが実行してみせたことがあるらしいのだが、具体的な手法は明かされていない。

だがそれでも、このまま好き勝手にマルゼンスキーを走らせては勝てないと全員が予感した。

ローギアから徐々に上がっていくマルゼンスキーのスピードは、中盤の時点でも並みのウマ娘では追い縋れないレベルに至っている。それでいて上昇が止まる様子はなく、トップスピードが何処なのかまるで見えてこない。

バカ逃げコンビすら終始追うことを強要される展開の中、トウカイティオーラもまた全力疾走していた。

優れた勝負勘とレースセンスがとっくに分水嶺に入っていると告げたから。

……それでも、すでに手遅れであるという感覚もあつたが。

実際、マルゼンスキーとトウカイティオーラが出せる最高速度に差はほとんどなかつた。

問題は二千二百という距離でマルゼンスキーのスタミナが尽きる可能性がないことだ。

最高速に差がなくスタミナも尽きないのであれば、単純にスパート時点でどちらが前に居たかで勝敗が決まる。

そして、戦略や駆け引きの要素を削ぎ落とした勝負に於いて逃げウマ娘は滅法強い。

（やつぱり、こうなるわよね……）

マルゼンスキーは内心で独り言ちた。

逃げたマルゼンスキーを終盤で追い抜くことが困難だなんてレース映像を見れば誰だつて分かることだ。

それでも実際に走つてみるまでは勘違いしてしまうのだ。駆け引きは通用すると。

甘い考えだし、マルゼンスキーに對して用いる策としては下の下と言える。

最初から自身を追い抜かすことを目的としていたバカ逃げコンビの逆噴射が始まつた以上、もう誰も追いつけない。

だが、それでいい。

最初から『こんな理不尽なレースを仕掛けてくる輩もいるぞ』と教えるために出走したのだ。

それを次に活かして”皇帝”との勝負に繋げてくれれば問題はないのだ。

トウカイティオー以外のウマ娘に取つては、完全にとばつちりでしかないので多少は申し訳なくもあつたが。

そう考え、マルゼンスキーは勝敗を決定づけるために『領域』へ入る準備をした。

本来であれば『領域』とは意図して入れるようなモノではない。だがマルゼンスキーにとつてのそれは特段小難しい理屈を要するものではなかつた。

ただ、レースの楽しみ方を変えるだけのことなのだ。

誰かと競い合い、一緒に走ることを楽しむツーリングのようなレースから。

競争相手も観客も一切気にせず、ひたすらにかつ飛ばすことだけを楽しむレースへ。

スイッチを切り替えるような気軽さで、後ろを走るウマ娘たちを意識の外に置く。

ただそれだけでマルゼンスキーは『領域』に至る。

本人としては、どちらのレースも楽しいことには違いない。

しかし、速さだけを追求するのなら周りはなくともいい。

それでも折角久しぶりにトウインクル・シリーズに戻ってきたのだ

からと、最後にもう一度だけ一緒に走る娘達に意識を向けることにした。

うんうん、ティオーチャんは速いわね。あれで成長途中なんだもの。何時かは得意な展開に持ち込んで勝てなくなっちゃうかも。

その後ろから来てる娘達はバテちゃってるけど良い逃げっぴりだつたわね。最初の妨害に余計な意識を割かれなければもつと良い勝負が出来たかな。

さらに後ろを走る娘達も必死に頑張る姿には花丸をあげたい。

共に走った十三人のウマ娘全員が素敵な娘達だと、本心から思つた。

一頻り後方へと思いを馳せ、マルゼンスキーは改めて『領域』へと入ろうとした。

速く走る以外の全てを頭の中から消していく。

そうしてエンジンがフルスロットルになろうかという瞬間。

ある事実に思い至つた。

あれ、今日一緒に走った娘達って十四人じゃなかつたかしら、と。

——悪意とは、常に大っぴらに見せておくものではない。

——駆け引きとは、全ての手札を最初から開帳して行うものでは断じてない。

確かに、マルゼンスキーを相手にラストスパートで追い抜けばいいなんてのは甘い考え方だ。

だがトウインクル・シリーズ程度、何時も通りに走れば自分が勝つだなんて考えもまた激甘だ。

マルゼンスキーはそれを思い知ることになった。



ナイスネイチャはずつと考えていた。
いや『領域』つてなによと。
トウカイティオーとの併走でオグリキヤップが見せた驚異的な末脚。



”怪物”と呼ぶに相応しい威圧感と怖い表情。

あれがそなうなんだろうと理解はできる。

しかし、実体験が伴わなければ、なんか凄いということ以外に感想が浮かばない。

だが、『領域』とは原理不明な超能力などではない筈だ。

理屈があつて起きるのなら、理屈で以て妨げることもまた可能。その方法を模索することが、己が天才たちを打ち倒すための光明になるかも知れない。

自分も『領域』へと至ればいいと考えないのが弱みもあり、至れないなら勝ち目がないなど諦めないことが、いまのナイスネイチャの強さだった。

（オグリ先輩のを実際に見れたのは有難いな。あ、これは今から入るなつて分かるもん）

序盤に逃げウマ娘をけん制して以降、ひつそりと存在感を消して集団に埋もれていたナイスネイチャはマルゼンスキーの変化をずっと注視していた。

徐々にギアを上げていくスポーツカーの如き走りをしながらも、マルゼンスキーは後方へとしつかり意識を伸ばしている。

強いウマ娘というのは往々にして広い視野を持つて全体を俯瞰しながら走っているものだ。

仕掛けどころを誤れば勘付かかる。

（『領域』つてのは要するに超集中状態のこと、誰だつて茶々入れられたくないんですね）

チャンスは一回こつきり。

狙うのは『領域』に入る瞬間。

大袈裟なことはなにもしなくていい。

例えばバッターボックスに入った打者やサーブを打つテニス選手に紙屑を投げて当たつたら、やはり集中は途切れる。

そして、どんなささやかな事象で集中が途切れたのだとしても、再度組み立てる労力と相関したりしない。

もはやレースの勝敗が決したといつてよい終盤。

マルゼンスキーが発する雰囲気が明らかに変化していくのを感じながら、ナイスネイチャは自身の呼吸すら最小限に抑えた。

(アタシは今だけは存在感なしのモブウマ娘。路傍の石ころ。日常の代わり映えしない背景)

微妙に心を自傷しながら、マルゼンスキーに感知されないよう気配を薄くしていく。

全てはただ一刺しのために。

(まあ、恨まないでくださいよ。別に大クラッシュさせたい訳じやないんで)

レースが始まる前は、どう動こうか悩んでいたのだ。

どうせマルゼンスキーは有馬記念には出てこないのだ。

だつたら、無敵のフィールドギミックみたいな物だと割り切って、当たる可能性のあるウマ娘たちの情報収集と本番のレースを使つた豪勢な練習とするか。

それが一番効率がいいだろうなと思っていた。

それが実際に始まつてみれば、徹頭徹尾マルゼンスキーを沈ませることに注力していた。

スタート時のけん制も邪魔できると思つて実行した訳ではない。序盤に目線を交わした相手の存在を完全に失念し、ラストスパートを妨害されたなら落差が大きくなる。

その終盤に仕掛ける一手をより効果的にするための仕込みだつた。(まさかここまで執着してるとは。自分でもちよつとどうかと思つちゃいますなー)

なぜそうしたのかと問われれば、トウカイティオーが自分以外に負けるのを見たくないからとしか言えない。

すでにメジロマツクイーンに負けてはいるのだが、それはそれ、これはこれ。

いきなりドリームトロフィーから降りてきたウマ娘に搔つ攫われるのは業腹だ。

だから、全力で邪魔してやるのだ。

(ほんのちょっと、一瞬だけブレークを踏んでくれればそれでいいん

で

後方に伸ばされていた意識が折り畳まれ、マルゼンスキーの踏み込みがひと際強くなつたのを見逃さず、ナイスネイチャは切り札を切つた。

(名付けて『領域壊し』……なんちゃつて)

宝塚記念2

ズドンツ、という音がターフに響いた。

少なくとも宝塚記念を走る十三人のウマ娘たちの耳には確かに届いた。

マルゼンスキーが加速するために踏み込んだ音かと多くの者が推測したが、発生源は列を構成したウマ娘たちの中で後方。

思わず音の発生源を確認しようと視線を向けてしまうような異音。奏でたのはナイスネイチャで、その音は悪意しか込められていない不協和音だ。

速度を向上・維持させることに適さない強烈な垂直方向への足の振り下ろし。ウマ娘の人間離れした脚力を以つて、ターフを蹴るのではなく踏み抜くことに特化させた一撃は明確にナイスネイチャを減速させた。

それでいいとナイスネイチャは心底から考えていた。

やられた——とマルゼンスキーは思った。

直前まで気配を消しておくことで、自身が『領域』に入ろうとする瞬間を狙い撃つた妨害目的のアンブツシユ。

見据えておくべき対戦相手を失念していたという精神的な焦り。レース中に起きた聞き慣れない異音への反射的な視線移動。

全ての歯車が噛み合い全力で回転を始めようとした刹那に挟み込まれた路傍の小石によって、マルゼンスキーが『領域』に至るためのスイッチは切り替わることなくブレーキが踏まれた。

一挙手一投足が最高率で噛み合うことで生まれるスーパーカーの如き最高速。それはつまり、僅かなズレさえも許容できないということだ。速ければ速いほどに、ほんの少しのハンドリングミスやアクセルとブレーキの踏み加減がクラッショニに繋がる。レーススタート時のローから数十秒を掛けて徐々にギアを上げていくという基本はマルゼンスキーであつても変わらない。一旦崩れてしまえば再度スパート中に立て直すことなど出来よう筈もなく、後輩虐めにやつてきたOBに一泡吹かせられたかに見えて——。

一秒後に、マルゼンスキーはギアを入れ直してみせた。



(亀の甲より年の功つてやつね……ちょっと年寄臭いかしら?)

『領域』に入ろうかという瞬間、頭の上から冷や水を浴びせられたマルゼンスキーは動搖しながらも過日のレースを思い出していた。

才能ある可愛い後輩たちがドリームトロフィー・リーグで自身を打ち負かすために講じてきた手段。その中で有効だったのは今まさにナイスネイチヤが実行したのと同系統の手段だ。

(ここまで悪意テンコ盛りではなかつたけれど)

例えば”皇帝”と呼ばれるウマ娘は生まれ持つたカリスマを応用することでマルゼンスキーを引き込んでみせた。

例えかつてのマルゼンスキーと同じく”怪物”の名を戴いたウマ娘は烈火の如き闘争心を浴びせ続けることで最後まで『領域』に至るスイッチを入れさせなかつた。

過去に敗北を経験させられた技術を行使してきたという意味ではナイスネイチヤの選択は正しかつた。だが、過去に経験済みの手段を用いてしまつたという意味では選択を誤つた。

マルゼンスキーは楽しく走ることができればオールオッケーなウマ娘だが、それは学習しない訳でも成長しない訳でもない。彼女もまたアスリートとして敗北から学び、ナイスネイチヤによつて齎された窮地に於いて過去の経験を活かした。

囁み合わなくなつた歯車を直すため、確かにマルゼンスキーはブレーキを踏んだ。しかし、それは足を垂直に振り降ろしたことで結果的に減速したナイスネイチヤとは全く異なる動きだ。

ブレーキのために出した足をメトロノームの支点のように使い、マルゼンスキーの身体は大きく前につんのめつた。傍から見れば止まりきれず、転んでしまつたのではないかと錯覚するほどの急制動。だが、制動によつて前傾し顔面からターフに激突するかと思われた瞬間、彼女は再加速した。

あたかも水面の上を走るため、右足が沈むより早く左足を出すかのように極めて力技な対処。崩れた体勢さえも加速の材料とすることで、マルゼンスキーは崩れることなくトップギアへと入った。正しくはトップギアの速度を出さなければ地面に倒れてしまふほど不安定な走行姿勢を強いられてしまった状態だが、それでも彼女は一条の紅い閃光となり、ターフにはテールランプの残光の如く美しい髪が靡いた。

時間にして僅か一秒。

たつた一秒限りの減速。

それがナイスネイチャが血反吐を吐くような努力を重ね、南坂が知恵熱を出すほど過去資料を参考にしてタイミングを弾きだし、宝塚記念で惨敗することを覚悟の上で放つたマルゼンスキー対策の成果だつた。

その切り札が完璧に決まつて尚『ああなつたら誰も勝てない』と評されるスピードへとマルゼンスキーは突入り、共に走るウマ娘たちに絶望を与えると思われた。

しかし、ナイスネイチャは負けたなどとは欠片も考えてはいない。彼女にとつて今日のレースは端からレイン戦だ。

十四人のウマ娘が協力して、大ボスのH.Pを削りきる戦い。

アタッカーがいて、タンクがいて、ヒーラーがいて、バッファーアーがいて、デバッファーアーがいる。

その中で彼女は自身の役割をデバッファーアー兼バッファーアーと定義していた。

オグリキヤップから『領域』に入る前兆を学び、過去のレース映像からマルゼンスキーが『領域』に入る条件を徹底的に洗い出した。同時に絶対に勝ちたい好敵手^(ライバル)が『領域』に入る条件もおおよその当たりを付けていた。

たつた一秒限りの減速——ではない。

一秒もの間、後続が距離を詰める時間を与えてしまったのだ。

それは”帝王”を相手取るには、あまりにも致命的な隙だつた。

(……つ、ティオーちゃん！)

地面スレスレを這うような低姿勢で走るマルゼンスキーオ。

対抗するかの如く前傾姿勢を取り、滑空するかのように並ぶトウカイティオーラ。

優れた身体能力^{ボテンシャル}のままに足の回転^{ギア}を上げ続けるスピードと、天性のバネによつて地面を蹴った反発力を全てを前方向へと変換するスピード。数値の上では拮抗する両者の対決は追い付かれたマルゼンスキートウカイティオーラと追い抜こうと並んだトウカイティオーラという構図になつた時点で決していた。

内に滾つた熱の一切を解き放つ超加速。

春の天皇賞ではメジロマツクイーン相手に最後まで詰めることのできなかつた一巴身。ナイズネイチャのアシストによつて埋められた距離がトウカイティオーラを『領域』へと押し上げた。



壁を超えた。

それを強く実感する。

レース中盤時点では気付いた失策。マルゼンスキーにどうやつても追い付けないという確信を抱きながらも諦めることなく粘り続けた走りはギリギリで功を奏した。

スタート直後から『領域』に至るための限界の壁はずつと見えていた。それほどまでにマルゼンスキーというウマ娘が強敵であるという事の証左だが、そこからの展開はメジロマツクイーンとオグリキヤップ、どちらの強敵と相対した時とも異なつた。

壁は見えている。今度こそ迷うことなくぶち当たつて突き破る覚悟を決めてきた。

なのに、何時まで経つても壁に辿り着かない。

自分が前に出るだけ壁が遠ざかっていく。至るための最後のピースがどこまでも逃げていく。

(あとハナ差、半歩分……たつたそれだけ詰められればいいのにつ!)余りにも遠い。

決してトウカイティオーが弱い訳ではない。

マルゼンスキーに一切離されることなく追従できるスピードとスタミナはドリームトロフィー・リーグに未登録のウマ娘としては破格だ。トウインクル・シリーズの中距離最強は誰疑うことなくトウカイティオーだろう。

しかし、彼女が今挑んでいるのは日本至上最強格であり、年末につかり合う相手はさらに同格以上なのだ。”皇帝”と”怪物”は全く性質の異なるウマ娘ではあるが、ここでの惨敗は半年後の有馬勝利に大きな不安の影を落とす。

そして敗北とは、彼を奪われるということだ。

(嫌だ、イヤだ、いやだ……！)

それだけは絶対に嫌だ。

それだけは絶対に許さない。

それだけは絶対に譲らない。

沸々と湧き上がる怒りをエネルギーへと変えて速度を上げる。

それでも前を行くマルゼンスキーとの距離は変わらず、壁にも届かない。

そんな苛立ちに歯軋りをしながら追いすがるトウカイティオー。しかし、状況は更に悪化する。

(このままじゃ、逆に『領域』に入られるつ！)

惚れ惚れするような走りをしながらも油断なく後続を捉えていたマルゼンスキーの意識が収束していくのが分かつた。それが余裕を無くしてのことであれば問題ないが、そう都合よく事が進むはずもない。

意識の収束に合わせ、より洗練されていく走り。増していく存在感。

熾烈なデツドヒートこそ『領域』への手掛かりと考えていたトウカイティオーにとつて、それはあまりにも異様だった。

好敵手が居らずとも、競り合いが起きずとも、マルゼンスキーは『領域』に到達する。

それは大きすぎる才能を持ち、好敵手との激闘を知らぬままトウイ

ンクル・シリーズの現役を終えてしまつた“怪物”だからこそ成し得る業だつた。技

(負けない……っ！ 絶対に！)

今以つて全力疾走をした時に掛る足への負担は無視できるものではない。

負傷してしまつた時のトレーナーがどんな反応をするか考へることは怖い。

それでも、最良の結果を自分から放棄することだけはしない。

年度代表ウマ娘に選ばれた時、ボクを支えてくれるヒト達に恥じない走りをするとトウカイティオールは言つた。

その言葉に嘘はない。

彼を含めた大切なヒト達のために全力を尽くす。

(そして、勝つんだ！)

——かくして、その想いは届いた。

春の天皇賞と宝塚記念。

そこにあつた違いは二つ。

一つはトウカイティオールが迷うことなく勝利を欲したこと。

そして二つ目は、結果的にメジロマツクイーンとの一騎打ちとは異なる介入者が居たことだ。

「はああ——！」

トウカイティオールは特に意識した訳ではなかつた。

負けないため、突き放されないため、何度も入れ直したかも分からぬい気合を入れ直して吼える。

絶望的な状況に直面しても諦めることなく挑み、踏みだした一歩。

その一歩が宝塚記念のレースがスタートしてから初めてマルゼンスキーとの距離を詰めた。



「やあ、レースも大詰めだね」

「えつ、いやどなたさんですか？」

宝塚記念の最終直線。

春天を彷彿とさせるティオーが前を走る強敵に追い付けない展開。手に汗を握つて声援を上げていた俺の隣から声が掛かつた。

結い上げた髪にラフな服装。頭上の耳を折り畳むタイプのキャップを被つてサングラスをかけたウマ娘は一見すると不審者だ。

だが、その声を俺は知っていたし放つオーラも完全に消せてはいかつた。

「……なんの用だよシンボリルドフ。不審者かと焦つただろ」

俺たちの仇敵がいつの間にか立っていた。

いや、そこまで俺自身に恨みとかはないんだけども。

「本当はレースが終わるまで黙つているつもりだつたのだけれどね。この光景を誰かと共有したくて我慢できなかつたんだ。申し訳ない」何の目的で俺の隣に居るのかは分からぬが、話しかけてきたのはレースの興奮によるものらしい。

「紅と緋が織りなす疾駆の競演。……私はね、今日のレースでマルゼンスキーゲ完勝すると断言していたんだ」

異なる二色の鮮やかな赤が眼前を駆け抜けていく。

緑のターフの上を走る赤はまるで炎のように力強く輝いていた。そしてゴールラインを先に超えた赤は――。

「君たちは何時も私の予測を超えていく。ああ、本当に素晴らしいよ」心底からの称賛。

感嘆した様子でシンボリルドフはトウカイティオーの勝利を褒め称えていた。

「どつかの誰かさんに勝たないと面倒ごとを引き受けさせられることになつちまつたからな」

困つたもんだ。俺は自分とティオーが楽しめればそれで良いと言つうのに。

お、勝つたティオーがこつちに向けて手振つてる。

「カツコよかつたぞティオー！」

声を張り上げるとティオーは両手それぞれの指を一本と三本上げて満面の笑みが浮かべた。

あれは……っ！

「宝塚記念一着の賞金一億三千万円ツ！」

あばばばばば、慌てるな慌てるな。

俺は教え子であるウマ娘を導くト^{聖職者}レーナー。

金銭欲に溺れて我を忘れるなどあつてはならないのだ。

「トレーナー君、目が円マークになつてゐるよ。賞金を使つた豪遊はほどほどにね」

「ああ、まずは元教え子の実家にツケてる金返さねーとだからな！」

「それは……いや、うん余所様の関係性に口出しはしないけどもね？」

一頻り俺に笑みを向けたティオーは一緒に走つたウマ娘たちの元へ向かい何かを話していた。

マルゼンスキーオの存在によつて混迷を極めたレースだつたが、終わつてしまえばノーサイド。

ターフに広がる雰囲気は決して悪いものではなかつた。

「で、お前もなんか用件があるんじゃないのか？」

「おや、敵対している私の話なんて聞く耳持たず逃げられるかと考えていたんだが」

ターフなら一考する余地もないが、人混みの中で障害物走ならシンボリルドルフから逃げられる可能性もあるだろうか。

いや、無理だわ人間がウマ娘に勝てる訳がない。

「お前の夢のために俺とティオーが欲しいんだつて？ 正直意味わかんねーと思つてたから詳しく聞いてみたかつたんだよな。さつさと生徒会室に突撃しても良かつたんだが、お前に会いに行くのティオーが嫌がるから自重してんだ」

ティオーはともかく俺と同じレベルの人材なんて掃いて捨てるほど居るだろう。

そんなもののためにティオーと仲違いしたり、レースの結果で処遇を決めようとするだなんて皇帝様らしくない氣がする。

「……トレーナー君は不屈という言葉をどう思つてゐるかな？」

不屈？

その質問が話しかけてきた用事なのだろうか。

「大事なことなんじゃねーの？ お前やマルゼンスキーダつて負けたことはある。ティオーは怪我でクラシック三冠に挑戦できなくなる寸前だつた。誰だつて上手くいかない事があるんなら、その時に折れない精神性つてのを試されることも全員にあるんだろうな」

俺みたいに怠惰な人種だとチャレンジ自体しないから挫折しづらいんだろうけど、代わりに大成もしない。

「ああ、とても大切だ。最も重要な才能とさえ言つていいかもしれない。人は弱いからね。どれだけ優れた身体能力と頭脳を持ち、精神性を養つたとしても世界の厳しさに少しずつ心を削られていく。そしてそれはトレセン学園に於いては退学という形で現れる」

それは確かにそうだ。

よく勘違いされるがレース成績が悪ければトレセン学園を退学させられるなどというルールは存在しない。

出走意志 자체がないならともかく、負け続けでも在学はできるのだ。

故にトレセン学園からの退学者は、そのほぼ全てが自主退学だ。レースに勝てず、今後も勝てる見通しが立たない者達が居たたまれなさや絶望から去つていく。

「私はなんとかして去り行く者達を救い幸せになつてもらいたかった。けれど、それはおかしくないかい？」

サングラス超しにコチラへと目線を向け、ルドルフは続けて疑問を呈してきた。

だが、何がおかしいのか分からぬ。

「全てのウマ娘が対象つてのはお人好しが過ぎるだろと思うが別におかしくはないだろ。俺だつて目の前に不幸面した連中が屯してたら飯がマズくなつて嫌だからな」

善人面するつもりは毛頭ないが、他人の不幸で飯が美味くなるとも思わない。

ネット上のモンスターとかマスゴミに対してもその限りではないが。

「その飯を不味くしないために行動起こせることが素晴らしいん

だ。……話を戻すが、やはり私の願いはおかしいのさ」

俺の言葉を微笑を浮かべて聞いていたルドルフ。その表情が嘲笑へと変わった。

「だつてトレセン学園で最も多くのウマ娘を絶望させたのは私なんだよ。どの口で幸福だなんて宣^{のたま}うのさ」

サングラスの隙間から覗く両の目。

そのドス黒く濁つた目を俺は知つている。

あの日、沈んでいく夕暮れの中でティオーが見せた日と同じだ。コイツは失望している。

だが、その対象はティオーとは違ひ他人ではなく自分自身に對してだ。

「去り行く者達を救いたかつたのなら最初からレースなんて出なればいいんだ。私の居ないクラシック三冠を誰かが獲り喜んだだろう。私の居た枠に入つたウマ娘が挑む機会を得られただろう。私がレースに費やした時間を彼女たちのサポートに充てていれば飛躍できた者が居たかもしれないだろう」

同期にシンボリルドフがいる絶望感。以前にそんなことを推察したこともあつたな。

まさか当人が同じこと考えているとは思いもしなかつたが。

「矛盾している。救うために力と実績を欲し、その過程で誰よりも他者を退けてきた。そうして今、より多くのウマ娘を救うための手段として君とティオーを力で屈服させようとしている」

会話というよりは独白。ルドルフは零れてくる言葉を堰き止めることができないでいるようだつた。

「分かつてゐるんだ。本当に協力してほしいならやり方が間違つている。なによりもウマ娘を幸福を願うのなら中途半端だと」

嘲笑を浮かべていたルドルフの表情が今度は泣いている子供のように歪み、顔を俯かせた。

「なのに消せないんだ。レースと勝利を欲する私を」

今の俺にとつて最も大切と言えるティオーの勝利。その熱が冷めてしまうほどの悲嘆。

「もう自分独りでは、どうしたら夢が叶うのか分からんんだ。一番多くのウマ娘を不幸^{負か}した私が、どうやつて彼女たちを幸福にすると言うんだ。誰よりも輝かしい勝利を得てきた私が、敗北^{皇帝}に塗れた彼女たちの幸福をどうやつて推し量れると言うんだ」

あまりにも見ていられない有様のルドルフに言葉を掛けようとした途端、その顔が上を向いた。

その顔に、瞳に宿るのは濁つた黒よりも黒い——光。

「だから、君たちが欲しい。絶望^{敗北}の底に落ちても尚、屈きず立ち上がりて燐然^{さんぜん}と輝く君たちが」

爛々と輝く狂気的な光には、普段のルドルフが持つ理性の色が一切感じられなかつた。

「マルゼンスキーもシービーもオグリキヤップも私の征く道と共に歩いてはくれなかつた。彼女たちが隣に居てくれれば伸ばせたかもしない手を諦めてきた。だが、私を憧れと言つてくれたティオーと彼女を絶望の淵から救い上げて道を示してみせた君だけは……諦められない」

そう告げるルドルフの異様な雰囲気に思わず後退る。

そんな俺の様子見をおかしそうに眺めながら、シンボリルドルフは絶対を宣言した。

「確かに今日のレースは素晴らしいもので私の予測を超えていた。だが、それでも勝つのは私だ」

先ほどまでの弱弱しさはどこにもなく、最強のウマ娘がそこに立つている。

「君たちに勝ち、君たちを手に入れる。そうすれば……私の夢はきっと叶う」

ルドルフの言葉には、確証ではなく希望に縋り付く必死さが滲んでいた。

そうして言いたいことは言い切ったのかルドルフは踵を返して去つていつた。

その後ろ姿を見ながら、俺は思わず呟いた。

「……おいおいヤンデレじゃねーか。俺はそういうの苦手なんだが」